

# 東北大学埋蔵文化財調査年報 1



東北大学埋蔵文化財調査委員会  
1985

# 東北大学埋蔵文化財調査年報 1

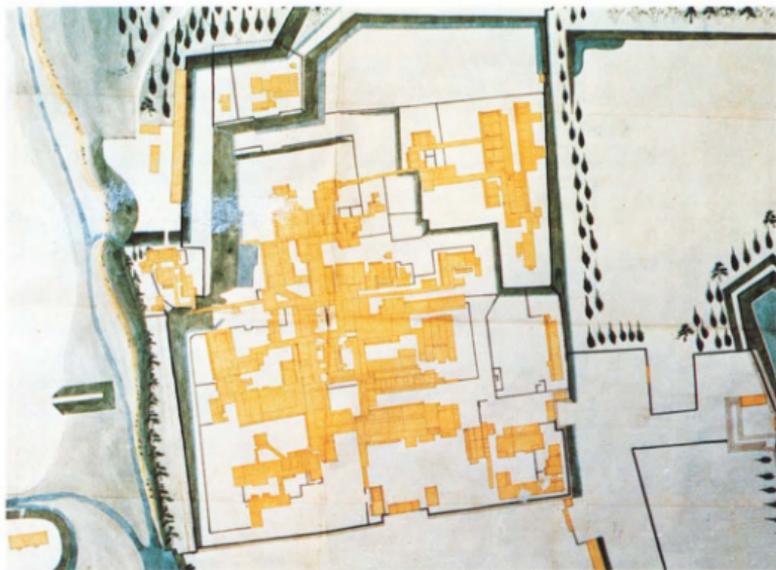
東北大学埋蔵文化財調査委員会

1985

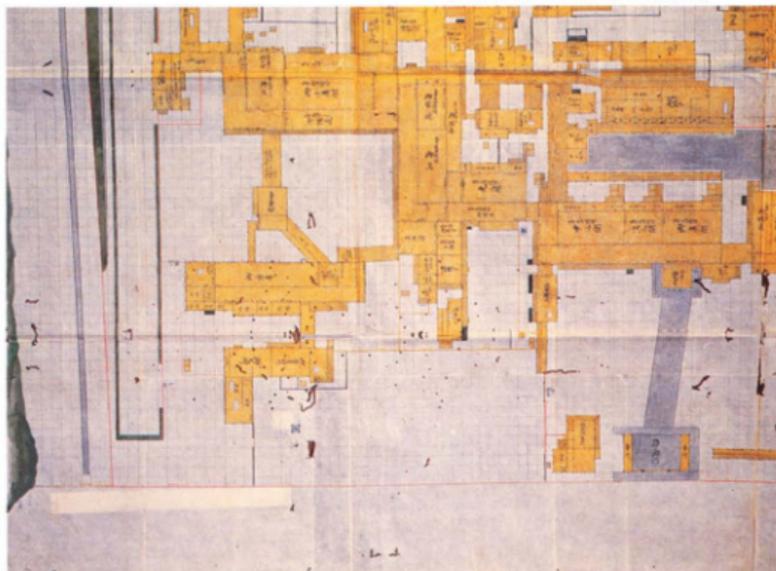


カラー図版1.

東北大学川内地区キャンパス (南から)



青山公造制木写之略図二の丸部分



カラー図版2

嘉永六年二の丸図玄関、小広間、馬場座敷部分



磁器茶碗



カラー図版3

磁器皿



陶器皿



カラー図版4

陶器土瓶

## 序

近年国内各地において、先人の貴重な遺跡や有形文化財の調査と発見が、新聞等の報道により一般社会に周知されているところであるが、これらの遺跡等の埋蔵文化財の学術研究は、考古学や歴史学、さらに関連諸科学分野の発展に寄与することは疑いない。

本学敷地内にも、埋蔵文化財包蔵地があることから、文化財保護法の趣旨を尊重し、埋蔵文化財の保存・活用を図る目的で、昭和58年11月に、東北大学埋蔵文化財調査委員会を設置し、調査班を組織して文学部史学科考古学講座の指導を受け、爾来意欲的に活動している。

このたびの報告書は、川内地区伊達家累代の居城仙台城下の丸跡の発掘調査の成果をまとめたものである。発掘調査ならびに報告書の刊行にあたっては、関係各位の御協力、御努力を賜った。ここに御礼申しあげる。

本書が斯界に多く活用され、もって史学発展の一助となれば幸甚である。

最後に調査研究にあたっては、今後とも学内・学外の御指導と御協力をお願いする次第である。

昭和60年3月

東北大学埋蔵文化財調査委員会委員長

東北大学長 石田名香雄

## 例 言

1. 本年報は東北大学埋蔵文化財調査委員会が昭和58年4月から同59年3月までに調査と保存を実施し、その後引き続き整理作業を終了した東北大学川内地区の二の丸跡に関する報告書である。
2. 調査は埋蔵文化財調査委員会の委嘱をうけ埋蔵文化財調査班が行った。
3. 遺跡名は略号で示した。
  - (1) 二の丸第1次調査 (NM1)
  - (2) 二の丸第2次調査 (NM2)
  - (3) 二の丸第3次調査 (NM3)
4. 遺構・遺物の作図、挿図、図版の作成は梶原洋・佐川正敏・大場拓俊・佐久間光平・佐藤広史・山田しょう・前沢聡央・市村賢則・山田富士子・相川美子・門脇弘子・菱沼孝志が行った。写真撮影には、梶原洋・佐川正敏・山田しょう・菱沼孝志・門脇弘子があたり、引き伸しは菱沼孝志・門脇弘子が行った。
5. 本文の執筆は、梶原洋・佐川正敏・大場拓俊・佐久間光平・山田しょう・前沢聡央・市村賢則・山田富士子が行った。執筆者名は文末に( )で記載した。
6. 佐藤巧(東北大学工学部教授)・蟹沢聡史(東北大学教養部教授)・竹内貞子(宮城県自然史博物館)・内藤俊彦(東北大学附属植物園)・高橋理(東北大学文学部考古学研究室)の各氏には玉稿を賜った。ガラスの分析では旭硝子株式会社から全面的な御協力を賜った。
7. 表紙絵の二の丸玄関と広間は、佐藤巧教授の原図による。
8. 芹沢長介氏(東北大学名誉教授)には陶磁器の同定について多大な御協力を賜った。
9. NM2は保存措置がとられ、将来の調査に委ねられることとなった。
10. 発掘調査から報告書作成に至る過程で次の方々から御指導・御助言を賜った。ここに記してお礼申しあげたい。(敬称略順不同)

伊東信雄・渡辺信夫・今泉隆雄・難波信雄・志村宗昭・池田圭介・広川吉之助・青山忠正・藤沼邦彦・佐藤則之・嘉藤美代子・千葉考弥・高倉敬明・松根努・吉田行雄・大沼二郎・大沼興治・加藤吉男・吉川昌治・野津芳・坪倉晴利・伊藤延行・池田栄次・池田民哉・John F. Morris・Richard L. Reece・Ivan F. Dornon・Louise Cort・佐藤弥市・佐藤達夫・松根金之助・伊藤嘉章・前川要・藤澤良祐・高橋良一郎・佐藤正己・東北大学考古学研究室・東北歴史資料館・宮城県多賀城跡調査研究所・仙台市博物館・仙台市歴史民俗資料館・多賀城市教育委員会・稲垣服飾株式会社・栃木県陶磁器指導所・福島県窯業試験所・千葉製作所・相馬大塚焼協同組合・瀬戸市歴史民俗資料館・Freer Gallery of Art・阿子島香・小林正史・佐藤和男・早坂正治
11. 編集は須藤隆の指導のもとに、梶原・佐川が担当した。

## 凡 例

1. 原則として遺物の実例図は縮尺 $\times$ (瓦は $\times$ )写真は $\times$ に統一した。他の縮尺のものはそれぞれに明記した。
2. 注は各章ごとにまとめて章末に記載した。引用文献はまとめて本文の末尾に記した。

### 埋蔵文化財調査委員会 (組織)

委員長	石田名香雄
委員	青葉山地区協議会委員長(薬学部長) 南原利夫
	川内地区協議会委員長(法学部長) 廣中俊雄
	鼠陵地区協議会委員長(医学部長) 星野文彦
	片平地区協議会委員長(科研所長) 小島 浩
	文学部教授 渡辺信夫
	文学部助教授 須藤 隆
	理学部助教授 中川久夫
	工学部教授 佐藤 巧
幹事	施設部長 小村一郎
調査員	文学部助手 梶原 洋
	佐川正敏(昭和59年2月16日から)
	(昭和59年3月現在)

### 発掘調査整理参加者

桑月 鮮	菱沼孝志	高橋邦仁	福山義幸
佐藤 広史	相川美子	高橋千秋	星野 晃
鈴木博子	門脇弘子	高橋康幸	増井啓太
高橋 理	堀千香子	高橋 学	丸山規之
林 努	宮脇康朗	田村裕彦	森永宏喜
馬場保之	村田章人	田村幸敬	安井英斎
藤田 淳	青山和夫	中川浩之	安川洋生
前沢聡典	井出隆一郎	長田 治	吉澤 正
松山 聡	川口哲男	中村和人	荒川 努
山田しょう	川崎俊彦	野村真也	田中謙二
山田富士子	川村 剛	早田直彦	斉藤直昭
大場拓俊	鈴木真一郎	平野信行	

# 本文目次

序	
例言	
目次	
図目次	
表目次	
図版目次	
第Ⅰ章 昭和58年度調査の概要	1
1. はじめに	1
2. 調査に至る経過	2
第Ⅱ章 川内地区二の丸跡の調査	5
1. 遺跡の立地と歴史的背景	5
2. 二の丸第1次調査(NM1)	6
(1) 調査方法と経過	6
(2) 層序	10
(3) 東区の遺構	10
(4) NM1の遺物	12
(5) まとめ	16
3. 二の丸第2次調査(NM2)	17
(1) 調査方法と経過	17
(2) 層序	17
(3) 遺構	17
(4) 主な遺構の変遷	26
(5) NM2の遺物	30
1) 遺物出土状況	30
2) 江戸時代末期から明治時代初期の陶磁器	30
① 茶碗	30
② 皿	43
③ 土瓶	56
④ 徳利	72
⑤ 急須・油瓶・蓋・香合・甕	74
⑥ 土鍋	76

⑦ 土師質土器・瓦質土器 …78	
3) 明治時代初期以降の陶磁器 ……………	83
4) NM2の陶磁器のまとめ ……………	83
5) 木製品 ……………	88
① 建築材…89	② 箸 …97
③ 竹製品 …97	④ その他 …97
6) 金属製品 ……………	98
7) その他の遺物 ……………	101
8) 瓦 ……………	104
9) 黒書陶器について ……………	108
4. 二の丸第3次調査 (NM3) ……………	110
(1) 調査方法と経過 ……………	110
(2) 層序 ……………	110
(3) 遺構 ……………	110
(4) NM3の遺物 ……………	120
1) 陶磁器 ……………	120
2) その他の遺物 ……………	120
3) 瓦 ……………	123
5. NM2礎石建物と二の丸建造物 ……………	131
(1) 二の丸におけるNM2・3の位置 ……………	131
(2) NM2の石敷遺構 ……………	132
(3) NM3と二の丸の位置 ……………	132
6. 二の丸の焼失について ……………	138
7. NM1・2・3調査の意義 ……………	140
第三章 仙台城二の丸の小広間について	佐藤 巧 ……………142
第四章 仙台城二の丸跡から出土した陶磁器の化学組成について	蟹沢聰史 ……………162
第五章 NM2の石敷遺構から出土した植物種子および果実	内藤俊彦 ……………166
第六章 NM石敷遺構の花粉分析の結果について	竹内貞子 ……………174
第七章 NM2出土の動物遺存体	高橋 理 ……………175
第八章 NM2出土の熔融ガラスの分析結果	旭硝子株式会社 ……178
引用文献 ……………	182
Summary ……………	184
図版 ……………	194

## 目 次

<p>図1 東北大学と埋蔵文化財…………… 3</p> <p>図2 NM1 試掘区の配置…………… 7</p> <p>図3 NM1 発掘調査区の位置…………… 8</p> <p>図4 NM11983年度発掘調査区の概況… 8</p> <p>図5 NM1 土層断面図…………… 9</p> <p>図6 NM1 遺構変遷図(1983年度)…11</p> <p>図7 NM1 出土の遺物…………… 13</p> <p>図8 NM1 出土の瓦(1)…………… 14</p> <p>図9        *       (2)…………… 15</p> <p>図10 NM2・NM3発掘区・試掘坑配置図…18</p> <p>図11 NM2 土層断面図…………… 20</p> <p>図12 NM2 遺構配置図・断面図</p> <p style="padding-left: 100px;">2層上面…………… 21</p> <p>図13       *       4層上面…………… 22</p> <p>図14       *       5・6層上面…………… 23</p> <p>図15       *       7層上面…………… 24</p> <p>図16 石敷遺構内遺物出土状況…………… 27</p> <p>図17 石敷遺構の平面図と断面図…………… 27</p> <p>図18 陶磁器の部位名称と計測部位…………… 29</p> <p>図19 茶碗と小形茶碗の外形プロフィール… 34</p> <p>図20 NM2 出土の茶碗(1)…………… 35</p> <p>図21 NM2 出土の茶碗(2)…………… 36</p> <p>図22 NM2 出土の茶碗(3)…………… 37</p> <p>図23 NM2 出土の茶碗(4)…………… 38</p> <p>図24 NM2 出土の小形茶碗…………… 39</p> <p>図25 NM2 出土の陶器皿類…………… 53</p> <p>図26 NM2 出土の磁器皿類(1)…………… 54</p> <p>図27 NM2 出土の磁器皿類(2)…………… 55</p> <p>図28 NM2 出土の磁器皿類(3)…………… 56</p>	<p>図29 NM2 出土の土瓶(1)…………… 62</p> <p>図30 NM2 出土の土瓶(2)…………… 63</p> <p>図31 NM2 出土の土瓶(3)…………… 64</p> <p>図32 NM2 出土の土瓶と急須…………… 65</p> <p>図33 NM2 出土の土瓶の蓋…………… 66</p> <p>図34 土瓶と小形茶碗の実容積比較…………… 67</p> <p>図35 各遺跡出土の土瓶・急須の実容積… 68</p> <p>図36 NM2 出土の徳利…………… 75</p> <p>図37 NM2 その他の陶磁器…………… 77</p> <p>図38 NM2 出土の土鍋…………… 80</p> <p>図39 NM2 出土の上師簀・瓦質土器…………… 81</p> <p>図40 NM2 出土の炭椀・蚊遣…………… 82</p> <p>図41 NM2 出土陶磁器の(FeO+MnO+ CaO+MgO)+(Na<sub>2</sub>O+K<sub>2</sub>O)関係 85</p> <p>図42 器種ごとにみた産地別出土数の比較… 86</p> <p>図43 NM2 出土の産地別陶磁器一覧表… 87</p> <p>図44 NM2 出土の木製品(1)…………… 91</p> <p>図45 NM2 出土の木製品(2)…………… 92</p> <p>図46 NM2 出土の木製品(3)…………… 93</p> <p>図47 NM2 出土の木製品(4)…………… 94</p> <p>図48 NM2 建築材解説図…………… 95</p> <p>図49 定義如米五重塔屋根柿葺詳細図… 96</p> <p>図50 NM2 出土の金属製品(1)…………… 99</p> <p>図51 NM2 出土の金属製品(2)…………… 100</p> <p>図52 NM2・3出土の和釘長さグラフ…100</p> <p>図53 NM2 出土のその他の遺物…………… 102</p> <p>図54 NM2 出土の軍靴の底…………… 103</p> <p>図55 NM2 出土の瓦(1)…………… 106</p> <p>図56 NM2 出土の瓦(2)…………… 107</p>
--	--

図57	NM3発掘区土層断面図・石垣平面 図及び断面図……………112	図73	二の丸小広間付近の変遷(1)……………134
図58	掘立柱建物I柱配置図と柱穴計測部位…113	図74	二の丸小広間付近の変遷(2)……………135
図59	打込はぎ石垣実測図……………114	図75	二の丸小広間付近の変遷(3)……………136
図60	NM3遺構変遷図(1)……………115	図76	二の丸小広間と周辺の建築図……………160
図61	NM3遺構変遷図(2)……………116	図77	二の丸表主要建物復原立面図……………161
図62	NM3各遺構平面図及び断面図(1)…117	図78	仙台城二の丸跡出土陶磁器の化学組成…165
図63	NM3各遺構平面図及び断面図(2)…118	図79	ヒメグルミおよびオオモミジの生育地と 石敷遺構の位置……………168
図64	NM3各遺構平面図及び断面図(3)…119	図80	サクラ属の核の大きさ……………170
図65	NM3出土の陶磁器(1)……………122	図81	エドヒガンの果実の散布……………170
図66	NM3出土の陶磁器(2)……………123	図82	NM2石敷遺構出土の植物種子…173
図67	NM3出土金属製品他……………125	図83	分析試料写真……………181
図68	NM3出土の瓦(1)……………128	付図1	現況建物・道路と二の丸遺物との関係
図69	NM3出土の瓦(2)……………129	付図2	御二の丸御指図
図70	NM3出土の瓦(3)……………130	付図3	嘉永六年・御二の丸御城中並中興 下水抜溝御絵図
図71	NM2・3発掘区・現況建物と二の丸遺構…133		
図72	礎石・石敷機能時の配置(NM2)…133		

## 表 目 次

表1	昭和58年度の事前調査と立会……………2	表13	NM2出土の皿類の文様分類……………46
表2	NM1の調査経過……………6	表14	NM2陶器皿の分布……………47
表3	NM1の層序・遺構……………10	表15	NM2磁器皿の分布……………47
表4	NM1の遺物の分布……………12	表16	NM2出土の陶器皿属性表……………57
表5	NM1の瓦の属性表……………16	表17	NM2出土の磁器皿属性表……………58
表6	NM2の調査経過……………19	表18	NM2出土の土瓶の属性表……………69
表7	NM2出土遺物の分布表……………28	表19	NM2出土の上瓶の書属性表……………70
表8	NM2茶碗の分布……………30	表20	NM2土瓶の出土分布表……………71
表9	NM2小形茶碗の分布……………31	表21	NM2出土の土瓶の蓋の出土分布表……………71
表10	NM2出土の茶碗の属性表……………40	表22	NM2その他の陶磁器属性表……………77
表11	NM2出土の小形茶碗の属性表……………41	表23	NM2出土の上師質・瓦質土器の分布……………79
表12	NM2出土の皿類の器形分類……………45	表24	NM2出土の木製品の分布……………89

表25	NM2出土の金属製品他の分布	103	表36	月次御札と建物との関係	149
表26	NM2出土の瓦の分布	105	表37	主なる年中儀式と建物との関係	149
表27	NM3遺構新旧関係表	110	表38	接見、拝命、御札と建物との関係	151
表28	NM3調査経過	111	表39	X線粉末回折法による鉱物同定結果	163
表29	NM3柱穴計測表	113	表40	NM2出土陶磁器および地球化学的標準試料の分析結果	164
表30	NM3出土の陶磁器の分布	121	表41	NM2石敷遺構から出土した植物種子および果実	167
表31	NM3出土の陶磁器観察表	123	表42	花粉百分率表	174
表32	NM3出土の木製品・金属製品他の分布	124	表43	NM2動物遺存体一覧表	177
表33	NM3出土の瓦属性表	127	表44	溶融ガラスの成分(組成)	179
表34	仙台城二の丸建築関係年表	137	表45	軟化温度および比重	179
表35	年始御札と建物との関係	148			

## 図 版 目 次

図版1	NM1全景と断面図	195	図版19	NM2出土の陶器皿(2)	213
図版2	NM1東区遺構(1)	196	図版20	NM2出土の陶・磁器皿	214
図版3	NM1東区遺構(2)	197	図版21	NM2出土の磁器皿(1)	215
図版4	NM2発掘区全景と遺構	198	図版22	NM2出土の磁器皿(2)	216
図版5	NM2作業風景・遺物出土状況	199	図版23	NM2出土の磁器皿(3)	217
図版6	NM2の遺構(1)	200	図版24	NM2出土の磁器皿(4)	218
図版7	NM2の遺構(2)	201	図版25	NM2出土の土瓶(1)	219
図版8	NM2の断面	202	図版26	NM2出土の土瓶(2)	220
図版9	NM3発掘区全景	203	図版27	NM2出土の土瓶(3)	221
図版10	NM3の遺構(1)	204	図版28	NM2出土の土瓶(4)	222
図版11	NM3の遺構(2)	205	図版29	NM2出土の土瓶(5)	223
図版12	NM3の遺構(3)	206	図版30	NM2出土の土瓶(6)	224
図版13	NM2出土の茶碗(1)	207	図版31	NM2出土の土瓶・急須・蓋	225
図版14	NM2出土の茶碗(2)	208	図版32	NM2出土の土瓶の蓋(1)	226
図版15	NM2出土の茶碗(3)	209	図版33	NM2出土の土瓶の蓋(2)	227
図版16	NM2出土の茶碗(4)	210	図版34	NM2出土の徳利とその他の陶磁器	228
図版17	NM2出土の小形茶碗	211	図版35	NM2出土の上皿とその他の陶磁器	229
図版18	NM2出土の陶器皿(1)	212	図版36	NM2出土の土鍋と土師質・瓦質土器	230

図版37	NM2出土の土師質・瓦質土器…	231	図版17	NM2出土の金属製品	
図版38	NM2出土の瓦(1)……………	232		ガラスボタンと伊達家籠の矢……………	241
図版39	NM2出土の瓦(2)……………	233	図版48	NM2出土のその他の遺物……………	242
図版40	NM2出土の木製品(1)……………	234	図版49	NM2出土の軍靴の底と軍靴の見本…	243
図版41	NM2出土の木製品(2)……………	235	図版50	NM1出土の瓦と銅輪……………	244
図版42	NM2出土の木製品(3)……………	236	図版51	NM3出土の陶磁器……………	245
図版43	定義如来五重塔の柿葺作業……………	237	図版52	NM3出土の瓦(1)……………	246
図版44	定義如来五重塔の軒付……………	238	図版53	NM3出土の瓦(2)……………	247
図版45	柿葺屋根と道具……………	239	図版54	NM3出土の瓦とその他の遺物…	248
図版46	NM2出土の金属製品……………	240			



## 第I章 昭和58年度調査の概要

### 1. はじめに

川内地区、青葉山地区、富沢地区には、東北大学埋蔵文化財調査委員会が設置され、埋蔵文化財調査班が調査を実施する以前から周知の遺跡が存在し、小規模な調査も実施されてきた(図1)。

この中で川内地区はかつての仙台北の丸とその周辺に広がる武家屋敷であり、近世の歴史学・考古学にとって重要な遺跡である(附図1)。

昭和49年の文系厚生会館建設時には仙台市教育委員会によって、工事に伴う事前調査が実施され、石敷の溝状遺構が発見されている。また昭和52年には、川内図書館本館裏の排水路建設の際、石敷の遺構に併い陶磁器・簀(かんざし)・筭(こうがい)などが発見されたため、文学部考古学研究室により小規模な緊急調査が行われた。昭和54年1月には、教養部プール新築工事の際に、井戸やピットが発見されたため、再び考古学研究室の手によって緊急調査が行われた。井戸内からは、江戸初期に遡る陶磁器類の他、種々の木製品等も発見された。

このように川内地区では、小規模な緊急調査が実施されてきたものの保存や事前調査を計画的に実施する機関がなかったため、十分な調査と保存は行われてこなかった。

青葉山地区は、東北大学植物園に連る広大な地域であり、昭和47年、工学部の各学科がこの地域の南半部に移転した。しかし、工学部移転当時、遺跡の存在は知られておらず、発掘調査が実施されたこともなかった。

しかし、青葉山地区に隣接する青葉台では、昭和46年頃、後期旧石器時代の遺跡が発見された(青葉山A遺跡)他、昭和55年には金属博物館前の露頭でも石器が採集された(青葉山C遺跡)。このようなことから当大学の青葉山地区内にも旧石器時代の遺跡の存在する可能性が指摘され、文学部考古学研究室は昭和56年からこの一帯の分布調査を実施した。その結果、昭和57年に薬学部に通じる露頭断面から後期旧石器時代の石器を3点採取した(青葉山B遺跡)。さらに青葉台でも新しい遺跡を1ヶ所発見し、旧石器時代の遺跡の分布密度はかなり高いことが明らかになった。また露頭の観察から後期旧石器時代ばかりでなく、3万年前より古い前期旧石器時代に遡る可能性も明らかになった。

富沢地区の周辺には、縄文時代前期の集落跡である三神峯遺跡、三神峯古墳、土手内横穴古墳群、金山窯跡、富沢窯跡などが群在しており、仙台市内でもっとも遺跡の密集度の高い地区の一つである。

昭和52年には、富沢地区の東北大学構内のグランド造成予定地区で遺物が採集され、考古学

研究室が緊急調査を行った結果、縄文時代、弥生時代、平安時代の複合集落遺跡であることが判明し、金山遺跡(芦ノ口遺跡)として登録された。

## 2. 調査に至る経過 (昭和58年度調査の概要)

昭和58年(1983年)度に行われた発掘調査は、事前調査4件、試掘調査1件である。また立会調査は8件にのぼる。発掘調査5件の内訳は、川内地区二の丸跡の事前調査が3件、青葉山地区の事前調査が1件である。青葉山地区では、試掘調査が1件行われた(表1)。

調査種別	調査地点	発掘調査	調査期間(天候等)	面積	平均深さ	結果
事前調査	川内二の丸第1次調査(NM1)	文系棟新築工事	昭和58年8/1~9/14(32)	150㎡	3.2m	瓦・土(17)
	〃 第2次調査(NM2)	文系厚生会館除害施設	〃 10/21~11/20(29)	60㎡	1.0m	〃
	〃 第3次調査(NM3)	〃	〃 12/1~1/9(27)	70㎡	1.2m	〃
試掘調査	青葉山B跡点(AO-B)	〃	〃 10/14~10/27(16)	50㎡	2.0m	遺跡は6部程度
	〃	〃	〃 11/21~12/21(24)	100㎡	2.5m	〃
立会	川内救護室跡点	〃	〃 10/4~6			遺跡・遺物なし
	〃	〃	〃 11/25~			
	川内二の丸A跡点北側	豊田通屋敷	昭和59年1/12~20			瓦・土(10)
	〃	御本宮廻道	〃 1/18 27~26			〃
	〃	〃	〃 1/27, 28			〃
	〃	〃	〃 2/14			遺跡・遺物なし
会	青葉山B跡点内クワトロコ堀	研究棟新築工事	〃 2/25			遺跡・遺物なし
	川内救護室跡点サッセル堀	御本宮廻道	〃 3/26 28~30			遺跡(1内照)

表1 昭和58年度の前調査と立会

Tables. 1 Rescue excavations in fiscal year 1983

### (1) 川内地区の調査 (付図1)

8月1日から9月14日にかけて文系棟新築工事に伴う事前調査を実施した。この地区は、旧二の丸の西端にあたと推定された(二の丸第1次調査NM1と略記する)。

10月31日から11月30日までは、文系厚生施設の除害施設建設に伴う事前調査を実施し、二の丸、小広間附近と推定される遺構を発見した。この遺構の重要性が明らかになったことから全掘せずに保存のための措置を講じることとなった(二の丸第2次調査NM2)。

このための代替地として、さらに南西側に発掘区を移し、ひき続き12月1日から翌年1月9日まで調査を行った。その結果この地区からも、二の丸南端を画すと考えられる石垣が発見された。その重要性を考慮して、石垣部分を除いて施工することとし、残りの部分について記録保存のための調査を行った(二の丸第3次調査NM3)。

### (2) 青葉山地区の調査

10月14日から10月27日にかけて、理学部・薬学部厚生施設の除害施設建設に伴う事前調査を



図1 東北大学と埋蔵文化財 (1,2,6,7,10,11は東北大学構内もしくはその隣接地帯である)

Fig. 1 Archaeological sites and Tohoku University (1,2,6,7,10,11 is within Tohoku University or its adjacent area)

実施した。その結果、後期旧石器時代に属する石器の集中地点が発見され、周知の遺跡である青葉山B遺跡はこの部分まで広がっていることが判明した(青葉山F遺跡：AOF)。

さらに11月21日から12月21日にかけて、東北大学附属図書館北青葉山分館の新築に伴う試掘調査を実施し、後期旧石器時代に属する礫等を発見した他、基本層序を確認し、本調査に備えた。また3月1日からは、同地点の本調査を開始した(青葉山B遺跡：AOB)。

### (3) 立会調査

8件の立会調査は、青葉山地区3件、川内文系地区4件、川内教養部地区1件である。

立会調査は、掘削作業を監視しながら、必要に応じて調査員が、スコップ等で断面・平面を削り、図面を製作・写真撮影することを原則とした。

(梶原 洋)

## 第二章 川内地区二の丸跡の調査

### 1. 遺跡の立地と歴史的背景

東北大学文系四学部・教養部植物園一帯は、旧仙台城二の丸跡とその周辺の武家屋敷跡、お萩林などに相当する(図1、付図1)。

川内地区は、広瀬川に向かって西から東へ、ゆるやかに傾斜する海拔50~70mの上町段丘上にある。西から南へと大きく蛇行する広瀬川に囲まれるように位置し、広瀬川が仙台城の外堀として機能していたことが推測できる。南側には、海拔140m前後の仙台城本丸が控え、西側一帯には、東北大理学部・工学部の研究棟の立ち並ぶ、仙台市内でもっとも高位の段丘である青葉山段丘が城の背後を守るかのように連っている。川内地区の東側には市街地が広がり、一望のもとに見渡すことができる(図1)。

伊達政宗の仙台城築城以前については、詳細は明らかでないが、国分氏により城が築かれていた可能性が指摘されている(伊東1979)。

また、この地には現在、新寺小路にある龍川院があったとも伝えられている(伊東1979)。慶長5年(1600年)、政宗によって、現在の本丸部分の築城が開始されたが、その当時、現二の丸部分には、政宗の長女五郎八姫<sup>いちはは</sup>の居住する西屋敷や、後に宇和島藩主となった政宗の四男宗家の屋敷があったと言われている(伊東1979)。

仙台城二の丸の歴史をふりかえると、当初本丸で行われていた仙台藩の諸行事は寛永15年(1638年)二代目忠宗によって、二の丸の造営が開始されるとともに、二の丸に移された。その後、綱村代の元禄年間には大規模な改築が行われたことが知られている(佐藤巧 1962)。

当初南側に片寄っていた二の丸敷地は、やがて政宗時代の西屋敷の全てをとり込み、北側に拡張され、この部分に奥向きの建物が立ち並ぶことになる(佐藤巧1962)。このように二の丸は仙台藩の行政の中心であるとともに、藩主の居館としてもその威容を誇ってきた(付図1)。

戊辰戦争の動乱の後、仙台藩は大幅にその所領を削られ、藩主は知藩事となり、それと共に二の丸には藩の勤政庁が置かれた。明治4年(1871年)の廃藩置県以後は明治政府の管轄下におかれ、東北鎮台(仙台鎮台)の本営として使用された。しかし明治15年(1882年)火災のためにその建物のほぼ9割が失われた。その後、この地には、第二師団司令部が置かれ、第二次世界大戦後は、米軍の駐留する地となった。昭和32年(1957年)に至り、米軍より返還され、東北大学の管理下に入り教養部・理学部附属植物園として使われ、昭和47年(1972年)以降は文学部・教育学部・法学部・経済学部・図書館が置かれた。

## 2. 二の丸第1次調査 (NM1)

### (1) 調査方法と経過

経済学部の西側新築される文系棟の建設に伴う事前調査として、昭和57年(1982年)11月12日～11月22日までの実質8日間の試掘調査を行なった。発掘区は建築予定地の範囲内に十字形に設定し、調査を実施した。調査面積は110㎡である(図2)。

昭和58年(1983年)8月1日から前年度試掘調査区の北側に、9×4mの発掘区を設定し、その内部を3×3mのグリッドに区分し調査を開始した。大学建設時の盛土を排除したが、地山が確認できないため、南側に2×1mの深掘区を設定し調査を進めた結果、約3mの盛土層下で江戸時代に属すると考えられる包含層を確認することができた(図3)。

その所見から、人力での排土は不可能と判断し、建設機械を使用して、15×10mの範囲を3m掘り下げ調査を進めることとした。期間中降水と湧水により、しばしばグリッド上端まで湧水となり、調査は著しく難行したが、4時期にわたる溝やピットを検出し(図4)、9月14日に調査は終了した(表2)。

830801	機土作業。湧水の勾く、ポンプ使用。1982年度とは異なる方向の傾斜あり。北東すみ一部固まらず。やり方用貫板すき打る。
830802	機土作業継続。機土作業継続。北東すみ石表土層。17:00鋼管(10536)出土、機掘り出土。
830803	北東隅2M×3Mの区を深掘り、北東隅3M×3M深掘り。溝と遺構確認。遺物(瓦)出土。
830804	北東区一北西区のトレンチ設定。北西区南側ザリム設置。北西区深掘継続。20~30cmほど全体レベル下がる。平板にて地形調査。残土。柱土質詳細断面の延長層を基準とし、発掘区併当に基準面設定。3M×3Mグリッドとする。
830805	午後調査。遺構の観察。
830806	東部遺構等の地山はげ。いので埋没的の掘り下げ(やぐら、A-E(北東区)の深掘りに切りかえる。A-B(北西区)の湧水のため放棄。
830808	午後調査。西側コンクリート。北東区深掘り続行。17:00上管埋没出土。水ははるく東東盛土層はグライ化している。
830809	北東区深掘り続行。瓦見。破片出土。1のグリッド部に、沼か池のような部分。1B-3-G:2M×2Mの深掘り設定。午後調査西側コンクリート。
830810	機土作業。機土作業。北東区深掘り。3Mでグライ土。鉄金。コンクリート。新しい瓦など出土。
830811	北東区深掘り。遺構の露を出した。埋め盛土層内から瓦等出土。
830816	機土作業。水抜き作業。平掘にグリッド。深掘区を入れる。家移動し。新掘点設定。
830819	水抜き作業。手掘り深掘。埋め盛土層。コンクリート内半分を掘削。湧水多く水抜き必要。
830820	コンクリート東半分を3M下掘り。面まで掘削。西半分多く。ポンプ回でつまる。
830822	機土作業中止。機土抜き。17:00ごろ大型ポンプ来る。
830823	機土半分排水終了。機土東半分の深掘り。コンクリートからレンガと磁器片。新掘り土から、瓦見。埋没物出土。
830824	樹木のための溝のみ。家気配調整。コンクリート使用できず。芝割セクション写真をとり、板石に貼る。
830825	水抜き3回。雨天中止。
830826	*
830827	*
830829	コンクリート使用。東半分、西半分を掘削深掘。東区深掘り並色土層土。グライ土(8層)を削る。
830830	東区深掘り内で遺構確認発見。ベルコン投入。高作業。
830831	東区機土。溝の掘り確認。西側深掘。地山とグライの境を面す。ベルコンを台座掘。
830901	機土。機土後深掘。深掘。西側深掘後一部掘削。
830902	東区遺構写真撮影おけ。平瓦。瓦見出土。溝1からは濁り湧水。ピット2と磁器確認。
830903	ピット2セクション。レベルとる。
830905	ピット1-2-3掘り上げ後。閉鎖完了。溝1溝2掘り上げ。西側深掘り入れ。
830906	ピット1。終了。ピット1に切りかえる。ピット4を発見。ピット3セクションレベル。溝2確認。
830907	埋没の土砂くずれを清掃。ピット4掘り上げ。埋没品は決死。
830908	ピット4実測。ダメ押し。溝1ダメ押し。ピット5掘り上げ。溝2掘り上げ開始。
830909	溝2掘り上げ失敗。東区北壁セクション写真了。
830910	雨中止。
830912	雨のちもり。機土抜き作業。機土北壁セクション。
830913	西壁(機土)セクション。生汚泥了。
830914	機土作業。

表2 NM1の調査経過

Table 2 A work record of daily excavations at NM1

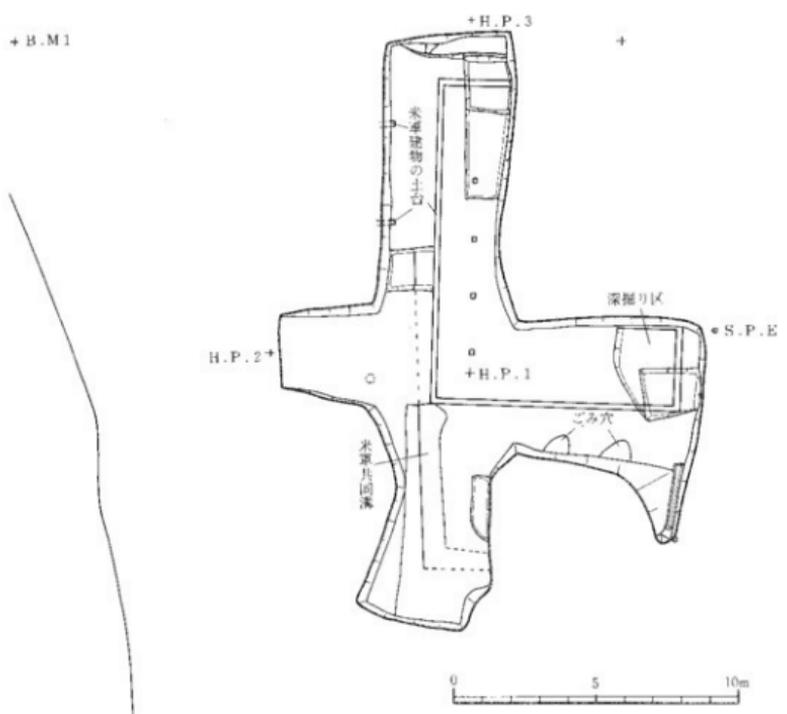
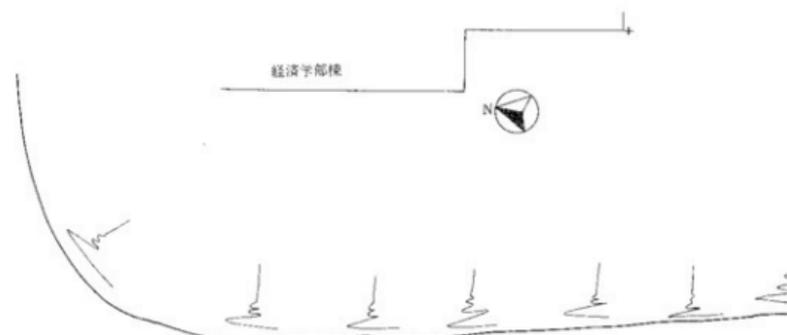


図2 NM1 試掘区の配置 (昭和57年度)  
 Fig. 2 Excavation at NM1 in 1982  
 NM1 is NM1 i.e. Location 1 of Ninomaru (Secondary Citadel)

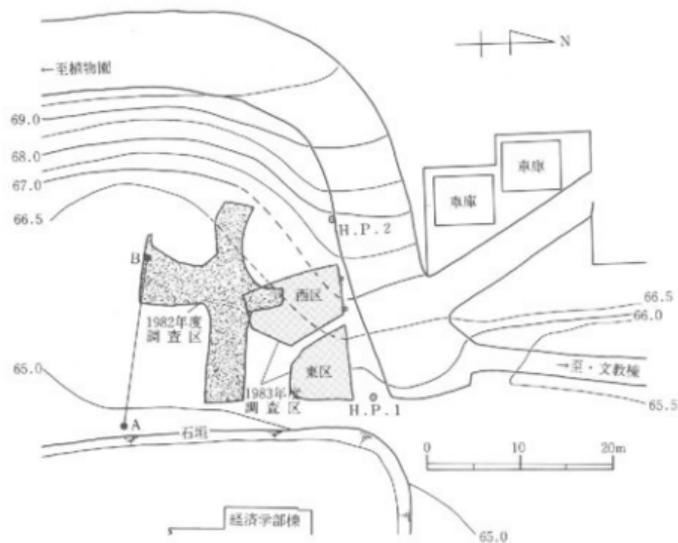


図3 NM1 (1982・83年)発掘調査区的位置  
 Fig. 3 Location of excavations (1982, 1983) and elevations at NM1

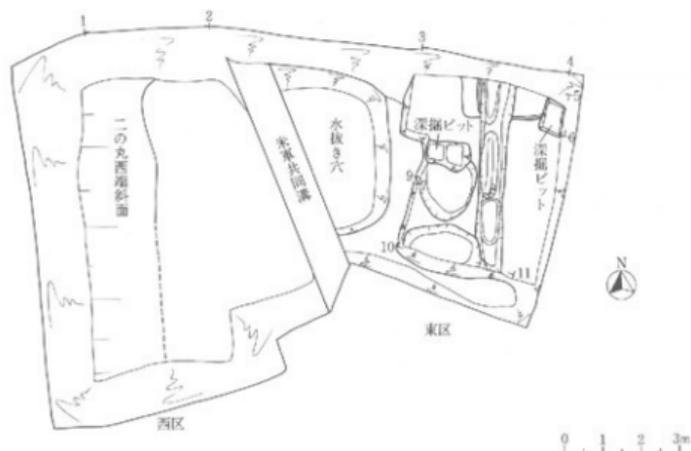


図4 NM1 1983年度発掘調査区の概況  
 Fig. 4 Excavation at NM1 in 1983

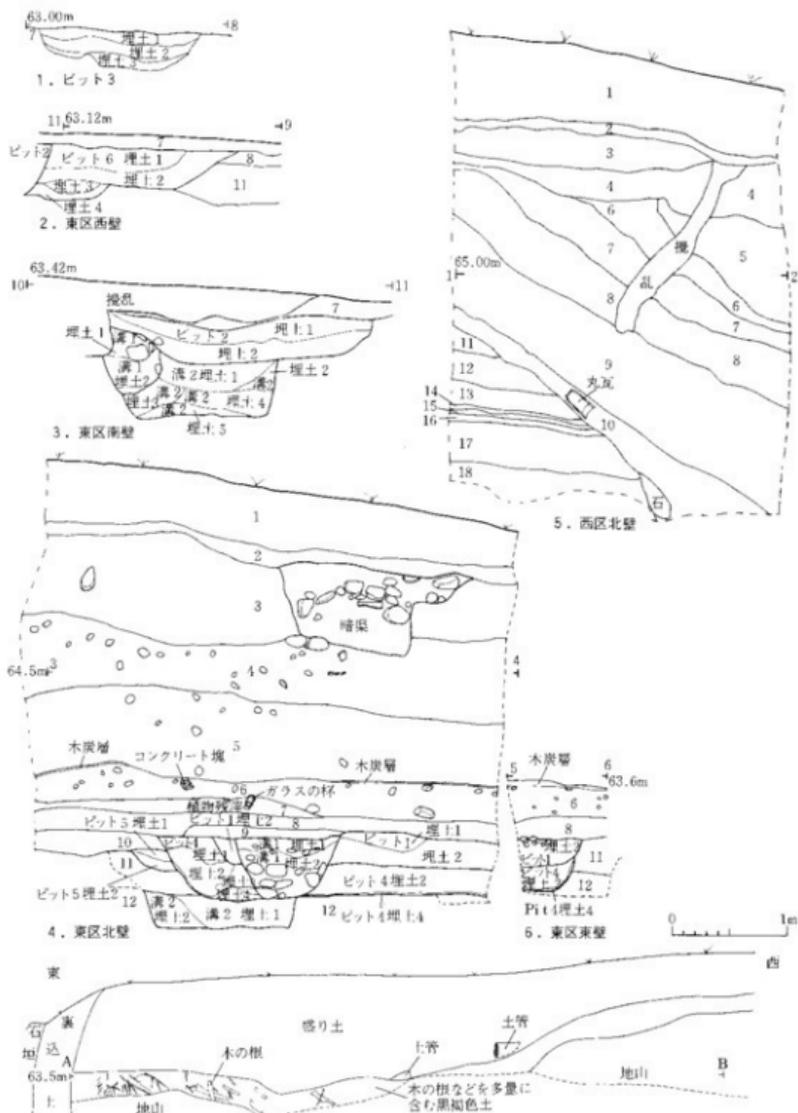


図5 NM1土層断面図  
Fig. 5 Cross sections of NM1

NM1 A図

## (2) 層 序 (図5)

### 1) 東 区

表土から約2m50cmの深さまでは、明治時代以降の盛土層と考えられる。1層は大学建設時のもの、2層から5層までは、米軍による整地(共同溝設置)層、6~7層(煉瓦・セメント片を含む)は、旧軍隊の盛土と考えられる。それ以下には、ガラス・煉瓦・セメント等の混入はなく、陶磁器類から見ても、江戸時代の包含層に相当すると推定できる。8層から11層までのうち、10・11層は自然の堆積によるものではなく、盛土層と考えられる。12層は地山の粘土層である。以下砂質土と粘土が交互に堆積しており、部分的に小礫もまじる。

### 2) 西 区 (図5-5)

東区と同様9層までは、明治以降の盛土層と考えられる。10層が江戸期の層で、東区の8層に対応する。11層以下は自然層である。

11層以下を切って斜面が作られており、10層の下部には、斜面にそって石が置かれていた。

### 3) I区南側断面 (図5-7)

建設に伴う削平の結果、南側に連続した断面が形成され、当該地区の大まかな地形が把握できた。約2.5mの盛り上りの下に木の根などを含む黒褐色シルト層が存在し、この層の上面が、かつて地表面だったことが推定できる。さらに地山の自然層が、幅8.5mに渡って掘り込まれ、堀状遺構の存在が予想される。黒褐色シルト層はおそらく東区の7層もしくは8層に対応すると考えられる。

以上の所見から、従来、大規模に削平されていると考えられていた文教棟・経済棟がある平坦面でも包含層は削除されたとしても、表上直下に遺構が残存している可能性が高くなった。

## (3) 東 区 の 遺 構 (図6)

8層以下が、江戸時代以前に相当すると考えられる。遺構としては、溝が2本、ピットが6基検出された。掘り込み面と遺構との関係は、表3にまとめた。

### 1) 8層上面

① ピット2は、発掘区南西隅にあり、半分は区外である。楕円形を呈し、長径2.2m、深さは約30cmである。埋土中に径10cm程の小礫を含み、人為的に投げ込まれたと考えられる。溝1を切っている。

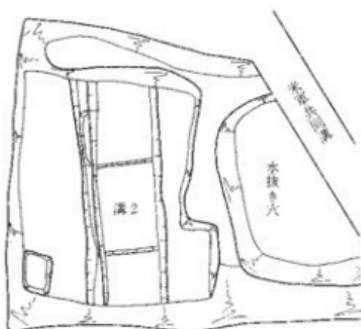
② ピット6は平面では確認されておらず、断面にのみ残っている。第3表 NM1の層序・遺構ピット2よりも新しい遺構である。

層	溝	ピット
8		6
		2
10	1	1
		4
11		5
12	2	

Table. 3 Strata and features at NM1

### 2) 10層上面

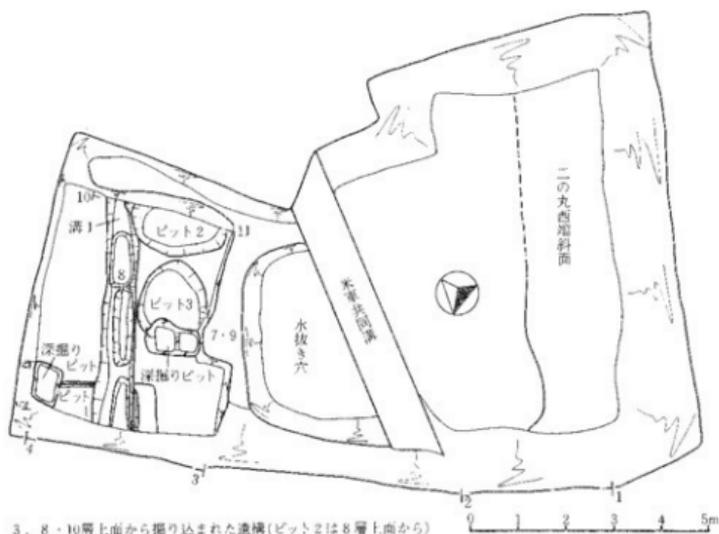
① 溝1は発掘区の中央を南北に走り、幅約80cm、深さが約30cmである。内部に5~10cmの礫



1. 12層上面から掘り込まれた遺構



2. 11層上面から掘り込まれた遺構(ピット4を除く)



3. 8・10層上面から掘り込まれた遺構(ピット2は8層上面から)

図6 NM1 遺構変遷図 (1983年度)

Fig. 6 Distribution of pits, drains and another features on each stratum at NM1

が詰め込まれており、人為的に埋めたと考えられる。傾斜は北が高く南が低い。暗渠と推定される。

② ビット1は、東区北東隅で確認されたが、大部分が区外にある。確認部の大きさは2.2×0.9m、深さは約25cmである。全体を推定すれば、方形の竪穴状遺構となろう。壁の立上りは明瞭であり、床面も平里である。柱穴等は確認されなかった。白山四丁目遺跡に類似の遺構が見られ、その中ではごみ穴と推定されている。しかし当遺構の場合は、遺物がほとんど見られないため性格は不明である。

③ ビット3は、ビット2の北側に位置し、一部試掘坑によって切られているが、ほぼ円形に近い外形をもつ(図6)。径は約1.5m、深さは約10cmである。遺物として埋土中から瓦片が発見された。

④ ビット4は、ビット1の直下にある。外形はビット1と同じくほぼ隅丸方形と推定されるが、西側に約50cmはり出し、深さも50cmとビット1より深い。このビットは一時期閉口していたものが後に人為的に埋め戻されたと推定される。埋土2層から木片、3層から陶磁器片が発見された。形態と方向から考えてビット1は、ビット4の存在が明確だった時期に作られたと推定できることから、両遺構の時間差はほとんどないと考えられる。

⑤ ビット5は、ビット4に切られており、全体の形は不明である。深さは約18cmと浅い。

### 3) 12層上面

溝2は、溝1と同じく、南北方向に伸びる。幅は溝1より広く、約1.4m、深さはやや浅く25cmである。北から南に向かって階段状の傾斜をもつ。

## (4) NM1の遺物(図7、図版50、52-5・6)

### 1) 陶磁器類、金属器類、木製品類、自然遺物

いずれも破片であり、かつ少量のため、遺構・層序との関係を中心にして、それを表として示し(表4)、ここでは簡単な解説にとどめる。

#### ① 東区

#### 3層

1953年アメリカ合衆国発行の1セント銅貨が出土した。裏面にはリンカーンの横顔が描かれ

出土地点	遺物	陶 器					磁 器				土 師 瓦		金 属 器		向 野 遺 物	
		碗	皿	土 瓶	磁 利	その他	碗	皿	土 瓶	その他	瓦	その他	鉄 器	その他		
東 区	3層 層 中															1(比類)
	7層 層 中				1	1	1?	2								
	8層 層 中		1													
	ビット2										6					
	10層 層 中		1				1(新出)	4	1			1				1(新)
不明	ビット3		1			1					1					
不明	不明										1			1(新)		
不明	不明			1(山崎文)					1(山崎文)							

表4 NM1の遺物の分布

Table 4 Distribution of artifacts at NM1

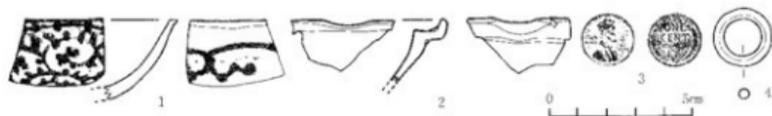


図7 NM1出土の遺物  
Fig. 7 Artifacts from NM1

ている。米軍宿舎の整地層上から出土している(図7-3)。

#### 7層

磁器：内面に蕨手唐草文を配し、外面にも唐草文を配した皿の破片(図7-1)の他に染付の碗と皿の破片が各1点出土した。

陶器：外面に鉄釉をかけ、周囲に数条の沈線を通らした徳利と推定される破片の他に、木灰釉を掛けた大堀の皿(図7-2)が出土している。

#### 8層

陶器：層中から灰釉を掛けた皿の高台部分の破片が1点出土している。皿付の部分は露胎となっており、軸挿けの際の指痕も見られる。

土師質土器：ピット2から灯明皿の破片が4点まとまって出土した他、胎土に2～3mmの礫を含む異った土器が2点発見されており、時代が遡る可能性がある。

#### 10層

磁器：溝1から染付茶碗の破片が4点、皿の破片が1点出土した。皿の内面には文様の一部があるが、全体の構成は不明である。裏面は唐草文の末端が見られる。

陶器：同様に溝1から唐津産の内面に刷毛目の施された鉢の破片が出土している。

土師質土器：溝1から灯明皿の破片が1点出土した。

#### 不明層

陶器：ピット3から茶碗の口縁部破片が1点、徳利の体部破片が1点出土している。茶碗には木灰釉が、徳利の外表面には吹掛絵付透明釉・内面には木灰釉が掛けられている。

金属製品：鉄製の輪が1点出土した(図7-4)。

ピット2・3出土の礫：なお、ピット2・3の埋土には、拳大から人頭大の礫が多数含まれており、これらを採集して観察したが、人為的な加工および使用の痕跡が見られるものは無かった。仙台市今泉城(山田1983)や多賀城市新田遺跡北寿福寺地区(多賀城市教委 近刊)では、中世の礫石器や石製品が数多く出土しており、時代的な違いを感じさせるが、江戸時代のこうした礫の性格も今後明らかにしなければならない課題のひとつである。

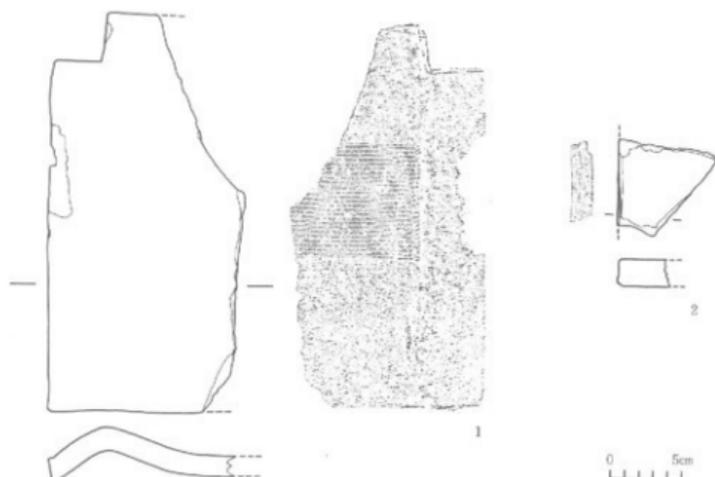


図8 NM1出土の瓦(1)  
Fig. 8 Ceramic roof tiles from NM1 (1)

## ② 西 区

層不明だが、陶器としては大堀の山水土瓶の体部破片が1点出土し、磁器としては、<sup>111</sup>襷絵の染付皿の破片が1点出土した。(梶原 洋)

### 2) NM1出土の瓦 (図8・9、図版50、52-5・6)

破片総数は123点と発掘区の面積に比べて少ない。丸瓦・平瓦・軒平瓦・<sup>84</sup>棧瓦が出土しているが、図示できるものはほとんどなく、軒平瓦2点、丸瓦2点、棧瓦1点、印の押された平瓦片1点の計6点のみである。全体に共通して、胎土は小石まじりで粗い(表5)。

①軒平瓦(図9-1・2) 唐草文様をもつもの2点のみの出土である。2点とも瓦当部の破片であり、しかも少片で、全体の文様はわからない。調整は瓦当部の表は型づくりのまま。瓦当部の裏、凹面はヨコナデ調整され、平滑である。凸面は粗いヘラケズリされ、ざらざらしている。文様のある瓦当の表面には、型から抜くのを容易にするためか、砂が付着している。

②丸瓦(図9-3・4) 図示した2点の他に破片が10点ある。調整は3・4ともに凹面は布目と布目に切られた横方向の筋目が見え、凸面は玉縁部、体部ともヨコナデで仕上げられている。凹面の筋目は型に入れる以前に、粘土塊から1個体分の粘土を切離す際についたものと思われる。他に凸面をヘラミガキで仕上げている破片、凹面に棒状のものをさしこんだような圧痕を残す破片がある。

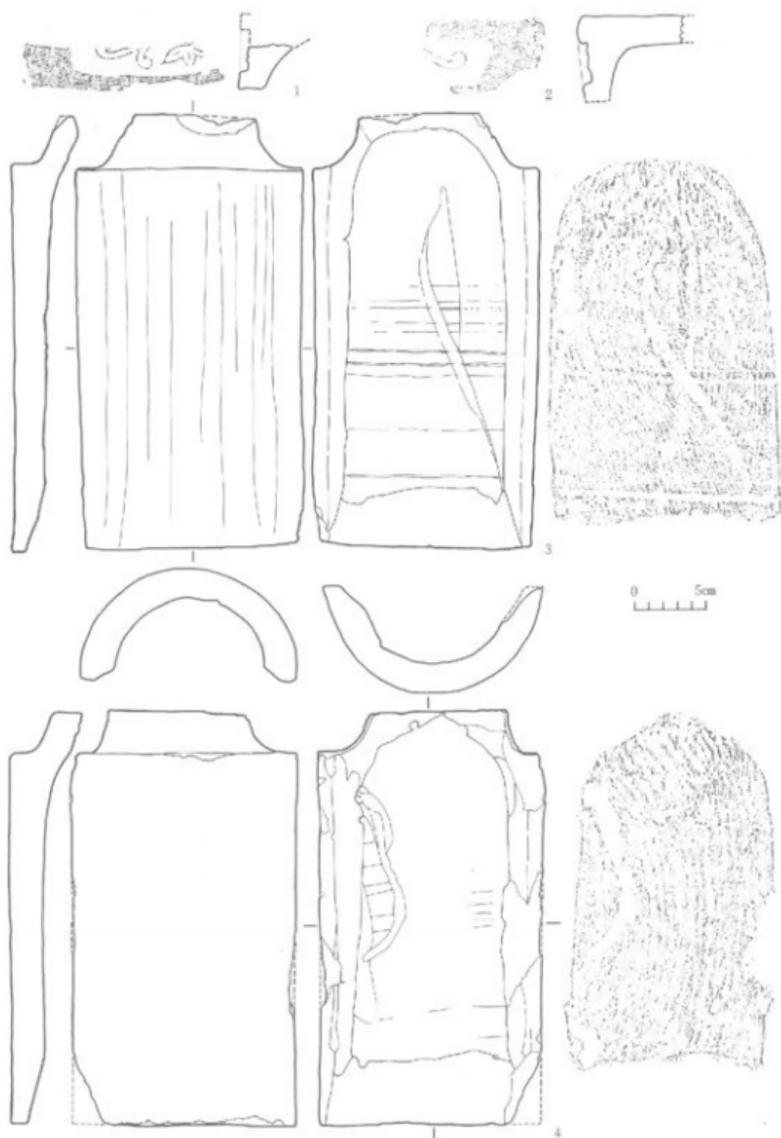


図9 NM1出土の瓦(2)  
Fig. 9 Ceramic roof tiles from NM1 (2)

図	出土区層位	種類	残存 部位	法世(単位mm)		色		土	焼成	備考	図版
				長(145)	幅(30)	表面	割れ口				
9-1	1号溝底埋土中	平瓦片	瓦片	長(145)	幅(30)	N4 / 1 灰 色	N 8 / 1 灰白色	小石混じりの粗い粘土	不灰	鎌草文	
9-2	中央区深掘り	*	*	長(65)	幅(54)	*	10Y 7 / 1 灰白色	*	*	*	
9-3	西区 10 層	丸瓦	丸瓦	長(95)	幅(55)	2.5GY 4 / 1 緑黄-灰 色-DGY 3 黄褐色	10Y 6 / 1 灰 色	*	良好		
9-4	掘 込 中	丸瓦	丸瓦	200	156	72	19	N5 / 1 灰 色	N 5 / 1 *	*	良好
8-1	北東区テラス中	丸瓦片	丸瓦片	長(277)	幅(130)	厚(18)	N4 / 1 *	10Y 7 / 1 灰白色	*	不灰	表面に傷みあり
8-2	北東区テラス中	平瓦片	平瓦片				N3 / 1 *	*	*	部の表面を埋土した	

表5 NM1 の瓦の属性表

Table 5 Attributes list of ceramic roof tiles from NM1

③ 棧瓦 (図 8-1) 西区斜面の明治以降の盛土層から出土したものである。型づくりの後、調整はほとんど加えられていない。凹面には櫛目が施される。

④ 平瓦片 (図 8-2) 「富」の印が押されている。

平瓦は出土しているが、図示できるものはない。図 9-3 は西区 10 層、図 9-4 はカクランから出土している。図 9-1 は溝 1 の埋土、図 9-2 は試掘深掘り出土で 8 層相当層から出土しており、仙台城二の丸と関連ある遺物である。  
(前沢聡史)

#### (5) ま と め

遺構は、4 時期にわたる。まず、12 層上面(自然層)に溝 2 を構築し、人為的に埋め戻した後(もしくは同時に)、11 層を盛土し、そこにピット 5 を掘る。さらに 10 層を盛土し、ピット 4 → ピット 1 → 溝 1 を構築する。その後 9 層・8 層を盛土し、ピット 2 → ピット 6 (ピット 3 は切りあなし)を構築している。溝 1 と 2 が同一方向に走り、ピット 1 と 4 が同一位置に同じような形態で構築されている事実は、盛土による断続はあるものの、これらの遺構のそれぞれの位置関係ははっきりと知られている程度の時間内で、次々と構築されたことを示している。

二の丸絵図中、享和二年(1802年)図をもとにした旧二の丸と四学部建築物との関係位置図(付図 1)を参照すれば、当該地区は、二の丸の最西端を画する現状の部分にあっており、溝 1・2 がそれに相当する可能性もある。しかし、いずれの溝も幅が 1.4m、そして 0.8m と細く、図に示された堀(1/1000 として幅約 4m)ほど広くはない。この堀についてはむしろ工区断面に現われた、幅 8m 程の落ち込み部が相当する可能性がある(図 5-7)。ピットについては、絵図中にそれらしきものを見出すことはできない。また、西区では断面図に見られるように斜面となっており(図 5-5)、これは絵図中に見られる観音堂へ至る階段で示される斜面に比定される可能性が高い。絵図中に見られるように、この部分は、二の丸の建物区域外であり、恒久的な建物などがあったとは考えられない。しかし、臨時的な建物が存在していた可能性は十分に考えられる。この地点では、瓦がやや多く出土するものの、その他の遺物は極めて少なく、時代を明確に判定できるものはない。このことは、この地点が二の丸の中心部から外れていたことと関連すると考えられる。  
(梶原 洋)

### 3. 二の丸第2次調査 (NM2)

#### (1) 調査方法と経過

調査区は、川内地区の南端にある文系厚生施設の東側にあたる。厚生施設の建物に平行して調査区を設定した。長軸の方位はN16°E、大きさは東西5.5m、南北10mである。これをさらに3mの小グリッドに区画し、南北方向をA～D、東西方向を1～2とした(図10)。試掘の結果、約1mの厚さで盛土があり、その下に二の丸の建物跡が確認された。バックホーによって盛土層を排土し、調査を開始した。調査の経過は表6に示した。遺物は、区(小グリッド)・層・遺構ごとに収納し、実測は遺形を使用した。

#### (2) 層 序 (図11)

基本層序は、大別すると次の通りである。1層(盛土層)は、大学建設時の1a層と、米軍駐留時と考えられる。粘土を主体とする1b層と、その下の1c層からなる。2層は焼土直上の砂層で、整地層と考えられる。3層は基本的に火災による焼土層である。一部は火災直後に整地を受けていると推定される。4層は、3層直下の火災による炭層、もしくは炭化物を多量に含む層である。5層・6層・7a層は、砂・粘土からなる層で、盛土層と判断される。7b層以下は、自然堆積層である。

#### (3) 遺 構

3層(焼土整地層)を境に、大きく二の丸焼失以後と以前にわけられる。

##### 1) 2層上面(二の丸焼失以降の盛土層 図12)

2層を掘り込んで作られている遺構としては、8基のピットが確認された。ピット7・8・10は外形がほぼ正方形に近く、内部に丸石が詰め込まれ、埋土として砂が入る。ピット6・12は丸石はないが、埋土しての砂が入る。これらは礎石の掘り方と判断されるが、建物の規模・プランは復元できなかった。ピット9と11の性格は不明である。

##### 2) 3層上面(二の丸焼失後、焼土整地層 図13)

遺構としては、主にピットが検出された。

ピット1・2・4・5・24は焼土を含む埋土を持つ。この中で特にピット1には、炭化骨片が混じっていた。ピット24からは、焼けた骨片が多量に検出され、種の同定が行われた(本文第Ⅷ章)。

ピット13・14・15・16・17・23は焼土を含む不定形のピットであるが、下部から根石と思われる礫群が検出され、礎石の抜き取り痕と判断された。

##### 3) 5層上面(二の丸焼失面 図14)

主な遺構としては、帯状の焼け面とピットが検出された。

帯状の焼け面は、礎石抜き取り痕の間を結ぶように広がる。周囲に礫石を持ち、径5cm程の

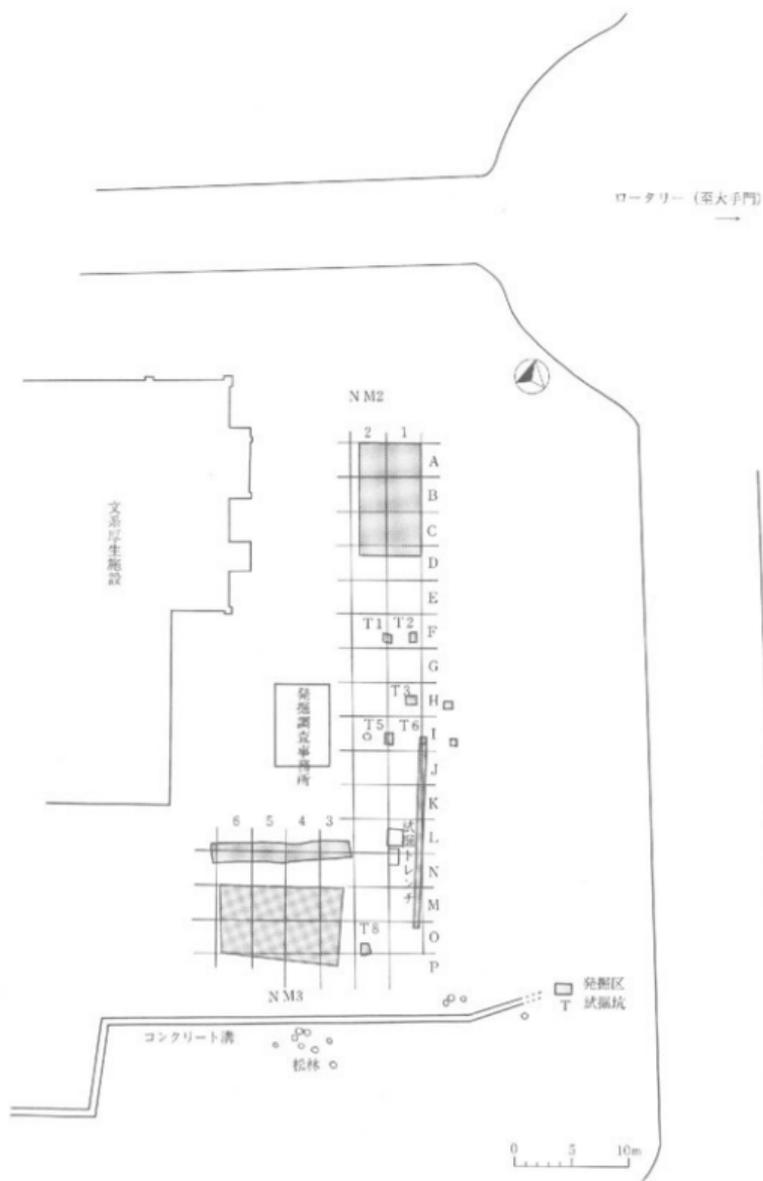


図10 NM2・NM3発掘区試掘坑配置図

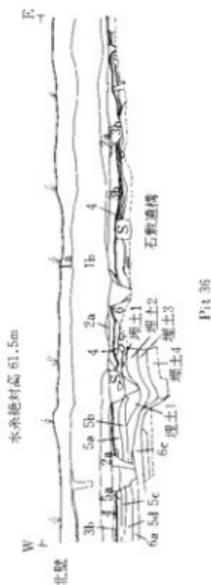
Fig.10 Grids showing location of excavations and test pits at NM2 and NM3  
 NM2 and NM3 i.e. Location 2 and 3 of Ninomaru (Secondary Citadel) of Sendai Castle

日付	11/1	11/2	11/4	11/5	11/7	11/8	11/9	11/10	11/11	11/12	11/14	11/15	11/16	11/17	11/18	11/19	11/21	11/22	11/25	
調査内容 土質調査																				土質調査 土質調査
調査内容 土質調査																				土質調査
調査内容 土質調査																				土質調査
調査内容 土質調査																				土質調査
調査内容 土質調査																				土質調査
調査内容 土質調査																				土質調査
調査内容 土質調査																				土質調査
調査内容 土質調査																				土質調査
調査内容 土質調査																				土質調査
調査内容 土質調査																				土質調査

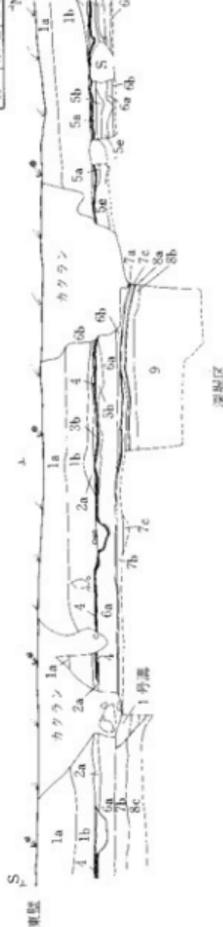
日付	11/25	11/28	11/29	11/30	12/23	12/24	12/26	12/26	12/27	12/28	12/29	12/30	12/31	04 1/7	1/9	1/10	1/17
調査内容 土質調査																	
調査内容 土質調査																	
調査内容 土質調査																	
調査内容 土質調査																	
調査内容 土質調査																	
調査内容 土質調査																	
調査内容 土質調査																	
調査内容 土質調査																	
調査内容 土質調査																	
調査内容 土質調査																	

表6 NM2の調査経過  
Table. 6 A work record of daily excavations at NM2

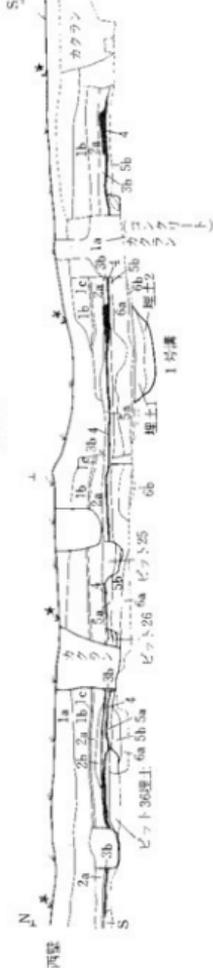
層名	色調	土質	備考
1a	黒褐色	砂質粘土	200
1b	黒褐色	粘質粘土	200
1c	灰褐色	砂質土	100
2a	灰褐色	砂質土	100
2b	灰褐色	砂質粘土	100
3a	灰褐色	砂質土	100
3b	灰褐色	砂質土	100
4	褐色	灰化土	100
5a	明褐色	砂質土	100
5b	褐色	砂質土	100
5c	褐色	砂質土	100
5d	灰褐色	砂質土	100
5e	灰褐色	砂質土	100
6a	黒褐色	砂質土	100
6b	黒褐色	砂質土	100
6c	黒褐色	砂質土	100
6d	黒褐色	砂質土	100
6e	黒褐色	砂質土	100
6f	黒褐色	砂質土	100
6g	黒褐色	砂質土	100
6h	黒褐色	砂質土	100
6i	黒褐色	砂質土	100
6j	黒褐色	砂質土	100
6k	黒褐色	砂質土	100
6l	黒褐色	砂質土	100
6m	黒褐色	砂質土	100
6n	黒褐色	砂質土	100
6o	黒褐色	砂質土	100
6p	黒褐色	砂質土	100
6q	黒褐色	砂質土	100
6r	黒褐色	砂質土	100
6s	黒褐色	砂質土	100
6t	黒褐色	砂質土	100
6u	黒褐色	砂質土	100
6v	黒褐色	砂質土	100
6w	黒褐色	砂質土	100
6x	黒褐色	砂質土	100
6y	黒褐色	砂質土	100
6z	黒褐色	砂質土	100
7a	青褐色	砂質土	100
7b	青褐色	砂質土	100
7c	青褐色	砂質土	100
7d	青褐色	砂質土	100
7e	青褐色	砂質土	100
7f	青褐色	砂質土	100
7g	青褐色	砂質土	100
7h	青褐色	砂質土	100
7i	青褐色	砂質土	100
7j	青褐色	砂質土	100
7k	青褐色	砂質土	100
7l	青褐色	砂質土	100
7m	青褐色	砂質土	100
7n	青褐色	砂質土	100
7o	青褐色	砂質土	100
7p	青褐色	砂質土	100
7q	青褐色	砂質土	100
7r	青褐色	砂質土	100
7s	青褐色	砂質土	100
7t	青褐色	砂質土	100
7u	青褐色	砂質土	100
7v	青褐色	砂質土	100
7w	青褐色	砂質土	100
7x	青褐色	砂質土	100
7y	青褐色	砂質土	100
7z	青褐色	砂質土	100
8	青褐色	砂質土	100
9	黒褐色	砂質粘土	100
10	黒褐色	砂質粘土	100
11	黒褐色	砂質粘土	100



“N” 水準絶対高さ 61.5m



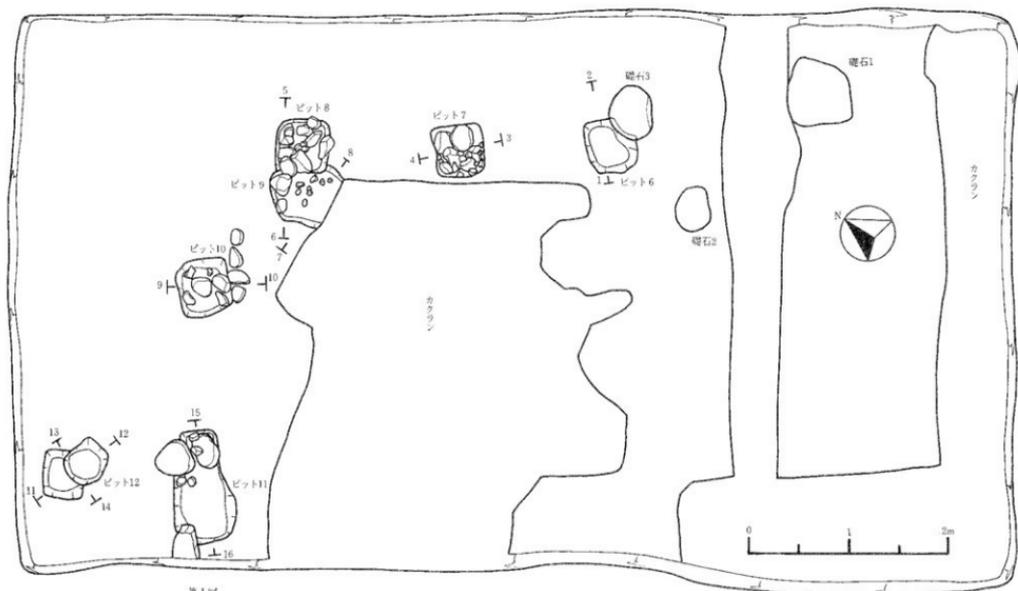
S、水準絶対高さ 61.5m



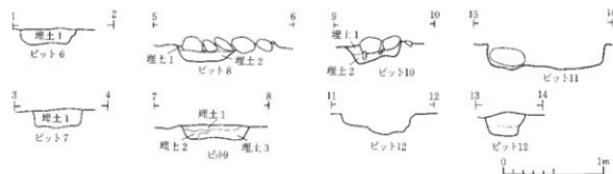
0 1m

図11 NM2 土層断面図

Fig. 11 Cross sections of excavation at NM2



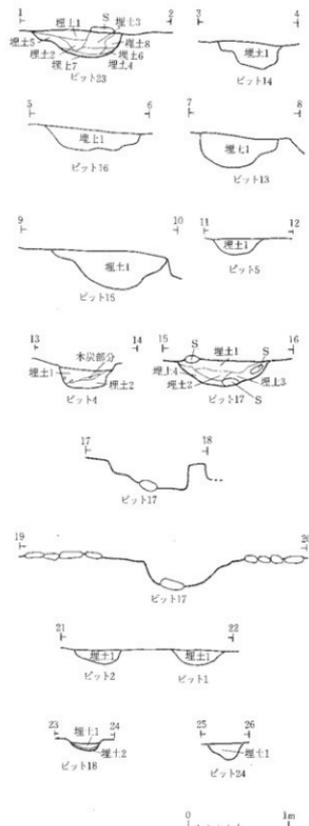
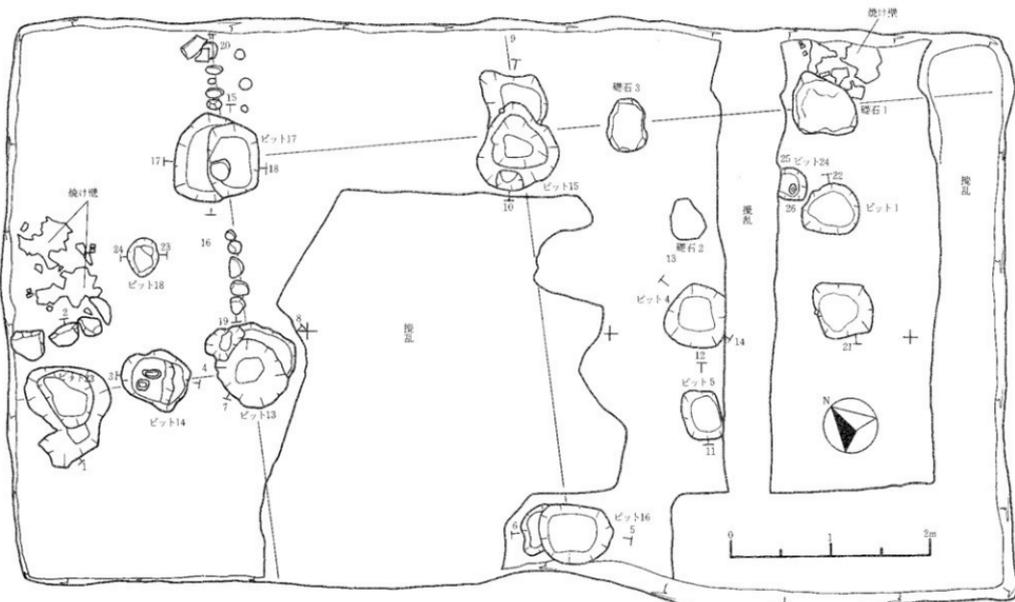
第1図



ピット	埋土	礎石	層	層	基
ピット6	1	灰褐色	粘	粘	粘り強い土質で、硬質の砂質土である。
	1	灰褐色	粘	粘	粘りの強い土質で、硬質の砂質土である。
ピット6	2	灰褐色	粘	粘	粘りの強い土質で、硬質の砂質土である。
	2	黄褐色	粘	粘	粘りの強い土質で、硬質の砂質土である。
ピット9	1	黄褐色	粘	粘	粘りの強い土質で、硬質の砂質土である。
	2	赤褐色	粘	粘	粘りの強い土質で、硬質の砂質土である。
	3	灰褐色	粘	粘	粘りの強い土質で、硬質の砂質土である。
ピット10	1	灰褐色	粘	粘	粘りの強い土質で、硬質の砂質土である。
	2	黄褐色	粘	粘	粘りの強い土質で、硬質の砂質土である。
ピット12	1	黄褐色	粘	粘	粘りの強い土質で、硬質の砂質土である。
	2	黄褐色	粘	粘	粘りの強い土質で、硬質の砂質土である。

図12 NM2遺構配置図・断面図(2層上面)

Fig. 12 Distribution and cross sections of features on stratum 2 at NM2



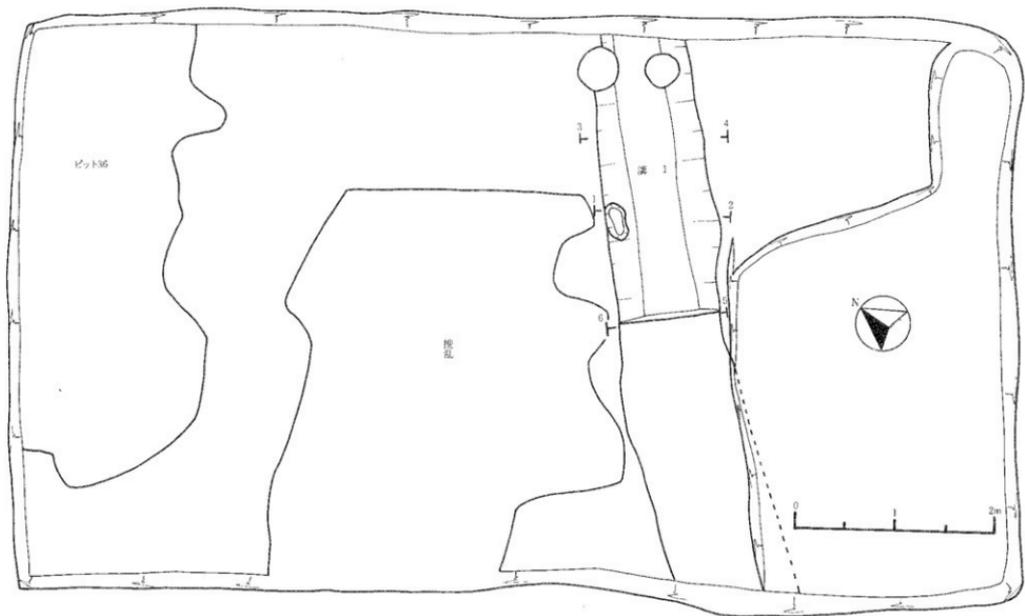
遺構	層土	色	土質	層	備
ピット23	1	赤褐色	砂質ローム	1	掘削時、土中の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
	2	赤褐色	砂質ローム	2	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
	3	黄褐色	砂質ローム	3	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
	4	赤褐色	粘	4	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
	5	黄褐色	粘土質ローム	5	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
	6	赤褐色	粘土質ローム	6	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
	7	赤褐色	粘	7	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
	8	赤褐色	粘	8	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
ピット16	1	赤褐色	砂質ローム	1	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
ピット13	1	赤褐色	砂質ローム	1	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
ピット15	1	赤褐色	砂質ローム	1	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。

遺構	層土	色	土質	層	備
ピット5	1	赤褐色	砂質ローム	1	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
ピット4	1	赤褐色	砂質ローム	1	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
	2	黄褐色	シルト	2	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
ピット17	1	赤褐色	砂質ローム	1	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
	2	赤褐色	砂質ローム	2	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
	3	赤褐色	砂質ローム	3	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
	4	灰褐色	粗砂	4	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
ピット2	1	赤褐色	砂質ローム	1	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
ピット1	1	赤褐色	砂質ローム	1	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
ピット18	1	紅褐色	砂質ローム	1	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
	2	黒	粘土質ローム	2	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。
ピット24	1	赤褐色	砂質ローム	1	遺構上部の硬質物を多く含む。中層部を境とする。

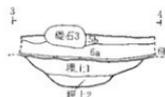
図13 NM2遺構配置図・断面図 (4層上面)

Fig.13 Distribution and cross sections of features on stratum 4 at NM2





溝1断面図



層位	層名	色	土質	基底	土厚	備 考
溝2	1	暗褐色	砂質ローム	面	不詳	この溝は、この層位に於ける最も古いものと思われる。また、この溝の底には、この層位に於ける最も古いものと思われる。また、この溝の底には、この層位に於ける最も古いものと思われる。
	2	暗褐色	砂質粘土	面	不詳	

第15図 NM2遺構配置図・断面図(7層上面)

Fig. 15 Distribution and cross sections of features on stratum 7 at NM2

柱痕も見られる。これらは地覆<sup>こぶ</sup>と呼ばれる礎石間を結ぶ木材が焼けた痕跡と推定される。(注)。ピット19・20・22・33は、南北方向の礎石抜き取り痕と平行に位置する。埋土は2重の構造をもち(図14)、上部のピットの埋土は焼土が入り壁面が焼けている。それと重複する下部のピットは、5層に類似した埋土を持ち、焼土は含まれない。

ピット30～32の性格は不明である。

#### 4) 6層上面(礎石構築時面 図14)

6層上面からは、礎石掘り方・石敷遺構の掘り方が認められる。

礎石1、ピット14・15・16・17・28・33は5層を排土後、6層上面の精査の段階で、掘り方が確認された。礎石2・3・12・13は掘り方をもたず、6層上面に直接据えられている。南北方向の掘り方(礎石1・ピット15・17)は、一辺が110～120cmで方形をなし、6層上面から約30cmの深さをもつ。掘り方の底面には径10～20cmの礫や瓦片が敷かれた状態になっている。南北に並ぶ礎石の方向は、磁北から約15度西へずれる。

東北方向の礎石の掘り方は、ピット13を除いて、擾乱によって破壊されているため、全体像は把握できないが、ピット13では、一辺約1mで南北方向の掘り方に近似する。

礎石の大きさは、礎石1で長径70cm、短径65cm、厚さは35cmである(図14)。礎石は6層上面から掘り方が構築され、根石が詰め込まれた後据えられた。その後6層上面まで掘り方の埋め戻しが行われ、さらに礎石の高さの中間ぐらまで5層の盛土によって覆われる。火によって礎石の上半が焼けていることにより、礎石1の場合、地表に出ている部分は約10cm程度であったことが判明した。

上述の礎石と掘り方を一括して以下のように呼ぶ。

礎石1・2・3・4(ピット15)、5(ピット17)、6(ピット28)、7(ピット16=29)、8(ピット13)、9(ピット34)、10(ピット14)、11(ピット23)、12、13。

これらの礎石から推定される建造物の配置は、南北方向に礎石1・2・4・5が連なり、それに直交し、礎石4から西側に延びる礎石6・7、礎石5から延びる礎石8・9によって構成されるL字状(鋸形)が考えられる。このL字状の建物の北側には石敷遺構があり、その南側には礎石10・11が連なる。また礎石8・9に平行するように12・13が並ぶ。これら4つの礎石がL字状の礎石群とどのように関連するかは現在の時点では明確でない。

礎石間の距離は南北方向の1・4・5の間が各約3m、東西方向の4・6・7・5・8・9の間が1.6～2.3mとばらつきはあるものの平均すると約1.98mとなる(図71)。これを尺で換算すると南北方向が約10尺、東西方向が約6尺5寸となる。

石敷遺構は、この礎石列と同時構築と考えられる(図14)。礎石掘り方の構築面である6層は発掘区の北東までは拡がらず、この層を切るように、ピット36の埋土であるグライ層が広がる。

石敷遺構は、このグライ層中に構築されている。この遺構は、本来の機能を喪失した後、ごみ捨て場として使用された事が明瞭である。中には陶磁器の他、屋根材・瓦・鉄製品・木製品・動物遺存体・植物遺存体などが乱雑に堆積し、その後に粘土で蓋をされて埋められている(図16)。火災の痕跡は、この上面に見られる。遺物を取り去ると、底面には平たい石が敷かれており、周囲には一段高く縁石が置かれている。縁から底石までの高さは約20cmである(図16・17)。石敷遺構は、この発掘区が保存されることとなったため、掘り方までは調査されていない。

#### 5) 7層上面(図15)

溝1が7a層を切って掘られている。これは東西方向に延びる溝で、その方向は礎石の東西方向にほぼ一致し、ピット15・27・28に平行するが、これらの礎石より1時期古いものである。2号礎石、3号礎石は、この溝を埋め戻した後、盛土6層上面に置かれている。5層によって覆われている点は、他の礎石と同じである。

溝1の埋土の2層には砂が多く、底部はグライ化していることから、この溝にはかつて水が溜れた可能性が考えられるが、常時堀状になっていたかどうかは不明である。1層は、溝を人為的に埋め戻した土と考えられる。

注、佐藤巧教授の講義による。

#### (4) 主な遺構の変遷

##### 7層上面

1号溝を東西方向に構築

##### 6層上面

1号溝を埋め、その後6b、6a層等を盛土し、礎石掘り方を構築し、根石、礎石を据える。この時期に、ピット36(グライ範囲)の中に、縁石と底石が置かれ、石敷遺構が構築される。その後礎石と同様に縁石の途中まで盛土(5層)がなされる。この遺構は最終的には、粘土によって覆われ廃絶された後、火事によって生じた、焼土層(3層)と炭火層(4層)に覆われる。

##### 3層上面

3層では、新しい遺構の構築はないが、礎石が抜き取られ、ピット状になる。その後、盛土(2層)がなされ、その面から新しい礎石掘り方が構築されている。

(柘原 洋)



図16 石敷遺構内遺物出土状況  
Fig. 16 Partially exposed stone floor of washing area filled with various artifacts at NM2

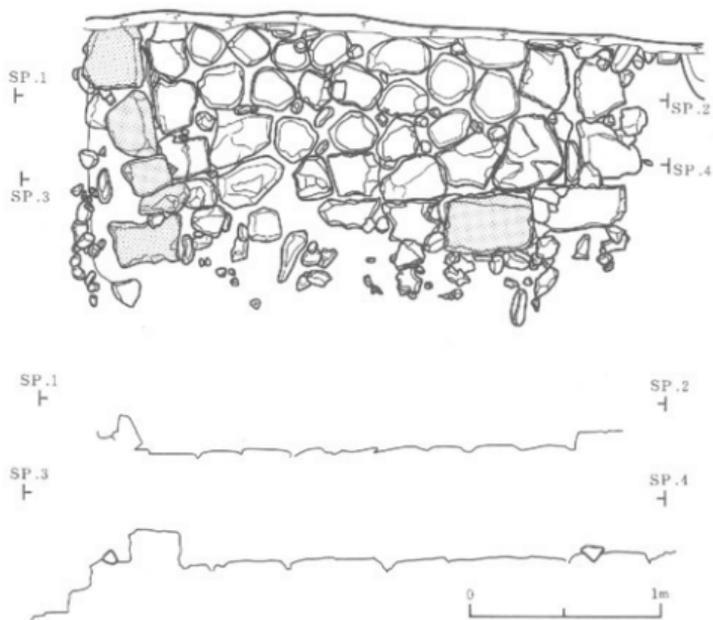


図17 石敷遺構の平面図と側面図  
Fig. 17 Exposed stone floor of washing area and profile at NM2

時期	出土遺物 出土地点	磁器				陶器						石器			木製品			ガラス		その他								
		碗	皿	手 皿	小 瓶	丸 瓶	燈 明	土 瓶		土 瓶	土 瓶	土 瓶																
																								茶 碗	丸 形 茶 碗	手 皿 類	小 瓶 類	丸 瓶 類
火 災 前	石敷遺構	45	7	46	4	1			19	6	2	66	20	5	5	3	1	17	13	85	27	105	7					
	石敷orピット36											7	1			2		39	7	3	4	13	45	1	2			
	ピット36	4	3	2				3	1									7		28		29						
	B-1																						3					
	B-2																							3				
	A-1内ピット			1		1		1										6					9					
	A-2内*							2								1		4		5		8						
	B-1内*	1																					6					
	不明						13					1	1															
小計	50	11	49	4	15		2	23	6	3	74	22	5	5	6	1	73	20	121	27	155	32	45	1	4			
火 災 時 直 後	A-1	7	6	1	1		3	3	3	17	2	6					4	2		1	9	121	189		6			
	A-2			2										1				4	1	2		6	14	108		2		
	B-1			2										2				1				115	5		2			
	B-2	1					2	2														2	2	2		3		
	C-1	5	9	2	8		2	3	2	7	2	1	7	2				1					221	127	3	3		
	C-2	6	1				1															23			1	7		
	D-1	1																					1			1		
	A-1内ピット																	1				5				1		
	A-2*	3	1	1								1							1				9	642	49			
	B-1*			1																			61			1		
	B-2*	1		1								1									3		3	9		2		
	C-1*			1																			1	18	21	16		
	C-2*																	2						8				
	3層 4層					1							8		1	3					1	7	1	11	28	538	4	
	不明	12	5			5		3		6	8	1						1		1			29					
	小計	36	16	16	9	6	1	11	6	13	32	7	22	8	7	6	1	15	11	9	3	58	728	2879	75	26		
火 災 後	A-1内ピット																				1	1	15		5	8	1	
	A-2*																						1	2		15		
	B-1*																							2	3			
	2層																							3	131	2		
	1層					1					1										1	3		4	5			
	不明										4											5			111	6	1	
小計					1					4		1								6	3	1	1	16	16	275	9	1
合計	86	27	65	13	21	2	2	34	12	16	110	29	28	13	13	6	2	94	34	131	31	229	776	294	85	31		

表7 NM2 出土遺物の分布表

Table 7 Distribution of artifacts at NM2

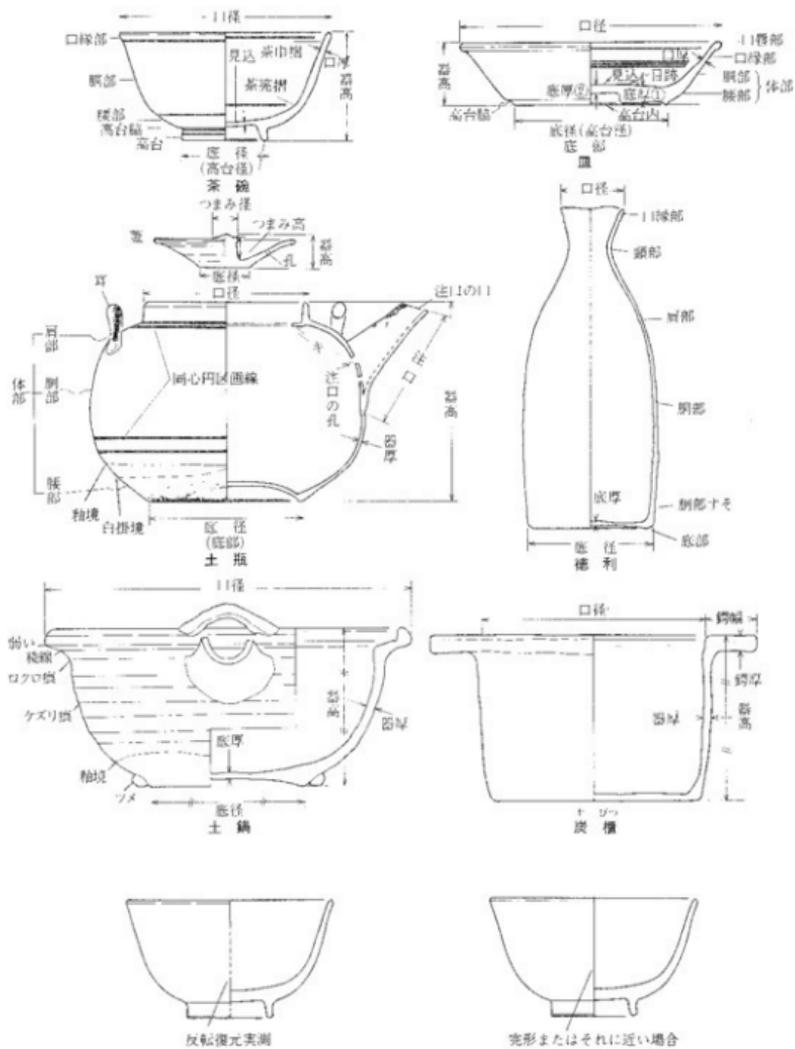


図18 陶磁器の部位名称と計測部位

Fig. 18 Denomination of ceramic details and points of measurements

## (5) NM2の出土遺物

### 1) NM2の遺物出土状況(表7)

1・2層の盛土を排除した段階で、焼土層が全面に広がった。この段階での遺物は火災後整地層(3層)と、炭化物層(4層)に多く、平面的には特にA-1・2区、C-1区に多く見られた。A-1・2区では、染付碗・熔融ガラス片・玉縁口縁丸皿・角型手塩皿などの陶磁器の他、釘・カスガイなどの金属製品、焼けて褐色化した瓦、赤色化した壁土などが集中して発見された。C-1区は、礎石1にはぼ重なるように焼壁が積重って発見され、その周囲から釘などの金属、湯呑茶碗、土鍋が集中して出土した。また付近のピットからは、焼土と共に焼けた獣骨片が発見された。

火災以前の5・6層では、廃棄場として使われていた石敷遺構内から、染付碗・輪花形丸皿・篋文玉縁口縁丸皿・土瓶・炭櫃などの陶磁器、木栓・箸・屋根材などの木製品、鉄鍬などの金属製品、魚骨などの動物遺存体、種子などの植物遺存体が集中して発見された。

石敷遺構の外側のピット36の埋土上部からは、屋根材や瓦などの石製品が出土している。瓦は、礎石の掘り方内から、礎に伴って発見された例が多い。(梶原 洋)

### 2) 江戸時代末期から明治時代初期の陶磁器

#### ① 茶碗

#### A. 茶碗(いわゆる飯茶碗)(表10)

##### a. 分析対象と出土状況

総数200点の中から類型化が可能な個体105点を選択し、分析対象とした。接合する資料はきわめて少なく、破片資料が多い。

火災前は出土資料の90パーセントの個体が石敷遺構の埋土から出土している。これらは石敷造

出土地点	類型	ピット																			その他	小計	計		
		A	B	C	B/C	D	E	F	G	C/R	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q				R	
火災前	A-1				3				1						2							1	7		
	ピット13														1								1		
	ピット14																					1	1		
	ピット23																					1	1		
	B-2					1																	1		
	ピット16																						1		
	C-1	1													1	1							1	5	
	C-2			1			1	1		1														1	6
	b-1															1								1	
	不明		2		1						1						4	1					2	1	12
小計		3		2	4		1	1		3					12	2	1					2	5		
火災後	ピット36				1										1						1		1	4	
	石敷遺構	9	5	5	1	2	1	1	1		1	3	3	2	3	5			1	1			1	45	
	ピット25																							1	
	小計	9	5	5	2	2	1	1	1		1	3	4	2	3	6			1	2			2	50	
計	12	5	7	6	2	2	2	1	3	1	3	4	2	3	18	2	1	1	2	2	2	7	86		

表8 NM2 茶碗の分布(1層、2層出土のものは除く)

Table 8 Distribution of "rice bowls" at NM2

構廃絶後、他の遺物とともにここに投棄されたものである。火災後にはA-1とC-1・2の2ヶ所に遺物の集中が存在する(表8)。

### b. 製作工程

茶碗はすべて磁器である。素地をロクロ水挽で成形し、口縁部を若干弯曲させたり(後述する端反り碗型)、高台を削り出す作業が行なわれる。素焼きの後、呉須によって絵柄や見込文が描かれ、石灰釉が施される。皿付は無釉のものが多い。本焼きの結果残された目痕はすべて4つである。なお、釉の発色の悪いものも製品として購入され、使用されていた。

### c. 類型化

類型化の大別は器形で行なうが、2点を除きすべて端反り碗型(以下I型)である。これにはI<sub>1</sub>型とこれに比べて胴部の立ち上がりの強いI<sub>2</sub>型がある。他の2点は碗型(以下II型)と沓型(以下III型)である。I型は口径が約115mm(約3寸8分)、器高が約60mm(約2寸)であり、プロファイルがよく近似している(図19-1~8)。この大きさだと「横から持つと親指と中指の指先が碗の径の直径に達するから、片手でしっかりと持つことができる(秋岡,1984)」なお、高台内の削りの状態(底厚)は多様である。重さは150gから200gのものが多い。以上が当時の茶碗の手頃な大きさと重さだったであろう。

さらに文様によって細別される。一般的に口縁部と腰部に引かれた同心円区画線によって胴部上文様帯が区画される。高台脇あるいはその附近にも同心円区画線(以下高台脇同心円文)が2条引かれるが、間隔が広いもの(a)と狭いもの(b)がある。内面は茶巾摺と茶筌摺の附近に同心円区画文を各1条引き、見込文を描く例が多いが、茶巾摺に文様帯を描く例もある。

#### I<sub>1</sub> 型

##### 〈源氏香文・蝶文系〉

I<sub>1</sub>-A: 2種類の源氏香文を交互に配し、間に蝶文を描く。見込文は蝶。高台脇同心円文はa(図20-1、図版13-1・2)とb(図版13-3)があり、aはbに比べ口径が10ミリメートル程大きく、また腰部も厚い。I<sub>1</sub>-B(図20-2、図版13-4): 源氏香文の高脇に花文を配し、これらに相対する位置に蝶文を描く。見込文は蝶文。高台脇同心円文はa。皿付は赤味を帯びる。I<sub>1</sub>-C(図20-3、図版13-5・6・7): 見込文が上であり、高台脇同心円文がbである点以外は、I<sub>1</sub>-Bと同じである。胴部の蝶はI<sub>1</sub>-Bより細身である。

##### 〈草花文系〉

I<sub>1</sub>-D(図20-4、図版13-8、14-1): コウモリ文に枝垂れ文を冠し、これに相対する位置

出土地点	類型	I-A	B	C	D	無文その他	小計	計
大文 西 庭 後	ビツト14					1		1
	C-1	1		2	5	1		9
	C-2				1			1
	不明	1			2	2	1	6
	小計	2		2	8	4	1	
大文 東 院	石敷遺構		1	2		2	2	7
	ビツト36		2			1	2	5
	D-1				1			1
	小計		3	2	1	3	4	
計		2	3	4	9	7	5	30

表9 NM2 小形茶碗の分布  
(1層、2層出土のものは除く)

Table 9 Distribution of "tea bowls" at NM2

に蝶文を描く。枝上の3個1対の丸は葉であろうか。見込文は蝶。高台脇同心円文はa。畳付は赤味を帯びる。I<sub>1</sub>-E(図21-1、図版14-2)：草花文と蝶文。花文はI<sub>1</sub>-A~Cの花文と同じである。3個1対の丸は葉であろうか。見込文は蝶。高台脇同心円文はb。I<sub>1</sub>-F(図21-2、図版14-3)：草花文と蝶文だが、それらの線はI<sub>1</sub>-Eに比べて細い。見込文は上。高台脇同心円文はb。I<sub>1</sub>-C(図21-3、図版14-4)：葡萄文と蝶文。蔓上の3個1対の丸は葉であろうか。見込文は蝶。高台脇同心円文はb。

〈山水文系〉 高台脇同心円文はすべてbである。

I<sub>1</sub>-H(図21-4、図版14-5・6)：山水文。次のI<sub>1</sub>-Iに比べて家の左上の山(あるいは船)の裾が短かく、家の真上に夕陽(?)を描く。見込文は舟。I<sub>1</sub>-I(図22-1、図版14-7・8、15-1)：山水文。見込文は鳥。I<sub>1</sub>-J(図22-2、図版15-2)：山水文。家の上の鳥(あるいは山)と浜の干綱は、I<sub>1</sub>-H・Iに比べて簡略化されている。見込文は不明。口縁部内面の同心円文は3条、胎土が灰色である。畳付は赤味を帯びる。

〈その他〉

I<sub>1</sub>-K(図22-3、図版15-3)：菊花文。見込文は鳥。高台脇同心円文はa。I<sub>1</sub>-L(図22-4、図版15-4・5)：寿文を3単位配し、その間を割菊文でうめる。見込文は $\odot$ 。高台脇同心円文はa。I<sub>1</sub>-M(図22-5、図版15-6)：山形に武田菱文を4単位配し、見込文も同文。高台脇同心円文はaとbがある。I<sub>1</sub>-N(図23-1、図版15-7)：蓮弁の内外に並草葉文を描いた。見込文は不明。

〈口縁部茶巾摺に文様帯がある〉

I<sub>1</sub>-O(図23-2、図版15-8)：4条1帯の縦方向の区画線の間にジグザグ文。I<sub>1</sub>-P(図23-1-3、図版16-1)：縦縞文に重ねた花文。花芯は点描き。見込文は舟か。I<sub>1</sub>-Q(図23-4、図版16-2)：縦縞文に重ねた花文。花芯は線描き。茶兜摺の同心円区画線が2条である点もI<sub>1</sub>-Pと異なる。見込文は不明。

I<sub>2</sub>型：上下の割菊文の間に竜唐草文を描いたもの(図23-6、図版16-3)と唐草文の一種?を描いたもの(図23-13、図版16-11)がある。

I型：I<sub>1</sub>型かI<sub>2</sub>型か判別不能な個体であり、文様には松文(図23-7、図版16-5)、菖蒲文(あるいは杜若文)(図23-10・11・12、図版16-8・9・10)、風景・山水文(図23-9、図版16-7)、その他(図23-14、図版16-12)がある。

II型(図23-15、図版16-13)：文様は不明。

III型(図23-5、図版16-4)：同心円区画線がない状態で茗荷文?を描く。茶巾摺は満文。器形判別は不可能だが、胴部片にはI<sub>1</sub>-Nと異なる並草葉文(図23-8、図版16-6)、竜唐草文(図版16-14)があり、見込文にはほかにし文(図版16-16)と花文(図版16-15)がある。

#### d. 生産地

類型化されたものの一部について行なった胎土分析の結果、I<sub>1</sub>-Ab、I<sub>1</sub>-D、I<sub>1</sub>-Eが平清水産のグループに入る。また、I<sub>1</sub>-Jは非平清水産のグループに入る。I<sub>1</sub>-Jは切込の窯跡出土品中にも存在し、とくに茶巾箱の同心円区画線が2条である点も切込焼の特徴の一つといえる(芹沢 1976)。胎土が唯一灰色である点、そして切込産に鉄分が多いという特徴を示す墨付の赤味などを考え合わせると、I<sub>1</sub>-Jは切込焼と断定できる。I<sub>1</sub>-Mは後述する山形に 武田 菱文をもつ磁器皿についての胎土分析結果を参考にすれば、平清水産と推定される。

#### e. 各類型の時間的消長 (表8)

I<sub>1</sub>-A・B・C・I・J・Lは火災前の石敷遺構廃絶を境に減少する傾向をもつが、I<sub>1</sub>-Mは増加する傾向にある。火災時においてもI<sub>1</sub>型が主体を占める状況は変わらないが、I<sub>1</sub>-Mの完形品の重さが130gであることは、時間的に新しくなるにしたがい、より軽い茶碗が用いられるようになったことがうかがえる(秋岡 1984)。

#### f. 茶碗の蓋と容積

北海道白老仙台藩陣屋跡(白老町教育委員会 1982)や 愛知県瀬戸市かたみ 第2号窯跡上層(愛知県教育委員会ほか 1975)では、茶碗の蓋が出土したが、二の丸第二次発掘調査では出土しなかった。前二遺跡でも茶碗の個体数に比べて蓋の数は非常に少なく、当時の茶碗の使用にあたっては、必ずしも蓋付でなかったことがうかがえる。ちなみに茶碗に蓋を被せると、蓋の縁は茶碗の約七分目に位置する。この位置は茶碗の実質容積を考える上で参考になる。

宍形・半宍形の茶碗11個体に水を入れて計量した容積の平均値は245cc(1合4勺)である。蓋が茶碗の七分目に位置していたと仮定すると、実質容積は全容量の60パーセント、すなわち147cc(8勺)となる。実験によればこの中には約4勺の米を炊いた分量が収まる。江戸時代の1日の米の摂取量は普通5合であり、1日2食であったといわれているので、1食分は2合5勺となる(山下ほか 1982、鬼頭 1983)。この2合5勺の米を炊いてNM2出土の茶碗に盛ると、約6杯分になる。もちろん蓋にこだわらず飯の盛り方を変えれば、杯数も異なるわけである。

#### B. 小形茶碗 (表11)

土瓶が多数出土しているので、湯呑として使用されることが多かったと推定される。また、徳利があるにもかかわらず盃がないので、小形茶碗の中には盃として使用されたものがあった可能性が高い。

破片資料の中から類型化可能な40個体を選択して分析対象とした。火災前は石敷遺構・ピット36より、火災後はC-1よりほとんどが出土している(表9)。

小形茶碗は磁器か陶器(2個体)かによって大別される。磁器は器形によって、端反り碗型(以下I型)、碗型(以下II型)、半筒型(以下III型)、盃(?) (以下IV型)に分類される。量的

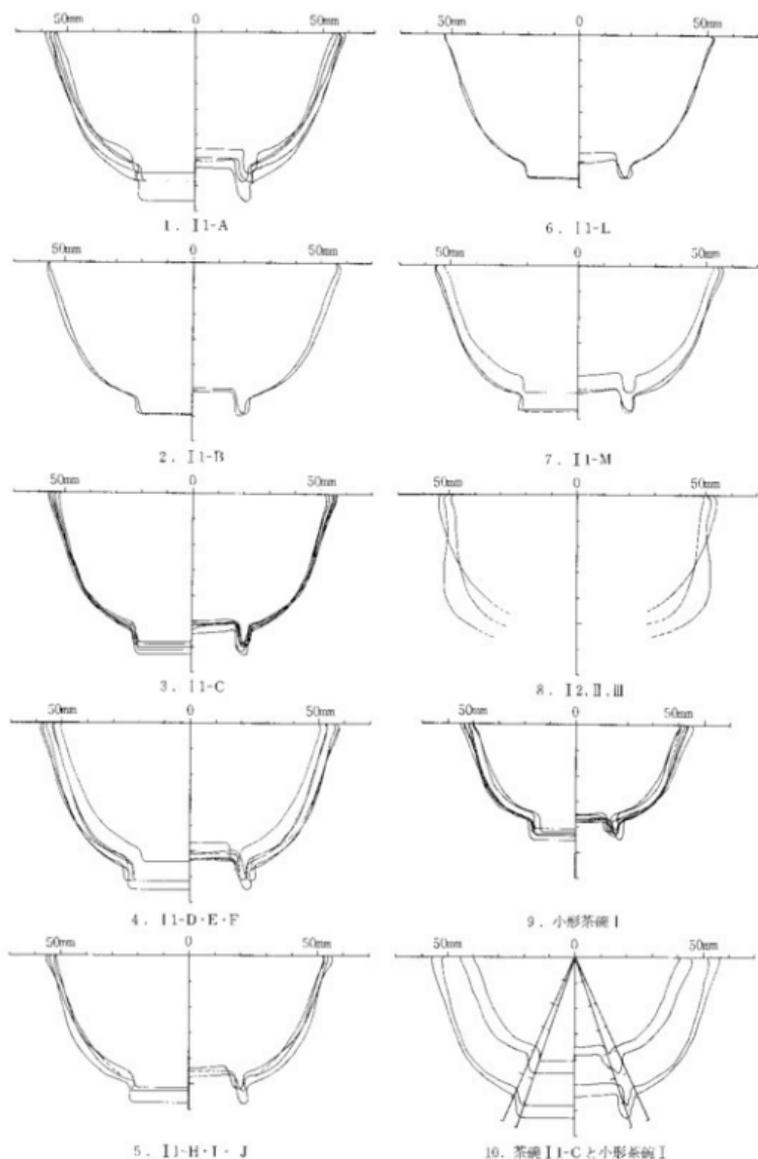


圖19 茶碗(1~8)と小形茶碗9の外形プロファイル  
 Fig.19 Profiles of "rice bowls"(1-8.10) and "tea bowls"(9.10)

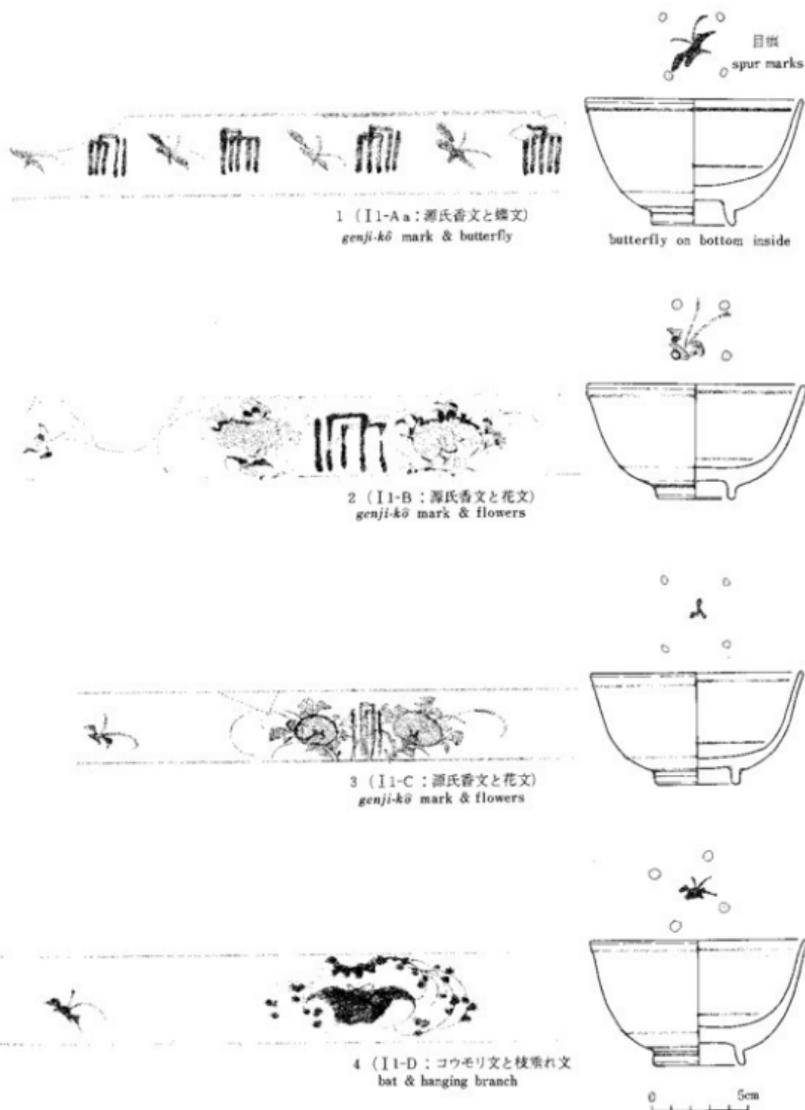
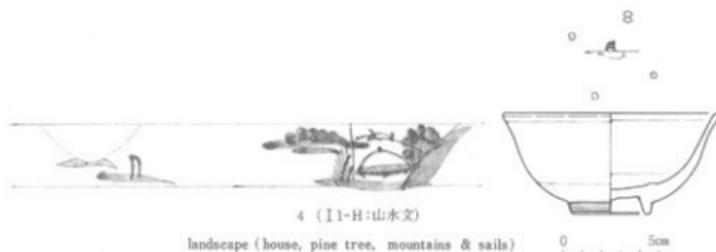
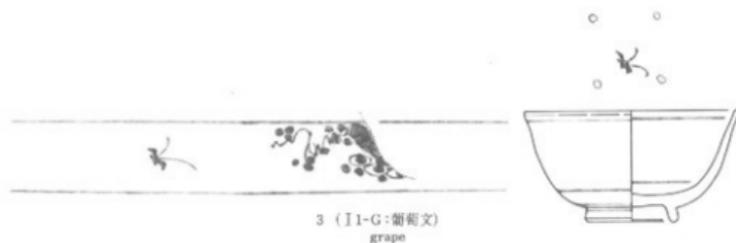
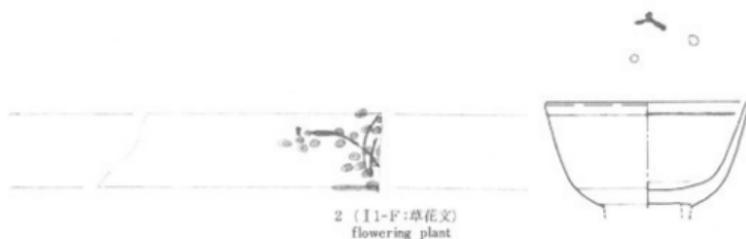
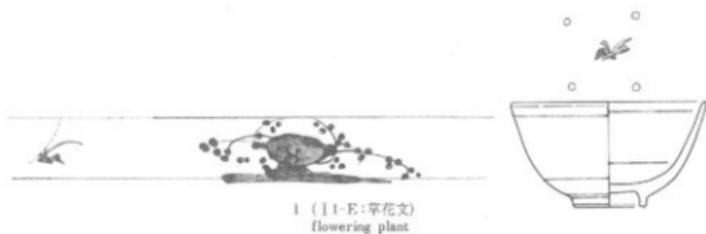


図20 NM2出土の茶碗(1) porcelains Mid. of 19c (before 1882)  
Fig. 20 "Rice bowls" with cobalt blue (designs executed in cobalt under a clear glaze)  
(Hirashimizu ware)



0 5cm

図21 NM2出土の茶碗(2)

porcelains Mid. of 19c. (before 1882)

Fig. 21 "Rice bowls" with cobalt blue from NM2 (2) (Hirashimizu ware)

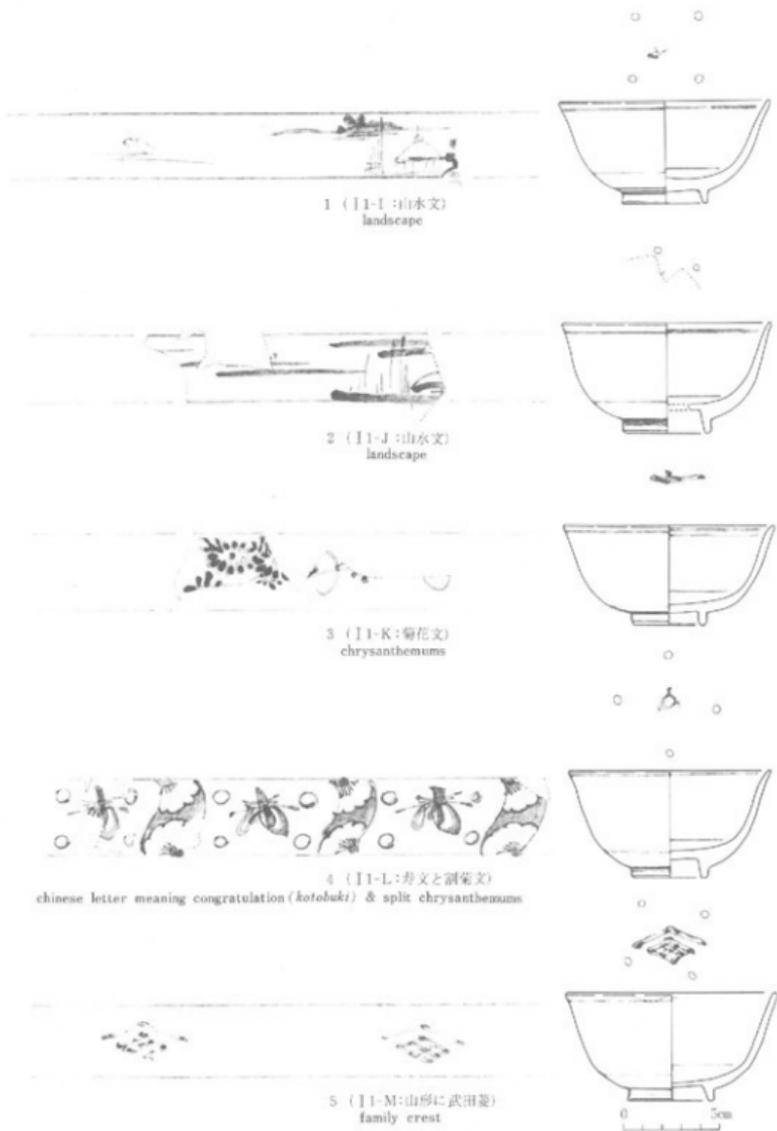


図22 NM2出土の茶碗(3)  
Fig. 22 "Rice bowls" with cobalt blue from NM2 (3)  
(1,3,4 Hirashimizu ware 2 Kirigome ware)  
Mid. of 19c. (before 1882)  
porcelain.



1 (I-N:蓮弁文に並草葉文)  
series of petals & grass



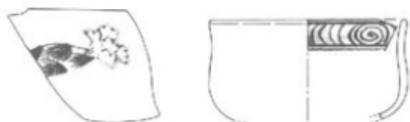
2 (II-O)



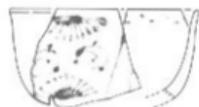
3 (II-P:縦縞に重ねた花文)  
vertical stripes & overlapped flowers



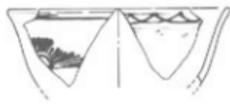
4 (II-Q:縦縞に重ねた花文)  
vertical stripes & overlapped flowers



5 (III:茗荷文?)  
myoga flower?



6 (II:割菊文に竜唐草文)  
split chrysanthemum & ryūkarakusa-scroll



7 (I:松文)  
pine tree



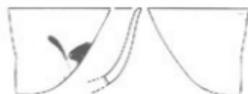
8 (蓮弁文に並草葉文)  
series of petals & grass



9. (I:風景・山水文)  
landscape



10 (I:菖蒲文) iris



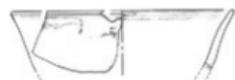
11 (I:菖蒲文) iris



12 (I:菖蒲文) iris



13 (II)



14 (I)

0 15 30cm

Mtl. of 19c. (before 1882)

図23 NM2出土の茶碗(4)

Fig. 23 "Rice bowls" with cobalt blue from NM2 (4) porcelains

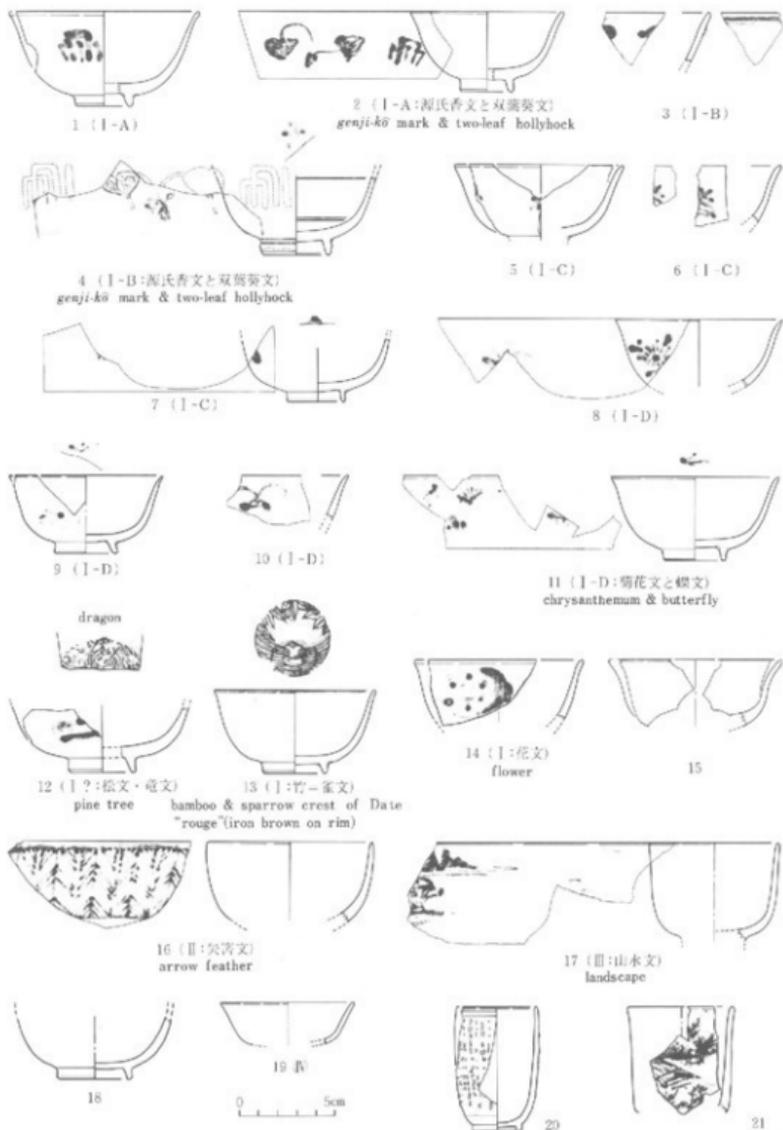


図24 NM2出土の小形茶碗 porcelains except No.20 Mid. of 19c. (before 1882)  
 Fig.24 "Teabowls" with cobalt blue from NM2 No.21 more recent

No	地区・遺構・層	保存状況	法 量				形影	文 様			色 名	JIS番号	備 考	区	区画	登録No
			口径	高さ	口径率	口径比		縦	横	斜						
1	石敷遺構埋土	L	116	67	47	3	7	1	As	48	浅青緑	5.63% 4.67%	足込櫻	20-1	13-2	1
2	*	M	108	58	42	3	*	*	*	*	45	明灰緑	*	*	*	4
3	*	M	112	57	48	4	3	*	Ab	44	*	*	岩組20w, 平浅水(分形)	13-3	3	2
4	C 1-3層	M	116	59	3	7	*	*	*	43	*	*	横丸筋	*	*	2
5	石敷遺構埋土	M	110	58	38	3	5	*	*	45	*	*	*	*	*	7
6	?-3層, 石敷遺構	S	112	50	3	*	*	*	A	45	*	*	*	*	*	5
7	石敷遺構埋土	S	?	?	3	*	*	*	*	44	*	*	*	*	*	6
8	*	S	110	?	3	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	8
9	*	S	?	?	3	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	10
10	?-1層	S	?	?	4	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	11
11	?-2or3層	S	?	?	3	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	12
12	?-3層	S	?	?	3	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	13
13	石敷遺構埋土	S	?	?	3	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	14
14	*	底部	?	44	10	1	B	*	*	*	*	*	*	*	*	15
15	*	L	114	60	41	4	6	*	43	黄白	3.03% 4.07%	岩組20w, 足込櫻	20-2	13-4	16	
16	*	M	110	60	41	4	5	*	43	明灰緑	4.07%	*	*	*	17	
17	*	M	110	?	4	*	*	*	*	黄白	2.07% 4.07%	*	*	*	21	
18	*	底部	?	?	?	*	*	*	*	明灰緑	4.07%	*	*	*	30	
19	?-2層, ?-2埋土	M	102	62	44	4	5	1	C	44	*	*	岩組20w, 横丸筋	*	*	19
20	石敷遺構埋土	L	110	65	45	4	7	*	43	*	*	岩組20w, 足込へ	20-3	13-6	18	
21	*	M	106	62	48	4	6	*	42	*	*	*	*	*	20	
22	*	L	107	60	45	4	5	*	45	*	*	岩組20w	*	*	21	
23	*	M	110	65	44	4	8	*	45	*	*	*	*	*	22	
24	*	M	108	63	41	4	8	*	45	*	*	*	*	*	23	
25	C 2-4層上	S(底部)	?	44	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	29
26	A 1-4層	S	?	?	4	1	B	C	黄白	2.07% 4.07%	*	*	*	*	25	
27	?-1層	S	?	?	4	*	*	*	*	明灰緑	4.07%	*	*	*	26	
28	ピット36埋土	S	110	?	4	*	*	*	*	*	*	*	*	*	27	
29	石敷遺構埋土	S	?	?	?	*	*	*	*	*	*	*	横丸筋	*	*	28
30	B 2-3層	S	?	?	?	*	*	*	*	*	*	*	*	*	31	
31	A 1-3層	S	?	?	?	*	*	*	*	*	*	*	*	*	32	
32	A 1-4層	S	?	?	?	1	*	*	*	黄白	2.07% 4.07%	*	*	*	33	
33	石敷遺構埋土	L	114	65	45	2	10	1	D	46	明灰緑	4.07% 4.67%	岩組20w 平浅水(分形)	20-4	13-8	39
34	*	S	110	54	50	3	5	*	45	*	*	*	*	*	40	
35	*	L	102	56	38	2	4	1	E	39	*	*	岩組20w	21-1	14-2	41
36	C1-埋土(3-1埋)	S	106	63	44	3	6	*	44	*	*	*	*	*	42	
37	試掘層灰	S	110	?	3	*	*	*	明灰	N 7.5	*	平浅水(分形)	*	*	43	
38	C1-埋土(3-1埋)	M	112	60	45	3	6	1	F	41	明灰緑	4.67%	*	21-2	14-3	44
39	?-1層	S	116	60	51	3	6	*	42	*	*	*	*	*	45	
40	石敷遺構埋土	S	?	?	3	*	*	*	*	*	*	*	*	*	46	
41	*	M	112	63	45	3	5	1	G	*	*	*	21-3	14-4	47	
42	A 1-4層	S(底部)	?	?	4	1	C	紺	*	*	*	足込へ	*	*	67	
43	?-3層上	*	?	?	?	*	*	*	*	*	*	*	*	*	68	
44	C 2-1層	*	45	4	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	69	
45	石敷遺構埋土	L	112	56	43	3	6	1	H	39	*	岩組20w	21-4	14-6	72	
46	*	M	110	53	44	3	4	1	I	39	*	*	15-1	71	70	
47	*	L	108	54	45	3	6	*	38	*	*	岩組20w	22-1	14-7	73	
48	?-埋土, 石敷遺構埋土	L	108	?	3	*	*	*	36	*	*	*	*	*	74	
49	ピット25埋土	S	?	?	2	1	J	灰	N 5.5	*	岩組20w	22-4	15-4	38		
50	石敷遺構埋土	S	?	?	2	*	*	*	*	*	*	岩組20w, 横丸筋	22-5	15-6	77	
51	*	M	114	58	46	3	2	*	41	*	*	岩組20w	22-2	15-2	78	
52	*	SS	?	?	3	*	*	*	*	*	*	岩組20w	*	*	79	
53	*	M	106	58	42	4	7	1	L	明灰緑	4.07%	足込へ	15-5	31	84	
54	A1-3層, 石敷遺構埋土	S	?	?	3	*	*	*	*	明灰	N 7.5	*	5, 6, 7	*	85	
55	石敷遺構埋土	L	106	57	39	3	4	*	*	明灰緑	4.07% 4.67%	岩組20w	22-4	15-4	38	
56	*	P	114	55	45	3	3	1	M	42	黄白	2.07% 4.07%	岩組20w, 横丸筋	22-5	15-6	90
57	C 1-4層	S	114	?	3	5	*	*	*	明灰緑	4.07%	横丸筋	*	*	100	
58	?-3層上	M	110	?	3	*	*	*	43	*	*	*	*	*	101	
59	試掘坑(9)	底部	?	43	6	*	*	*	*	*	*	*	*	*	102	
60	?-3層上	S	?	?	3	*	*	*	*	*	*	*	*	*	103	
61	石敷遺構埋土	*	110	?	3	*	*	*	38	*	*	*	*	*	104	
62	ピット2	*	115	?	3	*	*	*	*	*	*	*	*	*	105	
63	D 1-2層	S(底部)	?	?	1	M	明灰緑	4.07%	*	*	*	*	*	*	106	
64	ピット9埋土	S	?	?	4	*	*	*	*	*	*	*	*	*	107	
65	ピット13埋土	*	110	?	3	*	*	*	*	*	*	*	*	*	108	
66	石敷遺構埋土	S(底部)	?	?	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	109	

表10 NM2 出土の茶碗属性表

Table10 Attributes of "Rice bowls" from NM2

No.	地区・産地・層	残存 状況	法 量				形状	文様	釉 色	備 考	国	図版	登録No.
			口徑	底徑	口径	高さ							
67	?-3層	S.断面				I	M	黒点緑 4.0G75/L				110	
68	?-1層焼丸	*				*	*	*				112	
69	?-2 or 3層	S	110		3	*	*	*				113	
70	ビット16焼丸	*	110		3	*	*	*				114	
71	A 2-?層	*	?		3	*	*	*				115	
72	?	S.断面				*	*	*				116	
73	?-1層	S	?		3	*	*	*				117	
74	A 1-4層	S.断面				*	*	*				118	
75	C 1-3層	S	?		3	*	*	*				119	
76	?	S.断面				*	*	*				120	
77	?-1層	*				*	*	*				121	
78	石敷道橋様土	S	110		3	*	*	*				122	
79	C 1-3層	*	106		3	*	*	*				123	
80	ビット10焼丸A1-4層上	*	110		3	4	*	*				124	
81	石敷道橋様土	S.断面			46	5	*	*				125	
82	ビット36焼丸	*			44	3	*	*				126	
83	焼丸	S.断面				*	*	*				127	
84	石敷道橋様土	S	126		3	I	K	浅青緑 5.0G75/L				79, 80	
85	*	*	110	53	40	3	6	*	45 白 N 3.5	焼丸大	22-3	15-3 81	
86	?-3層	*	116		3	I	N	41 黒点緑 4.0G75/L	*		23-1	15-7 82	
87	C 1-3層	*	116		3	*	*	*				83	
88	ビット20焼丸A1-4層	*	100		3	I	O	49 黄白 3.0G75/L			23-2	15-8 85	
89	?-1層	*	?		3	*	*	*				86	
90	石敷道橋様土	M	106	35	40	2	5	I	P 51 赤 4.0G4V/L	見込は丹	23-3	16-1 87	
91	*	*	106		3	11	Q	49 明灰緑 4.0G75/L			23-4	16-2 88	
92	ビット30焼丸	S	116		4	*	*	*				89	
93	ビット20焼丸? or 3層	*	115		3	11	電線	42 赤点緑 5.0G75/L			23-6	16-3 90	
94	? 2 or 3層	S	?		3	*	*	*				91	
95	A 1-3層	*	116		3	*	*	*			23-13	16-11 161	
96	C 1-2層	*	130		3	I	6	*			23-7	16-5 92	
97	ビット14焼丸	*	110		4	*	*	*			23-10	16-8 93	
98	?-3層	*	116		3	*	*	*			23-14	16-12 95	
99	C 2-3層	*	?		2	*	*	*			23-9	16-7 160	
100	C 2-3層	*	110		3	*	*	*			23-12	16-10 162	
101	ビット36焼丸	*	96		3	*	*	*			23-11	16-9 157	
102	石敷道橋	*	110		2	II	?	*			23-15	16-13 159	
103	灰振込No. 8	*	106		4	III	?	*			23-5	16-4 84	
104	ビット7焼丸	S.断面			?	電線	?	黄白 3.0G75/L			23-8	16-6 84	
105	D 1-焼丸	*				電線	?	明灰緑 4.0G75/L				100	

表10 NM2出土の茶碗の属性表(2)

No.	地区・産地・層	残存 状況	法 量				形状	文様	釉 色	備 考	国	図版	登録No.
			口徑	底徑	口径	高さ							
1	石敷様土?-3層上	S	100	32	40	3	5	I	A 明灰緑 4.0G75/L	見込はN.印か?	24-1	17-1 1	
2	C 1-4層	M	82	41	25	3	5	*	*	焼丸大	24-2	17-2 2	
3	?-1層	S.断面				*	*	*				6	
4	ビット36焼丸	S	93			3	I	B 黄白 3.0G75/L			24-3	17-4 3	
5	*	*	?			2	*	*	*			4	
6	石敷道橋様土	*			38	3	*	*	*	見込は赤印	24-4	17-3 3	
7	*	S.断面			26		4	I	C	*	24-5	17-5 7	
8	ビット10焼丸	S	85	47	?	?	?	*	*	口紅あり	24-7	17-6 8	
9	石敷道橋様土	*	?		?	3	*	*	*		24-6	9	
10	C 1-6上	*	86	41	34	3	3	I	D 明灰緑 (LEG75/L)	貫入あり、焼丸大	24-9	17-9 10	
11	C 1-3層C1-4層	M	84			3	*	*	*		24-8	17-8 11	
12	C 1-層?-2 or 3層?	S	88	44	32	3	3	*	*	貫入あり、見込は角付	24-11	17-7 12	
13	C 1-2層	*	86			3	*	*	*		24-10	13	
14	C 1-4層	*			3	*	*	*				14	
15	C 1-3層	*			3	*	*	*				15	
16	?-2 or 3層	*			3	*	*	*				16	
17	*	S.断面				*	*	*				17	
18	D 2-焼丸	*				*	*	*				18	
19	C 2-3層	*				*	*	*				19	
20	石敷道橋様土	S	92	43	32	2	4	I	竹文 赤文	貫入、口紅あり、平焼丸?	24-13	17-10 21	
21	?-1層	*	90			2	*	*	花 文 灰白色 N. 8.5		24-14	17-16 23	
22	?-1層	S.断面			34	5	I	?	松文 黄白 3.0G75/L		24-12	17-11 24	
23	石敷道橋様土	S	90			3	I	唐草?	*			25	

表11 NM2出土の小形茶碗の属性表(1)

Table 11 Attributes list of "tea bowls" from NM2

No	地区・遺構・層	発見状況	法			器形	文様	胎色	JIS号	備考	図	図版	登録No
			口径	口径	口径								
24	?-3層上	S	?		3	I	無文	青白	3.0P99%				26
25	C1-4層	*	?		2	*	*	*	*				29
26	石敷遺構埋土	*	90		3	*	*	黒灰	*	口紅(イライプ色)あり	24-15	17-15	31
27	*	*	?		3	*	*	*	*	口紅あり			32
28	ビット36埋土	M	82		3	II	矢筈文	黒灰緑	1.0G+5% 5.0G2%	貫入あり、口紅あり、164cc	24-16	17-12	20
29	*	S	68		3	III	山水文	黒青	5.0G2%		24-17	17-13	21
30	石敷遺構	S	64		2	IV	無文	青白	3.0P9%	底か?	24-19	17-14	34
31	?-2or3層	SS	?		3	?	詩歌	青白	3.0P9%				17-20
32	C2-?層	*			?	?	丸文	黒灰緑	1.0G+5%				17-18
33	ビット14埋土	S	?		3	?	無文	青白	3.0P9%	口紅あり			27
34	埋土	*	?		4	?	*	*	*				28
35	?-2or3層	*	?		3	?	*	*	*	口紅あり			30
36	?	*	?		3	?	*	*	*				33
37	ビット12埋土	S(観測)					*	*	*	貫入			36
表9	松												
1	ビット36埋土	S(観測)		39		?	無文	明灰	N7.5	胎土遺存率0.7%、胎土貫入層	24-18	17-14	1
2	?-3層	S	40	65	26	2	III	矢筈	4.0P9%	胎土遺存率0.1%、胎土貫入層	24-20	17-21	7
3	ビット20埋土	S	89		3	埋入型	無文	黒白	7.5V+5%	胎土遺存率0.2%、胎土貫入層		17-19	

表11 NM2出土の小形茶碗の属性表(2)

にはI型がほとんどで、他は各1個体である。

I型 口径は約80~90mm(2寸7分~3寸)、器形は約40~45mm(1寸3分~1寸5分)であり、プロファイルもよく近似している(図20-9)。これはちょうど茶碗を3分の2程度縮小した大きさである(図18-10)。小形茶碗の文様はその多くが内外面ともに同心円区画文をもたない点で、茶碗と区別される。以下胴部文様によって細分を行なう。

I-A(図24-1・2、図版17-1・2)：源氏香文と双葉葵文。見込文は不明。I-B(図24-3・4、図版17-3・4)：源氏香文と双葉葵文。内外面に同心円区画文がある。見込文は米印。I-C(図24-5~7、図版17-5・6)：篆字様の文字文ともいわれる(愛知県教育委員会ほか1975、白老町教育委員会1982)。見込文と口紅がある。I-D(図24-8~11、図版17-7~9)：菊花文と蝶文。見込文は鳥。貫入が入る。本類型はC-1グリッドに集中する(表9)。このほかI型には、見込に「竹二雀文」の印判を押ししたもの(図25-13、図版17-10)、花文をもつもの(図24-14、図版17-16)、見込に竜文の印判を押し外面に松文をもつもの(図24-12、図版17-11)、無文で口紅(黒もある)をもつもの(図25-15、図版17-15・19)などがある。

II型(図24-16、図版17-12)：矢筈文。III型(図24-17、図版17-13)：山水文。IV型(図24-15、図版17-17)：無文。蓋の可能性が高い。そのほかの磁器には詩歌を書いたもの(図版17-20)、丸文をもつもの(図版17-18)がある。

磁器小形茶碗の容積は平均110cc(6勺)であるが、蓋付茶碗で推定される7分目という実質容積を小形茶碗に適用すれば、小形茶碗の実質容積は約70cc(4勺)となる。

陶器には大塚産の茶碗の底部(図24-18、図版17-14)と平清水産の埴器質で襷状の文様を描いたもの(図24-20、図版17-21)、そして大塚産で端反型の無文のものがある。

### C. 茶碗の年代

NM2出土の茶碗と同一型式あるいは類似する茶碗は、他の地域でも出土している。これらの中で年代を限定できる遺跡は、北海道白老町の白老仙台藩陣屋跡と愛知県瀬戸市かたみ第2号窯跡上層である。前者には仙台藩が北方警備のため安政3(1856)年から慶応4(1868)年まで滞陣し、戊辰戦争後は南部藩と一ノ関藩が白老一郡の支配のために滞陣し、明治4(1871)年には廃絶された(白老町教育委員会 1982)。したがって、この陣屋跡出土の茶碗の使用年代は1856年から1871年の間となる。かたみ第2号窯跡上層は報告者が陶工の加藤家の墓石、位碑、そして寺の過去帳を分析した結果、使用年代の下限を1850年と定めている(愛知県教育委員会ほか 1975)。以上対比資料からみたNM2出土の茶碗の下限年代は19世紀中葉の後半に位置づけることができよう。

(佐川正敏)

注. 属性表の残存状況はP, L, M, S, SSの5段階に分け表示した。

残存部分の面積の推定完形面積に対する比率が100%、すなわち完形品をP, 99%~60%をL, 59%~30%をM, 29%~20%をS, 19%以下をSSとした。他の器種の基準も同様である。

### ② 皿

この時期出土の皿類は、陶器皿62個体、磁器皿95個体、計137個体である(土師質の皿類は除く、⑦を参照のこと)。これらは、日用雑器としての小形丸皿類(いわゆる玉縁口縁丸皿、輪花形・菊形丸皿、油皿など)、小形角皿(手塩皿)のたぐいで、長皿や大皿類は全く認められない。主として石敷遺構から出土し、他に3層・4層出土のものが多い。

陶・磁器各皿類を器形に基づき、それぞれⅠ~Ⅲ類、Ⅰ~Ⅲ類に大別、さらに各類の中で細分を行なった(表12)。陶器皿Ⅰ類は高台をもつ丸皿、Ⅱ類は油皿(灯明皿)と称される丸皿、磁器Ⅰ類は高台をもつ丸皿、Ⅱ類は高台をもつ輪花形・菊形丸皿、Ⅲ類は手塩皿と称される角皿である。これらはさらに底部、口縁部などの差異から、陶器皿はⅠ類を3タイプ、Ⅱ類を4タイプ、磁器皿はⅠ類を3タイプ、Ⅱ類を4タイプ、Ⅲ類を1タイプに細分することができる。これらの細別において、陶器皿と磁器皿の両者間に同一器形はない。

以下、陶器皿・磁器皿ごとに各類の諸特徴をみていくが、皿類の部位名称は図18、文様分類は表13、各類の個体数及び出土状況は表14・15、また、各個体の属性観察は表16~20にまとめて示した。

#### A. 陶器皿

##### a. 製作上の特徴

胎土: 全般にⅠ類は粒子が緻密でⅡ類は粗い。Ⅱ類の中でもⅡ<sub>1</sub>・Ⅱ<sub>2</sub>類は砂粒を混じえ特に粗い。

細粒胎土のⅠ類は白色ないし灰白色、粗い胎土のⅡ類はおおむね褐色ないし橙色を呈す。  
成形：いずれもロクロ水挽後、外面口縁部～底部はロクロ削りを行う。高台はロクロ回転による削り出し。Ⅰ類の玉縁口縁は折り返しによるもので、断面ではしばしば小さな穴が観察される。

文様：施文されるのはⅠ類とⅢ類のみで、他は全て無文。Ⅰ類で施文されているものは全て呉須染付であり、花文(A類)が最も多い。Ⅲ類の場合は鉄絵。

釉薬：灰釉(木灰と葉灰)と鉄釉(鉛釉)が用いられる。鉄釉はⅡ類に限定されるがⅡ類のみ灰釉。Ⅰ類は全て灰釉。Ⅱ類は底部、Ⅱ<sub>1</sub>～Ⅱ<sub>4</sub>類は外面口縁部から底部にかけてが無釉。

焼成：目跡が5個と3個付く例がある。5個はⅠ類に、3個はⅡ類に限られる。ほとんどの資料に細かい貫入が認められるが、Ⅰ類、Ⅲ類、Ⅱ類の一部には貫入が全くない。

#### b. 各器形ごとの諸特徴

Ⅰ類 (図25-1~11、図版18-1~17、19-1~7)

Ⅰ類が30個体と最も出土点数が多く、Ⅱ・Ⅲ類は少ない。Ⅰ類は折り返しによる玉縁口縁をもつ。

Ⅰ<sub>1</sub>類 (図25-1~9、図版18-1~17、19-1~4)

出土点数は30(22)個体(注1)。形状にややバラエティーがある。概して胎土は白色ないし灰白色、釉は灰白色ないし緑がかった灰白色を呈し、1点(図25-5)を除いて他はいずれも細かい貫入が認められる。目跡は確認できる資料では全て5個、壺付部は露胎である。文様には呉須染付による花文：Aa~Ae類(図25-1~5)が多く、他には山形に武田菱文：B類(図25-6)、紅葉に松葉文：C類(図25-7)、無文(図25-8・9)のものがある。

Ⅰ<sub>2</sub>類 (図25-10、図版19-5・6)

この器形と推定される資料は3個体出土した。口径に比し高台径が小さい。3個体とも胎土は浅黄褐色、全体の色調は明黄褐色を呈し、貫入は全く認められない。腰部から高台内にかけては無釉、おそらく無文であろう。

Ⅰ<sub>3</sub>類 (図25-11、図版19-7)

1個体のみ出土。やや粗い胎土をもち、全体的に器厚が薄い。内・外面口縁部には(蒸)灰釉特有の乳濁が認められる。腰部から高台内にかけては無釉、見込には鉄絵が施されている。

Ⅱ類 (図25-12~15、図版20-1~4)

いわゆる油皿(灯明皿)と称される浅い小形の丸皿類。全般的に胎土は粗く、施釉は内面では全てであるが、外面は口唇部から口縁部周辺までにとどまる。いずれも無文。Ⅱ<sub>1</sub>類、Ⅱ<sub>2</sub>類Ⅱ<sub>3</sub>類の底部はロクロによる削り込み、Ⅱ<sub>4</sub>類の底部もロクロ削りがなされている。これらの皿類は図37-12の皿受とセットになる場合がある(図版35-9)(注2)。

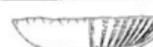
器類	器形	特徴	文様タイプ	図	図版	
陶器類	I 高台をもつ丸皿	I <sub>1</sub> 	玉縁口縁。胴部～口縁部へかけてはゆるやかな立ち上り。高台内は比較的高い。	Aa, Ab, Ac, Ad, Ae, B, C, 無文	25-9	28-1 29-1 29-4
		I <sub>2</sub> 	体部は丸味をもってふくらむ。高台内は比較的高い。口徑に比し高台径が小さい。	無文	25-10	29-5 29-6
		I <sub>3</sub> 	体部中平でやや凹曲をもつ。口縁部は外反。器厚は全体的に薄い。	K	25-11	29-7
	II 油皿 (灯明皿) と称される丸皿	II <sub>1</sub> 	口縁部はやや内弯、底部は平紐かもしくはやや上げ籠状。	無文	25-12	29-1
	II <sub>2</sub> 	口縁部は外反、底部は▽状。	無文	25-13	29-2	
	II <sub>3</sub> 	口縁部はやや内弯、底部はII <sub>2</sub> 類と同様▽状。	無文	25-14	29-3	
	II <sub>4</sub> 	口縁部はやや内弯。II <sub>1</sub> ～II <sub>3</sub> 類に比し厚手。底部は▽状。	無文	25-15	29-4	
磁器類	I 高台をもつ丸皿	I <sub>1</sub> 	玉縁口縁。深さがなく、体部中平から立ち上る。薄く低い口縁をもつ。高台は低い。	G	25-1	29-5
		I <sub>2</sub> 	玉縁口縁。蛇ノ目高台。底部～体部へかけては明瞭な屈曲をもつ。	B, Da, Db, I	25-2 27-1 27-2	29-6 29-7 29-8
		I <sub>3</sub> 	浅い。体部中平から立ち上る。底部は厚手だが口縁部は薄い。	H	27-4	29-1
	II 高台をもつ輪花形・菊形丸皿	II <sub>1</sub> 	輪花形。花卉数16枚。やや高目の蛇ノ目高台。	E, F,	27-7	29-9 29-10 29-11
	II <sub>2</sub> 	輪花形。花卉数20枚。やや高目の高台。	無文	27-8	29-12 29-13	
	II <sub>3</sub> 	輪花形。花卉数24枚。高台はII <sub>2</sub> 類よりさらに高い。	無文	27-5	29-14	
	II <sub>4</sub> 	菊形。花卉数32枚。低い蛇ノ目高台。	無文	27-10	29-15	
II類	角皿 (手塩鉢)		低い高台。平面形は隅切のほぼ正方形。	Ja-1, Ja-17, Jb	28-1 28-3	29-16 29-17

表12 NM2出土の皿類の器形分類

Table 12 Morphological classification of dishes from NM2

文様タイプ	図	図	図	文様名称	施文手法	備考	
A	a	25-1	18-1	花文	呉須染付	陶器	
	b	25-2	18-2	*	*	*	
	c	25-3	18-3	*	*	*	
	d	25-4	18-4	*	*	*	
	e	25-5	18-6	*	*	*	
B	25-6, 27-1・2	19-1, 21-6, 22-1・5		関戸文+山形+虎河童	*	陶器, 磁器	
C	25-7	19-1		松葉に虹雲文	*	陶器	
D	a	26-2・4	20-6・9, 21-1・2	桜文+局の円文+鳥文	*	磁器	
	b	26-3・6	21-3・5	笹文+局の円文+鳥文	*	*	
E	27-6	22-9		梅花文	呉須染付+筒注	*	
F	27-7	23-1・2		山水文	呉須染付	*	
G	26-1	20-5		松葉に虹雲文	*	*	
H	27-4	22-7		麻文(竹)	印刷+呉須染付	*	
I	27-3	22-6		松文	呉須染付	*	
J	a	イ	28-1	24-3・5	松葉にふくら雲文	浮文(凸文)	*
		ロ	28-2	24-6	松葉にふくら雲文+呉須	浮文(凸文)+呉須染付	*
	b	28-3	24-13	(幾何学文)	浮文(凸文)	*	
K	25-11, 27-12・13など	19-7, 23-4・6など		不	呉須染付, 鉄画	陶器, 磁器	

表13 NM2出土の皿類の文様分類  
Table.13 Classification of dish design from NM2

## II<sub>1</sub>類 (図25-12、図版20-1)

6(3)個体出土。胎土は粗い。黒褐色ないし暗オリーブ褐色を呈す鉄釉が施されるが、外面の体部から底部にかけては無釉。目跡は3個体付く例がある。一部の資料にタール状付着物が観察される(図25-12)。

## II<sub>2</sub>類 (図25-13、図版20-2)

2個体出土。図25-13は鉄釉が外面口唇部まで全体的に薄掛けされている。暗赤褐色～赤褐色を帯びる。無釉の底部は円形に橙色に発色し、外面口縁部にはタール状付着物が認められる。

## II<sub>3</sub>類 (図25-14、図版20-3)

2(1)個体出土。II<sub>2</sub>類とは口縁部、II<sub>4</sub>類とは底部の削り込みの形態が異なる。図25-14は暗オリーブ灰色を呈す鉄釉が外面口縁部まで施釉されている。

## II<sub>4</sub>類 (図25-15、図版20-4)

1個体出土。II<sub>1</sub>～II<sub>3</sub>類とは異なり胎土は灰色で緻密、また釉も鉄釉ではなく暗オリーブ色の灰釉が用いられている。施釉はやはり外面口唇部までである。

## B. 磁器皿

### a. 製作上の特徴

胎土：白色ないし灰白色を呈す緻密なもの。ただし、I<sub>2</sub>類の一部にはやや青味を帯び、黒色粒(鉄分?)が比較的多く含まれるものがある。

成形：3手法みられる。I類はロクロ水挽後、外面口縁部から底部までロクロ削りを施し、高台(蛇ノ目高台も含む)をロクロ回転によって削り出す。II類はロクロ水挽によって素形を作り、その後「型打ち」を行い、高台をロクロ回転によって削り出す。III類は「型起し手法」。なお、I<sub>1</sub>・I<sub>2</sub>類の玉縁口縁は折り返しによる。

器形	文様	火災前				火災時・直後				試験 不明	その他	小計	総計	
		石製 漆器	ガラス 器	磁器 A	陶器 B	A1	B2	C1	C2					
I	Aa	1										1	34	62
	Ab	1										1		
	Ae	1										1		
	Ad									1		1(1)		
	Ae	1										1		
	B						1					1(1)		
	C	1										1		
	無文	2										2		
	(h)A	7	1			2			1			11		
	(h)ア	4				1	1	2	1		1	10		
Ia	無文		2	1							3(3)			
Ib	K	1									1			
II	IIa	無文	6									6(3)	12	
	IIb	*				1		1				2		
	IIc	*				2		1				2(1)		
	IId	*						1				1		
	(h)E	(*)				1						1		
不明	—	2	1			3	2	2	3		3	16		

注 ( ) を付したものは推定を意味する。  
( ) 内に数字が入る場合は内数。

表14 NM2・陶器皿の分布  
Table14 Distribution of dishes at NM2

器形	文様	火災前				火災時・直後				試験 不明	その他	小計	総計	
		石製 漆器	ガラス 器	磁器 A	陶器 B	A1	A2	B1	C1					
I	G										1	1	47	95
	B					3	1	1			3	8(5)		
	Da	13		1								14(7)		
	Db	4				1	1			1		7(4)		
	K										1	1(1)		
	ア	1				2		1	1	1	2	9(5)		
	H	1										1		
	I											2		
	(h)I	2										2		
	ア	1									1	2		
II	E	1										1	28	15
	F	2										2		
	無文	5									1	6(3)		
	IIa	*						1	1			2(1)		
	IIb	*	1									1		
III	K	1									1	2	18	3
	(h)ア	9					1			1	1	13		
	Ja-e	3				1		4			1	9(4)		
	Ja-e							4			3	7(6)		
	Jb	1										1		
不明	—	1	1		1							3		

表15 NM2・磁器皿の分布  
Table15 Distribution of porcelain dishes at NM2

文様：呉須染付（Ⅰ<sub>1</sub>・Ⅱ<sub>1</sub>類）、呉須染付と筒描（Ⅱ<sub>1</sub>類の一部）、印刻と呉須染付（Ⅰ<sub>3</sub>類）、型起し成形時の浮文（凸文）（Ⅲ類）などがある。Ⅱ<sub>2</sub>、Ⅱ<sub>3</sub>、Ⅱ<sub>4</sub>類は無文、Ⅰ<sub>3</sub>・Ⅱ<sub>1</sub>・Ⅱ<sub>2</sub>類にはいわゆる口紅が施されている。

釉薬：全て石灰釉とみられる。Ⅰ<sub>2</sub>類の高台内及びⅡ<sub>2</sub>・Ⅱ<sub>3</sub>類の見込部では蛇ノ目釉ハギがなされている。

焼成：目跡は4個（Ⅰ<sub>2</sub>・Ⅲ類）、5個（Ⅰ<sub>2</sub>類）付く例がある。Ⅰ<sub>2</sub>・Ⅱ<sub>4</sub>類では貫入のみられるものがある。

#### b. 各器形ごとの諸特徴

Ⅰ類（図26-1~6、27-1~5、図版20-5~9、21-1~6、22-1~8）

Ⅰ<sub>1</sub>・Ⅰ<sub>2</sub>類は折り返しによる玉縁口縁をもつ。蛇ノ目高台をもつのはⅠ<sub>2</sub>類。量的に最も多いのはⅠ<sub>2</sub>類で39(26)個体、Ⅰ<sub>1</sub>・Ⅰ<sub>3</sub>類は1個体のみ出土である。

Ⅰ<sub>1</sub>類（図26-1、図版20-5）

1個体のみ出土。図26-1はⅠ<sub>2</sub>類と比較すると小形で浅く、高台も低い。胎土は白色、釉は明緑灰色を呈するが、焼成が不良なためか釉の一部が白っぽく（白斑状）浮き出ている。外面には源氏香文、内面には竹林仙人図：G類が施文されている。

Ⅰ<sub>2</sub>類（図26-2~6、27-1~3、図版20-6~9、21-1~6、22-1~6）

磁器皿の中では出土数が最も多く39(26)個体。大きさの変異は小さい。この器形の皿は、釉調・呉須色調・目跡の数などから2群に分離することが可能である。ひとつは、胎土が総じて青味がかかった灰白色（黒色粒一鉄分？の含有量が他の磁器と比較すると多い）、釉は明オリブ灰～明緑灰色を呈し、釉面は白斑状になる例が多く全般的に透明感に乏しく、ややくすんだ調子の一群である。目跡は5個、蛇ノ目高台内は輪状に釉ハギがなされ（蛇ノ目釉ハギ）、その部分のみ鈍い橙色に発色している。これらの特徴に加え、器形の歪みをもつ比率が高いという傾向ももつ。内面に呉須染付による同心円文（1本、3本、1本）と笹文・鳥文（)を描いたDa類（図26-2~4）、笹文を描いたI類（図27-3）をもつものがある。他の一群は胎土が黒色粒が少ないため前者より白味が強く、釉面は白斑状になるのは稀である。したがって透明感をもっている。目跡は4個、蛇ノ目高台内は輪状に釉ハギがなされるが、前者のように橙色に発色していない。この一群には、Da類と同様の文様構成（笹文）をもつが笹の展開方向が逆で、その単位数が異なる（前者は4つ）文様（Db類）をもつもの（図27-5・6）、同心円文と山形に武田菱文を描いたB類（図26-1・2）をもつものがある。

器形・文様のモチーフ、高台内蛇ノ目釉ハギの点などで共通点が認められる一方、胎土、釉調、目跡の数などに相違をもつこれら2群は、後述するように異なった生産地の製品であることを示している。

### I<sub>3</sub>類 (図27-4、図版22-7)

1個体のみ出土。図27-4はI<sub>1</sub>類と同様小形で浅く、高台も低い。底部は厚手だが口縁部は薄い。萩文(?)を印刻後、その部分に呉須を染付(H類)しているが、この施文手法が認められるのはこれ1点のみである。口唇部にはいわゆる口紅が施されている。

### 不明・その他 (図27-5、図版22-8)

図27-5は他の丸皿と比較するとやや口径が大きい。胎土は黒色粒の含有量が比較的多く、青味がかった灰色を呈す。釉は明緑灰ないし緑灰色を呈する。胎土・釉調の特徴は、後述のII<sub>2</sub>・II<sub>3</sub>類の無文の輪花形丸皿と類似する。おそらく高台をもつ浅い丸皿で、見込には蛇ノ目釉ハギがなされるものであろう。他に2個体同様の資料がある。

### II類 (図27-6~13、図版22-9、23-1~8、24-1・2)

成形は、ロクロ水挽後、型に入れて仕上げる「型打ち」。高台は蛇ノ目高台も含めていずれもロクロ削りにより作出されている。「花卉数」により細分される。花卉を模した波形は、II<sub>1</sub>・II<sub>2</sub>類やII<sub>3</sub>類では底部と体部の境界付近から認められる(輪花形)のに対し、II<sub>4</sub>類は見込中央部からはじまる(菊形)。

### II<sub>1</sub>類 (図27-6・7、図版22-9、23-1・2)

4(1)個体出土。同じ構成の山水文(F類)をもつ皿が2個体あるが(図27-7、図版23-2)、焼成不足のため、図27-7は釉の一部が白斑状になりやや不透明、呉須は灰青ないし暗灰青色を呈す。両者とも「口紅」が施されている。図27-6は呉須染付と簡描によって梅花文(E類)が配され、やはり口紅が施されている。いずれも蛇ノ目高台内は輪状に釉ハギがなされているが、I<sub>3</sub>類の一部の資料のように輪状の無釉部が橙色に発色している例はない。

### II<sub>2</sub>類 (図27-8、図版23-7・8)

5(3)個体出土。胎土はやや青味がかった灰白色、釉は明緑灰色を呈し、いずれも無文。II<sub>1</sub>類や後述するII<sub>4</sub>類のように口紅が施されることはない。見込部は輪状に釉ハギ(蛇ノ目釉ハギ)がなされている(この釉ハギは、重ね焼きの際に皿と皿が釉を媒体として融合するものを防ぐためである)。

### II<sub>3</sub>類 (図27-9、図版24-1)

2(1)個体出土。無文で、見込は蛇ノ目釉ハギ、口紅が施されないなどII<sub>2</sub>類と共通した特徴をもつが、花卉が4枚多く、釉もやや灰色味が強い点などが異なる。高台内もII<sub>2</sub>類に比し少々高目である。

### II<sub>4</sub>類 (図27-10、図版24-2)

1個体のみ出土。菊形丸皿。胎土は白色、釉も白色で無文、口紅が施されている。蛇ノ目高台内は輪状に釉ハギがなされている(橙色には発色していない)。他類の磁器と異なり細かい

貫入がある。

不明・その他(図27-11~13、図版23-3~6)

図27-11~13はいずれも輪花形・菊形丸皿であるが、Ⅱ<sub>1</sub>、Ⅱ<sub>2</sub>、Ⅱ<sub>3</sub>、Ⅱ<sub>4</sub>類のいずれかの器形であるのかそれ以外であるのか不明である。図27-11は青磁の口縁部破片で、本道跡では単独の出土品である。

Ⅲ類(図28-1~3、図版24-3~13)

18個体出土。形状は齊一的で、平面形態は隅切のほぼ正方形をなすが、各辺はやや内寄気味。型起し成形時に浮文(凸文)が施される。松葉にふくら雀文:Ja類(図28-1・2)と、全体のモチーフは不明であるが幾何学的文様:Jb類(図28-3)をもつものの2種類がみられる。前者にはさらに浮文の周辺部を呉須によって染付するもの:Ja-口類(図28-2)と染付しないもの:Ja-イ類(図28-1)がある。

#### C. 陶・磁器皿各類型ごとの出土状況

皿類の出土した遺構・層を、二の丸火災前・火災後に分け、その出土点数を各類型ごとに示した(表14・15)。この表からいくつかの傾向・特徴がうかがわれる。

まず平面分布をみると、火災前では陶・磁器とも石敷遺構埋土から出土した資料がほとんどであり、他にはピット36出土のものがごくわずかあるにすぎない。これは、火災前の時期の皿は各類ともほぼ例外なく石敷遺構廃絶後、そこに一括廃棄されたものであることを示している。焼失時ではA-1区、C-1区からの出土がやや多いが、特定の類型に限って分布上の偏在性が強く認められるということはない。ただし、磁器Ⅲ-Ja-イ類(手塩皿)は、C-1区にやや集中する傾向を示している。

次に各類の時期別分布をみると、明瞭な時期差を示す類型が認められる。陶器では、Ⅱ類の油皿のうちⅡ<sub>1</sub>類が全て石敷遺構出土であるのに対し、Ⅱ<sub>2</sub>、Ⅱ<sub>3</sub>、Ⅱ<sub>4</sub>類の油皿は石敷遺構から出土したものは1点もない。一方、陶器Ⅰ<sub>1</sub>類は全て石敷遺構と関連をもつようである。磁器ではⅠ<sub>3</sub>類の山形に武田菱文(B類)をもつ一群、及びⅢ類の松葉にふくら雀文と呉須染付(Ja-口類)をもつ一群は、石敷遺構からは出土せずいずれも3層と4層出土である。

石敷遺構は二の丸火災時より古い時期のものであるから、この出土状況は、磁器Ⅰ<sub>2</sub>-B類及びⅢ-Ja-口類、陶器Ⅱ<sub>2</sub>、Ⅱ<sub>3</sub>、Ⅱ<sub>4</sub>類が他の陶・磁器より時間的に新しいことを示唆していると言える(注3)。つまり、江戸時代末期から明治時代初期にかけての時期でも陶器Ⅱ<sub>2</sub>~Ⅱ<sub>4</sub>類、磁器Ⅰ<sub>2</sub>-B類・Ⅲ-Ja-口類は、より後半の時期に帰属させることが可能である。

#### D. 生産地について

東北地方及びその周辺地域では、近世から近代にかけての窯跡の調査例はほとんどなく、公表資料も少ないことから生産地の同定は困難である。今回胎土分析を実施し、より客観的に生

産地の同定を行なうことにも努めたが、皿類は分析資料が少なく、また継続分析中の資料もあるため一部の分析結果しか参考にできなかった(注4)。したがって、今回確実に生産地が同定できた資料は一部のものに限られている。

陶器では、相馬大塚産(福島)、磁器では、切込産(宮城)・平清水産(山形)・伊万里産・瀬戸産と推定される資料群が抽出できる。

相馬大塚産とみられるのは、陶器 I<sub>1</sub>～I<sub>2</sub>類(図25-1～11)、II<sub>1</sub>、II<sub>2</sub>、II<sub>3</sub>、II<sub>4</sub>類(図25-12～15)である。ただし、陶器で最も出土量の多いI<sub>1</sub>類の資料は、一部あるいは全て、磁器とともに陶器も製作していた平清水産の可能性もある。図41に示した胎土分析において、I<sub>1</sub>類破片(2点)は大塚産の土瓶、徳利などのグループからやや離れて位置するし、また平清水焼窯址から、A、B、C類の文様をもつI<sub>1</sub>類と全く区別つかない特徴を持つ破片を採集できたからである(注5)。また、平清水産とみてほぼ間違いのない磁器I<sub>2</sub>類の丸皿に用いられている山形に武田菱文(B類)が、陶器I<sub>1</sub>類にも施文されているという事実も平清水産とする裏づけとなる。平清水産の製陶技術には相馬大塚の影響もあり(高橋 1977)、両窯で全く共通した特徴をもつ製品を生産していたとも当然考えられる。陶器I<sub>1</sub>類は、それぞれの窯跡出土資料と本遺跡出土資料の肉眼による多くの属性の対比、胎土分析データ間の対比から判別しなければならない一群であろう。

磁器皿I<sub>2</sub>類の一部(I<sub>2</sub>類の記述の中で前者とした一群)(図26-2～4、27-3)、II<sub>2</sub>・II<sub>3</sub>類の輪花形丸皿(図27-8・9)、II類不明・その他とした丸皿(図27-5)は切込産とみて間違いない。胎土分析を行なったI<sub>2</sub>-I類、I<sub>2</sub>-Da類(各1点)はいずれも切込産のグループに属する。これらの資料と同様のものは、切込の工房址からも大量に出土している(芹沢 1976、芹沢編 1978)。I<sub>2</sub>類の説明の中で記述したように、総じて胎土は青味がかった灰白色で、また焼成技術の影響か釉面は白斑状～白濁状になりくすんでやや失透調、蛇ノ目種ハギがなされているI<sub>2</sub>類(高台内)、II<sub>2</sub>・II<sub>3</sub>類(見込部)の露胎部は鉄分が反応して鈍い橙色に発色するという特徴をもつ。

平清水産は、磁器I<sub>2</sub>類の一部(後者とした一群)(図26-5・6、27-1・2)、及びIII類の角皿(手塩皿)(図28-1～3)である。II<sub>1</sub>類の輪花形丸皿も胎土・釉調・蛇ノ目高台の形態などから平清水産と考えてよいかもしれない。胎土分析は、I<sub>2</sub>-B類、III-Ja-口類各1点ずつ行なったが、そのデータはいずれも平清水産として問題はない。なお、平清水産のI<sub>2</sub>類の一群には、切込焼の一群と器形が全く同じで、用いられる文様のパターンが類似した例(図26参照)があり、これは平清水窯と切込窯の技術的交流の一端を示している。

伊万里産とみられるのは磁器I<sub>1</sub>類の玉縁口縁をもつ丸皿(図26-1)である。単独出土で、釉調、呉須色調は他の磁器製のものとは異なる。灰青色ないし暗緑青色を呈す呉須染付による

竹林仙人図は伊万里特有のものである(注6)。

瀬戸産と推定される磁器皿も散見するが(図27-4・12)、不明な点が多い。

以上のような結果から、NM2出土皿類の生産地のあり方として、陶器が相馬大塚産、磁器が切込産、平清水産で大半を占め、伊万里産、瀬戸産(?)などの西日本の磁器皿がわずかに入りこんでいる様相をとらえることができる。

#### E. 年代について

前述の茶碗類のように、北海道白老陣屋跡出土資料と対比しうるものはなく、また、年代のわかる他遺跡の資料と比較できるものもないため、比較資料による年代の限定はできないが、江戸時代末期～明治時代初期の時期に位置づけられるNM2出土皿類は、その出土状況を検討すると年代がさらに狭くおさえられるものがあるようである。

皿類の中に、この時期の中でもより後半に位置づけられるものに、磁器製では山形に武田菱文の玉縁口縁丸皿(I<sub>2</sub>-B類)、呉須染付のあるふくら雀文の手塩皿(III-Ja-α類)、陶器製では油皿(II<sub>2</sub>～II<sub>4</sub>類)があることは前述したが、これらの陶・磁器皿類は、石敢遺構からは全く出土せず、全て火災時(明治15年)の地層である3・4層出土であることから、江戸時代末期まで遡ることはなく、明治時代初期のものと限定しうる。陶器製の花文・紅葉に松葉文をもつ玉縁口縁丸皿(I<sub>1</sub>-Aa-α・C類)、油皿(II<sub>1</sub>類)、また、磁器製の笹文をもつ玉縁口縁丸皿(I<sub>2</sub>-Da・Db類)、輪花形・菊形丸皿(II<sub>1</sub>-E・F、II<sub>2</sub>・II<sub>4</sub>類)、ふくら雀文の手塩皿(III-Ja-β類)などは前者より時期的に古く位置づけられるようであるが、これらについては年代をより狭く限定できず、江戸時代末期から明治時代初期の年代幅でおさえざるを得ない。

これらNM2出土皿類を生産地との関連で考えると興味深い様相がとらえられる。前述したように、NM2出土皿類のほとんどを占める生産地は、磁器皿が切込産(宮城)、平清水産(山形)、陶器皿が相馬大塚産(福島)であるが、NM2出土皿類の中で時期的により後半に位置づけられるとした磁器皿はいずれも平清水産で、陶器製は相馬大塚産である。つまり、後半期に位置づけられる磁器皿の中には切込産の皿類は認められない。他方、これらの皿類より古く位置づけられる皿類には、切込産・平清水産・相馬大塚産の製品がみられる。

ところで、平清水産、相馬大塚産は明治に入っても生産を継続しているが、仙台藩の御用窯としての切込産は、幕藩体制の崩壊、つまり明治維新とともに廃窯へと向かう(芹沢 1981)。この生産地の状況は、まさにNM2出土皿類のあり方に対応している。すなわち、明治維新後まもなく煙を絶つに至った切込産の磁器皿は姿を消すが、なお生産を継続し、その製品を供給していた平清水産、相馬大塚産の皿類はその後も利用されていたのである。NM2出土皿類の出土状況は、当時の生産地のあり方を反映していると考えられる。(佐久間光平)

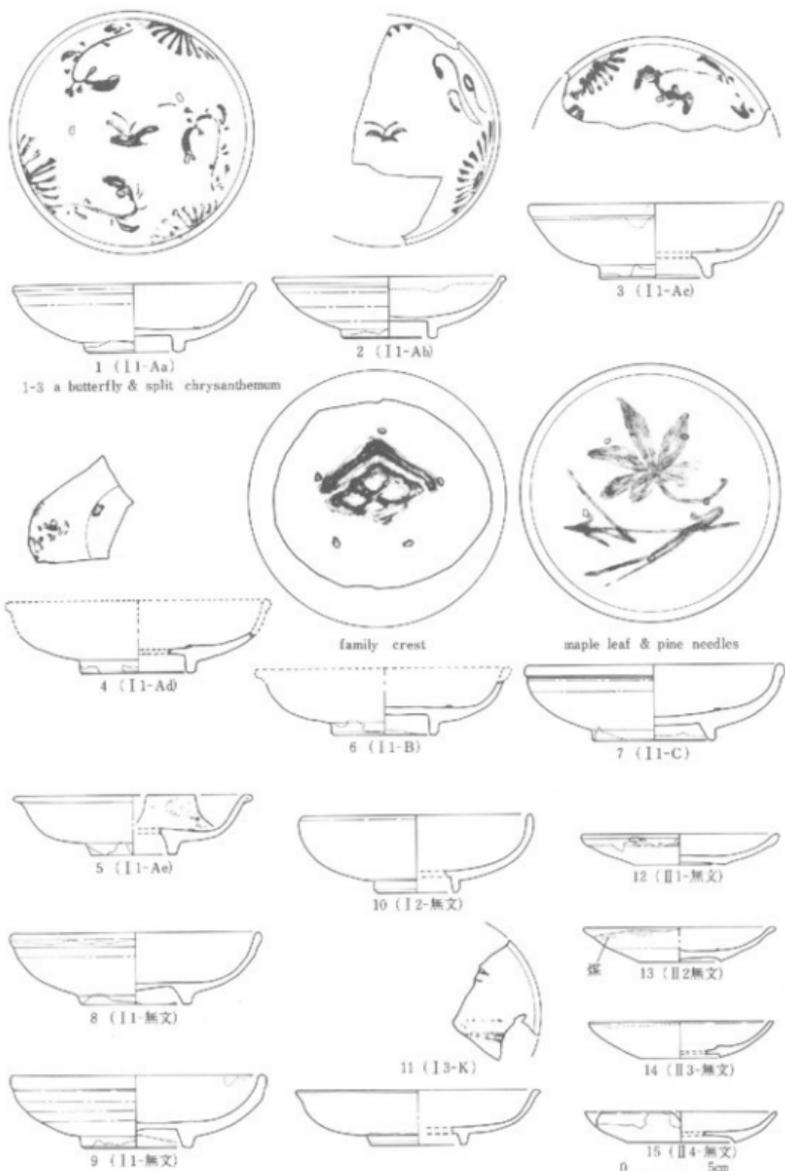


図25 NM2出土の陶器皿類 (I類: 1~11, II類: 12~15) Mid. of 19c. (before 1882)  
 Fig. 25 Dishes from NM2 (1-9 Sāma-Ōbori or Hirashimizu ware 10-15 Sāma-Ōbori ware)  
 1-7, 10, 11 cobalt bl and rounded rim 12-15 oil lamp dishes covered with iron glaze

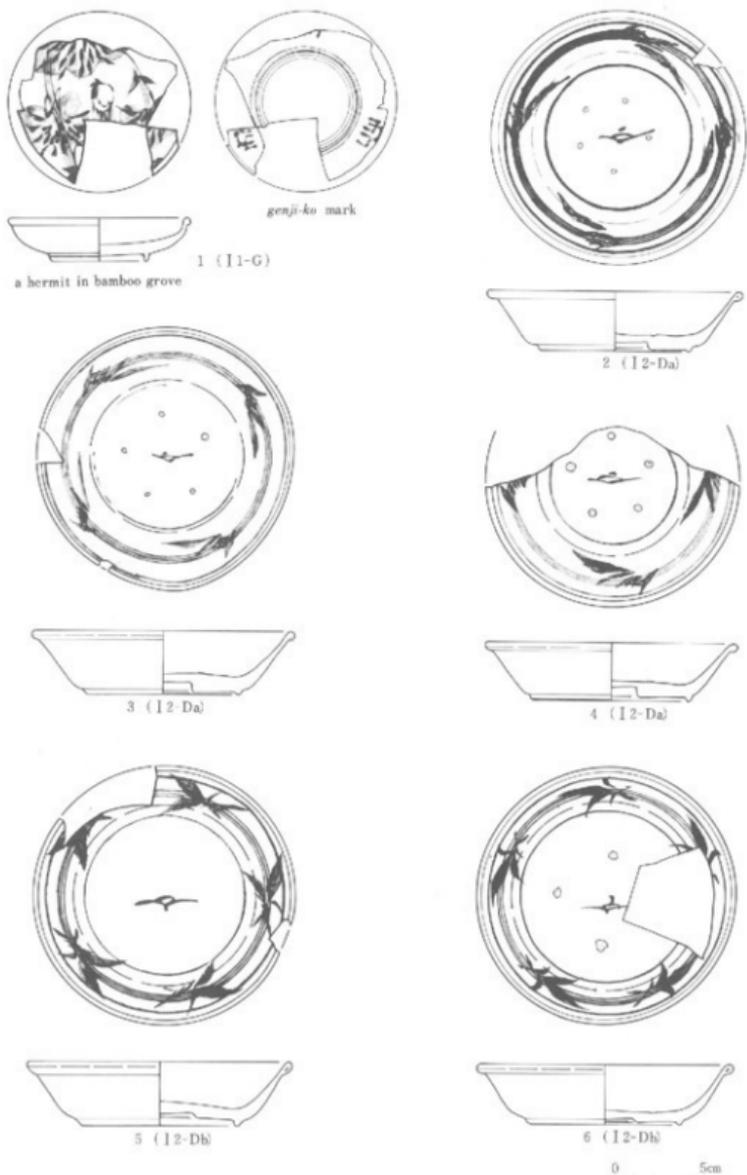


図26 NM2出土の磁器皿(1) (1類:1~6) Mid. of 19c.(before 1882)  
 Fig.26 Dishes from NM2 porcelains (1 Imari ware 2-4 Kirigome ware 5,6 Hirashimizu ware)  
 with cobalt bl. 2-6 bamboo grass & flying goose

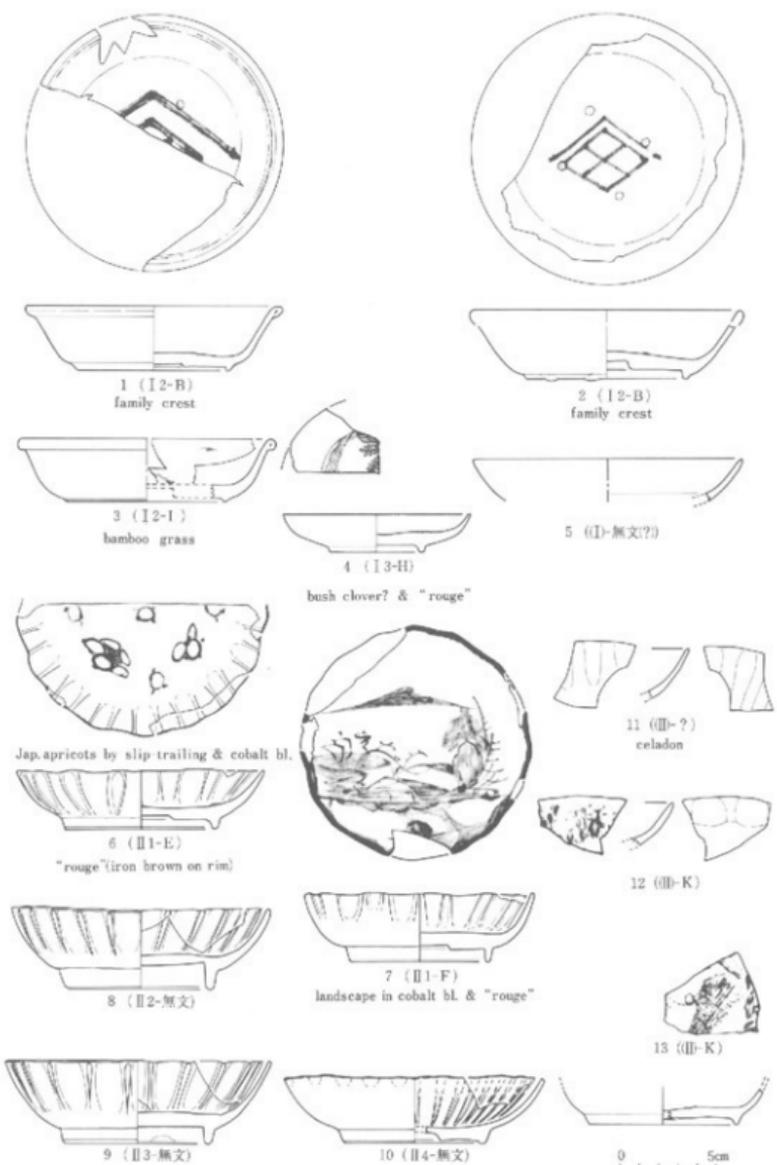


図27 NM2出土の磁器皿(2) (I類:1~5 II類:7~13) (I類:1~5, II類:7~13) Mid. of 19c.(before 1882)  
 Fig. 27 Dishes from NM2 porcelains (1,2 Hirashimizu ware 3,8,9 Kirigome ware 4,12 Seto ware)  
 1-4,6,7,12,13 cobalt blue 6-13 formed by jigger-molding



図28 NM2出土の磁器皿 (3) (Ⅲ類: 1~3) Mtl. of 19c. (before 1882)

Fig.28 Molded square dishes from NM2 porcelains (Hirashimizu ware)  
1,2 "puffy" sparrow" design 2 with cobalt blue

注1. ( ) 内の数字は推定個体数、たとえば 30(22)は30個体のうち22個体が推定個体数であることを示す。( ) 内数字が大きいののは残存率の低いものが多いため。以下同様。

注2. 鈴木省三 (1977), pp 235~236

注3. 厳密に考えれば、「廃棄」の時間差は必ずしも遺物の製作あるいは使用の時間差を示すとは限らないが、遺物及び出土遺構・層の性格から、廃棄の時間差は製作一使用一廃棄の一連の過程の時間差を示すものと思われる。

注4. 胎土分析した資料は、NM2出土皿8点(陶器製3、磁器製5)、窯址表採品(平清水)2点(陶器製1・磁器製1)計10点である。NM2のものは属性表に示してある。窯址表採品は、陶器製一玉縁口椀丸皿、磁器製一桜花文手皿(角皿)。

注5. 大場拓俊氏表探。

注6. 野村泰三 (1975)、三好一 (1975)。

### ③ 土 瓶

#### A. 分析対象と出土状況 (表20・21)

破片の中から類型化が可能な106点を分析対象とした。残存率が極めて低く、完形や完形に近い個体が少ない。分布は、多くが石敷遺構から出土し、他にピットや層中出土のものが少量ある。ただし後述する山形に武田菱文をもつものなどは、3層や4層からのみ出土する。

#### B. 土瓶本体の類型化

土瓶本体は、口縁部に蓋の受口である「キ」があるもの(Ⅰ類)と、ないもの(Ⅱ類)に大別でき、前者が平蓋を伴ない、後者が山蓋を伴う。さらにⅡ類は、体部が外寄するもの(Ⅱ<sub>1</sub>類)と腰部が屈曲するもの(Ⅱ<sub>2</sub>類)に細別できる。細部はまず注口の形が直線になっている鉄磁口が少なく、曲線になっている溜口が多い。耳は、ほとんど「より山」と呼ばれるものが多い。これは、一定の長さの粘土紐を山形にし両端を指で押し潰したものである。ただし1点のみは、「ぬき山」と呼ばれるものである。これは、型抜きで作り中心に穴を設け、耳の上に刻がある。底部は、高台内が半球体形をなす基筒底形と呼ばれる。また、底部脇には、ツメと呼ばれるものが3個ある。これは、片手で施釉の際に用いられる。





No.	器形	地区・遺構・層	口径(mm)	底径(mm)	高さ(mm)	口径(mm)	底径(mm)	高さ(mm)	文様及び調査	文様	軸	底	耳	脚	備考	図	図版
67	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S 坂下南-2er2層	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	—	—	○	—	—	—	—	—
68	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S 坂下南-2er2層	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	—	—	—	—	—	—	—	—
69	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S 石倉遺構	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	—	—	—	—	—	—	—	—
70	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S C1-3層	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	—	—	—	—	—	—	—	—
71	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S 石倉遺構	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	—	—	—	—	—	—	—	—
72	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S 〃	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	—	—	×	—	—	—	—	—
73	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S 〃	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	—	—	—	—	—	—	—	—
74	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S 〃	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	—	—	—	—	—	—	—	—
75	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S 〃	27	36	28	5	5	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	29-1(24)-2
76	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S C1-3層	79	77	24	4	5	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	—
77	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S C1-4層	77	77	25	4	3	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	29-4
78	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S C1-3層	78	76	24	4	5	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	29-5
79	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S C1-2層、小間	79	76	24	4	5	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	29-10
80	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S C1-3層、小間	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	29-7
81	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S 石倉遺構	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	29-8
82	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S 石倉遺構A1-3層	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	29-12
83	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S A1-4層	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	29-11
84	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S C1-4層	81	85	26	3	4	5	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	29-2
85	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S C1-4層	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	—
86	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S C1-3,4層	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	29-13
87	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S 3層	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	—
88	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S C1-層、中層、3層	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	—
89	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S C1-3,4層	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	—
90	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S 3層	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	—
91	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S 〃	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	—
92	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S 石倉遺構	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	29-12(4)-2
93	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S A1-4層、石倉遺構	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	—
94	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S 石倉遺構	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	—
95	Ⅲ <sub>2</sub>	Ⅲ S A1-4層	—	—	—	—	—	—	黒く染められた土	〓	〓	〓	〓	—	—	—	—

表17 NM2出土の磁器皿属性表(2)

I類(図29-1~4、図版25-1・2、図版26-1・2) 胴部が外湾し、底部が基筒底を持ち安心型と呼ばれるものである。耳は「より山」で注口は鉄砲口と溜口である。注口の孔の直径は4mmで5・6個ある。すべて絵付され、山水文が多く笹竹文や蝶文もある。ただし、図29-3、図版26-1と腰部が屈曲する図32-5、図版30-4は製作の特徴からI類と推定できる。

Ⅱ<sub>1</sub>類(図29-5、図30-1~2、図版26-3~4、27-1) 胴部が外湾し、底部内が水平な基筒底で、1点のみある耳は「ぬき山」(図30-1、図版26-4)である。注口は鉄砲口と溜口で、注口の孔の直径が6mmで3個ある。絵付がなく、糠白釉と青釉で施釉される。ただし、(図32-4、図版30-3)のみは、鉄絵によって流し掛風の文様が描かれる。

Ⅱ<sub>2</sub>類(図30-4~図32-3、図版27-3、30-2) 腰部が屈曲し、底部が基筒底で耳は「より山」である。注口は溜口が多く、注口の孔の径は、3・4・6mmあり、孔が大きい場合には孔の数も少ない。文様には、山水文と山形に武田菱文が多く牡丹文と飛龍文もあり、精葉による裝飾効果として、<sup>よみかた</sup>煎肌釉と木灰釉もある。

Ⅱ<sub>3</sub>類(図30-3、32-6~9・11、図版27-3) Ⅱ類と推定はできるものの口縁部と腰部が不明であるものを示す。肩部に葡萄文?を描くもの、胴部に筒描きで区画線を描くもの、肩部に段を有する青釉がそれぞれ1点ずつ出土する。また、口縁部が不明であるが腰部が屈曲し、胴部に弱い凹凸があり筒描きに鉄絵具で駒絵を描いたり、筒描きのみのももある。

不明(図32-10、図版31-4) 胴部に黒絵具と筒描きで駒絵を描く。

### C. 蓋の類型化

総数40点の中から類型化が可能な29点を分析対象とした。残存率は、低い器形の類型化が可能なものが多い。出土状況は、土瓶本体と同様である。本体のⅠ類に平蓋(Ⅰ類)が伴い、Ⅱ類に山蓋(Ⅱ類)が伴う。

Ⅰ類(図33-1~5、図版31-7~32-1) 口縁部の高さ、つまみの大きさに規格性はなく、底部は糸底である。平蓋のみは、すべて直径3mmの孔が1個ある。巴文が多く笹竹文の文様もある。

Ⅱ類(図33-6~18、図版32-2~33-6) 器形が山形をなし、無文や梅花文・菊花文の筋みを持つつまみが蓋の上につく。口縁部に沈線<sup>①</sup>を有しないⅡ<sub>1</sub>類が多く、沈線を有するⅡ<sub>2</sub>類もある。装飾は、青釉と鮫肌釉が多く山形に武田菱文や巴文もある。

### D. 製作の特徴

a. 素地 すべて陶器である。素地の種類と装飾方法との間には一定の結びつきがある。

① 極めて細かく鉄分の少ない粘土質で、可塑性の強い灰白色土である。水挽で伸びるため薄く軽い。これは白掛に山水文や牡丹文、笹竹文、青釉をもつものに用いられ、ていねいに製作されている。

② 少量鉄分を含み、①より純度の落ちる灰白色土で、器厚が厚く重い。白掛のない蝶文や巴文、鮫肌釉、糠白釉をもつものに用いられる。

③ 少量鉄分を含み、意図的に鉄砂を混入した灰白色土である。駒絵で筒描と鉄絵を併用するものと筒描きのみのもので、白掛に葡萄文<sup>④</sup>をもつものに用いられる。

b. 絵付(筒描) すべて下絵である。白掛に山水文や笹竹文、牡丹文、葡萄文<sup>④</sup>、巴文が描かれる場合と素地に蝶文や巴文、駒絵、草花文、梅花文<sup>⑤</sup>が描かれる場合がある。山水文や巴文はクロームと鉄を用いる。クロームは筒描風に描き、酸化炎で暗オリーブ色、還元炎でオリーブ色に発色する。鉄は木灰釉を含ませて濃淡を出し酸化炎で暗褐色、還元炎で褐色に発色する。他に呉須を加えたものや、呉須だけのものもある。笹竹文の顔料は、呉須のみやクロームである。牡丹文は呉須のみである。山形に武田菱文は、鉄とクロームの割合で黒色に発色すると思われる。

c. 釉薬 素地の性分や焼成方法により微妙に発色を異にする。ここで用いられる釉のほとんどは、相馬大塚産の木灰釉や青釉、鮫肌釉、糠白釉である(注1)。

① 木灰釉 土灰釉とも呼ぶ。樹木を焼いた灰に長石を調合。大塚では、浪江町小丸産の砥石石に<sup>⑥</sup>礬灰などを調合している。白掛に絵付のⅠ類やⅡ<sub>2</sub>類と蓋は、直火を受けるために薄掛である。貫入はきわめて細かく入る。酸化炎では灰白色、還元炎では灰色を発色する。白掛を用いないⅠ類蝶文やⅡ類巴文は、酸化炎で灰黄色に発色する。Ⅱ<sub>2</sub>類山形に武田菱文や飛龍文などは、幾分厚く粘掛し、還元炎で明緑灰色を発色する。これは灰と長石の割合が異なる木灰釉である。

同類の釉は、Ⅱ類の駒絵で酸化炭で淡黄色を発色し、貫入がない。

②糖白釉 藁灰釉とも呼ぶ。珪酸分の多い藁や萩、草木の灰と長石を調合。酸化炭で灰白色、環元炭で緑青色を発色。貫入は木灰釉より大きく入る。

③青釉 クローム青磁や銅青磁とも呼ぶ。糖白釉に銅成分のクロームを調合。酸化炭で灰色、環元炭で灰汁色に発色する。一部に、糖白釉の珪酸分を含まない織部釉(銅釉)がある。この中に数点、青釉に織部釉の流し掛と思われるものがある。貫入は糖白釉と同様に大きく入る。

④鮫肌釉 釉原料名や釉色を示すものでなく、釉の焼縮が素地のそれより極端に大きいため亀裂を生じたものである。ここでは、最初にいわき市勿来産の原石が単味で用いられた。酸化炭で明赤褐色、環元炭で暗赤褐色である。焼成温度が高ければ亀裂が大きく生じる。

#### E. 容積

完形や完形に近い個体15点より求めた。蓋の位置や柄の高さ、本体の重量、器厚を考慮しなければならぬ。ここでは、煤や茶渋の付着を持つもので(図29-1)を基準とし、茶渋痕の上下(体部までの器高80%と55%)で押えた。算出方法 $V = \frac{1}{2} \pi h (a^2 + ab + b^2)$  数値は、(図34)に表示した。さらに小形茶碗(湯呑)との数量(何杯)関係も表示した。基準の資料は、多数出土する小形茶碗Ⅰ類のNo11を用いた。実容積は、飯茶碗の七分目程度に当る点に注目し、同様に求めた結果、4勺程度となる。土瓶の実容積÷小形茶碗の実容積は、そのまま人数を限定できない。そこで、同時期の遺跡と比較した(図35)。土瓶の大きさは、その遺跡で使用された湯呑の大きさの問題もあるが、遺跡の性格により限られてくる傾向が強い。土瓶の実容積、湯呑茶碗の数量、さらに人数を求める問題は、消費地における各器種のセットの確立を知る上で重要であり、今後の課題としたい。

#### F. 産地・時期

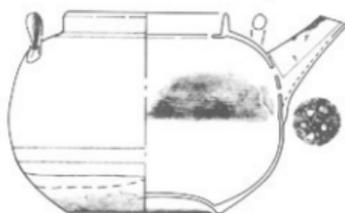
東北地方の近世窯跡の調査は、数例しかなく、生産地の同定は困難である。従って、研究者の鑑定(注2)や一部の胎土分析資料から求めた。ほとんど相馬大堀産であり、1点のみ不明である。しかし、Ⅱ類糖白釉は、胎土の肉眼観察より上野目産の可能性もある。相馬大堀産と上野目産は、器種や成形、釉薬に類似する点が多く技術的な交流があるため、とりわけ産地同定が困難である。また、同地域の消費地の調査例がほとんどなく、正確な年代は求められない。一部の製品のみ限り生産開始を知り得た。しかし、白掛を用いたⅠ類やⅡ類の山水文は、慶応年間から明治四十年代まで生産された。呉須を用いたⅠ類やⅡ類の山水文や笹竹文、牡丹文は、幕末から生産され、Ⅱ類の鮫肌釉は、明治七年から生産された。以上の点から遺物の年代は、江戸時代末期から明治時代初期の間である。ただし、火災時(明治15年)の3、4層出土の山形に武田菱文は、明治時代初期に限定される。(大塚拓俊)

注1. 窯業技術は、栃木県陶磁器指導所や福島県窯業試験所、相馬大堀焼協同組合、高橋良一郎氏(大堀焼研究家)の御教示を頂いた。

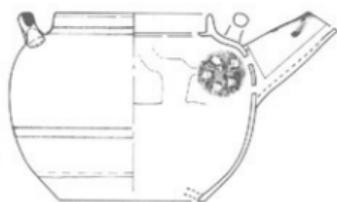
注2. 芹沢長介(東北大学名誉教授)氏や高橋良一郎氏の御教示を頂いた。



landscape design in iron brown  
& copper green  
(a house, a pine tree, mountains & sails)



1 I類(山水文)



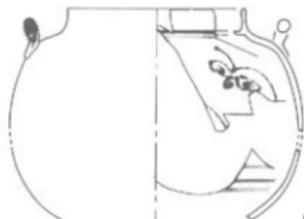
2 I類(笹竹文)

bamboo design in iron br. & cobalt blue



3 I類(笹竹文)  
bamboo in cobalt blue

1-3 Designs are over white slip, beneath a clear glaze



4 I類(蝶文)

butterfly in iron br. covered with ash glaze



5 II類

図29 NM2出土の土瓶(1)

Msl. of 19c.(before 1882)

Fig. 29 Teapots from NM2 (1)(Sōma-Ōbori ware)

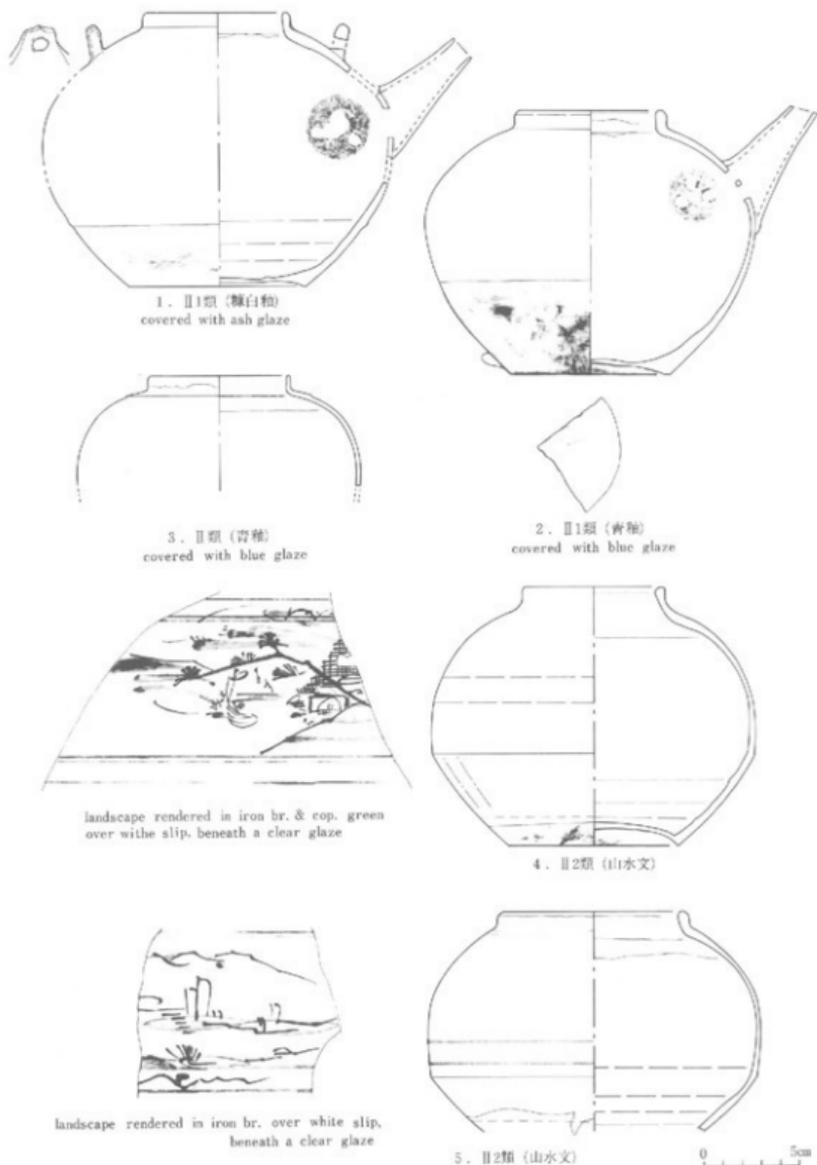
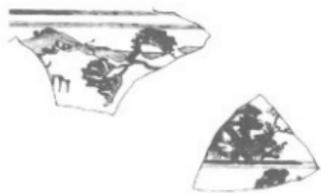
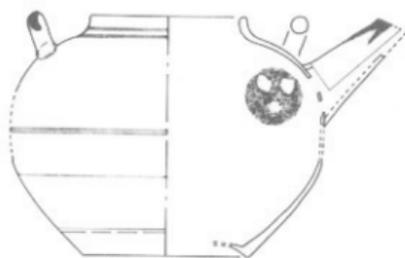


図30 NM2出土の土瓶(2) Mid. of 19c. (before 1882)  
Fig. 30 Teapots from NM2 (2) (Sôma-Obori ware)



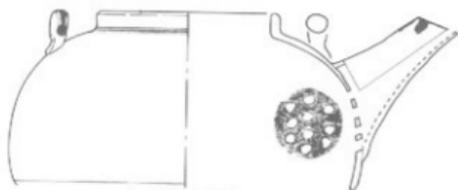
landscape in iron br., cobalt blue & cop. green



1 Ⅱ2類(山水文)



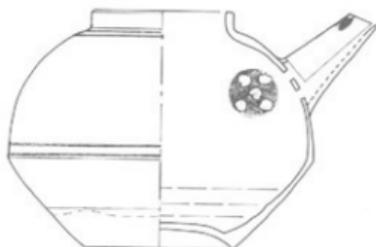
landscape in cobalt blue



2 Ⅱ2類(山水文)



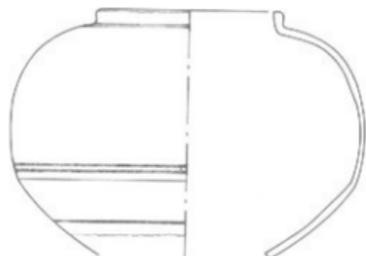
peony in cobalt blue



3 Ⅱ2類(牡丹文)



peony in cobalt blue



4 Ⅱ2類(牡丹文)

0 5cm

図31 NM2出土の土瓶(3)

Mid. of 19c. (before 1882)

Fig. 31 Teapots from NM2 (3) (Sōma-Ōbori ware)  
1-4 Designs are over white slip, beneath a clear glaze

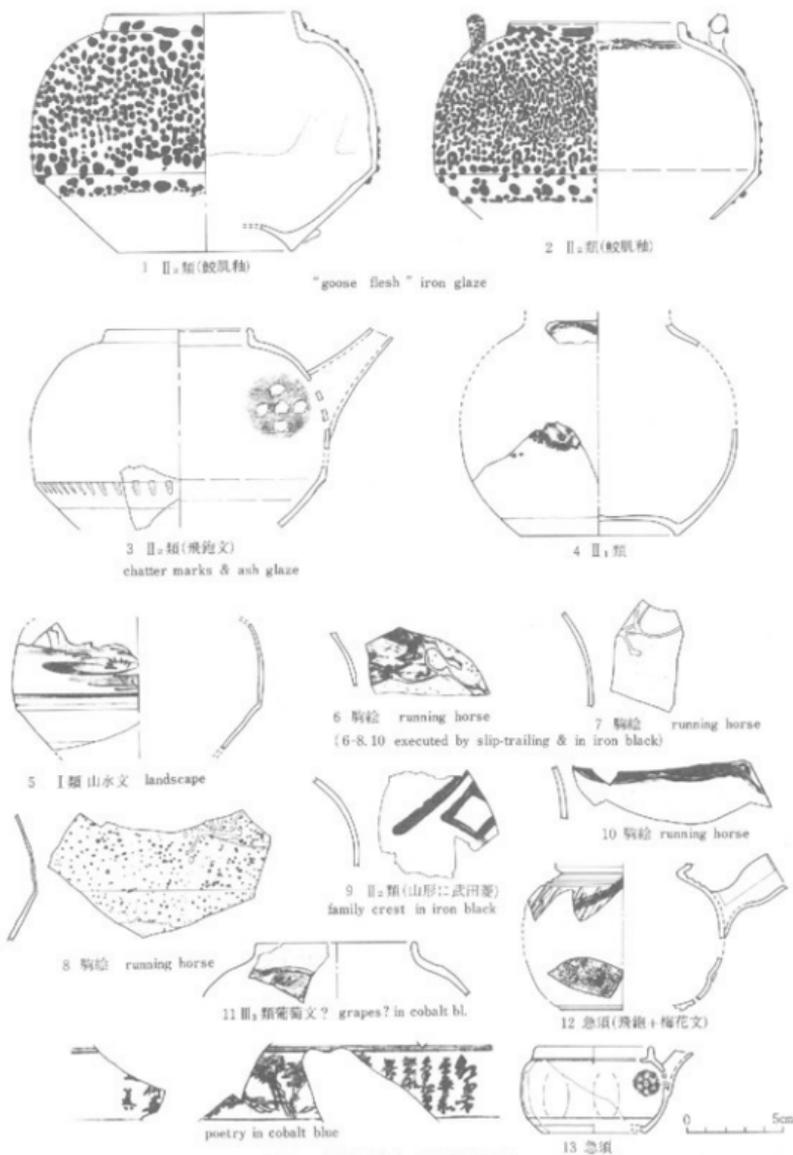


図32 NM2出土の土瓶と急須  
 Fig. 32 Teapots and small teapots (*kyusu*) (12, 13) from NM2  
 (1-11 Sôma-Ôtori ware 12 Nishomtsu Banko ware 13 Seto ware)

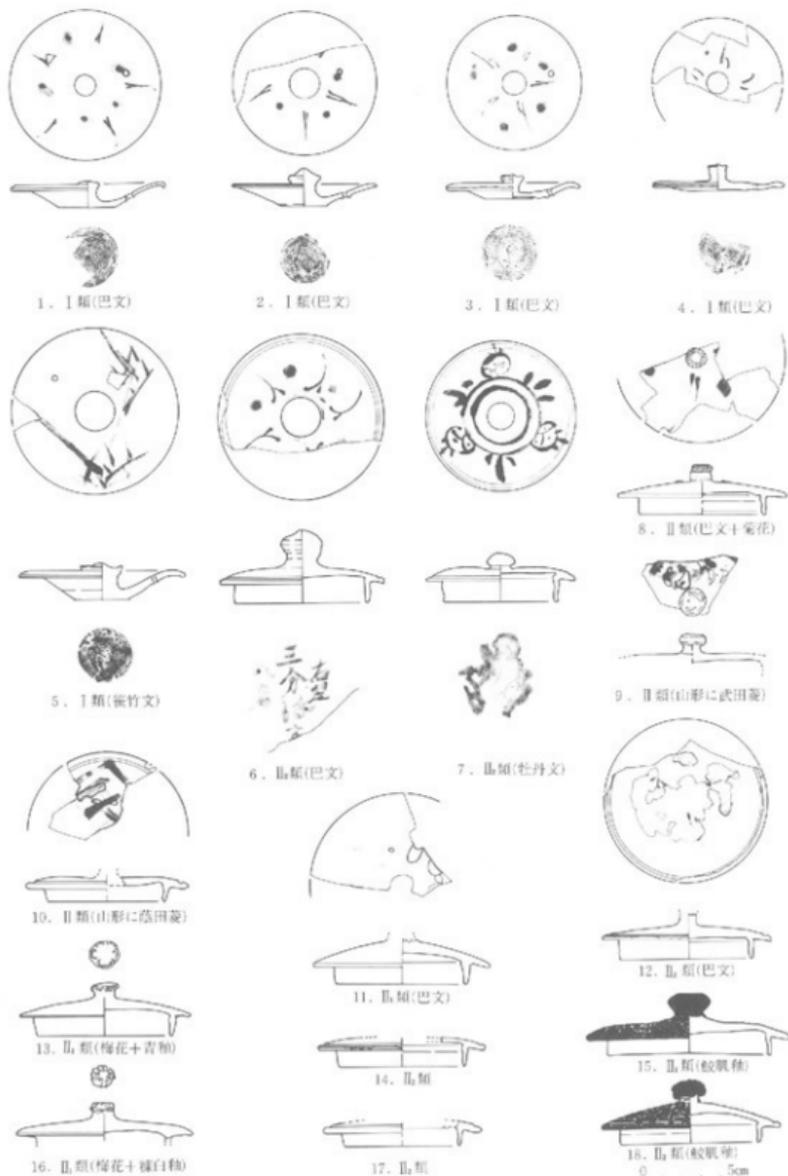


図33 NM2出土の土瓶の蓋  
Fig. 33 Teapots lids from NM2

Mid. of 19c. (before 1882)

1-4, 5, 8, 11, 12 teapots with landscape 5, teapots with bamboo design 9, 10 teapots with family crest 13, 14, 16, 17 teapots covered with blue glaze 7 teapots with peony design 15, 18 teapots covered with "goose flesh" iron glaze

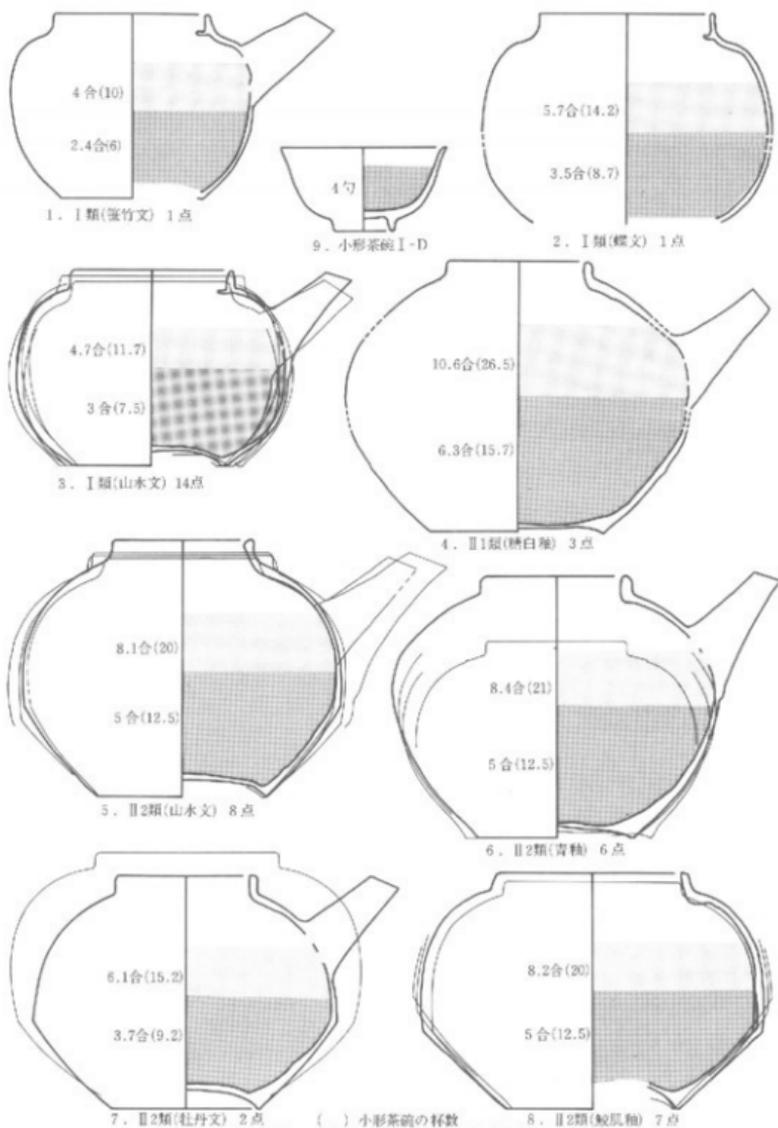
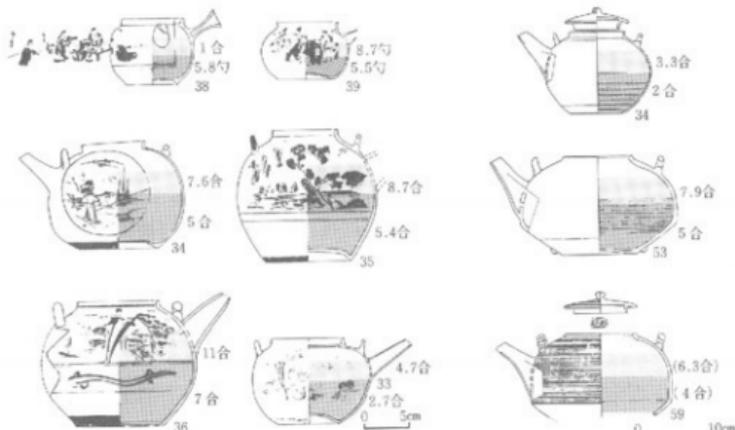
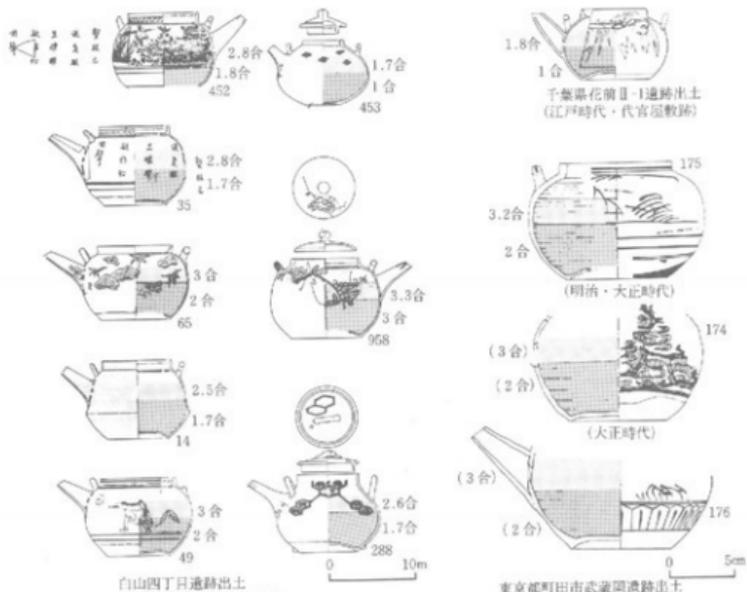


図34 土瓶と小形茶碗の実容積比較  
Fig. 34 Teapot capacity vs. "tea bowl" capacity



松前藩戸切地陣屋跡出土(幕末)

白山四丁目遺跡出土  
(江戸時代中期後期・旗本屋敷跡)



白山四丁目遺跡出土  
(江戸時代中期後期・旗本屋敷跡)

東京都町田市武藏岡遺跡出土

図35 各遺跡出土の土瓶、急須の実容積

Fig.35 Capacity of teapots and small teapots (kyusu) from other sites





No.	器名	出土地、遺跡、層	通 風 口 (cm <sup>2</sup> )				出土位置	土質	行跡	用 意				焼成	備 考	出 所	図版
			直径	高さ	開口	面積				形状	色	質	厚				
12	皿	M	石ノ下A1-3層	88	64	26	—	11	9	文	○	木灰粉	—	○	普通	700-800 1000-1100	33-102-2
13	皿	L	石敷遺構	86	28	19	(30)	21	13	文	×	木灰粉	—	×	古い	変付	33-102-1
14	皿	P	—	78	60	25	45	14	8	文	×	木灰粉	—	×	普通	変付 漆器	33-102-8
15	皿	M	石ノ下A1-4層	84	63	—	—	—	—	文	×	木灰粉	—	×	—	—	33-102-4
16	皿	M	C1-3層中、A1-3層	—	—	—	—	14	10	文	×	木灰粉	—	×	—	—	33-102-3
17	皿	M	石敷遺構	93	70	—	—	—	—	文	○	木灰粉	—	○	—	—	33-102-6
18	皿	L	—	88	70	27	(25)	14	8	文	×	木灰粉	—	×	—	—	33-103-1
19	皿	L	3層上	92	70	—	(72)	13	9	文	×	木灰粉	—	×	—	—	33-103-2
20	皿	S	石敷遺構	88	66	—	—	—	—	文	×	木灰粉	—	×	—	—	—
21	皿	P	—	106	85	32	104	22	12	文	×	木灰粉	—	×	—	—	33-103-3
22	皿	P	—	92	72	32	69	16	11	文	×	木灰粉	—	×	—	—	33-103-4
23	皿	S	—	90	66	—	—	—	—	文	×	木灰粉	—	×	—	—	33-103-5
24	皿	S	ビット36	96	66	—	—	—	—	文	×	木灰粉	—	×	—	—	—
25	皿	S	A1-4層中、4層上	82	60	—	—	—	—	文	×	木灰粉	—	×	—	—	33-14
26	皿	S	3層	94	72	—	—	—	—	文	×	木灰粉	—	×	—	—	33-17
27	皿	S	石敷遺構のビット並	86	—	—	—	—	—	文	×	木灰粉	—	×	—	—	33-3
28	皿	S	ビット13	—	—	—	—	—	—	文	×	木灰粉	—	×	—	—	—
29	皿	S	不明	—	—	—	—	—	—	文	×	木灰粉	—	×	—	—	—
30	皿	S	石敷遺構	—	—	—	—	—	—	文	○	木灰粉	—	○	—	—	—

表19 土瓶の蓋属性表(4)

出土点	器名	土 瓶										小 計	合 計	
		山水文	笹竹文	雲文	藤白相	青 梅	山水文	牡丹文	花鳥文	顔取文	獅 踏			木灰粉
大 塚 後	A-1	7		1	1				1			6	1	12(16)
	C-1	2			1	3								7(4)
	C-2													
大 塚 前	不明				1				2			1		4(2)
	石 敷 遺 構	13	2		3	8	9	2		11	7	7	4	66(44)
	石 敷 の ビ ッ ト 36	2				4							1	7(7)
	不明					1								1(1)
小 計	24(17)	2	1	5(2)	21(20)	30(4)	2			11(9)	7(7)	14(13)	7	106(78)

表20 NM2土瓶の出土分布表  
Table 20 Distribution of teapots at NM2

出土点	器名	I 類					II 類					小 計	合 計	
		巴 文	笹竹文	藤白相	青 梅	料	巴 文	牡丹文	花鳥文	顔取文	獅 踏			木灰粉
大 塚 後	A-1								2					2
	C-1	2											2	
	ビット13										1		1	
	ビット16										1		1	
大 塚 前	不明			1									1	
	石 敷 遺 構	7	1		2	1	1		3	3		3	1	20
	石 敷 の ビ ッ ト 36				1								1	
	不明			1									1	
小 計	9	1	2	3	1	1	2	3	3	2	3	1	29	

表21 NM2出土の土瓶の蓋の出土分布表  
Table 21 Distribution of teapot lids at NM2

#### ④ 徳 利 (図36、図版34)

本調査で出土した徳利は、陶器31個体・磁器2個体・石器6個体の計39個体である。主に3層、4層、ピット13、石敷遺構に集中する傾向が認められる。大半は破片で、器形・法量が推定できるものはわずかであるため、詳細な分類は不可能である。施文の方法から、A類(無文)、B類(文様 or 文字を描く)、C類(釉を流す)、D類(絞肌)、E類(沈線を施す一炆器のみ)に類型化できよう(図36下表)。なお、Fとしたものは細片であるため文様が不明のものである。

##### A. 陶 器 (No1~31)

いずれもロク口水洗きにより成形されている。きわめて薄手に作られたものが多い点は土瓶に類似する。底径のわかるものについては、60mm前後と80mm前後の2グループに分けられる。

No4(図36-3、図版34-3)は胴部下半から底部まで現存する。底径は65mmを測る。底部から10mm前後のところの2ヶ所の指痕が確認できる。胎土は精良で淡黄色を呈する。胴部下端で白掛上が全面に剝落するが、胴部すそを巡って2本の直線が描かれ、灰白色の灰釉が薄く掛けられている。焼成はややあまい。産地は平清水と推定される。

No7(図36-2、図版34-2)は口縁部から胴部上半まで現存する。口径は28mmである。胴部から頸部へゆるやかに移行し、肩部は明瞭でない。頸部から口縁部にかけてはわずかに外反する。白掛には細かなひび割れが生じ、部分的に剝落しており、ところどころに灰白の胎土が露出する。光沢のある木灰釉が掛けられている。文様の絵柄は不明。産地は平清水と推定される。

No8(図36-4、図版34-4)は胴部上半から底部まで現存し、容積は約360cc(2合)と推定される。精良な灰白色の胎土に白掛を施し、鼻須により菊花文と思われる絵柄が描かれる。胴部はわずかなふくらみを有し、頸部へはゆるやかに移行するものと思われる。産地は平清水と推定される。

No10(図36-1、図版34-1)は胴部上半から口縁部まで現存する。口径は29mmを測る。胴部径が細く、容積は約180ccと推定される。肩部から細く短く頸部へと収まり、口縁部にかけて比較的強く外反する。精良で灰白色の胎土に白掛を施し、肩部には2本の直線がめぐる。釉はやや黄色がかった灰白で光沢をもつ。産地は平清水と推定される。

No12(図36-5、図版34-5)は胴部下半から底部が現存する。底径77mmを測る。胎土は精良で淡黄色、白掛は施こされず、釉調は暗い灰白色で透明感はない。底部付近に1ヶ所、指痕が確認される。文様はない。産地は不明。

No16・17は灰色の胎土で、表面に青味を帯びた糠白釉を流す、文様類型C類としたものである。器厚は3mm前後と、本調査出土の他の陶器徳利より厚い。No18・19の破片も胎土・色調・成形などの類似性から、明らかにC類に含まれる。いずれも産地は平清水。

No.15はB類中ただ1点、胴部に文字の書かれたものである。いわゆる貧乏徳利と呼ばれる大形の徳利の破片で、内外面とも灰白色の石灰釉が掛けられている。文字は部分的で判読できない。産地は不明。

No.26・30は大塚に特徴的な鯨肌釉(D類)の小破片である。チョコレート色の釉の粒子ひとつひとつは、縦断面形が丸まることなく平面的である。

#### B. 磁器 (No.32、33)

磁器が一点(No.32)、半磁化したものが一点(No.33)出土した。

No.32(図36-6、図版34-6)は白磁で、口縁部から胴部下半までと、底部のごく一部が現存する。口径は35mmを測る。白色で精良な胎土に光沢透明釉が掛けられる。胴部は直線的に立ち上がり、比較的明瞭な肩部を有する。頸部は短かく、胴部同様に直線的に立ち上がり口縁でゆるく外反する。頸部つけ根付近に、高さ幅とも1~2mm、断面玉状の隆帯が一条、上下より削り出されており、これをはさむように釉溜が生じている。釉溜の部分は色調がやや暗く、釉の薄い隆帯部の胎土の白色を強調するような趣きがある。無文・産地は平清水か。

No.33(図36-7、図版34-7)は半磁化した製品である。口縁部から胴部上半まで現存する。口径は32mmを測り、注ぎ口が作り出されている。やや灰味をおびた白色の精良な胎土に、光沢の強い釉が掛けられている。胴部から頸部への移行はゆるやかで、口縁部にかけて外反する。無文。産地は平清水か。

#### C. 炻器 (No.34~39)

6個体が出土した。いずれも胴部に沈線が連続して施される(E類)。細片のNo.34のみ、胎土は黄色味の強い灰褐色で、沈線幅は0.2~0.5mmと細い。他の個体はすべて褐灰色の胎土で、沈線幅は1mm前後である。No.35・39は、胴部にくぼみのあるヘソ徳利である。その他はいずれも小破片で、くぼみ部が現存しないが、同種の器形と思われる。

No.39(図36-8、図版34-8)は口縁部から胴部まで現存する。胴部上半に三ヶ所、長径約35mm、短径約30mmを測るだ円形のくぼみのあるヘソ徳利である。口径は22mmで、胴部には幅1mm前後の沈線が連続して施される。胴部最大幅は胴部下半にあると思われる。頸部は短かく直線的に立ち上がり、口縁は小さな玉縁状をなす。胎土は精良で褐灰色、艶消釉が掛けられるが、ヘソ部分には光沢があり暗赤褐色を呈す。産地は平清水。

#### D. 出土状況

陶器は、焼失前では石敷遺構、焼失時・直後では3層・4層・ピット13などに集中する傾向が認められる。徳利については詳細な分類が不可能なために、焼失前後調での比較は困難である。図36下表中文様類型C類とした。表面に糠白釉を流すタイプ(No.16・17・18・19)は、焼失前後にまたがっている。D類の鯨肌徳利破片(No.26・30)は、いずれも焼失前のものであるが、出土数が少な

いため、これが焼失前に限って存在するかどうかは不明である。

磁器については白磁・半磁それぞれ1個体ずつ出土したのみで、分布の特徴、焼失前後間での比較はできない。

炬罏(E類)は(C2-4層、ピット16)に集中しており、焼失前には存在しない可能性が高い。

(市村賢則)

#### ⑤ 急須・油指・蓋・香合・甕

##### A. 急 須 (図32-12・13、図版31-5・6)

3層やピット16より陶器2点、石敷遺構より炬罏1点が出土する。陶器のうち1点は、相馬大堀産で意図的に鉄砂を含む素地を用いて、胴部を凹凸させて黒絵具で文様を描く。他の1点は、素地に呉須と白掛を用いて、その部分のみに施釉される。炬罏(図32-12)は「キ」を持ち肩部に腰部に沈線を有し、その間に飛鉤と梅花文を施す。釉薬は、糠白釉にコバルトを含む濃藍色が流し掛けされている。産地は平清水焼の可能性を持つが、粗い粒子の素地である点、二本松が占焼に類似する。二本松では、類似する製品が明治10年代に生産されている。磁器(図32-13)は、菅家文章の一節「紅玉帯雪尋和氣松翠火風□是□□……□□春□道具」と不明な文様が描かれてある。

##### B. 油 指 (図37-1・5・6、図版34-10、35-1・2)

ピット16やピット5より陶器2点を出土する。細部は欠損し形態は不明であるが、多賀城跡<sup>たがぎ</sup>作賀地区から類似する完形品が出土する。それぞれ大堀産で、木灰釉を使い酸化炎で浅黄色、環元炎で灰白色に焼成され、きわめて細い貫人に黒い染みが目立つ(図37-1・6)。

前者の油指より体部が長く、弱々しい把手を持つ陶器が3層より1点出土する(図37-5)。釉薬は、全面に糠白釉と一部に鉄釉(鉛釉)の流し掛がある。産地は、上野目産の可能性もあるが大堀産であろう。これは、水指の可能性もある。

##### C. 蓋 (図37-11、図版35-7)

ピット16より陶器が1点出土する。大堀産の油指の蓋と思われ、釉薬と貫人は同じである。釉薬は外面に厚掛し、内面にきわめて薄く掛け、橙色に発色する。

##### D. 香 合 (図37-2・3、図版34-11・12)

ピット36もしくは石敷遺構から陶器が1点と3層上から磁器が1点出土している。陶器(図37-2)は鉄分を含まない純度の良い素地に呉須で麦藁手を描き、石灰釉を掛ける。磁器は無文で石灰釉を掛ける。

##### E. 坏 ? (図37-7、図版35-3)

3層より陶器が1点出土する。大堀産と思われ、少量鉄分を含み木灰釉を掛け環元炎で緑青色に発色する。

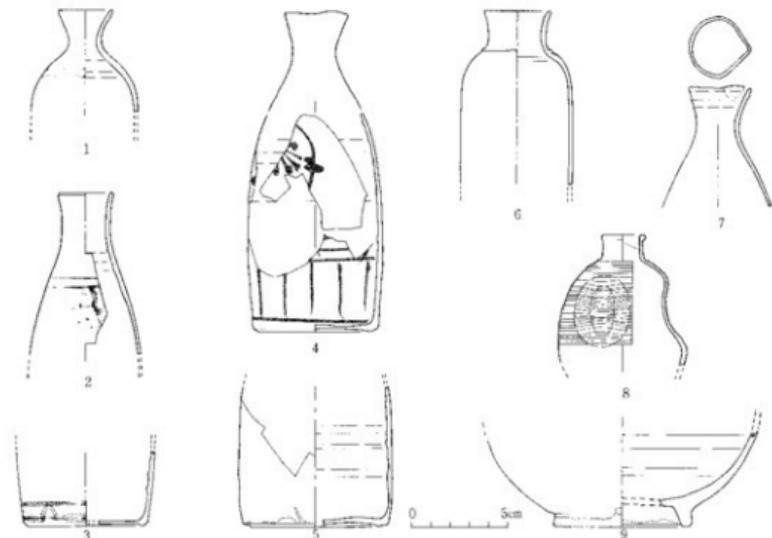


図36 NM2出土の徳利

Mid. of 19c.  
(before 1882)

Fig.36 Bottles from NM2 (1-4,8 Hirashimizu ware 6,7,9)  
1-4 Cobaltblue over white slip, beneath a clear glaze 6,7,9 porcelains.

No.	発出 時期	出土層、遺構、層	寸 (mm)			胎土	器 類	器 名	器 種	色 調	白化粧	産地	備考	図 録
			口徑	胴径	器高									
1	S	A1-1層	—	—	—	Y1.1.1	B	木灰胎	青	○	平清水			
2	S	A1-1層	—	—	—	Y1.1.1	B	木灰胎	青	○	平清水			
3	S	A1-1層	—	—	—	Y1.1.1	B	木灰胎	青	○	平清水			
4	S	A1-4層、ピット17	65	—	—	Y1.1.1	B	木灰胎	青	○	平清水	250-100-100-100	36-334-3	
5	S	A1-4層	—	—	—	Y1.1.1	FIAT?	木灰胎	青	○	平清水			
6	S	3層	—	64	—	Y1.1.1	B	木灰胎	青	○	平清水	100-100		
7	S	C2-2層、3層	28	—	—	Y1.1.1	B	木灰胎	青	○	平清水	100-100	36-334-2	
8	S	石和遺構	—	64	—	Y1.1.1	B	木灰胎	青	○	平清水	100-100	36-334-4	
9	S	A1-4層	—	—	—	Y1.1.1	B	木灰胎	青	○	平清水			
10	S	3層	29	—	—	Y1.1.1	B	木灰胎	青	○	平清水	100-100	36-334-1	
11	S	3層	—	—	—	Y1.1.1	R	木灰胎	青	○	平清水			
12	S	A1-4層	—	77	—	Y1.1.1	A	木灰胎	青	○	平清水	100-100	36-334-5	
13	S	A1-4層	—	66	—	Y1.1.1	A?	木灰胎	青	○	平清水			
14	S	黄土	—	—	—	Y1.1.1	R	木灰胎	青	○	平清水			
15	S	石和レナシ4層	—	—	—	Y1.1.1	F	石灰胎	青	○	平清水	100-100	36-334-6	
16	S	A1-4層	—	—	—	Y1.1.1	C	石灰胎	青	○	平清水	100-100	36-334-7	
17	S	A1-4層	—	—	—	Y1.1.1	F	石灰胎	青	○	平清水	100-100	36-334-8	
18	S	A1-4層、石和遺構	—	—	—	Y1.1.1	HC	石灰胎	青	○	平清水	100-100	36-334-9	
19	S	ピット11	36	—	—	Y1.1.1	HC	石灰胎	青	○	平清水			
20	S	ピット12	—	66	—	Y1.1.1	F	木灰胎	青	○	平清水			
21	S	3層	—	—	—	Y1.1.1	F	木灰胎	青	○	平清水			
22	S	4層	—	—	—	Y1.1.1	F	木灰胎	青	○	平清水			
23	S	ピット12	—	—	—	Y1.1.1	F	木灰胎	青	○	平清水			
24	S	ピット12	—	—	—	Y1.1.1	F	木灰胎	青	○	平清水			
25	S	A1-4層、ピット12	68	—	—	Y1.1.1	F(C?)	木灰胎	青	○	平清水			
26	S	石和遺構	—	—	—	Y1.1.1	D	石灰胎	青	○	平清水			
27	S	ピット12	—	—	—	Y1.1.1	A?	木灰胎	青	○	平清水			
28	S	ピット12	—	—	—	Y1.1.1	B	木灰胎	青	○	平清水			
29	S	C2-1、3層	—	59	—	Y1.1.1	B	木灰胎	青	○	平清水			
30	S	石和遺構	—	—	—	Y1.1.1	D	石灰胎	青	○	平清水			
31	S	石和遺構	—	83	—	Y1.1.1	F	木灰胎	青	○	平清水	100-100	36-334-10	
32	M	石和遺構	35	83	—	Y1.1.1	A	石灰胎	青	○	平清水	100-100	36-334-11	
33	S	ピット12	32	—	—	Y1.1.1	D	石灰胎	青	○	平清水	100-100	36-334-12	
34	S	A1-4層	—	—	—	Y1.1.1	E	木灰胎	青	○	平清水			
35	S	C2-2層、ピット16	—	—	—	Y1.1.1	E	木灰胎	青	○	平清水			
36	S	C2-2層	—	—	—	Y1.1.1	F	木灰胎	青	○	平清水			
37	S	3層	—	—	—	Y1.1.1	E	木灰胎	青	○	平清水			
38	S	ピット16	—	—	—	Y1.1.1	E	木灰胎	青	○	平清水			
39	M	C2-4層、ピット16	22	—	—	Y1.1.1	E	木灰胎	青	○	平清水	100-100	36-334-13	

F. 貼花の器 (図37-4、図版34-13)

石敷遺構より陶器が1点出土する。素地に意図的な鉄砂を含み、図案化された九曜文を貼花とする。貼花に白海鼠釉を掛け口縁に鉄絵を描き、環元炎で焼成された大瓶産である。

G. 駒絵?の器 (図37-10、図版35-6)

3層より陶器が2点出土する。素地に特徴があり、長石粒子や白い粒子を多量に含む相馬駒焼である。木灰釉を使い、酸化炎や環元炎でそれぞれ焼成される。

H. 鐔のある器 (図37-8、図版35-4)

石敷遺構より陶器が1点出土している。鉄砂を含ませた素地に、上瓶の腰部に当る部分に鐔を持つ。木灰釉を掛け酸化炎で焼成した大瓶産である。

I. 壺・甕

3層上より埴産の陶器1点と石敷遺構もしくはピット36より埴産と思われる陶器が1点出土している。2点とも胎土が類似し砂粒子を含む。3層上の1点は「黒釉」と呼ばれる黒色の釉が掛けてある。釉は火災のため変色している。

J. 玉縁の器 (図37-13、図版35-8)

4層より鉢類と思われる陶器が1点出土している。糖白釉を掛け環元炎で焼成した大瓶産か上野日産である。

K. 灯明皿受け (図37-12、図版35-9)

石敷遺構より完形で1点出土している。砂粒を含む褐色の胎土に、底部臨のみを除き鉄釉(鉛釉)を全面に施釉し、酸化炎でオリブ褐色に発色する。Ⅲ類の灯明皿の胎土と釉が同一であり、大瓶産であろう。

L. 器形不明 (図37-9、図版35-5)

石敷遺構より磁器の破片が1点出土している。糠白釉を掛け環元炎で焼成した製作時の指跡があり、上部には不明の凹凸があり、部分的に鉄釉、全面に石灰釉を掛けて焼成されている。

M. 器形不明 (図37-14)

石敷遺構と5層上より陶器の細片で2点出土している。大部分は不明であるが円盤状の型を用い、縁に型作りの痕跡と底部の縁の方向にケズリ痕が見られ、木灰釉が掛けてある。

(大場拓俊)

⑥ 土 鍋 (図38、図版35-10、36-1)

石敷遺構とC-1区3・4層に集中している。口縁部の形態と法量はみな少しずつ違いがあり、口径164~215mm、底径72~80mm、器高95~103mmで、完形品はないが口縁部に把手が1対つき、その片方の下に注口があると思われる。ただし、注口が確認された個体は1個体のみで、後述のように注口が少くとも把手の下にはない例があるので、すべてが同形態であったかどうか

No.	器形	出土地、遺跡名	法			胎土	文様	釉			施文	用途	備考	図録
			門目	硬度	断面			種類	色調	状況				
1	油瓶	石取遺構	---	---	2	...	...	...	...	...	...	...	32-1231	5
2	...	...	---	---	2	...	...	...	...	...	...	...	...	...
3	(+) S	A1-4層-A1-5層	---	---	1	...	...	...	...	...	...	...	...	...
4	漆器	...	---	---	2	...	...	...	...	...	...	...	37-1240-10	...
5	...	...	---	---	2	...	...	...	...	...	...	...	...	...
6	青白磁	A2-6層	51	10	17	46	3	...	...	...	...	...	37-625-2	...
7	...	...	---	---	3	...	...	...	...	...	...	...	37-205-11	...
8	...	...	---	---	3	...	...	...	...	...	...	...	37-413-7	...
9	漆器	...	---	---	3	...	...	...	...	...	...	...	37-520-1	...
10	片	...	---	---	1	...	...	...	...	...	...	...	37-72-2	...
11	...	...	---	---	2	...	...	...	...	...	...	...	37-305-4	...
12	...	...	---	---	2	...	...	...	...	...	...	...	37-430-13	...
13	...	...	---	---	2	...	...	...	...	...	...	...	37-1235-8	...
14	...	...	---	---	3	...	...	...	...	...	...	...	37-613-4	...
15	...	...	---	---	2	...	...	...	...	...	...	...	...	...
16	...	...	---	---	9	...	...	...	...	...	...	...	...	...
17	...	...	91	40	58	56	3	...	...	...	...	...	37-1230-9	...
18	...	...	---	---	2	...	...	...	...	...	...	...	37-920-5	...
19	...	...	60	43	43	56	2	...	...	...	...	...	32-1231-6	...
20	...	...	---	---	3	...	...	...	...	...	...	...	...	...
21	...	...	003	---	---	3	...	...	...	...	...	...	37-14	...
22	...	...	---	---	3	...	...	...	...	...	...	...	...	...

表22 NM2その他の陶磁器の属性表  
Table 22 Attributes list of various ceramics from NM2

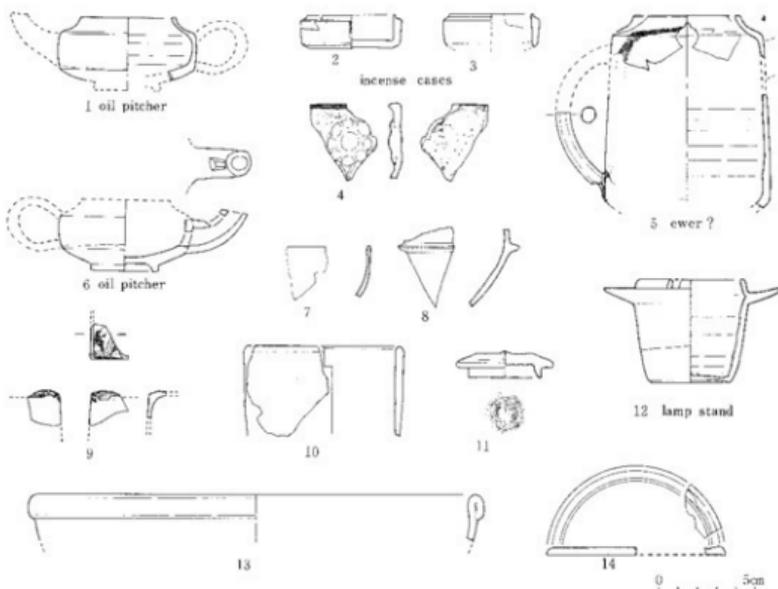


図37 NM2その他の陶磁器  
Fig.37 Various ceramics from NM2

Misl. of 19c  
(before 1882)  
Only 9 is precelan.

かはわからない。底部は相馬大堀産の土瓶と同じ形態で、非常に薄い。ツメがおそらく3個つくが、土瓶と違って底の縁についている。体部外面下半は削りで仕上げられている。体部外面上半と内面には暗赤褐色・極暗褐色の鉄釉が掛けられる。外面は漬け掛けである。釉の上には黒斑が特徴的である。胎土は比較的軟質の浅黄橙色のものと硬く焼きしまった灰色のもの二つがある。後者は相馬大堀産の絞肌土瓶に似る。図38-1のみ黒斑の見られない極赤褐色の釉で他と異なる。図38-5は釉が黒変し、図38-7は焼き損じ。目痕の形は変化があるが、焼台は五脚と思われる。

胎土は相馬大堀産のものに類似するが、大堀産ではこのように口縁部に把手が立つ土鍋は今のところ知られていない。胎土・釉調は明らかに異なるが、同形態の鉄釉土鍋の破片1点が、1976年の東北大学の切込西山磁器工務所の発掘で出土しているが(図版35-11)、ここで焼いたものかどうかはわからない。多賀城市山王遺跡出土の例は注口が少くとも把手の下にはない(図版35-12)。胎土・釉とも異なり、小形である(口径147mm、底辺57mm、器高63mm)。

#### ⑦ 土師質土器、瓦質土器

酸化焰焼成の橙色の素焼の土器を土師質土器とした。口縁部水挽きの皿、播鉢、鉢類、蚊遣？土管と、不明土製品があるが、透明の鉛釉を薄く掛けた焙烙も、便宜的にここに含めた。これに対し、燻焼環元焰焼成によって灰白～黒色を呈したものを瓦質土器とした。鉢類の一部と炭椀がある。土師質・瓦質土器はほとんどが細片で、出土量も多くなく、形態・法量等について分析できるものはない。これらの土器は一般に火に関連した用途に用いられることが多い。胎土には粗い砂粒を多く含んでいる。この種の器を焼いてきた近くの窯は仙台市の堤窯がある。堤の佐大土管店の佐藤弥一氏、佐藤達夫氏と現在の堤の陶工松根金之助氏によれば、これらの器種は素焼の播鉢を除けば、堤でも焼いてきており、胎土は概ね堤のものともよとのことである。

#### A. 播 鉢 (図39-6～11、図版36-4)

本調査区出土の播鉢はすべて素焼である。

#### B. 皿 (図39-1～5、図版36-2)

近世によく見られる素焼の小皿である。完形品は一点のみ、ほとんどは細片である。体部の曲線や口縁部の形態に変化があるが、復元可能なもの大きさは口径115～125mm、底径70～80mm、器高20～25mm前後で、他もほぼこの範囲に取まると思われる。底部は上げ底気味である。この種の皿は神事や灯明皿に用いられるが、本調査区では灯明皿に用いられた痕跡(煤痕)のあるものはない。

#### C. 鉢 類 (図39-12～14、18～20、図版36-3・5、37-1)

土師質のものと瓦質のものがある。完形品は無く、大きさには変化があるが、口縁部は膨ら

んで内側に突出する。口縁部を強くするため、持ちやすくするためなどが考えられる。図39-12、図版37-1は口縁に水平な沈線が刻まれている。七輪の口縁を針金で縛って補強するような行為が想起される。これらも一般的に見て火鉢の類と見てよいだろう。図39-20は外面が磨かれており、蚊遣?としたものの底部かもしれない。

#### D. 蚊遣? (図40-3~5、図版37-8)

3~4個体認められた。体部上半が内弯し、口縁部が内側に折れこんでいる。外面は丁寧にヨコミガキされ滑らかである。多賀城作真地区から多数出土している完形品との類似から、蚊遣(中に杉葉などを入れて燻し、蚊を追い払う道具)と推測した。但し多賀城で出土のものは瓦質である(図版37-3)。蓋や透し穴のある破片、煤のついた破片はない。1点内側に墨書されたものがあり(図40-3、図版37-8)、『月H』『主立』の文字が読める。(P.109参照)。

#### E. 焙烙

豆などを炒る器で、薄い透明な鉛釉が掛けられている(図版37-4、参考品)。細片が6点出土しているのみである。

#### F. 土管 (図39-16・17、37-2)

土管の接続部の破片が2~3層から各1点出土している。進駐軍の遺構から出土する、胎土が層状に剥がれる素焼の土管とは焼成が異なるが、管部の径はほぼ一致する。大災時から大災直後の時期であり、土管の出現時期が今後の検討課題となろう。

#### G. 不明土製品 (図39-15)

多角形の板状の土製品である。

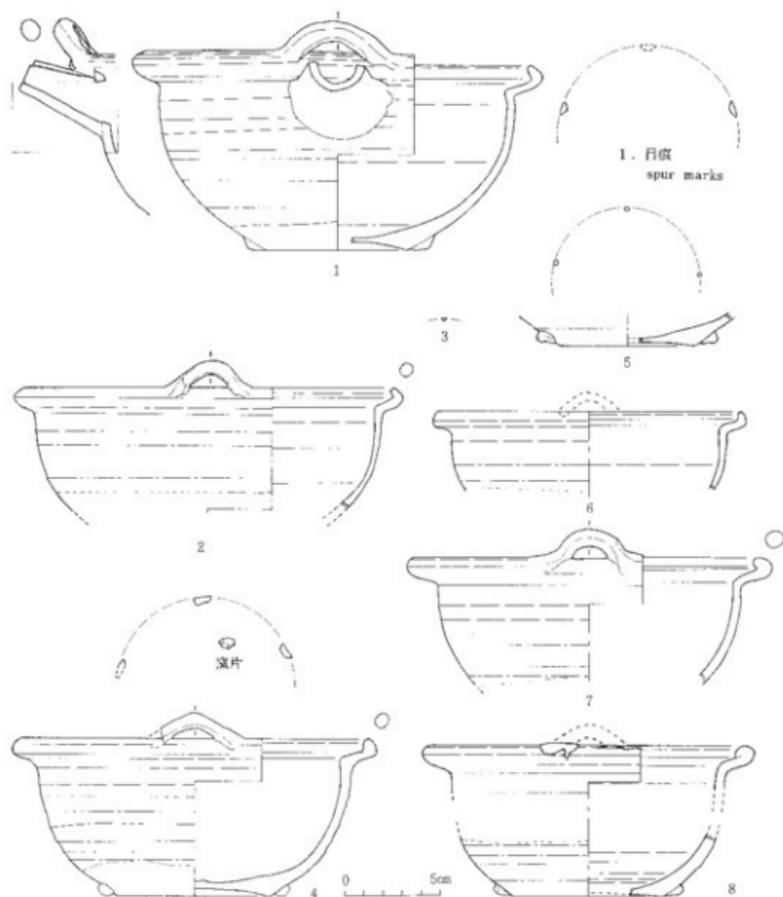
#### H. 炭櫃 (図40-1・2、図版37-6・7)

C-2区4層から3片出土している他はすべて石敷遺構出土である。細片が多く個体の識別が困難であるが、最低4個体ある。内外面に黒色処理を施した箱状の容器で、平面形は正方形

遺構名	大		大		大		大		大		大		大		大		大	
	ビン																	
土上地点	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36
品	7	39	17	2	6	2	2	1	1	1	3	4	1	1	1	1	1	1
鉢																		
鉢																		
鉢																		
上																		
不明土製品																		
炭																		

表23 NM2 土師質・瓦質土器の分布

Table 23 Distribution of red earthenware and smudged black earthenware at NM2



No.	石	形	寸法	重量	年代	出土	層	備考	図	図号
1	石	丸	225	76	103	5	2			38-1 35-10
2	*	丸	203	-	-	3				38-2
3	*	丸	-	-	-	-	4			
4	*	丸	-	-	-	-				
5	*	丸	-	-	-	-				
6	C 1	3層	-	-	-	-				38-3
7	C 1	3, 4層	190	80	95	3	4			38-4 36-1
8	*	丸	-	-	-	-	3		*	38-5
9	C 1	3層	194	-	-	-	3			38-6
10	C 1	3, 4層	193	-	-	-	5			38-7
11	*	丸	374	80	-	10				38-8
12	C 2	3層	-	-	-	-				
13	C 1	3層	-	-	-	-				

他: C1 4層, C 2 4層, ビット15層穴, M=3層, ビット1より順序番号点 単位: リンメートル

図38 NM2出土の土鍋

Mid. of 19c. (before 1882)

Fig. 38 Cooking pots covered with iron glaze from NM 2

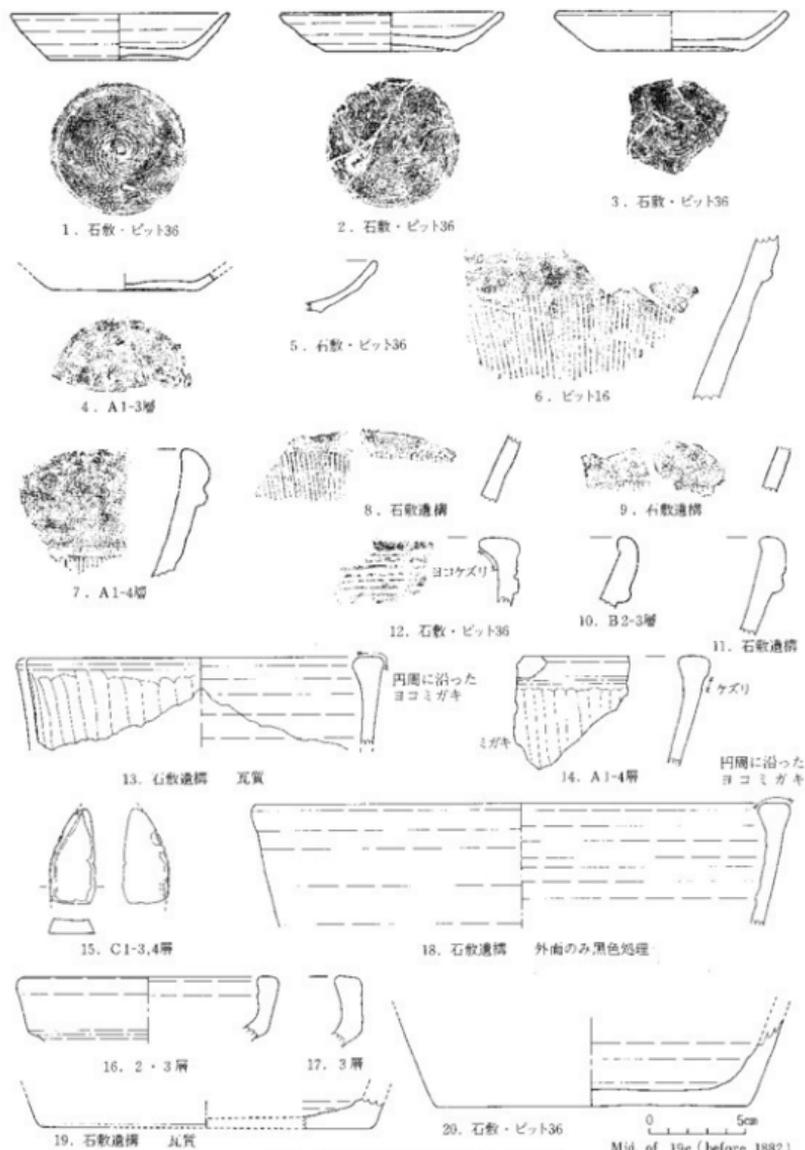


図39 NM2出土の土師質・瓦質土器

Fig. 39 Red earthenware and smudged black earthenware from NM2 Nos. 13, 18, 19 black earthenware  
 1-5 皿 dishes 12-14, 18-20 鉢類 braziers 16, 17 土管 pipes 6-11 楕鉢 mortar 15 不明土製品 unknown piece

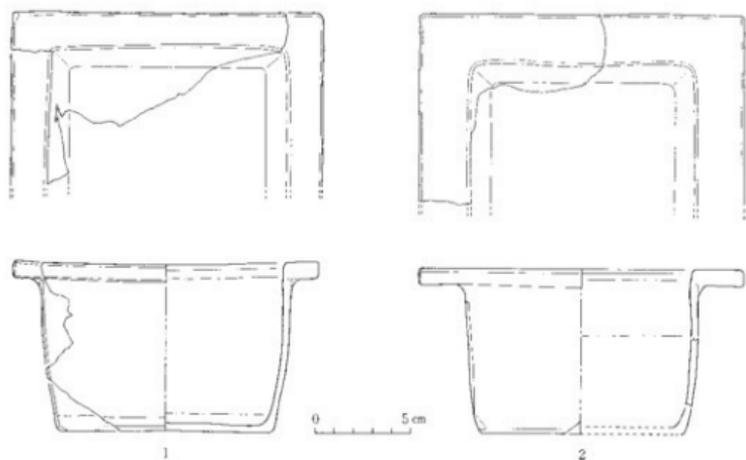
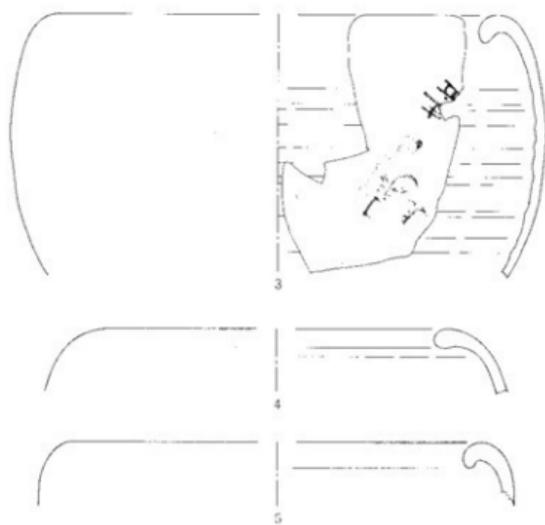


図	出上地点	胎型上辺	胎型下辺	胎厚	口幅	口厚	口底	口高	備	考
1	行敷築橋	324	177	7	37	17	37	6		
2	*	328	170	8	54	17	37	7	内面土色、黒色地埋無し	



0 5cm

図40 NM2出土の炭槽・蚊遣

Mid. of 19c. (before 1882)

Fig. 40 Rectangular charcoal heaters and braziers for smoking out mosquito

が長方形である。黒色処理が及ばず、橙色や灰白色を呈するもある。No2の内面は黒色処理が直線的に切れている。重ね焼きの痕だろうか。粘土板をつなぎ合わせて組み立てられており、つなぎ目に粘土を埋めてなでている。口縁の鈎と本体の接合部では鈎の側に2～3条の溝を刻んで接合している(図版37-5)。埴ではこの形の容器を「すびつ」と呼んでおり、近代の民家では堀り火爐こたつの炉に鈎の部分を引っかけて用いたという。朝倉他(1981)によれば火爐は江戸期には普及しており、これらの「すびつ」も火爐に用いられたのかもしれない。

(山田しょう)

### 3) 明治時代初期以降の陶磁器

湯呑(図24-21) 磁器に筒形の山水文を描く。

(大場拓俊)

### 4) NM2の陶磁器のまとめ

#### ① 時期・産地・使用者

NM2出土の陶磁器は破片資料がほとんどである。これらは火災前では本来の機能を失った石敷遺構に、火災直後ではA-1とC-1・2に集中して分布する。これらは壊れて破片になった陶磁器の集中的廃棄と火災直後の跡始末の痕跡を反映している。

これらの陶磁器の時期(製作・使用・廃棄)は、ほぼ明治初期である。まず茶碗からは同一類型の磁器を出土して時期のわかる北海道つるぎ白老仙台藩陣屋跡と愛知県かたみ第2号窯跡と対比すると、下限時期は1860年前後となる。皿からは切込廃棄に伴ない、平清水に依存度を増す時期であり、1869(明治2)年前後となる。1874(明治7)年製作開始とされる鯨肌上瓶と1877(明治10)年頃の福島県二本松万古急須が石敷遺構型土から出土した。そして、火災は1882(明治15)年に起った。以上より製作・使用時期が一部幕末まで遡るものがあるにせよ、多くの陶磁器は明治初期の約15年間のものといえる。

視覚による属性分析に加え理化学的分析を行なった結果、産地には切込(茶碗・皿)、平清水(茶碗・皿・德利)、相馬大塚(皿・土瓶・灯明具)、相馬駒焼(陶器)、二本松万古(急須)があることが判明した。このほか伊万里や瀬戸と推定される磁器もあるが、主に在地や隣接地、とりわけ平清水産や大塚が多い(図42)。磁器皿の分析によれば、少なくとも1882(明治15)年の火災以前から、切込産が減少し平清水産が増加する傾向があり、これはすなわち仙台藩の保護を失ったことによる1869(明治2)年の切込廃棄を背景とした現象と解釈できる。また、そうした情勢の変化の中でも上瓶などは相馬大塚から供給されており、土瓶製作の技術水準の高さなど廃藩後も民窯として独立して採算の合う条件が整っていたことがうかがわれる。

山形に武川菱文は、茶碗・皿・土瓶に共通する文様であるが、土瓶と陶器皿は相馬大塚産であり、茶碗と磁器皿は平清水産である。この文様をもつ陶磁器は石敷遺構がゴミ捨て場として使用されなくなって(1877年頃)から火災時(1882年)までの間に増加(茶碗)または出現する。従

って、これらはその時期に注文主が同一文様をもつ陶磁器のセットを商人に注文し、商人は平清水と大堀に依頼して作らせたものであろう。

NM2出土の陶磁器はその大きさにおいて、従来の江戸期の食器研究結果を裏付けることになった(秋岡 1984)。すなわち、膳に一汁一茶と湯呑、あるいは一汁二茶を並べるとすると、直径約3寸8分の茶碗と直径約4寸の皿であるから、江戸当時の一般的膳(一辺約8寸5分)の上に無理なく収まることになる。一方、土瓶の数に対して湯呑が、徳利の数に対して猪口が少なすぎる。また、大皿が皆無であることから、個人用膳の上に並べられる器を使用する場が付近にあったことになろう。また、陶磁器中とくに複数の食器に占める磁器の割合は高い(図42)。中でも茶碗はすべて磁器である。当時、一般庶民(農・工・商)の食器の多くは陶器であった様である。一般庶民の使用した大瓶産土瓶も山水文の描き方が粗雑であるなど、NM2に比べて質の上で一定の差を見出すことができる。

幕末に北海道に構築された仙台東白老陣屋跡、松前藩戸切地陣屋跡の出土食器の組み合わせは、NM2のそれとよく近似している。また、茶碗がすべて磁器であるなど、食器中に占める磁器の割合も高い。こうしたものが足軽など下級武士が詰めていた長屋跡から出土していることからみて、彼らの使用したものであったと判断できる。従って、当時の下級武士が自宅で使用したもまでは不明だが、少なくとも彼らが支給されていたものは、一般庶民とは質的に1ランク上のものと見ることが出来る。もともと、NM2の食器類中には多くのハネモノ、つまり釉の発色のきわめて不良なもの、多少歪みを生じているものが含まれている。これは一方で財政上の困難を反映すると解釈できるほか、その使用者が武士階級でも下級に属する者であったことを示していると言える。「NM2のまとめ」で後述するように、これらの陶磁器が近世陶磁器の最終末の特徴をほとんど留めていながらも、時間上はすでに廃藩後の明治初年に属する東北領台の下級兵卒らの使用物であった可能性が高い。下級兵卒も江戸時代の下級武士的性格と類似することからみて、NM2の陶磁器の使用者を下級兵卒とみることは妥当であろう。

(佐川正敏)

## ② 陶磁器の化学組成結果と考古学的考察

本遺跡出土の陶磁器は、多くが在地や隣接地の切込産や相馬大堀産、平清水産と推定できる。しかしながら、窯跡の多くが未調査で、製品の胎土色調や粒子が類似することから、識別が困難な資料もある。そこで理化学的方法(原子吸光法)による主成分分析を齋沢聡史(東北大学教養部教授)に依頼した。その分析方法は第四章で詳述されているのでここでは省略する。資料は、出土品の産地が判明するものを選んだが、産地不明な資料が少なくないため、平清水窯跡表採品も対象とした。内訳は陶器が6点、磁気が20点、炆器が6点(本遺跡出土品32点と表採品10点)で、器種の多い茶碗や皿や土瓶や徳利が主である(表41)。

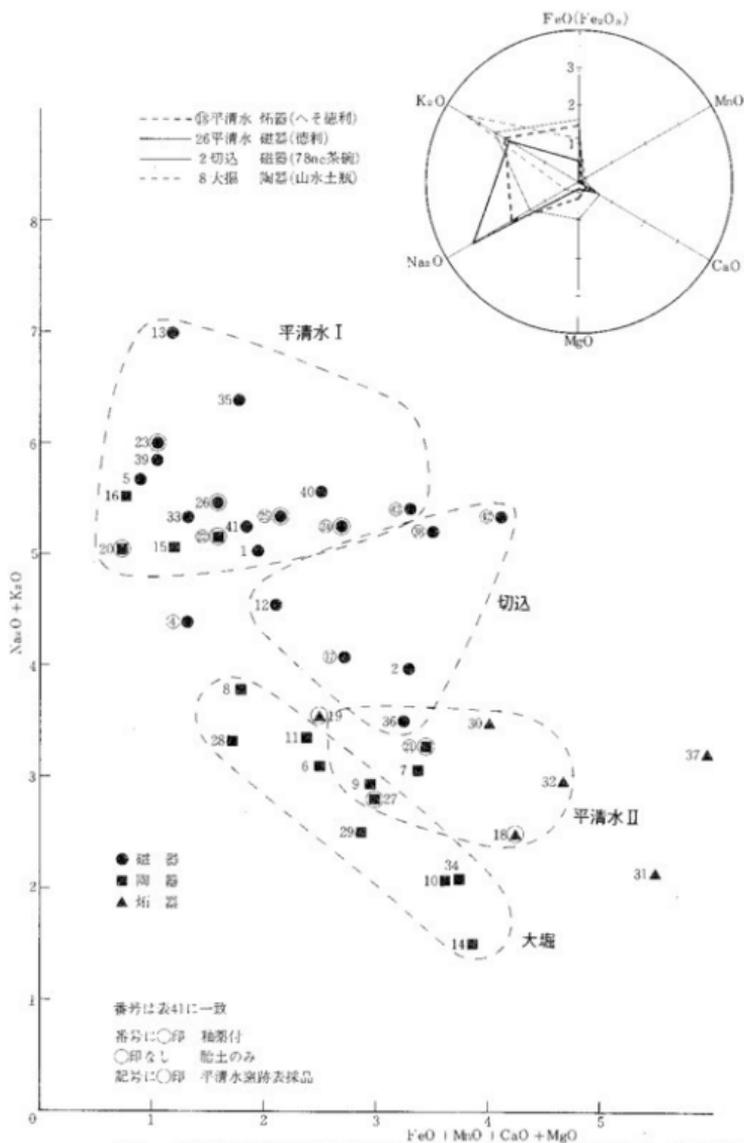
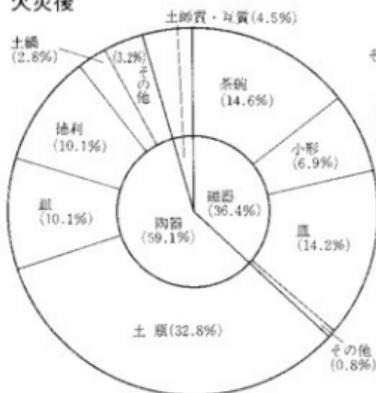


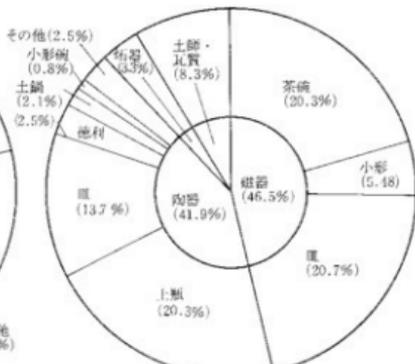
図41 NM2出土陶磁器の  $(\text{FeO} + \text{MnO} + \text{CaO} + \text{MgO}) + (\text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O})$  の関係

Fig. 41 Relation between the  $(\text{FeO} + \text{MnO} + \text{CaO} + \text{MgO})$  and the  $(\text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O})$  in the ceramics from NM2

火災後



火災以前



注: 前後とも、土師質の皿を含まず

percentage variation before and after the fire in 1882

茶 碗

平清水	不明
38.9	61.1

茶 碗

平清水	8.0	不明
22.0	切込	70.0

小形茶碗

不明	100
----	-----

小形茶碗

平清水	相馬大瓶	不明
12.5	大瓶	81.2
6.3		

皿

相馬大瓶	平清水	切込	不明
16.7	35.0		43.3
5.0			

皿

相馬大瓶	切込	平清水	不明
31.3	28.9	13.3	24.1
瀬戸2.4			

土 瓶

相馬大瓶	100
------	-----

土 瓶

相馬大瓶	不明
98.8	1.2

徳 利

平清水	不明
59.3	40.7

徳 利

平清水	不明
75.0	25.0

\*不明は東北地方産

図42 器種ごとにみた産地別出土数の比較

Fig. 42 Percentage of excavated ceramics divided according to place of production

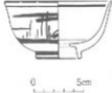
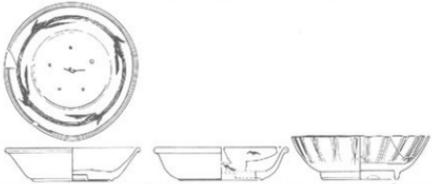
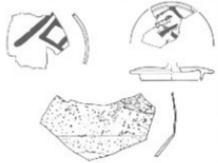
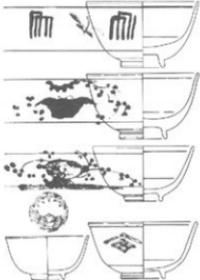
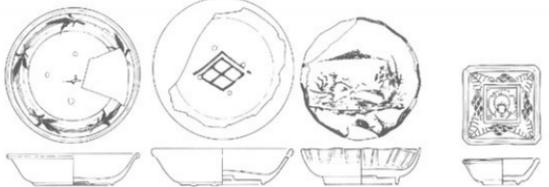
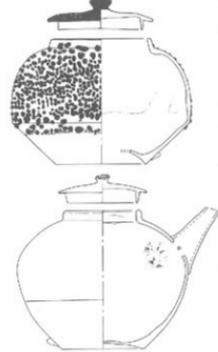
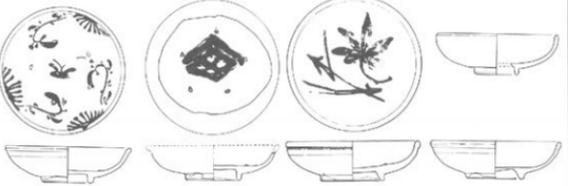
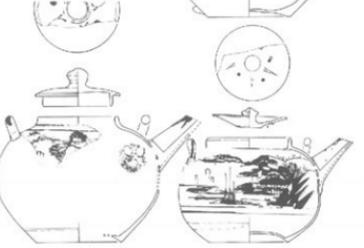
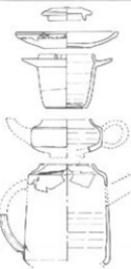
産地	茶碗 Bowl	皿 Dish	徳利 Bottles	土瓶 Tensetsu	その他 Others
宮城県宮崎町切込 Miyagi (Miyagi pref.) Kirigomae (Miyagi pref.)					
山形県山形市平清水 Yamagata (Yamagata pref.) Hirahimizu (Yamagata pref.)					
福島県浪江町大堀 Fukushima (Fukushima pref.) Ohoiri (Fukushima pref.)					

図43 NM2出土の産地別陶磁器一覽表  
Fig. 43 Types of excavated ceramics divided according to place of production

陶器の出土品13点と表採品3点は、 $\text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$ が富む一群と乏しい一群に分けられる。前者は、陶器の中で最も灰白色を有する胎土で玉縁を持つⅠ類の皿(No15・16)である。これらは、窯跡表採品に分布値が隣接し、同類の胎土と器形を考え合わせると平清水産と推定できる。後者の中では、 $\text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$ が富むⅠ類巴文蓋(No8)が前者に最も近接し灰白色に近い浅黄橙色の胎土をもつ。続いてⅡ類鮫肌土瓶(No11)、鉄砂を含むⅡ類土瓶(No9)、Ⅰ類青釉土瓶(No10)、Ⅱ類の皿(No14)の順に $\text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$ が乏しくなる。その間に油指し(No28)や徳利(No6・29)や片口土鍋(No34)が分布する。徳利は、土瓶群の胎土と同様の色調を有する点と大堀の分布値に隣接することから大堀産と推定できる。ただし徳利(No6)は胎土が異なることから平清水産の可能性もある。土鍋は、玉縁の器形が大堀で見られず、胎土の粒子が粗く、大堀産の土瓶の胎土と異なるが、大堀に隣接することから同一産地の可能性がある。炬器の出土品4点と窯跡表採品2点の分布では、窯跡表採品と出土品の徳利(No30・32)は互に近接し、小形茶碗(No37)と急須(No31)は離れている。前者は褐色の胎土と粒子の状態から同一産地と推定できる。急須は、胎土の粒子が粗い点で二本松万古とは異なるが、暗褐色胎土と文様や釉薬に同様な点があるので同一産地であろう。小形茶碗は、明褐色胎土で他の炬器とは異なるが、高台の仕上がナデであり丁寧に製作されていることから素地の選択の結果とも考えられる。また、素地から筒描が剥落する点を考慮すると平清水の可能性もある。磁器の出土品16点と窯跡表採品4点は、窯跡表採品に多くが隣接し集中する。この一群は、鉄分が微量で髹付は灰白色が多く、平清水と推定できる。それに対し鉄分が多く髹付が茶色で灰色の釉薬を持つ茶碗(No2)は、切込特有のもので分布値の上でも明確に示されている。他の切込と推定される資料の茶碗(No38・42)は髹付が薄く茶色を呈するが、明確に産地は決めかねる。急須(No4)の胎土が灰白色で透明感を持ち釉が完全に溶けている資料は、分布値に明確に示されているように瀬戸産であろう。今回は、産地推定の基礎資料となる窯跡資料が少なく出土品の産地を明確に決めかねた。とりわけ、肉眼で識別困難な出土磁器や表採炬器の分布値が離れており、同一産地の分布値の範囲が問題となる。窯跡の多くが未調査の段階において、産地の基礎資料の充実と消費地出土資料の比較に基づいた産地同定は、とりわけ今日の意義があると言える。

(大場拓俊)

## 5) 木製品

出土資料の内訳は表24に示した。木製品は石敷遺構に集中し、その多くが木羽などの屋根葺材である。明治15年の火災時に形成されたと考えられる3・4層からは、一部が炭化した板材の破片が出土するが、数は少なく、焼け落ちた建物の残骸は火災後片付けられたものとみられる。このことは、3層が多少動かされている可能性があることを示している。なお樹種同定は時間の都合で行えなかった。

種 類	出土地点											計						
	ビ ワ ト 36	石 敷 遺 構	ビ ワ ト 数 or 36	ビ ワ ト 方 17	ビ ワ ト 方 23	各 区 4 層	各 区 3 層	火 災 時 ・ 直 後	ビ ワ ト 穴 13	ビ ワ ト 穴 14	ビ ワ ト 穴 16		ビ ワ ト 穴 17	ビ ワ ト 3	ビ ワ ト 8	ビ ワ ト 9	ビ ワ ト 10	ビ ワ ト 12 b
板	5	6	1															18
板または角材	1	2	1		1				1	1					1			8
下げ																		1
くさび					1													6
野付板		4				1	1											4
木羽	22	67	1		3	2												93
トバ		6																6
山木		19																19
白木		7																7
漆																		1
漆		1				1						1	1					4
柿の柄		1																1
不明木製品		1																1
丸		4			1													5
杭																	1	1
竹製品		8																8
葉	2	1				1												4
葉	1		1	2	3	2							2					11
葉	5	17				1												23
炭化	17	62	3	4	4	3	2			1	4		1	1	9	1		112
断片	4	10		3	3	2	3	3	1	3	10				4			33
計	57	217	7	9	13	12	6	5	4	2	10	1	1	1	15	1	1	382

(数は破片数)

表24 NM2出土の木製品の分布

Table 24 Distribution of wooden materials at NM2

## ① 建築材

長さ1尺、幅2寸程の薄く割られた板の破片が石敷遺構から多数出土した。東北大学工学部佐藤巧教授にこれが屋根葺きに用いられる木羽であると御教示頂いた。折りしも、宮城郡宮城町大倉の定義如来西方寺が五重塔の新築を計画され、工事が進行中であったので、工事を担当されている仙台市の阿部建設株式会社の大沼二郎氏、大沼典治氏の御厚意により、1985年2月・3月に工事現場を見学させて頂いた。大沼二郎氏、棟梁で山形県文化財保護指導員の加藤吉男氏、柿葺職人の吉川定男氏らに以下の遺物を鑑定して頂いた。野津芳、坪倉晴利、伊藤延行、池田栄次、池田民哉の各氏による柿葺も実見させて頂いた。以下は、その御教示をまとめたものである。

## A. 木羽 (図44、図版40-1~5)

長さ1尺2寸、幅3寸前後、厚1分程の薄板を重ねて屋根を葺く方法を柿葺(木羽葺)という。戦前は民家でもよく見られたが、戦後は資材と職人の不足で急速に廃れた。仙台市では大崎八幡神社が柿葺である。寿命は30~50年程である。木羽は角材をナクで割って作られる(図版43-1)。板目に割る方が丈夫だが、技術的に困難なので柾目に割る。定義如来五重塔では、建物の本体と共にアオモリヒバを使っている。割った板の表面は凹凸があるが、これが重ね合わされた時に隙間を作って空気を通し、屋根の乾燥を良くする。

木羽は上下に1寸ずつずらして重ねられる。このずらした部分を葺足という(図48-2、

葺足は墨打ちで揃える(図版43-2)。葺足が長くなると風で割がされたり、腐食しやすくなる。木羽の幅は時々變いて調整する。釘は竹釘(図版40-2)を用いる。真竹を削り、糠油で炒って脱水して使った。木羽を打ちつける地釘は1寸、後述する軒付に使う軒釘は1寸2分を使う。釘はまとめて口を含み、1本ずつ1から頭を先にして出し、打ちつけていく(図版43-3~5)。

NM2出土の木羽は完形品は1点で長さ30cm、幅はやや狭い傾向がある。すべて柾目である。材は、加藤氏・吉川氏らの肉眼による鑑定では、多くは杉で若干の檜(ひのき)が(図44-3)が含まれるようである。普通ひとつの屋根では同一材が使われるので、複数の建物の木羽が混ざっている可能性もある。竹釘が残存している例が2点ある。釘穴は直線ではなく、交互に2列並ぶ例が目につく(図44-1~3・8)。定義如来五重塔の軒付板でも板が緩まないよう同じ方法が使われている(図版44-11)。図44-1、図版40-3は、一端の幅1寸の部分腐食が進み、葺足を示している。木羽の破片の多くは一端の保存が良く、他端は腐食して失われているが、これは葺足側が腐食したためと考えられる。図44-6は表面に一見文字のような削り痕がある。製作者の名を墨書することはあるらしいが、これについては何とも言えない。

#### B. 軒付板(軒積板)(図45-1・2・4・8、図版40-6・7)

柿葺の屋根の軒先には、木羽が葺かれる前に軒付板(軒積板)が積まれる(図49、図版44)。ここにも竹釘が使われる。本調査区からも竹釘やその穴を残す軒付板の破片が出土している。図45-8は軒先側が腐食している。軒付裏板(図49)は側面を竹の合釘(あひ)で繋ぐ(図48-3)が、図45-2は側面にその合釘の痕を示している。

#### C. 檜皮(図45-5、図版41-1)

檜(ひのき)の外皮で屋根を葺く方法を檜皮葺きという(渋谷・長尾 1959 pp 324~326、長尾 1982 pp168~179参照)出土した檜の皮6点中、全体の形が分かるのは1点だが、他もみな屋根材であったと思われる。図45-5は表側、矢印の位置に切れ目が入られ、折り曲げるようになっている。(他に失敗した切れ目が1つ、裏側にはこれらに対応する折り目が三つある)。これは棟の部分に折り曲げて重ねられ、品軒(しなのき)を構成した棟折(むねま)(図48-1、「折曲げ」と考えられる。両端の腐食が著しいことは、中央部が図のように箱棟(後述)のあふり板で覆われていたか、あるいは棟瓦でおさえられていたことを示す。曲げた時の角度は約170度で、回廊のようなあまり大きくない、屋根の勾配の緩い建物だったと推定される。檜皮の出土数は少く、また史料から二の丸の建物の多くは柿葺と考えられるので、檜皮は棟の部分にだけ使われた可能性がある。

#### D. 下げ束(図46-1、図版41-4)

箱棟の芯の下げ束である(図48-1)。屋根の野地板の上に檜皮や木羽が葺き上がるまで、下げ束を差し上げて下げ止栓で止めておき、工事が終わってから下げて固定する(長尾 1982 P.

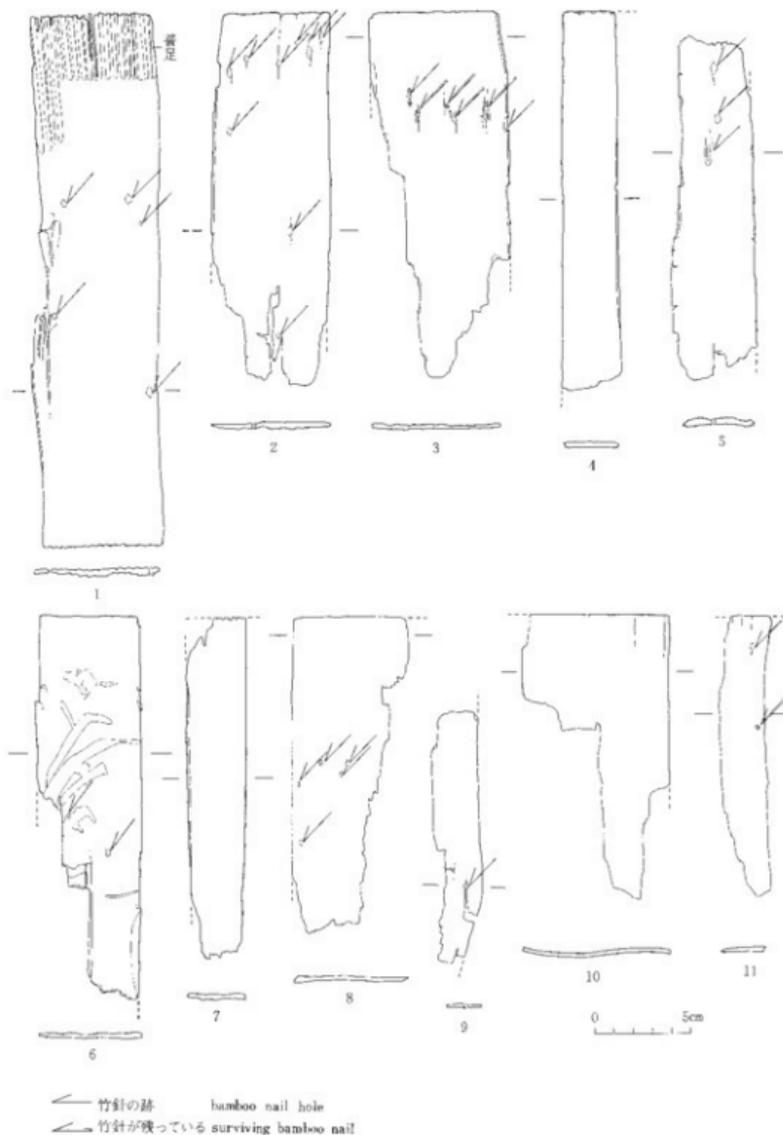


図44 NM2出土の木製品(1) 木羽 全て石叡遺構出土 Mid. of 19c.(before 1882)  
 Fig. 44 Wooden materials from NM2 (1)  
*kaba* (shingles) made of cedar and cypress

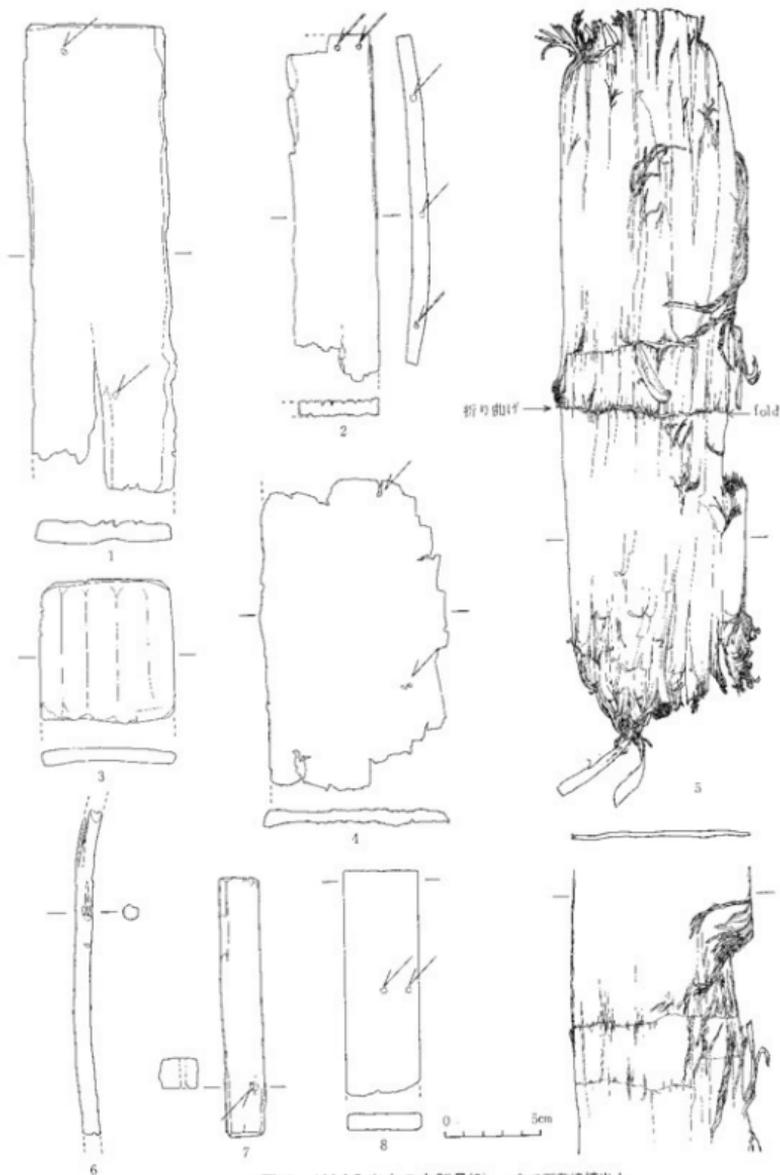
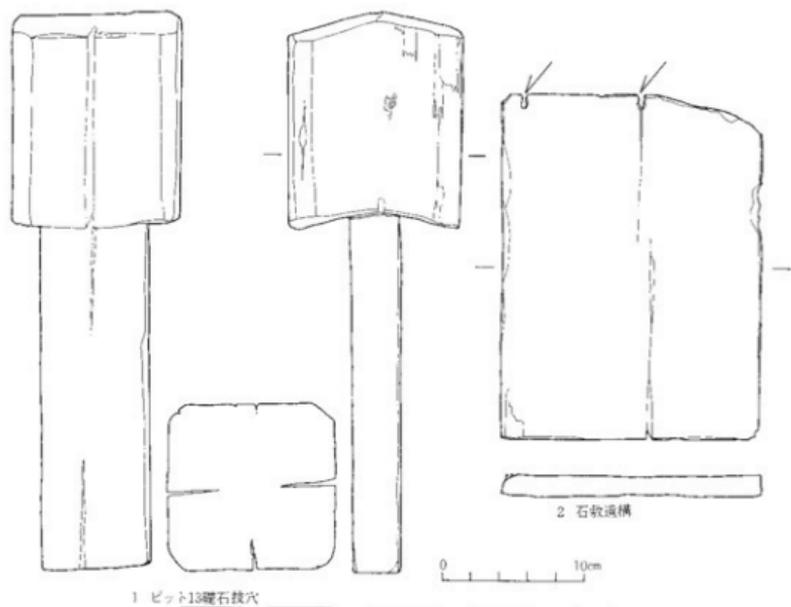


図45 NM2出土の木製品(2) 全て石敢境横出土

Fig. 45 Wooden materials from NM2 (2) Mid. of 19c. (before 1882)

- 1.2.4.8 野付板 *Nokitsuke ita* (shingles on eaves) 3. 横の柄? lateral fragment of pail?  
 5. 檜皮棟折 ridge shingle (cypress bark), 6. 丸棒 unknown stick 7. 角材 square lumber



1 ビット13礎石抜穴

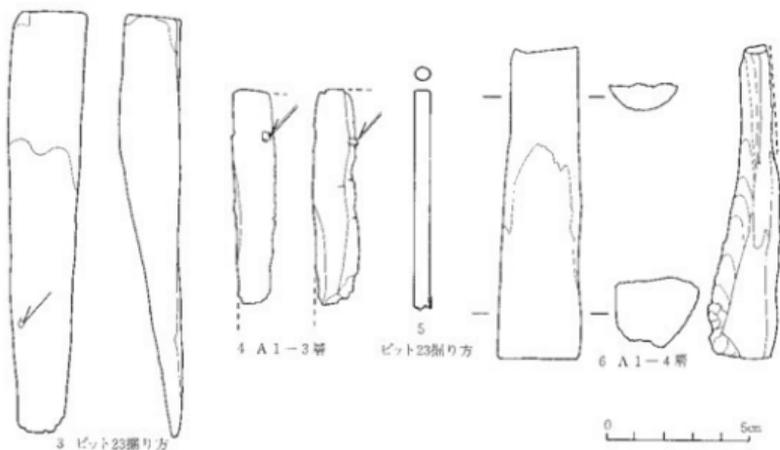


図46 NM2出土の木製品(3)

Fig. 46 Wooden materials from NM 2 (3) Mid. of 19c. (before 1882)

1. 下げ束 ridge tenon 2. 板 材 board 3. 楔 wedge 4. 野付板? shingle on eave? 5. 丸棒 unknown stick 6. 切片 chip

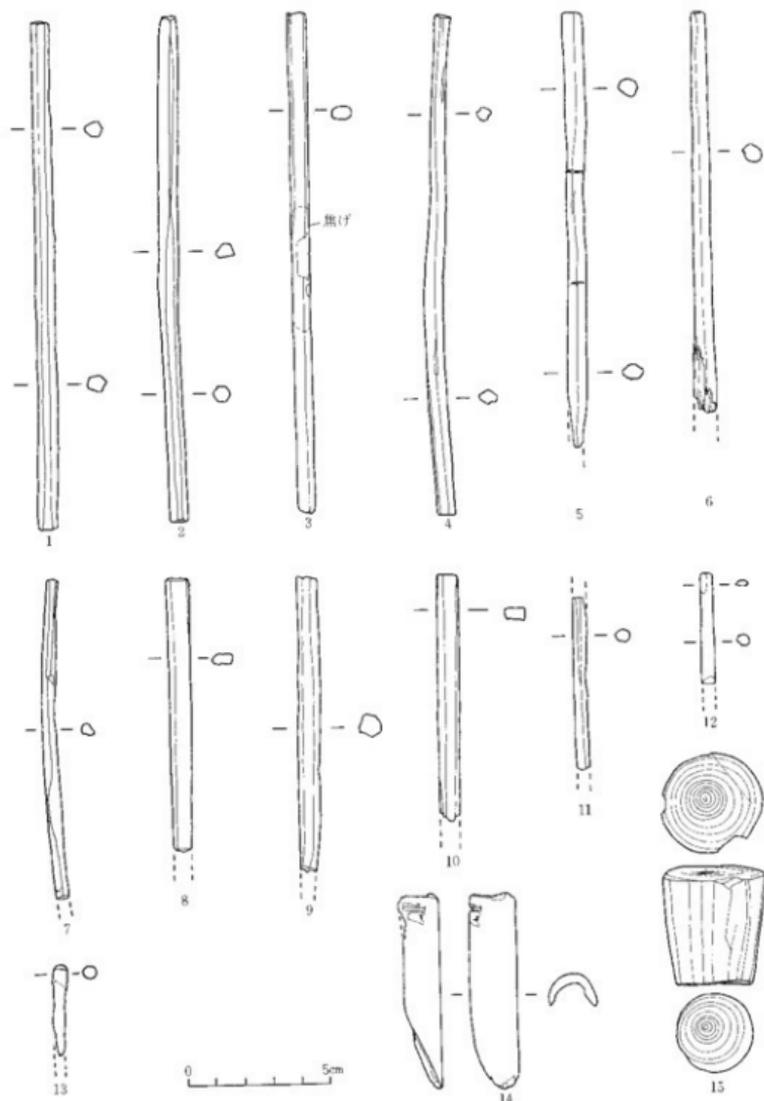


図47 NM2出土の木製品(4)

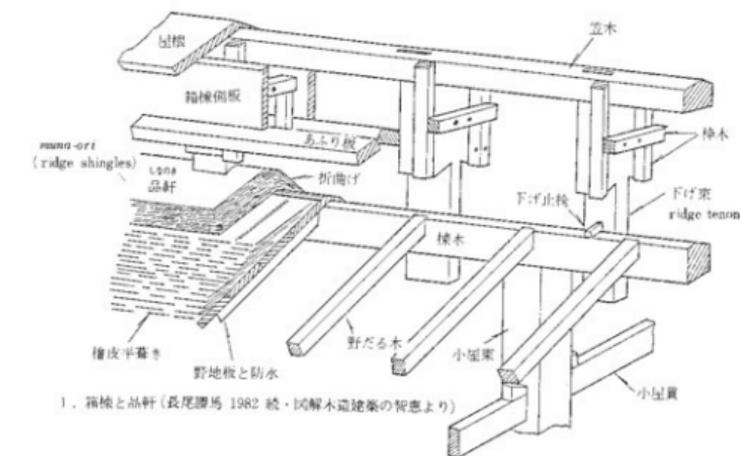
全て石敷遺構出土(13のみピット9)

Fig. 47 Wooden materials from NM2 (4) Mid. of 19c. (before 1882)

1-6, 8, 10 箸 chopsticks 7, 11, 12 箸(小) small chopsticks

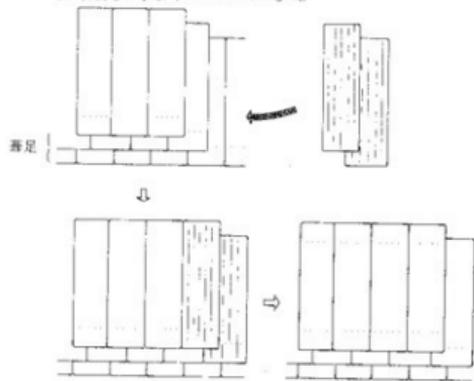
No. 13 after 1882

13 漆箸 chopstick with lacquer 14. 竹製品 bamboo implement 15. 栓 plug

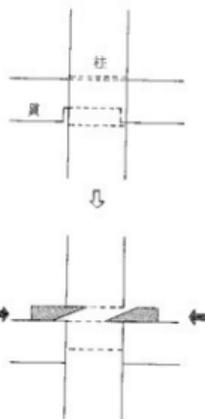


1. 箱棟と品軒 (長尾謙馬 1982 続・図解木造建築の智慧より)

2. 柿置きの手順 process of shingling



3. 合釘



4. くさび wedge

図48 NM2建築材解説図

Fig. 48 Illustrations of building constructions from NM2



173、179参照)。下げ束の上にはさらに外装がなされる。本例は表裏に2個ずつ釘穴が有るので、何らかの外装がなされたと思われるが、頂部に棟の形が作り出され、樋で打ち込んだ痕があるので(加藤吉男氏によれば、柄の部分にも傷があり“かなり無理して突っ込んだ”痕が見える)、図48-1のように笠木を上に乗すのではなく、下げ束の間を横木でつなぐような構造だったと思われる。屋根上に出る部分の高さが低いので小さな建物である。箱棟は柿葺き・檜皮葺きの他、瓦葺きの屋根にも作られるが、本例は小さいこと、また先述した通り二の丸の建物の多くは柿葺きと見られるので、柿葺きの屋根に使われた可能性が高い。佐藤巧教授によれば、二の丸の建物の屋根の細部構造は史料ではあまり明らかでないが、新しい時期に箱棟が登場してくることは考えられるという。本例は杉材で、非常に保存が良く、明治15年の大災で火を受けた痕が全くないのが、やや不自然だが、大災後の礎石抜き痕から出土しているので、やはり文化元年(1804)の二の丸全焼後に再建された建物の部材と考えた方がよいと思われる。

#### E. 楔 (図46-3、図版40-8)

長さから、柱貫に使った楔と思われる(図48-4)。釘穴があるが理由は分からない。クリ等の雑木製と見られる。

建築材から推定されるNM2付近の建物の屋根構造についてまとめると、まず、石敷遺構の廃棄時に近辺で柿葺きの屋根の破損・修理・解体等があったと思われる(複数の建物の可能性も有り)。上部に棟瓦が乗っていたか、木造の箱棟があったのか不明だが、檜皮を棟に積んだ小さな建物もあった。大災で焼失した近辺の建物も3・4層から出土する木羽の断片から柿葺きで、棟瓦、熨斗瓦の出土が多いことから棟を瓦で組んでいたと思われる。また、下げ束の出土からおそらく柿葺きに箱棟を組んだ小さな建物もあった。

#### ② 箸 (図47-1~13、図版42-1~3)

削ったままの白木の箸で、石敷遺構から出土。断面は多角形で部分によって異なり、割箸ではない。完形品4点はいずれも6寸で短い。幅は6~8mmである。また、完形品が無いが、幅4mm程で一端が偏平になるものがある。一応、箸の一種とした(図・表中では「箸(小)」と表記)。塗箸1点(図47-13)は大災後のもの。

#### ③ 竹製品 (図47-14、図版41-11、42-4・6・9)

すべて石敷遺構の出土で、径30~50mm、長さ95~105mmの竹幹が4本、竹幹を裂いて紐状にしたものが1束、一端を斜めに切ったものが1点ある。いずれも性格は不明である。表中「笹莖」としたものは竹または笹の枝葉。

#### ④ その他

表中「板または角材」としたものは、腐食した断片で板材か角材か不明なもの。「漆器碗」は

いずれも断片または復元不能な程に腐食が進んでいる。「桶の柄？」(図45-3、図版41-2)はよく目のつまった柁目板を削って弯曲させている。角が落してあり桶の柄かもしれないが、薄いのではとも言えない。桶職人の佐藤和男氏(仙台市東七番丁 佐藤風呂店)に鑑定して頂いた。「丸棒」(図45-6、45-5、図版41-5・9)は表面を丸く仕上げられた棒状のものを一括。図46-5は筥の一種だろうか。「切片」は切り屑・削り屑と考えられるものである(図46-6、図版41-7・10)。ビット17とビット23の石敷掘り方から檜を含む手斧痕のある切片が出ている。「燃料？」(図版42-5・8)は径30~150mm、多くは40~70mmの樹皮がついたままの炭火した木の幹で、一端ないし両端が切り落とされているものがあるので、燃料の可能性があると考えた。もともと「炭」だったかどうかは分からない。「断片」は全体の形状が不明なもの。

## 6) 金属製品

金属製品は和釘がほとんどである。内訳は表25に示す。東北大学金属材料研究所の志村宗昭助教授、池田圭介助教授、広川吉之助教授に材質について御教示頂いた。鉄は鍛造品、鋼の多くは黄銅と思われるが、まとまった資料が少ないのと、整理日程の都合で分析は行わなかった。和釘の分析は現在進行中である。和釘・鋸については、木製品と共に大沼二郎氏、加藤吉男氏らに御教示を得た。

### ① 和 釘 (図50-1~3、5-8、図版46-1・2)

日本古来の鍛造の釘である。仕上げの際、熱い表面に真綿をこすりつけて錆止めする。このため錆ず、断面四角形なので材が固定後回転しない効用がある。ほとんどは焼土層である3層に含まれるため、平面分布も3層の残存の良いA1・B1・C1区に多い。多くは錆で、表面に焼土がこびりついている。計測可能なものの長さを図52に示す。大形の釘は錆や破損で計測不能なものも多く、資料が不足している。完形のものも多くは先が潰れて丸くなっているのので、使用前の長さは実測値より1~2mm長くなる。すると3cm、4.5cm、6cm、7.5cm、即ち1寸、1寸5分、2寸、2寸5分にやはり集中が見られるが、中間の長さの釘もまんべんなく存在している。長さ以外の属性では特に分類できない。

なお、内部が四角く空洞になった資料が見られるが、これは鍛造の際、表面に耐腐食性のマグネタイト層が形成され、内部のみ腐食したと考えられる。和釘の製作過程の復元例は、西岡他1981に紹介されている。屋根瓦にも四角い釘穴が多く見られ、ビット36からは実際に釘が遺存した例が出土していることから(図版39-3・4)、瓦に使用された釘も含まれているのだろう。また頭の丸い銅釘が2本ある(図50-6、7)。

### ② 洋 釘 (図50-4)

和釘と異なり、断面が円く、機械造りで針金を一定の長さに切断して作られる。2本のみ出土。1・2層は重機で刺がしているので3層の和釘との層位的な出土量の対比はできない。朝

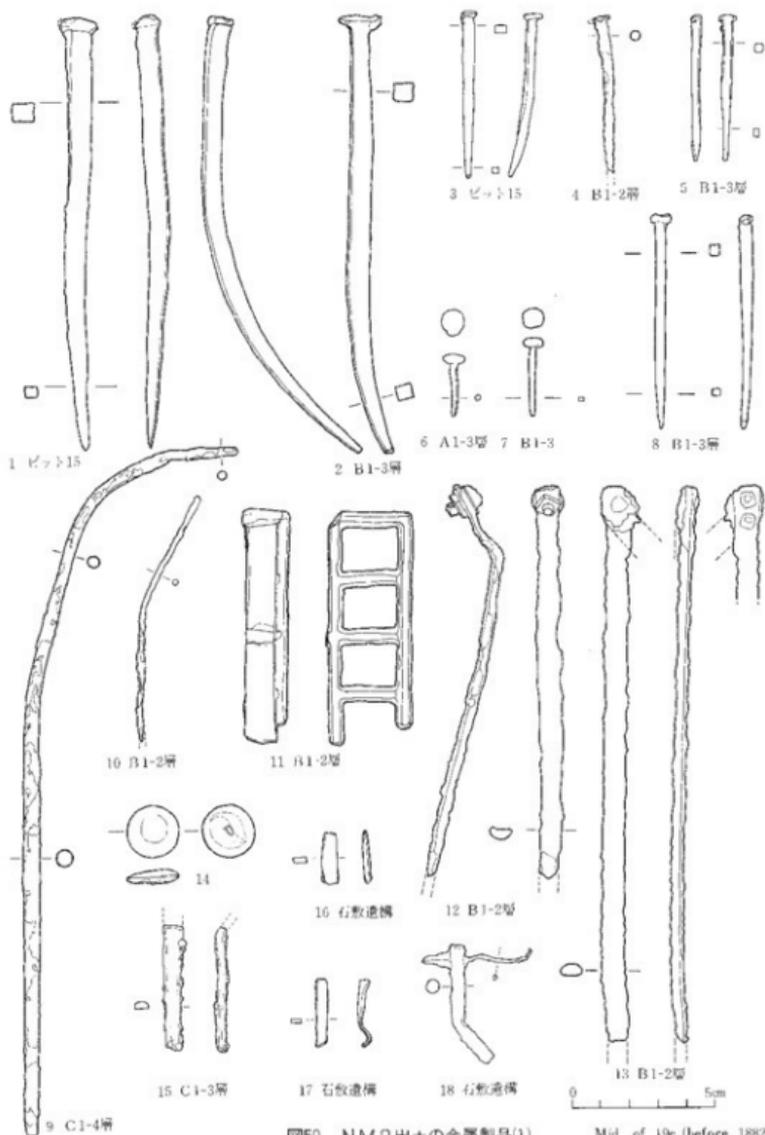


図50 NM2出土の金属製品(1)

Fig. 50 Metal materials from NM2 (1)

Mid. of 19c. (before 1882)

Nos. 4, 10-13 after 1882

- 1-3, 5, 8 和釘 Japanese nails (iron) 4 洋釘 Western-type nails (iron) 6, 7 和釘 Jap. nails (cop.) 9 針金 wire (cop.)  
 10 針金 wire (iron) 11-13 部品 fragments (iron) 14 ボタン button (cop.) 15 きじの柄? spoon? (cop.)  
 16-17 断片 fragments (steel) 18 部品 fragment (cop.)

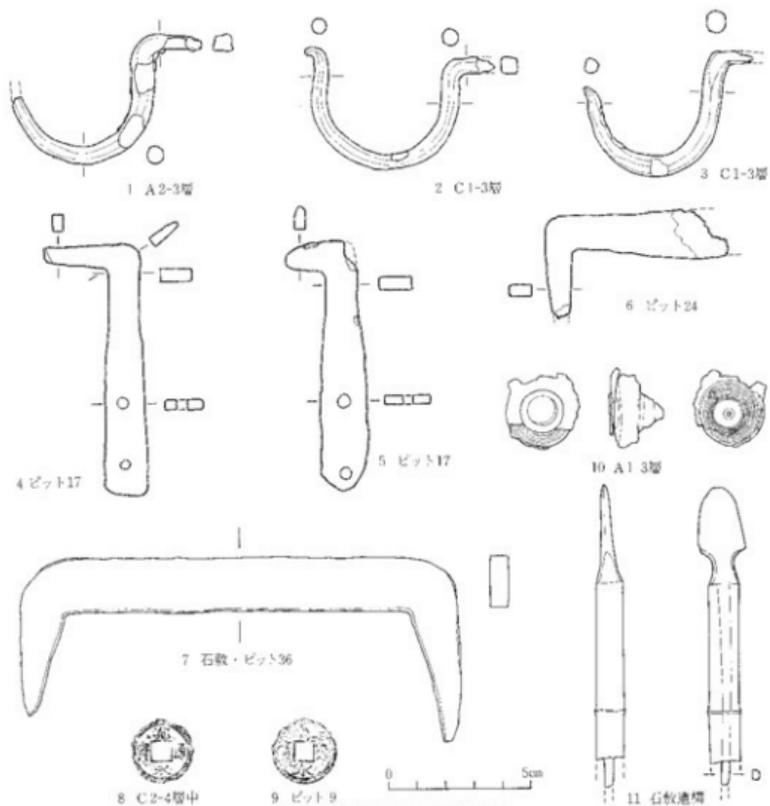


図51 NM2出土の金属製品(2)

Fig. 51 Metal materials from NM2 (2)

Mid. of 19c. (before 1882)

- 1 3 鈎 hooks (iron) 6,7 釘 staples (iron) 10 ぜんまい spring (organic material & cop.)  
 4,5 目釘? staples? (iron) 8,9 寛永通宝 coins (cop.) 11 鉄 箭 頭 (iron & bamboo)

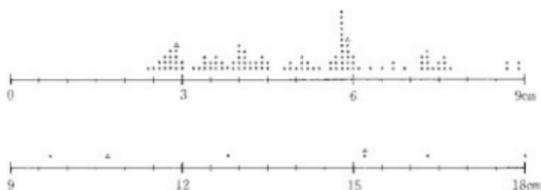


図52 NM2・3出土の釘長さグラフ

Fig. 52 Distribution of length of Japanese nails from NM2 and NM3

● NM2出土  
 ▲ NM3出土

倉他(1970、P176)によれば、洋釘の使用は明治11年に福島県下にみられ、14年富岡工場で多量に使用され、地方の市中に出回るのは27年頃からとされる。

③ 鍍 (図51-6、7、図版46-3)

図51-7は片足が短い。止められた材の大きさが異っていたためであろう。

④ 鍍 (図51-11)

小さな平根で出土時には茎が黒漆塗りの竹の籠に差し込まれていた。伊達家旧蔵の江戸後期“服の矢”中の平根を比較のために図版47-2a・2bに示す。後者には糸による根巻があるが、本例には見られない。仙台市立博物館の嘉藤美代子氏に御教示頂いた。

⑤ ぜんまい? (図51-10、図版46-7)

ぜんまい状のものを銅の鉾に巻き、銅製のケースに止めたものが1点、明治15年の火災時のA1-3層から出土している。ぜんまいそのものは金属ではなく、黒ずんでいることから、有機物と思われる。鉾の先端には小さな穴があいているが目的は不明である。懐中時計のぜんまいにしてはシャフトが伸びてない。

⑥ その他

ボタン2点(図50-14)は表側と裏側を接合して作られ、中空になっている。“鈎”(図51-1~3、図版46-6)としたものは座金を付けて固定していたらしい。また、赤色の顔料のようなものが付着した断片が2点見られるが、素地が鉄であるため、顔料が舌かの判定は難しい。図50-12・13、図版47-3はボルト、ナット、ワッシャーのついた近代の部品である。

7) その他の遺物

ボタン、硯、ガラス、靴底等がある(表25)。動物遺存体については別項参照。

① ボタン (図53-1~8、図版47-5・6)

型押し of ボタンで11点出土。直径10.3~11.5mm(平均10.8)、厚さ2.4~3.5mm(平均3.0)。装飾の刻みがついたものが1点ある。松根努氏(仙台市一番町、まつねボタン)と稲垣服飾株式会社(大阪市)に調査頂いた。白い不透明のガラス製で、メリヤスの肌着またはももひきの前に使われたものと思われる。このタイプのボタンは戦前までは大阪の真田山近辺で作っていたらしい。ガラスのボタンは明治中期には製造されていたが手作り、どの様なボタンを生産していたかは不明とのことである。他の遺物同様、明治15年の火災の前後の層から出土しており、東北鎮台(陸軍第二師団の前身。明治4年または5年に国分町より二の丸跡に移る。明治6年仙台鎮台と改む)関係のものとの可能性がある。

他に貝製と思われるボタンが2点ある(図53-5・6)。

② 土玉(土製品)

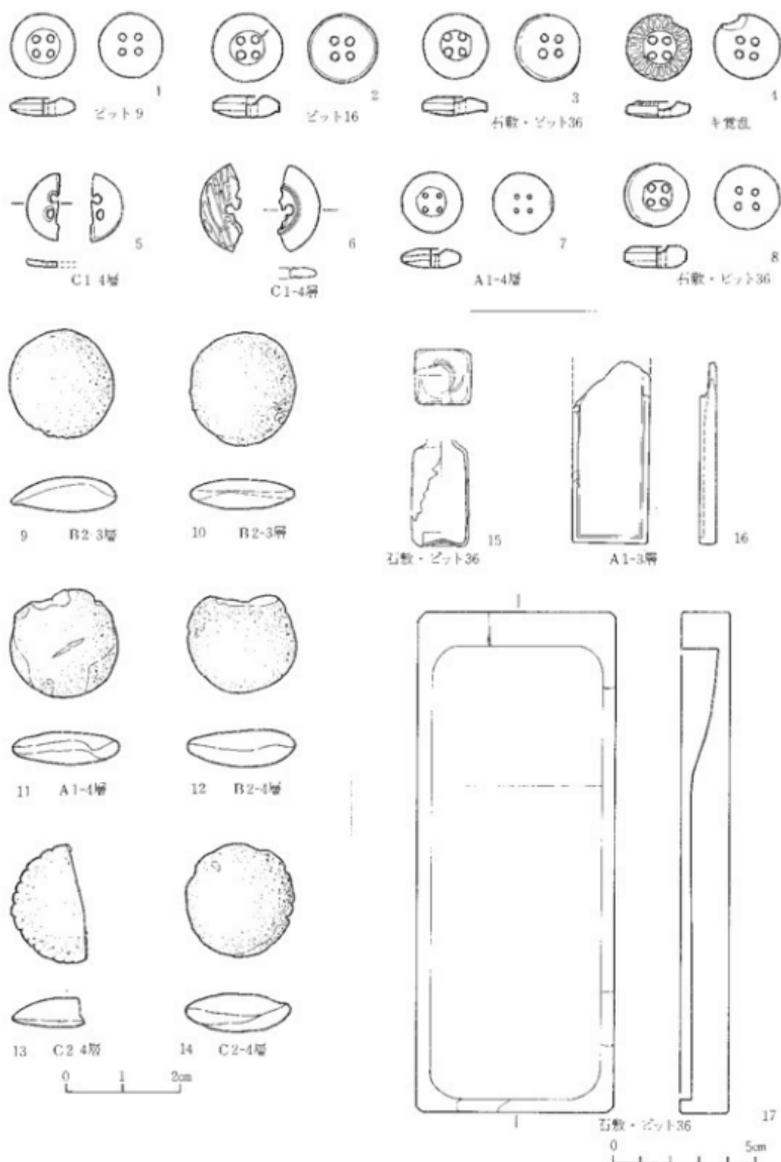


図53 NM2出土のその他の遺物

Fig. 53 Various artifacts from NM2

1-8:ドタン buttons (1-4:7,8 glass 5,6 shell) 15 ガラス小瓶 glass phial

9-14土玉 marbles ? (red earthenware)

16,17 硯 inkstones

Mid. of 19c. (before 1882)



粘土を指で押えておはじきのような形に作っている。何に使われたものか分からない。周縁に刻みのついたものが1点ある(図53-9~14、図版48-4)。

### ③ ガラス容器

ガラスの小瓶が1点(図53-15、図版48-2)と、瓶と思われる透明ガラス及び黒い色ガラスの破片がある。朝倉他(1981)によれば、日本の近代ガラス業は明治9年工部省の品川硝子製作所設立以後である。

### ④ 板ガラス・熔融板ガラス(図版48-5・6)

熔融し塊状になった板ガラスが多数見つかっている。これについては別項(第Ⅲ章)に詳しく熔融してない板ガラスは種類が違うようである。出土状況から見て明治15年の火災で焼けた仙台鎮台の建物にはガラスが使われていたらしい。明治5年頃撮影の大阪鎮台の士官たちの背後にはガラスが映っている(朝日新聞社編1985、P.24)。

### ⑤ 靴底(図54、図版49-1)

火災後の柱の抜き穴から出土している。吉出行雄氏(仙台市一番町、ロダン・シューズ)に鑑定して頂いた。鉄を多数打ち込んだ痕があることから、軍靴の短靴である。仙台市歴史民俗資料館蔵の軍靴(年代は不明)を参考品として図版49に示す。軍靴には長靴と短靴があり、短靴は鉄が打たれ、最下級の兵士のものである。形は明治から第二次大戦までほとんど変わらなかった。本例は牛皮製で焼けて縮んでいる。明治に軍靴の修理をされた方々の気遣いでは、当時仙台には靴を縫う機械が無かったこと、縫い目が一列であることから手縫いと思われる(機械では普通二列に縫う。手縫いの方が丈夫な為と思われる)。踵は踵の芯や表皮が重なり厚くなるので、普通は縫わずに積上げを重ねてベースと呼ばれる木の釘で止める。内側に突き出たベースの先はベース削りという鉄のヤスリで削る。鉄の釘を使わないのは汗でさびやすいためである。積上げの上に化粧皮と化粧一短靴の場合は馬蹄形等の金具一が付けられる。本例も踵の中央に積上げの痕跡とそれを止めた二つのベース穴がある。その後方に散在する三つの穴はなんのためかよくわからない。ふまつ芯(土踏まずに入れる芯)でも止めたのであろうか。踵の縁には粗い縫い目に平行して、この部分を止めたベース痕がある。歴史民俗資料館の例は踵にすべて頭の無い鉄の釘が使われており、靴の前半分には半貼と呼ばれる皮が貼られている。

朝倉他(1981)によれば、明治2年の海外視察後、外相陸奥宗光が皮革が軍事上重要であることを痛感し、明治3年御用商人西村勝三が東京の築地入舟町に伊勢勝製靴工場を設立したのが西洋靴製造のはじめとされる。(山田しょう)

## 8) 瓦

出土量は破片数にして602点あるが、小片が多く図示できるものは多くない。時期別に見ると明治15年の火災前(5~6層)がもっとも多く、火災時とその直後(3・4層)がそれに次ぐ。火災

前では A1・A2区に出土数が集中しており、平瓦が多い。火災時とその直後では B1区・C1区及び B1区のピット15に出土数が集中しており、棟瓦・製斗瓦の出土が多い。表25に遺構変遷の時期ごとに破片出土数を示す。平瓦1点、棟瓦1点、製斗瓦3点、種類不明1点、棧瓦片1点の計7点について図示した(図55、56)。

① 平瓦 (図55-1、図版38-1)

各時期の各層・遺構から出土しているが、完形のものはなく、縦横の寸法のわかるものも図に示した1点のみである。調整技法の時的な変化はない。すなわち凸面は粗いヘラケズリ、粗いヨコナデでザラザラに仕上げ、凹面はヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキで平滑に仕上げている。図55-1は凸面は粗いヨコナデ、凹面はヘラナデで仕上げている。火災前Ⅱ期に属する。

② 棟瓦 (図55-2、図版38-5)

棟瓦とは各種の棟の最上段におく瓦の総称である。破片ばかりで完形品はなく、縦横の寸法のわかるものもない。図55-2は角棧をもつものである。この瓦も含め、火災時の瓦には焼けを受けて変色したものが多い。調整は凸はヨコナデ・ヘラナデにより平滑に仕上げられ、凹面は棧の部分にヨコナデにより平滑に仕上げられ、その他の部分は粗いヘラケズリによりザラザラに仕上げられている。表25には棟瓦の項目があるが、この中には棟積みに用いる製斗瓦片が含まれている可能性がある。すなわち前者は棟にのせられるという点では同じで、棧がついている点を除けば調整等には差がないため、小破片では両者を区別することは難しいからである。

③ 製斗瓦 (図56-1~3、図版38-2・3、39)

②の棟瓦と異なり、両面ともヘラナデにより平滑に仕上げられ反りのないものをとくに②と区別して製斗瓦と呼んでおく。図56-1は2隅に釘穴がある。図56-3は不明文字と盃の絵が線刻されている。図56-2は辺に指目が切れ、側面に「カ」の印が押されている。水切

時期	出土層	区画	棟瓦	製斗瓦	平瓦	棧瓦	不明	計
火災前Ⅰ	ピット15埋土	28	9	10	43	50	0	112
	1号溝	2			3	4		7
	本瓦葺1号	21	11	10	66	87		174
火災前Ⅱ	A2区	4			18	22		40
	B1区	29			53	53		106
	B2区				1	1		2
	C1区				1	1		2
	ピット15埋土	3	1		3	7		11
	ピット4	4	1		5	12		18
	ピット5	3			8	9		20
	ピット6	4			12	27		43
	ピット7	13	1		1	1		16
	ピット8	1			1	1		2
	ピット9	10	2	7	12	11		32
火災時	本瓦葺2号	25	5	7	152	205		374
特殊	出土層		区画	棟瓦	製斗瓦	平瓦	計	
遺構変遷	ピット15埋土	1			2	6	9	17
	ピット25埋土				1	1	2	3
	火災時・遺構	24	20	28	28	32	112	222
火災後	ピット15	15			2	3		20
	ピット16	2			2	2		6
	ピット17	2			2	2		6
	ピット18				1	1		2
	ピット19				2	2		4

表26 NM2出土の瓦の分布  
Table 26 Distribution of ceramic roof tiles at NM2

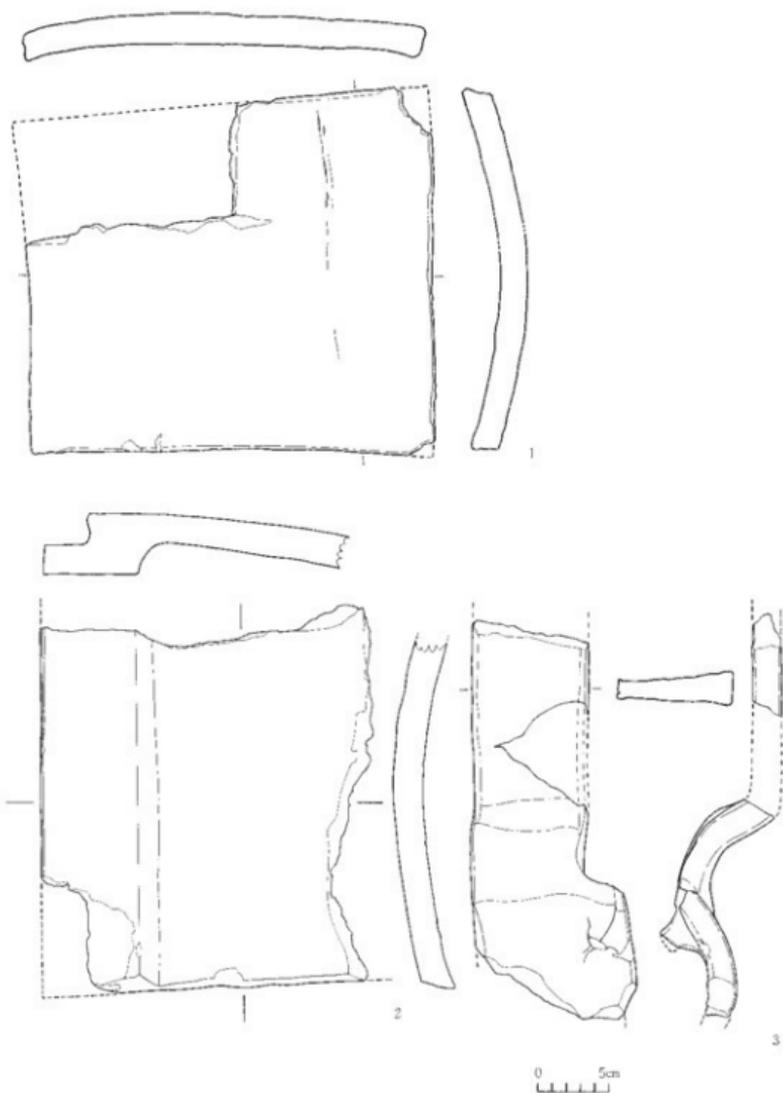


図55 NM2出土の瓦(1)

Fig. 55 Ceramic roof tiles from NM2 (1)

19c. (before 1882)

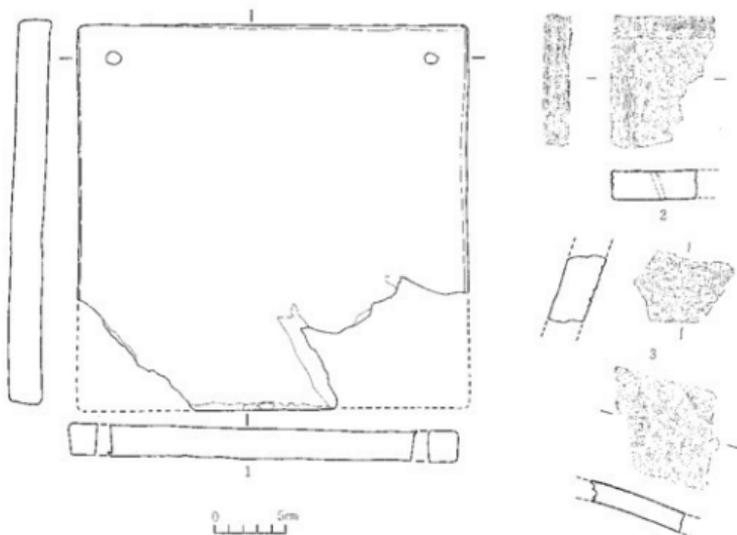


図56 NM2出土の瓦(2)  
Fig.56 Ceramic roof tiles from NM2 (2)

19c. (before 1882)  
No.4 more recent

時期	図	出土地点	種類	法量 (単位cm)			色		加土	模文	備考	図番
				長さ	幅	厚	裏面	表裏				
大正期2	55-1	A1-5層上	平瓦	280	255	18	赤褐色	黒褐色	+	+	+	38-1
大正期	55-3	B1-2層上	棟瓦	2250	220	22	赤褐色	黒褐色	+	+	+	38-2
+	56-1	3層	板瓦	271	272	23	赤褐色	黒褐色	+	+	+	38-3
+	56-2	B1-3層	+	+	+	+	赤褐色	黒褐色	+	+	+	38-4
+	55-2	A1-4層	+	+	+	+	赤褐色	黒褐色	+	+	+	38-5
大正期	56-4	3層オランダ	棧瓦	2270	110,80	11-23	赤褐色	黒褐色	+	+	+	38-6

NM2 瓦の属性表

りの溝や葺土の痕が見られるものもある(図版39)。棟瓦と異なる特徴をもつことから本当に契斗瓦として用いられたものか若干疑問がある。海鼠髷に貼ったものとも考えることもできる。しかし焼失時とその直後の瓦の破片の出土状況を見ると、この種の瓦と棟瓦の出土状況は非常に類似しており、棟積みに用いた契斗瓦と考えるのが妥当であろう。

④ 種類不明の瓦 (図55-3、図版38-4)

表面はヘラナデで平滑に仕上げられている。

⑤ 棧瓦 (図56-4)

1層(盛土)中から出土したものである。「宮」の型によるレリーフがある。ごく新しい時期のものと考えられる。NM3にも同様のものが出土している(図70)。

まとめ

時期別の破片の出土数を見ると、明治15年の火災以前と火災時のものとの間には若干違いの

あることがわかる。すなわち、火災以前は平瓦が中心であり、丸瓦も若干出土している。これに対し火災時では棟瓦・熨斗瓦中心であり、丸瓦がまったく出土していない。このことは建物の違いによる可能性もある。木製品の出土状況などと考え併せれば、明治15年に焼け落ちた建物は木羽葺の上に瓦の棟を組んだものであり、火災以前には本瓦葺きの建物が近くにあったと推定できよう。(前沢聡史)

#### 9) 墨書陶器

##### ① 右 翹 (図33-6、図版32-7)

##### 三分隊

(百?) 八名

##### A. 時期

石敷遺構の埋土中から発見された。土瓶の蓋の裏に書かれていたものである。

- 石敷遺構は、本来の機能終了後、ごみ捨て場として使われ、満杯になった時点で、粘土で覆われ、その後に明治15年の火災を受けている。したがって、この中から出土した土瓶は、これ以前のものと考えられる。
- 遺構が浅く長期間のごみ捨て場としては使用できない。
- 遺物中に、器形・文様・産地の同一のものが、複数存在しており、使用—廃棄に至る過程が短かったと推測される。
- この蓋は、相馬大畑焼の土瓶に伴うもので幕末から明治初期の時期と推定される。
- 共伴した遺物中、鯉肌こゝろの土瓶は、明治7年以降に製作が開始されたと考えられている

(高橋、1977)

以上から、土瓶の蓋に墨書が書かれた年代は、幕末から明治初期の間と推定される。

##### B. 釈文

右翹三分隊 (百か?) 八名

翹は翼であろう(注1)。内容は、軍の編成に関するものであるという仮定に基づいて考察を加えたい。

##### C. 考察

軍事編制に関するものとする、幕末の仙台藩と、明治初年の明治政府の兵制が問題となってくる。

仙台藩の兵制については、まとまった記述は見られず、各記録に散見するだけである(注1)。仙台藩においては、文久3年(1863年)と慶応3年(1867年)に、兵制改革を行っている。その結果、戊辰戦争時の兵制における呼称は、大隊・小隊などとなっていた。『仙台叢書』第12巻『戊辰始末』には、小隊・大隊の記事が甚だ多出する。例えば133頁には「仙臺第三小隊・隊長

……」中軍 二小隊 從軍 三小隊」等の記載がある。しかし具体的な一小隊の数の内訳や分隊の呼称は見られない。一小隊の内訳について、より詳しく記載のあるものとしては、渋川助太夫の日新録(大郷町史料集第一巻)があげられる。その中の記載をまとめると、小隊二隊、大番組64人(したがって一小隊は32人)大番組の与頭老人、中隊長、小隊指揮役老人、半隊指揮役二人、左右番頭四人、鼓手役四人となっている。分隊についての記載はここには見られない(日新録P.84)。

明治政府初期の兵制については、松下芳男の『明治軍政史論』に詳しい。明治3年(1870年)に、東北鎮台が仙台に置かれ、その常備兵は、旧藩の常備兵をこれにあてている。また、同年城郭、武器の管理が兵部省の管轄下におかれることになった。また、同年11月には、鎮台常備兵の軍令が、藩知事から直接天皇に移されている。明治7年には、徴兵制がしかれたが、仙台鎮台では、歩兵二大隊、砲工兵各一中隊の欠員がある。明治8年(1875年)以降の陸軍の階級機構には、分隊という呼称は見られない。

一般的に、明治以降の兵制の中に、右翼(右翼)などの名称は存在せず、また分隊の呼称も公式的な兵制の中にはない(注2)。ただし、松下の記載の中に、明治3年(1871年)の常備編隊規則の中の砲兵隊の編制に「砲2門を偲て1分隊とす。3分隊をもって1隊とす。別に砲6門」とある(松下P1978、P.62)。

#### D. 結 論

以上の事実から考察すると、右翼、分隊という名称が、いつの時代の兵制に基づくものなのか、確実には立証できない。しかし、上述のように明治政府の下における近代的な兵制の中に砲兵隊とはいえ分隊の名称が出現することは重要な事実である。また前述の事実や、二の丸の中心部である小広間裏がごみ捨て場として使われていたということ、陶磁器に粗末なものが多いなどという状況をふまえると、鎮台兵の使用した物品という可能性が高くなる。

#### ② 月 日

蚊遣?(図40-3)の内面に書かれているので、蚊遣が機能を失い破片となった後に、字が書かれたと判断される。「月日」の字は3~4文字書かれており、同一の筆跡であるので、同一人物が書いたと判断される(注3)。

#### ③ 主 立

「月日」と同じ蚊遣の内面に書かれているが、筆使いは「月日」と異なる。なお、「主立」とは「重要な人物……」の意であり、「月日」とは連続して意味をなすものでもない。

#### ④ 勝 (?)

土瓶(図33-7、図版32-8)の蓋の内面に書かれており、「勝」とも読めようか。(梶原、佐川)

注1. 仙台藩の兵制については東北学院大学難波信雄助教授に御教示いただいた。

注2. 東北大学文学部国史学研究室青山忠正助手の御教示による。

注3. 墨書陶器の検討に当たっては、東北歴史資料館千葉景一氏に御教示を賜った。

## 4. 二の丸第3次発掘調査 (NM3)

### (1) 調査方法と経過 (図10)

NM2が保存されることとなったため、新たに5×10mの発掘区を設定した。極力遺構の破壊を防ぐため、まず1から11までの1×1mの試掘坑を設けた。二の丸遺構の存在の証拠となる焼土層が確認された地点を避けた結果、発掘区南方の文系厚生施設建物南西部が選ばれた。南北5m、東西10mの範囲で、バックホーにより表土盛土層を除去した際、南端部で石垣と考えられる行列が発見された。そのためその部分を避けて、さらに発掘区を北側に1m拡張し、6×10mの大ききで調査を進めることとした。グリッドは、東から3・4・5・6、南からP・O・Mに区分した(図10)。グリッドの東北部は、米軍関係と考えられているコンクリート製の土台によって攪乱を受けている。

### (2) 層 序 (図57)

1～7層はいずれも極めて新しい盛土で、層を切ってコンクリートの構築物が存在する事から、米軍もしくは旧日本軍による盛土と考えられる。

8～12層は、グライ化した層で、金属片・ガラス・刻印の入った瓦片等を含む。従って二の丸焼失後の整地層であり、この層より下層が、江戸時代に層すると判断される。13層以下は、自然堆積による地山と考えられ、江戸期の遺構は全てこの面で確認されている。この地点では、NM2で確認された江戸期の盛土層(5層・6層・7層)は確認されず、遺構の前後関係を層位的に理解することはできなかった。

### (3) 遺 構

はじめに

第3次調査の遺構は主に3層より検出され、①柱穴痕を持つピット、②池に関する遺構群、③石垣、④柱穴痕を持たないピットと溝、⑤その他の遺構に分類することができる。それぞれの切り合いによって前後関係を決定することができるものもあるが、ほとんどの遺構が13層で確認されているため、層位的には明らかな時期差を見出すことはできない(図59・60)。切りあい関係については表27に示した。

#### 1) 柱穴痕を持つピット

(図58・59・61)

掘立柱建物1に属するものとそれ以外に分けることができる。発掘区北西部の

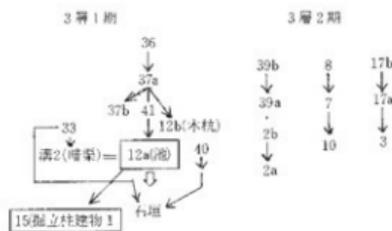


表27 NM3遺構新旧関係  
Table 27 Feature changes at NM3 listed chronologically

	11/29	11/30	12/1	12/2	12/3	12/5	12/6	12/7	12/8	12/9	12/10	12/12	12/13	12/14	12/15	12/16	12/19
調査内容 土壌調査	調査 土壌	調査 土壌						調査 土壌									
調査内容 土壌調査																	
調査内容 土壌調査																	
調査内容 土壌調査																	
調査内容 土壌調査																	
調査内容 土壌調査																	

NM3 調査区

12/20	12/21	12/22	12/23	12/24	12/26	12/27	12/28	12/29	12/30	12/31	04 1/7	1/9	1/26	1/27	1/28

表28 NM3 調査経過

Table 28 A work record of daily excavations at NM3

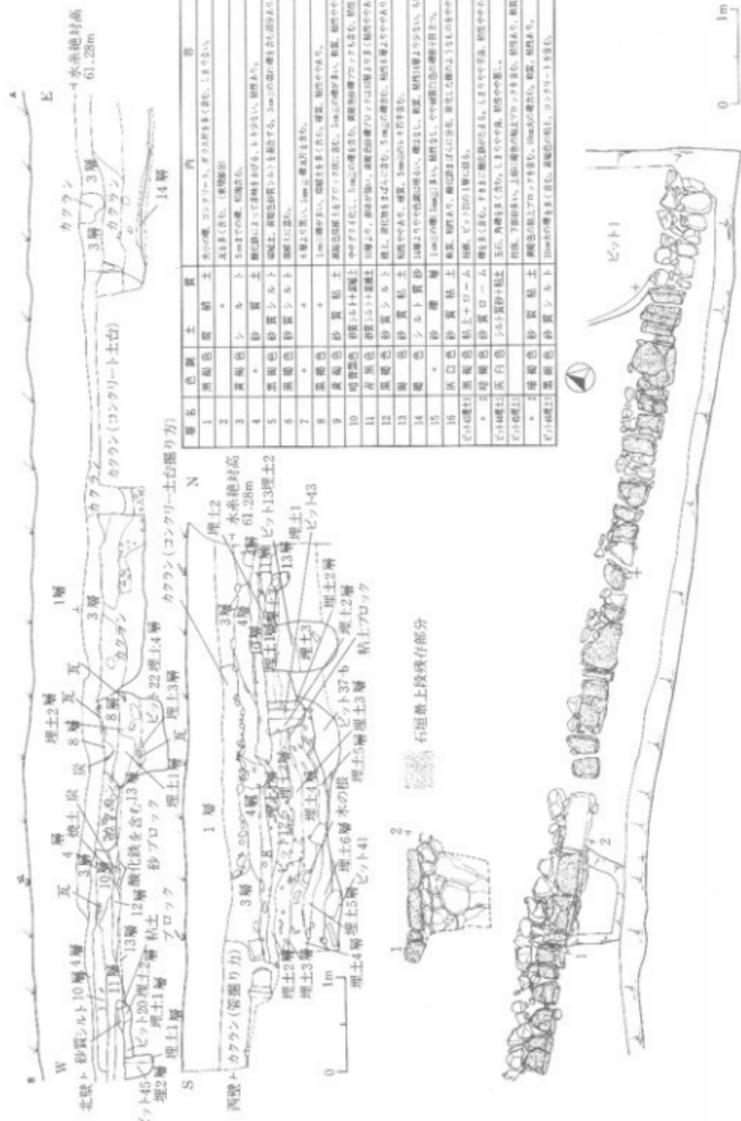


図57 NM3発掘区土層断面図・石垣断面図及び断面図  
 Fig. 57 Cross sections of excavation and a stonewall at NM3

ビット14・15・16・18・19・21・43・45は柱の掘り方の径が約30cm、柱穴痕の径が約12cm、深さが約20~27cm、柱間が東西方向で0.9m(約3尺)、南北方向で1.91m(約6尺3寸の間)の掘立柱建物跡と考えられる(図58)。ただし43・45は西壁セクションで確認され、その位置と特徴からこの掘立柱建物1に属するものと考えられる。建物の長軸方向は後述の石垣に平行する(図59-2)。また12(池跡)と15の切り合いからこの建物が2より新しいことがわかる。さらに21の柱穴痕からは化粧版と思われる破片が出土しているが、それだけでは必ずしもこの掘立柱建物の構築された年代を示すとは限らない。従って二の丸に伴う遺構の可能性も否定できない。

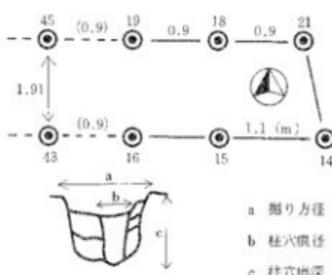


図58 NM3 掘立柱建物1柱配置圖と柱穴計測部位  
Fig.58 Points of measurements and post span of construction at NM3

掘立柱建物1の柱穴				その他柱穴痕を持つ柱穴			
ビットNo.	掘り方径	柱穴痕径	柱穴痕深	ビットNo.	掘り方径	柱穴痕径	柱穴痕深
45	26	12	22	29	54	14	20
19	30	12	25	35	50	14	22
18	29	11	28	21	52	14	30
21	32	12	19	平均	54	15	26
43	30	13	27				
16	32	11	28				
平均	29.8	11.8	23.1				

表29 NM3 柱穴計測表  
Table 29 Size of post holes

ただし、ビット43、45は断面図上にかかっているのみなので、計測していない。(単位はcm)

この他、掘立柱建物としては組まないが、柱穴痕を持つビットとして24・25・26・28がある。柱の掘り方の径が50~60cm、柱穴痕の径が14~18cm、深さが20~32cmと大ききからみて先の掘立柱建物1の柱穴とは明らかに異なる(表29)。29は打ち込まれた杭の跡である(図59-2)。

## 2) 池に関する遺構群 (図60・63)

ビット12は石垣が構築される以前にあった人工的な池と考えられる。埋土は埋め戻した層と底部のグライ化した層に分けられ、切り石や瓦の破片が含まれていた。瓦の中には平瓦や丸瓦に混じて瓦頭に三ツ巴紋を持つ軒丸瓦が出土している。池の底部はさらに掘り込まれ、段状の構造を持つ。池底付近では、杭跡(ビット12b)を囲むように、上面がほぼ水平に置かれた切石、平たい丸石が発見された(図60・63)。また池に続く溝2にはこぶし大の丸石が詰められ、底部は水平を保っており、暗渠と推定される(図63)。発掘の所見では溝2とビット12との切り合いは見られず連続した遺構と考えられる。28は柱穴痕を持つビットであるが、溝2に切られている。

## 3) 石垣 (図57・59・60・64)

石垣は発掘区の南寄りに北西部の掘立柱建物1の東西軸と平行に一列発見された。石垣最上段の天端石には切り石を使い、二段目には大ききのそろった丸石を積む。三段目から下は合端

(面取りをして作り出した前後左右の石との接点)をとつた丸石を裏込め石(友銅石、栗石)と共に積んだ打ち込みはぎの石垣である。この石垣は天端石の頭が13層上面で検出された。天端石の上端から最下端までの高さは90cmと低く、試掘坑の所見では下端に続き、南側に玉石が敷かれていることが確認された(図57)。

ひとことで石垣といってもその規模、使われる位置によって性格は様々である。たとえば城壁、天守台の土台といったものは大規模な土木工事が行なわれ、高く美しい石垣が営まれるであろうし、曲輪内の仕切りや土留、塀、庭の意匠などに使われれば規模ははるかに小さくなる。今回出土した石垣は、南側を未調査のまま残したとはいえ、その高さや石の大きさからいって大規模な建築物を伴うものではない。したがって二の丸内という位置関係からむしろ土留、あるいは垣根か塀の土台といった類のものと思われる。

前後関係ではピット1・12・33はすべて石垣に切られているので、石垣はこれらより新しいものといえる。

#### 4) 柱穴痕を持たないピットと溝(図60~64)。

柱穴痕を持たないピットの切り合いは、39b→39a、8→7→10、17b→17a→3、2b→2a(いずれも旧→新)である。また単独のものでは、24・27・32・38、溝1が検出された。このうち溝1は13層で検出されたものの、焼けた壁が溝に落ちた状態で発見され、溝の底部も焼けており、明治15年の二の丸焼失時のものと思われる。焼けた鬼瓦の破片や大塚の土甎の破片もここから出土した。また3も13層で検出され、瓦が出土している。11は不整形なピットであり、性格は不明である。

#### 5) その他(図60)

掘り方などは確認できなかったが、8~12層で0~5・6区にグライ化した粘土の層があり、中から大量の礫・瓦が出土している。この遺構は層と遺物からみて二の丸以降のものと考えられる。

#### 6) まとめ

今回調査した地点は二の丸南端部と推定される。

検出された遺構群に層位的な前後関係は見出せなかったが、大まかには池に関する遺構群がもっとも古く、二の丸構築以前の遺構と考えられよう。二の丸の地は、もと伊達政宗の四男宗泰の屋敷があった場所であり、のち二の丸を造営したことがわかっている。従ってその時代まで遡る可能性がある。石垣と溝1は池を埋戻した後の遺構で、二の丸焼失時に存在したことが確かである。また掘立柱建物1は、柱穴痕出土の遺物は新しいものの二の丸に伴う遺構である

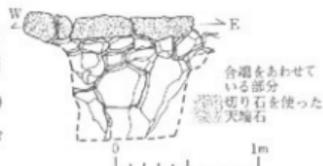


図59 打込はぎ石垣実測図  
Fig. 59 Side view of stonewall

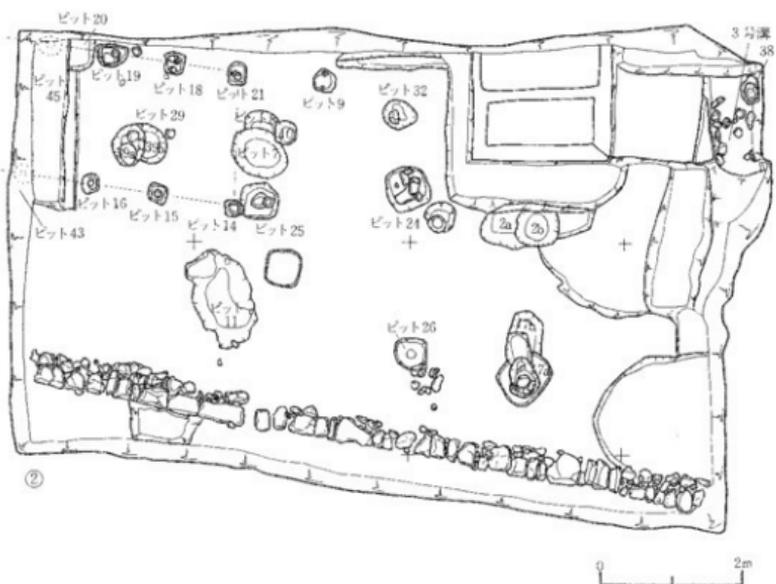
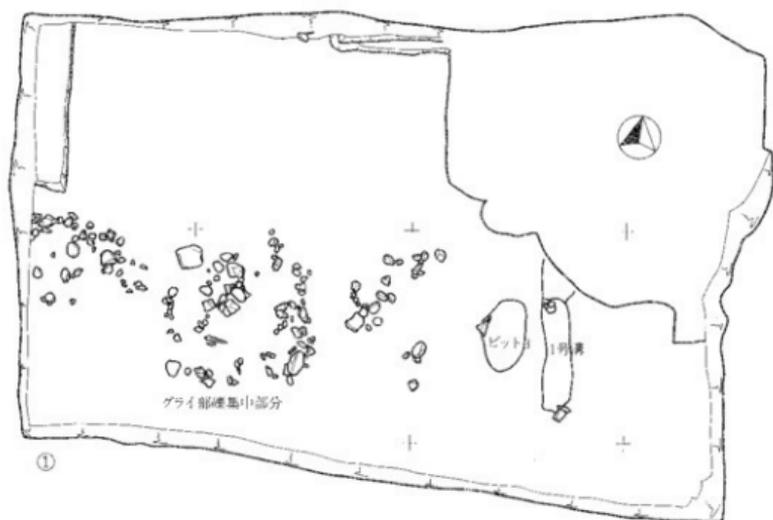


図60 NM3遺構変遷図(1)  
Fig. 60 Historical transition of features at NM3 (1)

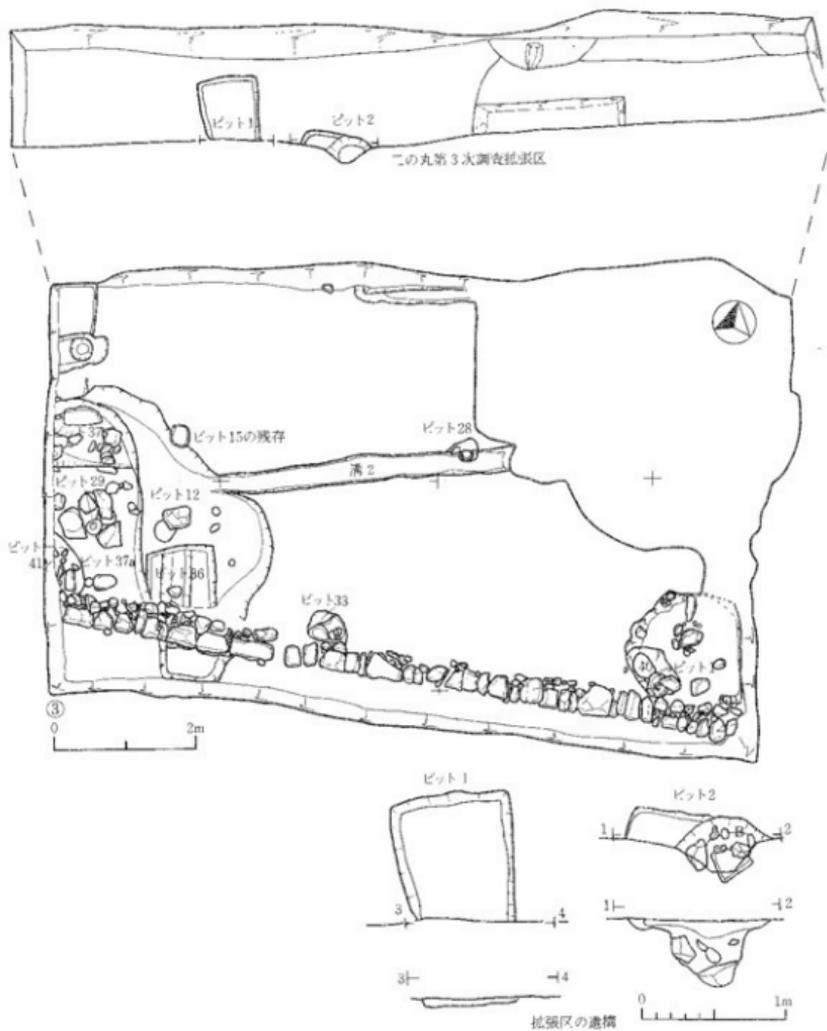


図61 NM3遺構変遷図(2)  
Fig.61 Historical transition of features at NM3(2)

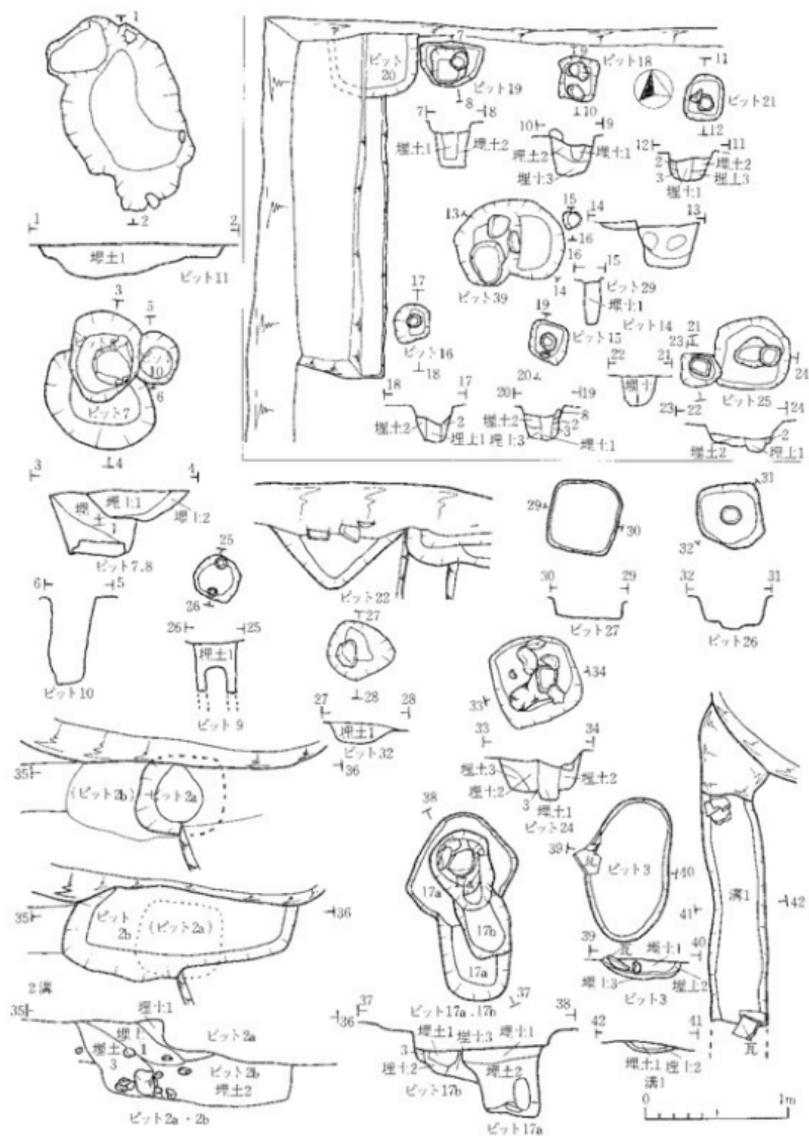


図62 NM3各遺構平面図及び断面図(1)

Fig.62 Plans and cross sections of pits and ditches at NM3 (1)



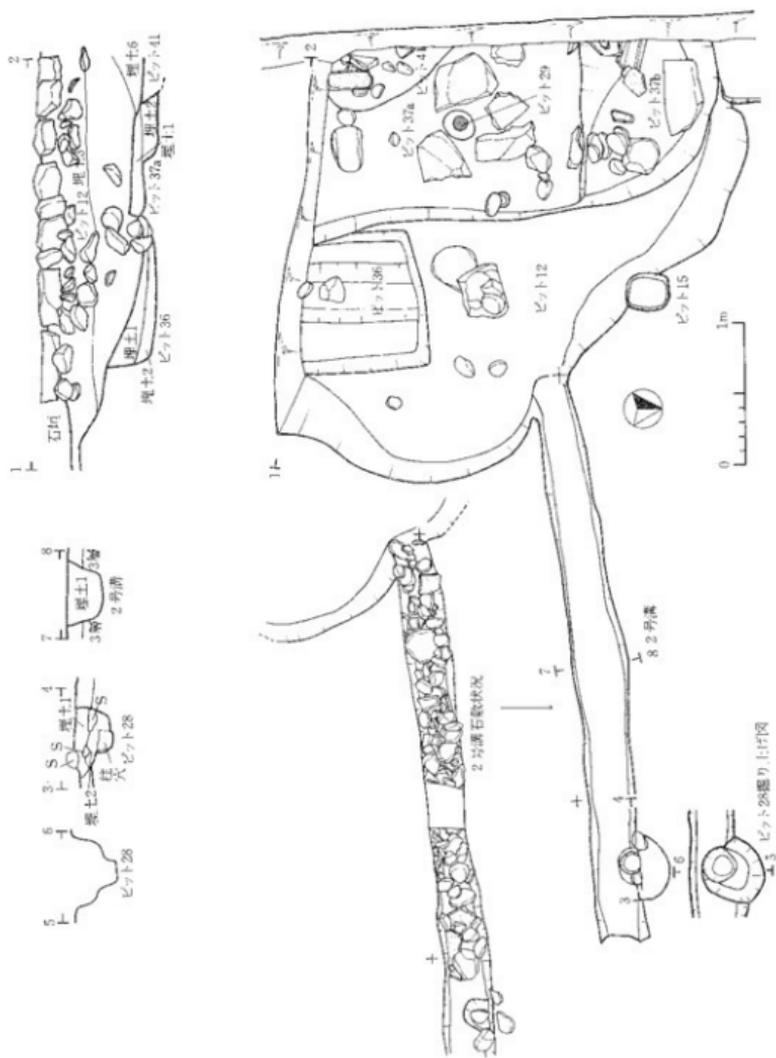


図64 NM3各遺構平面図及び断面図(3)  
 Fig. 64 Plans and cross sections of pits and ditches at NM3 (3)

可能性も否定できない。

#### (4) NM3の遺物

##### 1) 陶磁器 (図65・66、図版51)

NM2に比べて出土量はるかに少なく、ほとんど細片で、出土状況も散漫である(表30)。したがって全体の傾向を概述するにとどめる。1～5層及び第2次大戦後の擾乱出土のものは、一部を除き分析対象から外した。8～12層には確実に近代窯業の製品が含まれる。遺構出土のものはピット21の柱痕から出た化粧瓶(図65-6)以外、明確に近代と言えるものはない。全体にNM3では遺物・遺構ともに明確な年代決定の資料を欠いている。ピット12の最上部埋土がやや出土量が多く、その上を覆うN6-8～12層及び06-8層、1号、2号溝と接合関係を持つ。またピット18とN6-8～12層も接合関係を持ち、8～12層とこれらの遺構の埋設時期がごく近いことを示している。陶磁器は全体にNM2と共通していることから、江戸末期から明治初期の近世最終期の製品と考えてよいだろう。

##### ① 茶 碗

磁器製茶碗はNM2のI<sub>1</sub>-BやI<sub>1</sub>-M、また図65-20等、平清水焼と推定される破片が多い。また、仙台城も含めて仙台附近の近世遺跡から多数出土する相馬産と推される陶器茶碗(図65-1、3-5)がピット12の最上部埋土から出ている。NM2ではまったく見られないこの種の茶碗は、磁器製のものより一段ランクが低いのではないだろうか。図65-10は旧陸軍の磁器茶碗で、17・18も確証はないが、同時期のものと推される。

##### ② 皿

磁器はNM2のI<sub>2</sub>、II<sub>1</sub>、III類(図66-1)、陶器はI<sub>1</sub>類(図65-21)等が見られる。

##### ③ 土 瓶

細片で器形は不明だが、山水文・青釉・灰釉のものがある。

##### ④ 土師質土器・瓦質土器

皿(図65-8・9)、鉢類(図65-15・16)、焙烙がある。胎土は金雲母を含む図65-15以外は概ねNM2のものと共通しており、坩堝の可能性もある。瓦質は1点のみ。

##### ⑤ その他の陶磁器

湯呑? (図66-2・3) 徳利? (図65-7)、貧乏徳利、染付の磁器朱肉入れ(図66-5、内面に朱肉の残滓が残っている)、近代の型造りの化粧瓶(図65-6)等がある。

##### 2) その他の遺物 (図67、図版54、表32)

ごく少量である。熔融ガラスもNM2よりはるかに少ない。図67-7は池底に打込まれた杭。

○1～7層 標品・出土区不明のものは漏計してない。  
○標に数字の無い限り時期は古世。  
○数は破片数。

○分類タイプはNM2による。

○数は破片数。

都	標		茶		鏡		鉄		銅		土		石		その他		近代製品		
	1	2	1	他	大	小	大	小	大	小	大	小	大	小	大	小	大	小	
出土地点																			
ビュート	1																		
*	2																		
*	3																		
*	6																		
*	11																		
*	12上茶																		
*	18																		
*	20 鉄道																		
*	21 柱礎																		
*	22																		
*	23																		
*	26																		
*	34																		
*	35																		
*	石橋の力																		
1	号																		
2	号																		
石橋	式																		
アライ	部																		
N 3-8	部																		
O 6	部																		
N 6-8	部																		
N 5	部																		
O 5	部																		
O 4.5	部																		
地区不明	8-12層																		
N 6-13-16層																			

表30 NM3出土の陶磁器の分布  
Table 30 Distribution of ceramics at NM3

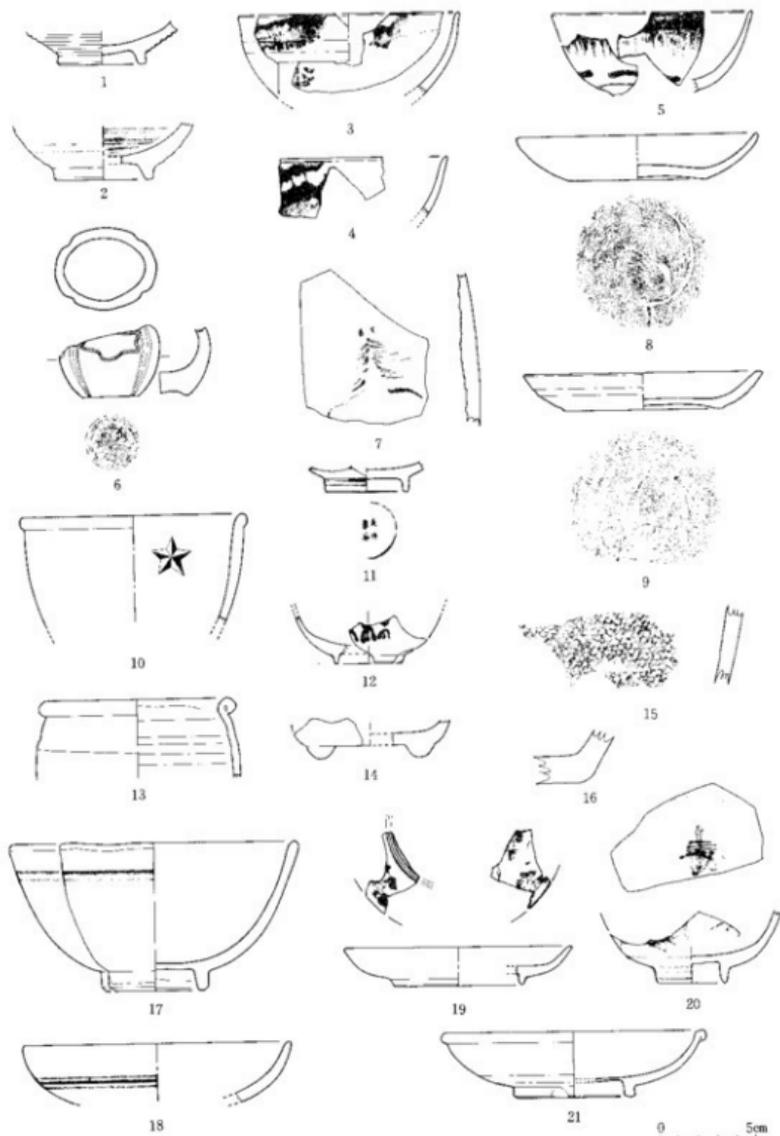


図65 NM3出土の陶磁器(1) probably 19c.  
 Fig. 65 Ceramics from NM3 (1) Nos. 6, 10, 17, 19, and 20 are more recent.

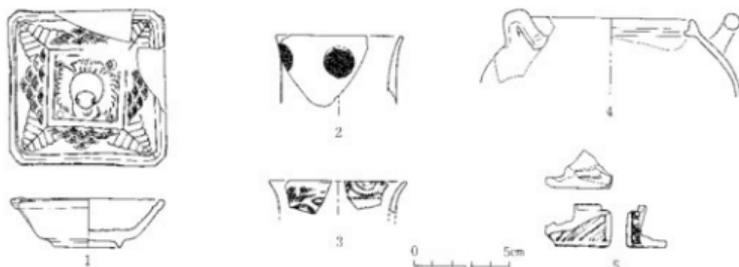


図66 NM3出土の陶磁器②  
Fig.66 Ceramics from NM3

probably 19c  
porcelains except 3

図	図名	種類	地区・遺構	胎	装	物	備考
65-1		瓦・茶碗	ビット12	赤胎 白 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	相馬大塚
2		*	ビット12, 8号	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
3		*	ビット12, 8号	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
4		*	ビット12, 8号	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
5		*	ビット12, 2号	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
6		磁・化粧板	ビット43 拝橋	白 N 9.5		赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
7		磁・抄紙?	ビット12	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
8		土師・瓦	*				
9		*	*				
10		磁・茶碗	ビット12	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
11		*	8 ~ 12 層	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
12		*	*	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
13		瓦・茶碗	ビット12, 8号	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
14		土師・鉢?	ビット12, 8号	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
15		*	0.5 ~ 8 ~ 12 層				
16		*	ビット11				
17		瓦・長筒	土	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
18		陶・正	グライ部埋込中	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
19		磁・皿	8 ~ 12 層	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
20		磁・茶碗	N 6 ~ 8 ~ 12 層	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
21		瓦・口	*	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
66-1		磁・瓦	*	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
2		磁・茶碗?	A トレンナ	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
3		陶・*	8 ~ 12 層	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	
4		磁・土板	*				
5		瓦・丸瓦?	*	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	黒胎 赤胎 7.5YR 6/2	赤胎 赤胎 7.5YR 6/2	

表31 NM3 出土の陶磁器観察表

Table 31 Notes on ceramics in Fig. 65 and 66

### 3) 瓦

出土破片数は1409点と多いが、完形品はなく、図示すべきものも少ない。遺構ではビット12(池跡)からまとまって出土している。ここではビット12等、やや古い遺構より出土した瓦と新しい盛土層から出土したものとを分けて扱う(表33)。

前者の例として次のようなものがある。

#### ① 軒丸瓦(図68-2~4、69-4、図版53-1・2、52-4)

いずれも書割立て三引き文をもつものである。図68-2は図68-3、図68-4より周縁部の幅

出土地点 種類	出土地点										合計	
	樺	松	杉	柏	ヒノキ	トドマツ	スギ	ヒノキ	トドマツ	スギ		
木製品	樺	3										3
	松	2										2
	杉			1								1
	柏				1							1
	ヒノキ					1						1
金属製品	銅											
	鉄											
	鉛											
	錫											
	銀											
その他	ガラス											
	陶器											
	土器											
	石											
	骨											

表32 NM3 出土の木製品・金属製品他の分布  
Table 32 Distribution of wooden, metal and other artifacts at NM3

の広いものである。図68-3・4は瓦当の文様のある方の面に鈔が付着しており、型から抜くのを容易にするためと思われる。調整は凸面はヘラナデにより平滑に仕上げ、凹面は粗いヘラケズリによっている(図68-2)。図69-4は、九曜文をもつもの。文様部は周縁を型で作った後果を粘土玉を張りつけて作っている。

#### ② 軒瓦(図68-5)

軒平瓦ではなく、棧瓦葺きの軒先の瓦である。小破片で文様もごく一部しかわからない。

#### ③ 丸瓦(図68-1・69-1、図版54-1・2)

2点とも玉縁をもつ。図68-1は図69-1やNM1出土のものに比べて大きい。図68-1は凸面はタテ方向のヘラケズリ、ヨコ方向のヘラケズリ後ヨコ方向のヨコナデを施し、最後にタテ方向のヘラミガキで仕上げられている。凹面には布目の痕跡が全体をおおっており、布の継ぎ目と推定される痕跡も見える。図69-1の凸面は図68-1と同様だが凹面では布目の及んでいる範囲がわずかで、粘土塊からの切離し時の痕跡と思われる筋目がはっきりしている。また上下に鈔が付着しているほか、棒状のものをさしこんだような圧痕もある。

#### ④ 棟瓦(図69-2、図版53-7)

屋根形の棧と箆状の乗れをもつものである。

#### ⑤ 鬼瓦(図69-3、図版52-1)

どのような部分なのかははっきりわからないが、下り棟の鬼瓦の下部ではないかと推定できる。

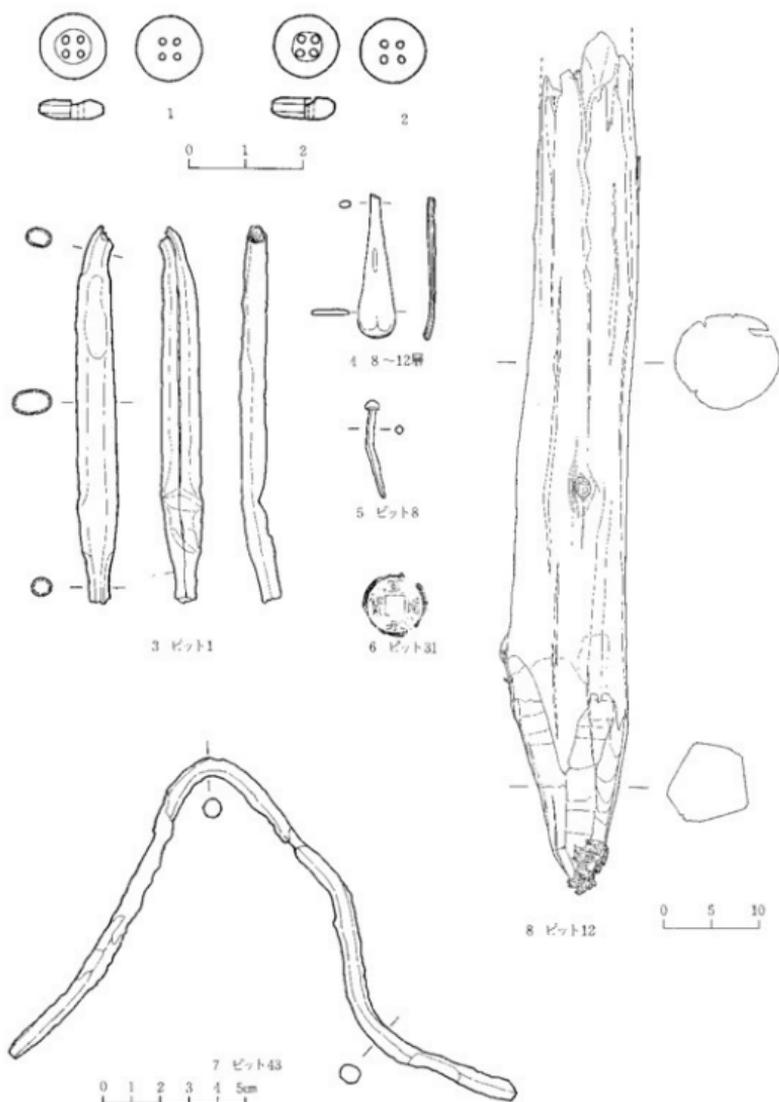


図67 NM3出土金属製品他  
Fig.67 Various artifacts from NM3

- 1,2. ボタン button (glass) 3. キセル pipe (cop.) 4. さじ spoon (cop.) 5. 釘 nail (cop.)  
6. 寛永通宝 coin (cop.) 7. 棒状鉄製品 fragment (iron) 8. 杭 stake (wood)

以上が江戸時代末期から明治初期と考えられる瓦である。明治初期以降のものとしては次のものがある。

**A. 軒瓦** (図69-5・6、図版52-2・3)

棧瓦葺きの軒先瓦に用いられた瓦である。図69-5は小巴に3つ巴文をもつもの、図69-6は方十軒瓦である。いずれも小巴部のみの破片である。小巴部の裏側はあらいヨコナデで粗面に仕上げられている。

**B. 棧瓦** (図70-1~6、図版53-3・4)

図68-2~6は小片である。「宮」または「宮四九」の型によるレリーフをすべてもっている。瓦の胎土は小石まじりの粗いものが普通だが、この種の棧瓦は細砂を含む細かい胎土である。

**C. 平瓦片** (図70-7・8、図版53-5・6)

図69-7は「和田」、図70-8は「ノメ」の印の押されたものである。

近世の瓦については他にほとんど報告例がないため詳細はわからない。ただ図68-1の丸瓦については、この遺跡の出土例の中で1点だけ他より大きいものであるが、昭和58年の仙台市による仙台城三の丸発掘でも出土しており、他の遺物より古いものである可能性がある。この他NM1出土のものと比較してわかるように、丸瓦には製造工程の仕上げの段階で凸面にヘラミガキを施すものとししないもの、凹面では布目のはっきりするものとししないもの、棒状のものをさしこんだような圧痕をもつもの、などさまざまなバラエティーがあるが、時期差をあらわすものかどうかわからない。今のところこれらは同時に用いられたと考えるのが妥当と思われる。

図	出土地点	種類	残存 部位	法	量(単位mm)	色		胎土	焼成	備	考	図版
						表面	割れ口					
68-2	ピット埋土1層	軒丸瓦	瓦当部	(155)	(164)	23	黒	小石混りの悪い粘土	不良	黒黒まで引き文		53-1
3	ピット12	*	*	(108)	(152)	25	黒	*	*	*		53-2
4	*	*	*	(80)	(149)	(21)	黒	*	*	*		*
5	ピット12埋土1層	軒瓦	*	(86)	面	(53)	黒	*	良好			
68-1	埋土5層	丸瓦	*	面	面	面	黒	*	不良			54-1
69-1	埋土2層	*	*	面	面	面	黒	*	良好			54-2
2	ピット13埋土	棟瓦	*	面	(114)		黒	*	不良			53-7
3	12層	地瓦	*	面			黒	*	良好	黒を返けて染色		52-1
4	C 5-10層	軒丸瓦	瓦当部	面	面	面	黒	*	不良	瓦割文		52-4
5	10層	軒瓦	*	面	面	面	黒	*	良好	三つ代文		52-3
6	*	*	*	78			黒	*	良好			
70-1	ピット3埋土	伏瓦	*	(179)	290		黒	細砂を少し含む	不良	染けて染色		52-2
2	3層	*	*				黒	*	*	割による「割取」のノリーフ		53-3
3	1層	*	*				黒	*	*	割による「割取」のノリーフ		
4	カクラン中	*	*				黒	*	*	割による「割取」のノリーフ		53-4
5	*	*	*				黒	*	*	*		
6	*	*	*				黒	*	*	*		
7	O 5、6、10層	平瓦	*	面	面	面	黒	0.1-0.5mmの細粒を多量に含む	良好	割取の印(染色の土)を挿す		53-5
8	*	*	*				黒	*	*	「割取」の印(染色の土)の多量挿入		53-6

表33 NM3 出土の瓦属性表

Table 33 Attributes list of ceramic roof tiles from NM3

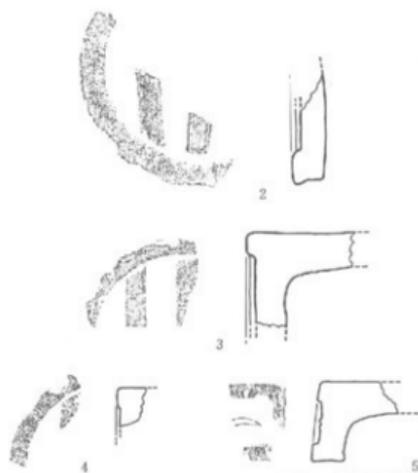


図68 NM3出土の瓦(1)  
Fig.68 Ceramic roof tiles from NM3 (1)

before 1882



図69 NM3出土の瓦(2)  
 Fig. 69 Ceramic roof tiles from NM3 (2)

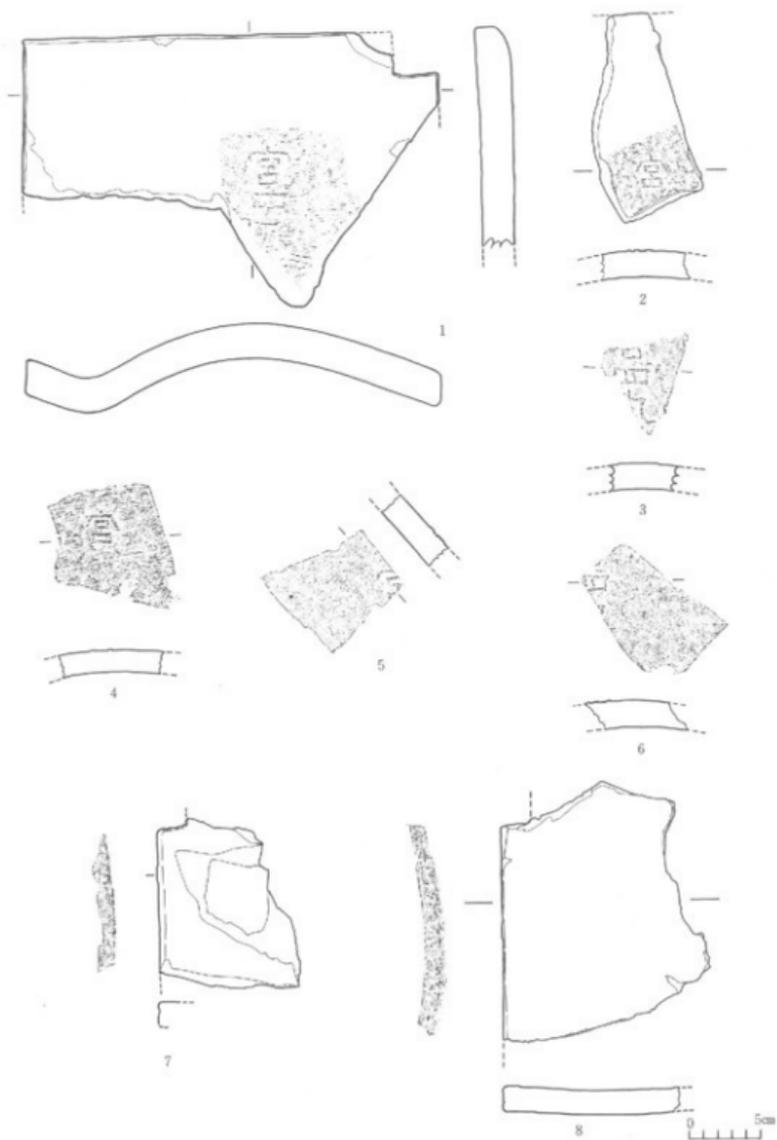


図70 NM3出土の瓦(3)  
 Fig.70 Ceramic roof tiles from NM3 (3)

after 1882

## 5. NM2礎石建物と二の丸建造物

### (1) 二の丸におけるNM2・3の位置

享和2年(1802)の絵図面を使った二の丸建物と、文系四学部建物の現況との推定対比位置図(付図1)を参照すれば、この2地点は、馬場をはさんだ二の丸南端部(NM3)と、馬場座敷から小広間付近(NM2)に相当すると推定される。試掘坑・試掘トレンチによる知見では、NM2から試掘トレンチにかけては、一面焼土が広がり、火災により焼失した建造があったことがわかる。しかし、NM3にはほとんど見られず、二の丸建物群が密集していない場所であったことがうかがわれる。NM2の南端とNM3の北端との距離は約30mある。NM2の礎石4から南北方向の礎石列を南側に延長した線をたどって、NM3の石垣の延長線までの距離を計ると、約42mとなる。1間を2.0mとすると、約21間となる。この値は図69・74-1に示された間数に近似する。種々の絵図(図73-75、付図1)を参照すると、この空間には元禄年間以降は馬場が存在したと推定される(佐藤1967)。

NM2の検出遺構の特徴は以下のようにまとめることができる。①礎石建物は鉤の手状を示す(図72)。②南北方向の柱間は約3m、東西方向は約2.2m(7尺)である(図72)。③礎石建物北側に石敷遺構(幅2.9m)が存在する。

これらの事実から、①について絵図上で検討すると、最も古い図(図72-1)の中の「御書院」東側に併行する「御廊下」と「小広間」あるいはそれにつらなる部分とが作る、鉤の手状の構造や図73-2、図74-1の中の、馬場座敷北側の「御膳立」と「御廊下」の鉤の手状の構造が注目される。

前述の礎石との石垣の距離42.0mという事実から考察した時、建物の間数がわかる。図74-1の原図(斎藤報恩会所蔵)を使い、1間=6尺5寸(196.7cm)として計算すると、同図では礎石と石垣間は約21間となる。また、文化年間図(県立図書館所蔵)では23間とあらわされている(図74-2)。「御膳立」と「馬場屋敷」の間から21間をとると、両図のはるか南方にずれ、中島地に重複してしまう。(馬場端からさらに約12間)。石垣が図74-1の南端を画する石垣とすると、この位置のずれは、大きすぎ、図と一致しない。次に鉤の手の構造を御廊下と小広間の角からとすると、石垣は図74-2南端の部分から4間の位置にあり、図74-1ともよく一致する。ついでこの南北礎石間距離(図72)について考察を加える。図74-1では「御膳立」が幅2間、「御廊下」が1.5間と表わされており、3m前後の値をもつ南北の礎石幅が「御膳立」のものとする、1間1.5mとなり1間6尺以下になってしまう。二の丸の間は6尺3寸もしくは6尺5寸と推定されており、「御廊下」の1間約2.0m、約6尺5寸という値とほぼ合致する(注1)。この点からも、この礎石列が小広間に連なる御廊下であることが推定できよう。

## (2) NM2の石敷遺構

以上の事実から、ごみ捨てとして使われていた石敷遺構は、この「御廊下」に面した施設と推定される。絵図に相当する建物を探すと、御上段の西側「御廊下」の東側にあたる正方形の構造物が目玉される。

図73-1では、御廊下(A)の北側に連結した部分が見られる。また、御廊下(B)にも張り出し部分が存在する。図73-2では、すでに南東側に「馬場座敷」が新築され、それと共に御廊下(B)は「御膳立」と呼称が変わり、御廊下(B)の北側にあった。張り出し部分は消滅して、その後図で見る限り、その部分に再びこのような張り出しが作られることはない。図73-2では、御廊下張り出し部分のうち西側の1画が、便所として図示されている。従って、図73-1の張り出し西側も便所であろう。その東側にほぼ正方形の別の張り出しが認められ、宮城県立図書館蔵の原図には「たいすけ置所」と記載されている。堂司が茶事の道具を入れる棚であることを考えると、1種の物置として使われていたと推定される。図74-1では、特別な張り出し部分はなくなり正方形の張り出し部分には変化がない。図74-2では、基本的には変化がないが、西側に新たに便所が1箇所設けられている。さらに、時期不明の第2師団で作製した二の丸図には、(図75-2)西側(図の上方)に「田村様に便所」と、その下に「手掛水」と記載があり、手洗場と推定できる。石敷の作り方を見ると(図17)、手洗場とする解釈の方がより妥当と考えられるが、手洗場などを伴った物置として使われた可能性もある。また、時期的な使用目的の変化も考慮する必要がある。以下廃絶の時期についても考察する。明治2年時の勤政片時代のものである図75-1では、御廊下付近の張り出しは、見あたらない。これは図が略図であるため省略したのか、あるいは図中の他の便所等がそのまま記載されていることを考慮すれば、すでにその時期には機能を停止して取り壊されていた結果とも考えられる。また遺物から見ると、石敷遺構出土遺物の中で前述のように、茶碗・皿・土瓶などの陶磁器類は切込産・平清水産・大堀産が大部分を占める。時期的にもほぼ江戸末～明治10年代にかけてのものに限られており、それ以外の時期のものはほとんどない。鯉肌の土瓶が伝承通りに、明治7年以降に焼かれたものとするれば、幕末から明治7年前後に作られた遺物が捨てられた後、明治15年に焼けるまでの間に粘土で蓋をされたことになる。

## (3) NM3と二の丸の位置

発見された石垣は前述のように二の丸の南端を画すもので、図73-1に示されている石垣と推定される(付図1)。石垣に切られて発見された池は、二の丸構築以前に造営された苑池と考えられるが、その時期・規模・造営方法などは不明である。(梶原 洋)

注1. 東北大学工学部建築意匠学科 佐藤 巧教授の御教示による。

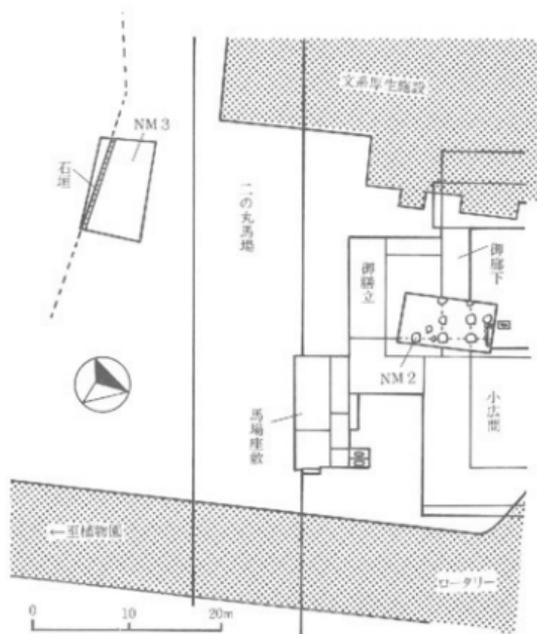


図71 NM2・3の発掘区・現況建物と二の丸遺構  
 Fig. 71 A superimposed plan of excavations, university building, road and ruined structures in Yedo era

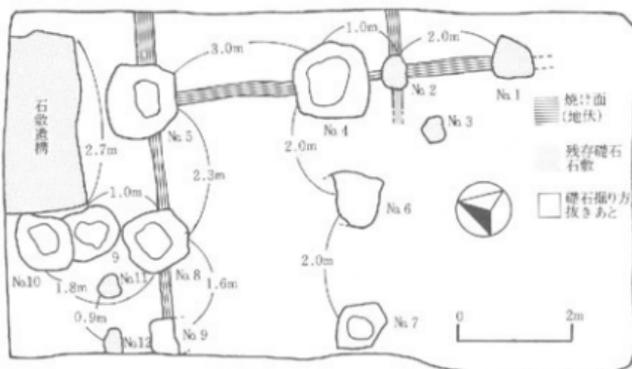


図72 礎石・石敷機能時の配置 (NM2)  
 Fig. 72 Excavated stone floor, rows of foundation stones and/or their holes at NM2



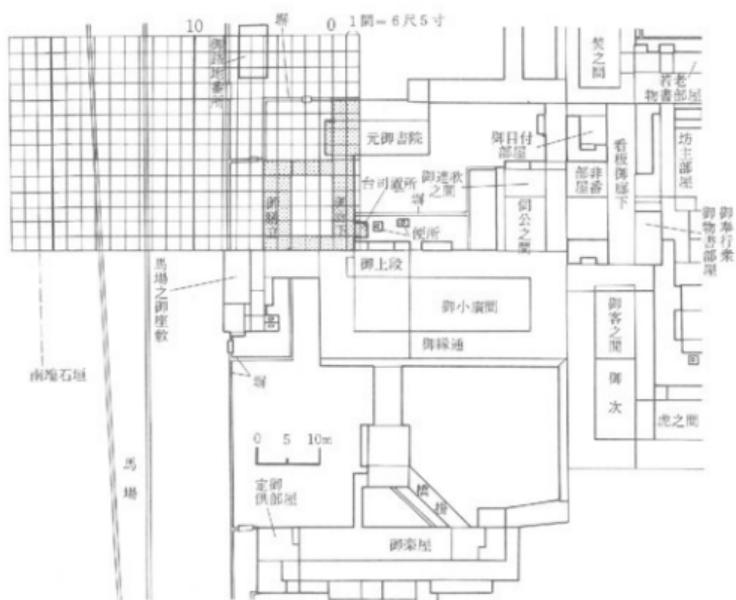
1) 御二の丸初指図より



2) 享和2年 御家作御給圖写より

図73 二の丸小広間附近の変遷(1) (仙台城1967図版より)

Fig.73 Historical transition of structures around ceremonial hall in the secondary citadel (1)



1) 御二の丸御家作水被御給図より



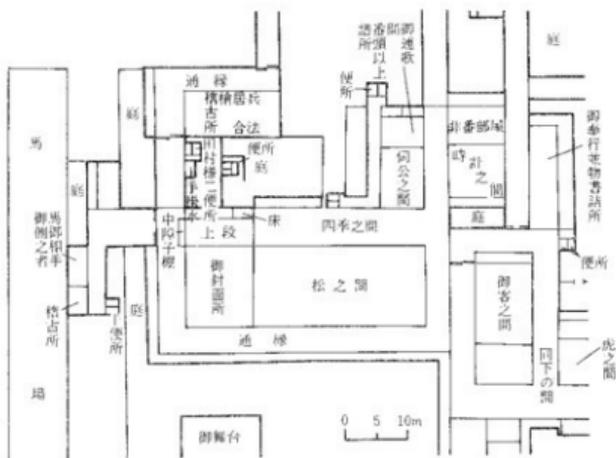
2) 御二の丸御城中並御中美下水抜清御給図・嘉永6年(1853)より

図74 二の丸小広間付近の変遷(2) (仙台城1967図版より)

Fig. 74 Historical transition of structures around ceremonial hall in the secondary citadel (2)



1) 明治2年 (佐藤巧氏原図)



2) 時期不明第二陣図作製二の九平面図より

図75 二の丸小広間附近の変遷(3)

Fig. 75 Historical transition of structures around ceremonial hall in the secondary citadel(3)

西暦	年月	建 築	人 物	火 事・倒 壊・そ の 他	行 事
1620	天 保	城山内蔵 西曲輪(西館)	五郎八郎		
1629	寛永 6		政 宗		政宗、西軍敷で茶を闘う
1631	寛永 8				西曲輪で歌伎・享観劇
1636	寛永13		政宗死去		飯坂、籠
1638	寛永15	忠宗、二の丸許可 谷林越より移築	忠 宗		
1639	寛永16	二の丸完成 図1			
1675	延宝 3	二の丸記録者 万 善 堂	英 村		
1676	延宝 4	因 縁 殿			
1681	天明元	祈 愿 庫			
1683	天明 3	愛宕神境			
1688	元禄元	二の丸役所地祭 芋餅を命ず			
1690	元禄 3	万善堂修造			
1691	元禄 4	万善堂完成			
1692	元禄 5				虎の窟 三代 治家記録編纂
1699	元禄12	二の丸輪郭			
1700	元禄13	二の丸失火			
1717	享保 2		吉 村	地震、城中諸所被害	
1718	享保 3	二の丸等、石垣土手 片講成る			
1719	享保 4			大開城内上屋敷	
1720	享保 5	修 復			
1736	元文化			地震 被害大	
1751	宝暦元		宗 村	大 雨	
1804	文化元		嗣 宗	二の丸 中奥 雷火により焼失	
1805	文化 2	再 築 地 祭			
1806	文化 3	中奥造営成る			
1809	文化 6	二の丸造営成る			
1810	文化 7	万善堂修復成る			
		二の丸奥付面所に 足 場	吉 武		
1855	安政 2	二の丸因縁殿前に 愛宕神祠 再建	重 形		
1858	安政 5	二の丸中奥馬場に 築 庭 舎		二の丸因縁殿 火災	
1861	文久元			地震 被害大	
1868	慶応 4				二の丸に軍事局を置く 仙台藩降伏 奥羽鎮撫に入る 仙台藩編制(28万石)
1869	明治 2				二の丸に勤政庁
1871	明治 4				東北鎮台を二の丸に移す
1873	明治 6				仙台鎮台と改す
1875	明治 8			本丸大広間城戸 城内 總台等を撤去 図八	
1881	明治14			二の丸仙台鎮台本部全焼	
1882	明治15			二の丸仙台鎮台本宮9割焼失	
1884	明治17			二の丸米蔵跡、鎮台木材小屋 焼失	
1945	昭和20	9、米蔵通社開始 の丸跡を埋め立て 住宅等を建築		7、空襲により大平門信物 集積庫兵舎 (二の丸籠御台 楽川遺構 など全焼)	

表34 仙台城二の丸建築関係年表(三原良吉1967より)  
Table.34 Chronological table on the Sendai Castle

## 6. 二の丸の焼失について

明治15年(1882年)9月7日二の丸の焼失により、寛永15年(1638年)以来約250年間にわたり、偉容を誇ってきた二の丸のほぼ全取舎が灰燼に帰した。これ以降、大手門や裏池、石垣などの一部の遺構を除いて、二の丸をしのぶものはほとんどなくなってしまったといつてよい。火事の原因については、当時の陸羽日々新聞が火災発生後3日間にわたり、記事を掲載している。それによれば、火事の原因は銃工場として使用していた旧台所内で、砲隊が使用していたコーラル油に火が入り、茅葺の壁根に燃え広がった結果、全焼するに至ったとのことである。

これを見ると、仙台城二の丸は、旧藩時代の使用目的や呼称に関係なく、鎮台の建物として使用されていたことがうかがわれ、このことにより小広間裏石敷遺構が単なるごみ捨て場として使用されていたことも間接的に明らかになる。

火災の様子や、さまざまなエピソードが講談風にまとめられた記事は、当時の状況を窺うのに格好の資料であることから、全文を以下に掲載した。<sup>28</sup>

(明治15年9月8日 陸羽日々新聞)

仙台鎮台本営出火、昨7日午前11時少し過ぎる頃、突然火事ありと叫ぶものあり何処の火事やと逸早く火の見に上り彼方を見やれば、川内なる青葉城、即ち鎮台本営にて、黒煙天を焦がすばかりなれば、すわ火事なりと筆投け捨て、息を継かず片平町の公園地まで駆付けたるに、火勢の鋭こと言わん方なく非常の号砲銃鐘を、聞き付け駆集りたる各町の消防組警察署の哨笛、本営の兵士等八方より駆廻りて、尽力せられしも、見る見る参謀部を始め、各局課、輜重兵營、工兵第二方面本署等凡そ178棟に燃えがり櫓ヶ岡の兵營より一大隊ばかり駆足にて走せ付けられし時分は、早や下火のころにてありしが、正午12時30分頃全く鎮火なしたり、扱て焼残りしは衛戍兵の詰所、金庫、新築金庫、新築職工場、第二方面倉庫、新築旅、被服庫、火薬庫并に、大門の十棟の外物置小屋等なるが、雑と九分通の焼失なるべし。火薬庫へ火の廻らざりしは、実に風少なかりし僥倖なりしが兵士小隊ばかり同庫の近傍に立並び、又、同方角への火は、殊に烈しく防がれざる容子なりし。若し火薬庫にして破裂せば或いは、市街も甚難を免がれ得ざりしならん。比日風位は、最初は西なりしが、火事半より南となり、火薬庫へ向き少しは危険なりしも風力殊に微弱にして、煙の延程には、あらざりし。

扱て、当本営は、伊達政宗公が慶長十二年丁未の年始めで、ここに本城を据え、これを青葉城と號し二の丸は二代目の藩主義山公が元和年中に築かれしにて、文化元年6月24日雷火の爲め、全城炎上し尋で新築ありて明治5年4月に至り、ここに鎮台本営を置かれたるなりと、漏洩れたることは後號に記すべし。

鎮台事務所、右出火の報あるや、県庁より和達少書記官が、公園まで出張られ、官部七等属の見舞として、本営へ遣わされし処同宮に於ては差当り、事務所に差支ゆる旨を偲て、公園地内元動工場を借用し度しとの義に付、此趣を県令へ復命せしめられしに、聊か差支これなき故御用あるべしと、回

答せられたるよし。

(明治15年9月9日 陸羽日々新聞)

仙台鎮台本営出火続報 旧伊達藩士族中に去る者ありと聞えたる当区北四番丁、沼澤興三郎氏は、一昨日鎮台本営出火せりと警報を聞かや、矢を射る如く旧大手前に駆付き、町伊達家業代居住し玉いし青葉城も今日を限りて一片の烟と成果ること残念とや云わん、残り借しとや云わん、心魂ともに焼るが如しと路上に仆れて、大声を發し、泣叫びつつ転回る様可笑くてや、傍に居合せし矢野某なる者が思はずも一笑したるに、沼澤氏はムックと起き、此の恩知らずめがと云いさま、飛掛りて矢庭に蹴倒し、数多度踏躑りしかども、流石に返す詞のなくてや、平誤りにあやまりながら、遠道何へか逃げ去りしと云う。沼澤氏にしては、左もあるべし。

右出火の火元は未だ判然せざる由なれども焼始めしは、旧藩の頃御台所と稱えし並葺の建物(当時銃工場)なりとの事。又本営に火の揚るや、火薬庫の破裂を恐れ、川内の家室にては、一人も残らず逃げ失せ、公園下辺にも余程逃げし向もありしが、逃げ損となりしは、幸中の幸なりし。

又、本営内に、入獄の者18名ありたるが、火の揚るや直に舊な門外へ解放せられしも、一人として逃ぐる者なく、何も踏止まりて、消防に尽力せしは、殊勝なりしと。

また営内に響き置かれたる馬80余頭は、直に門外へ逐い出されると、其処彼処にて蹴り合を始め怪我せしも多く、驚いて崖より落ち、其ま倒れたるも二頭あり、何れへ馳行しか、今に行方のかぬも二頭あるよし。

怪我人も五・六名ある由なるが、中にも傳令使長中原少尉は、余程の火傷にて、昨日より出勤なかりしと云う。

鎮台仮事務所は、愈愈片平町公園地の元鋸工場へ設けられたり。

参謀部副官大尉富岡三蔵氏は、出火見舞の答札として、昨日県庁、警察本署、両裁判所等へ参られたるよしに聞く。

また、本営の火事最中、木町通北56番丁の間の、南宮行宅の草屋根へ飛火し、ポッと燃上りしが、ソレと云て消し止め火事には至らしめざりしと。

(明治15年9月10日 陸羽日々新聞)

本営出火の火元 仙台鎮台本営が、去七日を以て焼失せる其火元の未だ分らずにあるまま、世説竊聞なりしが、今確なる筋より聞く所によれば、右は同営内兵器磨場なる砲隊用掃杖本部に於て、コールター油(石炭の蒸溜して油となるもの)を、塗抹する際、其油が火の上に滴り落とると均しく火は飛散りて、傍なる油壺に入るや、俄然火焰に飛騰して、折柄天気続きに燥き切たる茅葺の屋根裏につきざれば、何かは垣らん忽ち屋根から屋根へ燃移り、僅僅一時間余にして、東北第一の大城を落楯するに至りしなりと云う。

(梶原 洋)

注 かなづかいとふりがなは遺書改めた。

## 7. NM1・2・3調査の意義

仙台藩上の居館として、また藩政の中心として、約250年間にわたって偉容を誇ってきた仙台城二の丸は、明治15年(1882年)に焼失して以来、そのよすがすら窺い知ることは難しかった。その後、旧帝国陸軍第二師団司令部として、また戦後は米軍の駐留地として、約70年間にわたり、一般人の立入を拒む聖域であった。失われた二の丸について関心もたれ、調査が可能になったのは、ようやく東北大学のキャンパスとして平和を取り戻した昭和32年(1957)以降であり、実際に調査が始まったのは昭和58年(1983年)である。

調査の結果、遺構・遺物の遺存状態が予想以上に良好で、絵図ともよく照合し、さらに絵図に示されていない建物跡なども確認されたことから、二の丸の研究に新たな資料を提供すると共に、旧藩時代から明治初期にかけての城内の暮らしぶりの一端を明らかにすることができた。

NM1は二の丸の西端にあたり、お裏林の斜面に続く平場と推定される。中心部からは外れてはいるものの、暗渠の溝や竪穴状ピットなど江戸時代の遺構が検出された。遺物も少量ではあるが陶磁器、瓦などが出土した。(Ⅱ章2節参照)。

NM2の礎石群とそれに伴う石敷遺構は、2代目藩主忠宗の創建した二の丸の中心部の小広間の裏手にあたる御廊下とその側の張り出し部分と推定される。(Ⅲ章参照)。貼り出し部分の石敷遺構は、その本来の機能を失ってから明治15年の焼失時まで、ごみ捨て場として使われており、中から多量の遺物が出土した。大部分を占める陶磁器は、切込、平清水、大堀など近隣の窯のものが多く、伊万里や瀬戸はきわめて少ない(Ⅱ章3節、Ⅶ章参照)。陶磁器の使用・廃棄時期は幕末から、明治10年代と推定される。石敷遺構の中からは他に屋根材・箸などの木製品、瓦、自然遺物も出土している。小広間の裏がごみ捨て場として使われたこと、陶磁器が日常雑器であることなどを考慮すると、石敷遺構に遺物が廃棄された時期は幕末ではなく、藩の権威が消失した明治4年の東北鎮台設置以後と推定される。火災時以後の層からは多量に焼融ガラスが出土し、当時、ガラス窓が使われていた事が明らかとなった(Ⅷ章参照)。この段階の陶磁器には切込産のものが含まれておらず、文様にも若干違いが見られる(Ⅱ章3節参照)。しかし、互いに接合するものもあり、石敷内への廃棄と焼失が時期的に比較的近いことを示唆している。

石敷遺構から、タイ・タラ・サケなどの魚骨、シジミなどの貝類が出土し、鎮台当時の食生活の一端を窺うことができる。焼失後の層とピットからはイノシシの焼けた骨片など哺乳動物の骨やガン・カモ種の鳥類骨が発見された。この遺存体は石敷内の遺存体と種類が異っている。

下層からは溝が検出されているが、これは二の丸創建時より古いと推定される。ただし、礎石の方向と一致することから、それほど時を隔てたものではない。

NM3の遺構は大きく3時期にわけられる。最古の遺構の中で、池跡は二の丸に伴う石垣に壊されていることから、それより古く、二の丸造営以前にあった伊達宗泰邸の遺構の一部分である可能性もある。池を壊して作られた石垣は、絵図から二の丸創建時に構築された二の丸最南端の外郭線と推定される。掘立柱の建物は池を埋め戻した層の上面で検出されたが、時期は不明である。この他、明治以降と考えられる遺構が確認された。(II章4節参照)。

遺物の中で陶磁器はNM2出土のものに類似する。瓦では丸瓦にNM2出土のものと同じ大きさの上で異なるものがあり、NM3とNM2の間の時期差を反映していると推定される。

NM2の石敷遺構内の土壌の花粉分析の結果と、出土した植物の種子の同定結果により、今から約100年ほど前の附近の植生は、基本的に現在の植物園附近の植生と大きく異なることはない。ただ、花粉分析から見て、現在よりも松・杉の比率が高かったことがうかがわれる(VI章参照)。また、桜はソメイヨシノではなくエドヒガンの種子が発見され、屋敷地内に植えられ、他の樹木と共に、庭園的な景観を呈していた可能性がある(V章参照)。さらに、馬場付近にはススキなどの雑草が生い茂り、その周囲を松や杉が囲むという景観が推定される。二の丸の城内とは異なり、お裏林にはモミ・ブナ・コナラ・シデ、沢筋にはハンノキ・ヤナギなどが繁茂していたようである(V章、VI章参照)。

調査によって明らかになったように、二の丸跡の保存状態は概して良好である。今後、計画的に、調査と保存を進め、研究機関としての大学と貴重な歴史的環境との共存を図ることが是非とも必要である。

(梶原 洋)

### 第三章 仙台城二の丸の小広間について

佐藤 巧

#### 1. 二の丸殿舎の概要

仙台城本丸殿舎の中心は大広間であったが、二の丸殿舎の中心は小広間である。本丸殿舎の利用期間は伊達政宗一代の約20年に過ぎず、二代の忠宗以来幕末に至る二百二十余年は二の丸が政庁及び私邸の中心であり、近世城郭殿舎としての事実上の機能は、あけて二の丸に移行した。寛永13年(1636)襲封した忠宗は、同15年、早速二の丸の普請を起こした。正保年間の奥州仙台城絵図によると、「本丸、山城、東西百三十五間、南北百四十七間、町屋之地形ニ卅二間半高」、「二之丸、東西百七十一間、南北百十一間、本丸地形ニ廿七間低」とあり、本丸地形の外郭線に較べ、二の丸のそれははるかに単純に描かれている。二の丸地形の西北方に道路を挟んで別に「東西百間、南北六十間、二之丸地形ニ同ジ」とある西屋敷が接続している。二の丸の敷地は後にはこの西屋敷にまで拡張されるが、当初においてはその面積は本丸に較べてとくに広大なものではなかった。

本丸敷地の輪郭は極めて複雑で、かつ西南部において起伏があり、立地上からも整然たる建造物の配列に難点があった。ほぼ矩形に近い、なだらかな傾斜面に加え、本丸より遙かに低く、城下との連絡が容易であることが新しい時代の城館敷地として強い魅力となったであろう。

「忠宗君治家記録引証記」によれば、まず焼火之間、虎之間、納戸、茶道部屋、鎗之間、土大所、風呂屋、大犬所、小性之間、用之間、香部屋、麩部屋、箒用部屋が寛永15年12月14日迄に、次に御座間、御寝所、奥方御寝所が同16年3月28日に上棟し、更に同16年5月より12月迄の間に蔵、大手門(詰の門か)、大書院、小廣間、舞台、歩之間が順次上棟した<sup>1)</sup>。政宗死去に伴う若林城経営廃止により、その撤去建築の部材がここに運ばれて転用されたものもあった<sup>2)</sup>。ここにいう大手門は詰の門の誤りとみられる。

同16年6月にはやくも移抄の祝儀を行ない、同17年の元日儀式は二の丸において行なわれた<sup>3)</sup>。本丸での諸儀式は心経会、懺法、護摩供等の仏儀を残すのみで、他はことごとく二の丸に移行する。即ちこれより二の丸が事実上の仙台城の中心となった。

文化元年(1804年)6月24日、仙台城二の丸及び中奥は天災に罹り堂宇ことごとく灰燼に帰した<sup>4)</sup>。この文化元年の大災を前後にして、二の丸殿舎の構成に大きな違いのなかったことは、その前後の絵図の比較(図76及び付図2・3を参照)や儀式帳などから確認される<sup>5)</sup>。しかしこれらの図によって直ちに創建期ないし初期の様子を窺い知ろうとするには無理がある。「治家記録」によっても綱村の時代に一連の大きな改造工事の事実が認められるし、寛永の引証記の中に見えた大書院の姿は後世図には無く、また後世図にみられる内対面所(奥対面所)の如きは引証記中

に見当たらない。即ち創建期の殿舎構成と後世図との間にかなりの変化が予想されるし、またそれなら後世図に示される殿舎構成が定まったのは何時の事かと改めて問題となる。

治家記録によると、綱村の時代、とくに元禄初年を中心として一連の新築、改築工事の行なわれた事実がある。例えば元禄3年(1690)に新造御休息所への移歩<sup>65</sup>、同4年に新造御座間への移歩<sup>67</sup>、萬善堂の移築<sup>68</sup>、数奇屋、園の新築<sup>69</sup>、また同3年までに新焼火間<sup>70</sup>、同7年には新舞台、新座敷が出来<sup>71</sup>、同8年には新座敷を内対面所と称し<sup>72</sup>、他方書院の語およびその用例が見えなくなるのがこの時期である。

従ってこの元禄初年を前後として書院が失われるかないしは使用されない状態となり、新たに寝所、休息所、御座間、内対面所が出来、また新たに焼火間が設けられることにより従来の焼火間を元焼火間と称しているなど、構成上の移動、変化が指摘できる。この改造以後においても多少の改変、修葺が行なわれているが、主に奥方関係の作事が多く、表向きにおいてはその構成を変えるような大改造は無かった。

ここに二の丸御指図と称する絵図(付図2)がある<sup>73</sup>。年代不明であるが、後世の幕末図と較べてかなり古い時期のものと考えられる。東面の詰之門を入った玄閤の右脇に徒之間が、そして玄閤につづいて中之間、次之間、廣間より成る一棟があり、この奥に虎之間、客之間、小廣間、書院が階段状に連り、客之間の奥、書院の北裏に焼火間、その奥に御座間、御寝所が続く。焼火間と御座間との間に小姓衆之間、小姓衆之間の裏に風呂屋がある。これらの建物の背後に納戸、上大所、大大所、肴部屋等が配置される。西南の小高いところに数奇屋関係の建物がある。この図面の示す建物名と寛永時代の引証記の述べる建物名とはよく一致している。そして奥関係諸建築の記入はないが、後世図にみるような複雑さがなく、単純、明確な構成配列を示し、初期殿舎の特徴をよく表わしている。

二の丸の初期の建物名、部屋名を治家記録で調べてみると、寛永時代にはまず書院、御座間、小廣間(大廣間とある)、数奇屋、鎖ノ間、正保年間には小廣間、焼火間、番所、談合ノ間、用ノ間が加わり、万治年間にはさらに小姓衆ノ間、物書部屋、虎ノ間、夜居ノ間、廣間等が加わる。延宝年中には客ノ間、中ノ間、次ノ間、學問所、小書院、虎ノ間押込、連歌ノ間、書院勝手ノ間、御座間寄場、御寝所、小廣間裏座敷、書院裡座敷、伺公ノ間、禊堂等が、そして天和、貞享年間には対面所、奉行ノ間、馬場座敷、大所、園、時計ノ間、小廣間勝手座敷、鑑板廊下、内舞台、御座間欄、因縁殿、萬善堂等が加わってみえる。これらの中には同一の建物で別呼称のものも含まれている<sup>74</sup>。

いずれにしても先述の二の丸指図に示された部屋名は大体延宝以前に出揃っている。この指図の作成年代の確かなことは分らないが、書院が存在し内対面所がない点から、元禄を中心とした改造より以前の状態を示すものであることは明らかである。

書院が用いられなくなったのは天和2年(1682)以降であるが、その頃には小廣間廬に馬場座敷が設けられていたが、馬場座敷の語及び用例は天和元年にすでに現われている。<sup>93</sup> この指図には未だ馬場座敷が見えていないので、この図の内容は天和以後のものではあり得ない。寛永から延宝頃にかけての二の丸初期の殿舎の状態を伝えるものと考えてよい。

## 2. 小広間の建築

小廣間は上段、次之間、そしてこれに鈎の手に三之間が続き、入側(畳縁)が廻り、前面には切目縁が付く。上段、次之間、そして表舞台が一直線上に並ぶ。上段、次之間を結ぶ上・下の線と上段と表舞台との線とが直交する本丸大広間を古式とすれば新式の座敷配列をとっている。上段は4間に2間の16畳、次之間は柱間3間に3間(実長4間四方)の32畳、三之間は柱間3間に7間(実長4間に9間)の72畳。入側(縁通り)は東面、西面ともに2間はば、南面・北面ともに2間半はばで、(嘉永6年、即ち二の丸再興後の小広間図では北面の縁通のみ1間半と狭くなっている)(付図3)、総面積145坪となる。この三之間の広さについては、図によって(例えば文化元年二丸御造営図(巻頭図版2下))。この図は文化元年6月24日二の丸焼失直後に作成された再興計画図とみられる)実長4間に9間半と取れるように描かれていて、南北の長さにおいて半間分の差がある。

文化6年(1809)4月再興落成してから明治15年まで存在していた二の丸につき、「尊皇事蹟」(矢野頌藏著)では、

松の間(三之間のこと、筆者註)、七十二畳。唐紙南面四枚、松に牝雉。西十四枚、松。北雄雉の画。惣金地、東洋の筆……

と記述している。七十二畳とあるから、4間に9間であったと考えられ、従って小広間の規模は創建当初から幕末まで変化がなかったものとみてよい。<sup>94</sup>

小広間は、本丸大広間の約6割7分程の広さであり、大広間に比べて間取りが単純化され、規模が縮小されているのが注目される。小広間と称される所以である。しかし次之間と三之間との間の襖を取り払って使用すれば120畳の大室となり、一空間の規模としては大広間相較べくとくにおとるものではない。前方に曲折して接続する客の間は、本丸大広間の鹿の間、即ち「色代」が析出、変様したものと考えられるが、この客の間は上・下の2室、総面積97.5坪で遠侍を除けば小広間に次ぐ規模をもち、従ってこれを加えれば優に大広間を凌駕する。

寛永の二の丸創建時において『引証記』は「小広間」とするのに対し、『治家記録』は「大広間」としている。<sup>95</sup> 治家記録中の二の丸大広間なる呼称は寛永20年6月まで続くが、やがて正保元年10月12日、嗣君(綱宗)の使用例から小広間になり、以後は小広間の呼称を続ける。二の丸の居館を独立の屋敷として取り扱う立場からは、殿舎群の中心となる曙れの建物を大広間と称して

も、当時の慣例からは一向に差し支えないし、とくに150坪にも及ぼうとする独立棟に対してはあながち誤った呼称とは言えない。しかし仙台城総体としてみると、すでに本丸に大広間が存在するので、あえて小広間と称して区別したものと思われる。<sup>38</sup> 『引証記』はその点を意識して検別していたのに対し、『治家記録』の編者には暫くの間なお躊躇するところがあったためであろうか。

一屋敷内に晴の儀式関係の空間として大広間、小広間の二つの建物を持つ場合が近世初頭の大大名邸にみられるが、大広間の建築が遅れるか、あるいは何らかの理由でこれを欠くときに小広間がその機能を兼ねるということはあるが、当初から屋敷の中心施設として小広間を建てる例は余りみられない。

伊達家においては寛文度の江戸上屋敷においても中心建物が小広間であり、この名称は仙台城、江戸上邸ともに後世まで用いられ、通常の大書院、表書院の呼称を採用しなかった。要するに寛永以後においては主要中心建物を常に小広間と呼称するのが伊達家の伝統となっていた。

小広間の奥に続く書院は上之間(3間に5間、30畳)、次之間(3間に4間、24畳)、厨間に縁通りを付し、78坪の広さをもつ。治家記録では常に書院と記されているが、創建期の引証記には大書院とある。書院の裏には書院勝手が付いていた。

小広間上段の間の床、棚、および脇壁は金の張り付け、次之間の南面、東面、そして三之間の東面、北面は障子で、上に欄間を設けていた。また次之間と三之間の境の襖、三之間の西面の襖はともに金襖であった。

元禄以前まで小広間奥にあって活躍していた書院においては床の張り付け、腰障子の張り付け、襖などにはすべて墨絵が画かれ、意匠的にも絢爛たる小広間とは対照的であった。<sup>39</sup>

玄関より小広間に至る間に徒之間(40.5坪)、広間(実長3間半に6間)、次之間(同3間半に4間)、中之間(同3間半に7間。中之間、次之間、広間は合して一棟を構成。前面に縁側、背後にそれぞれ夜着部屋を有する。総面積123.5坪。この棟を総称してまた広間と言う)、虎之間(同3間に7間。縁側、夜着部屋を含んで42坪)の、いわゆる遠侍部分が、そして客之間が介在する。この関係は本丸の場合と同巧であるが、客之間が加わり、より延長され、拡大されているところに相違がある。

客之間、焼火之間は上・下の二室より成り、御座間、御寝所はともに上段をもった形式である。客之間、焼火之間、伺公之間(連歌之間とも云う。二の丸指図にはここの名称が欠けている)には床が設けられている。小広間、書院とともに客之間、焼火之間、伺公之間は比較的上位の座敷であることを物語り、いずれも上・下の二間構成をとる点、他室との格の差を窺うことができる。

遠侍、客之間、小広間、書院、御座間、御寝所は創立期の二丸殿舎構成のいわば骨格をなす

ものであり、そのうち遠侍より書院に至り、各棟の線を交互に水平、垂直に置きながら、東北より西南にわたって斜の方向に、すなわち階段状に連続させていて、配列上の大きな特徴となっている。そして、それにもかかわらず客之間の、床のまを背にした上・下の線、小広間の同じく上・下の線、書院の同じく上・下の線は同一方向に統一されている。

客之間の南面、小広間の東面、南面、書院の南面はともに開放され、この部には腰障子が施設され、従って採光上も有利である。小広間では座敷利用の面で、上段と次之間と縁通りによる方法と、次之間と三之間と縁通りとによる方法と、二通りが指摘できるが、その配置と間取りと採光とが巧く工夫されている。また小広間の上段と次之間とを結ぶ結ぶ線上に表舞台が位置し、上君は小広間の床のまを背にした観能が可能であり、また小広間と客之間で舞台を抱く形になり、それらの間に格好の観劇空間を形成し、客之間の前面は脇正面として利用されるなど、建築計画上もすぐれた配慮がなされている。

ここでは本丸のように大広間を中心に、そしてそれを最前面に置く配置方法から離れて、むしろ諸建築の相互関係が重視され、総合によって効果を発揮すること、そして使用上の利便ということが強く出されているようにみうけられる。

敷地の西南隅やや小高いところに蔵が配され、御座間の前庭には池があり、前庭前の土手を越えた小高い位置に数寄屋関係の建物が置かれ、数寄屋、鍍之間、数寄屋台所、数寄屋書院(か)を備え、御座間、書院から長い廊下によって連絡し、また二の丸敷地の正面南より路地を通り、「ひとやどり」を経て同じく数寄屋に達するようになっている。

正面の詰之門に入ってやや右折して表玄関に到るが、向って左側の堀地門を通り、舞台後方を廻って小広間、書院に達する径路も工夫されている。詰之門より右手の廐の前を通って台所玄関、さらに遠侍の裏手の台所と惣御次との間に設けられた中之口に導かれる。

北側の北門(後の台所門)の線と、以上の諸建物との間の空白の地が奥向建物の存在する敷地に当たると考えられるが、この二の丸指図にはその建物の記人が全くない。未だ計画に無かったためか、意図的に欠いたものか不詳である。この図の北門の線がほぼ二の丸敷地の北限と見做されるが、これは正保年間仙台北城下図中の二の丸敷地と較べても納得できる。即ちこれが初期二の丸敷地の限界であったと考える。

すでに述べたように、元禄を境に二の丸殿舎の構成に大きな変化があったが、小広間の近辺で元禄改造後の大きな変動としては、まず書院が失われ、遺ったものを書院勝手座敷を「元御書院」と称するに至ったこと、もとの御座間の位置に内対面所(奥対面所)を新設したこと、これに伴って小広間を表対面所とも呼ぶことがあること、小広間から書院に至る廊下の出隅の位置に馬場座敷が新設されたことである。

内対面所は元禄9年(1696)、上段の工事を竣えることによって完成した。上段、次之間、三

之間と裏の座敷および附属した内舞台から成り、全体で81坪の広さをもつ。上段、次之間、三之間、舞台が一直線となっているのも新しい形式と言えよう。三之間、裏座敷、舞台のあたりが旧御座間の位置に相当する。二の丸の馬場座敷は天和元年(1681)9月に竣工している。即ち治家記録に

二丸新馬場馬御覽ノ座敷落成ニ因テ御出御御膳<sup>五</sup>侍食伊達将監殿石川主馬殿伊達兵庫殿  
小梁川修理黒木上野佐々伊賀於御次奥山大炊ニ料理ヲ賜フ、畢テ於新馬場馬御覽乗初アリ、  
中地半右衛門馬御覽ノ座敷作事奉行ヲ命セラル落成ニ因テ鞆一口賞賜セラル

天和元・九・廿二

とある。馬場馬御覽ノ座敷を略して馬場座敷と称するが、この座敷の前面にはこの時同時に馬場が新設された。

小広間の性格を知るにはその用法をみる必要がある。以下に他の主要殿舎のそれと比較しながら簡単に触れて置きたい。

### 3. 小広間の性格

元禄初年を中心に二の丸殿舎の構成に大きな変化のあった事実を指摘したが、その前後において如何なる差異が使用面にみられるか。

年始御礼は最も重要な儀式であるが、本丸時代においては大廣間が、二の丸においては専ら小広間が中心であった(表35参照)。御座間で連枝、奉行、近習とともに祝儀が行なわれ、ついで一番座、二番座の召出以上の御礼は小広間で行なわれる。諸役人、大番組以下の諸士の目見も小広間である。書院においても一時、母公、北方の使者、一門衆の嗣子などの御礼が行なわれることもあったが、これは年始儀式としてはいわば従属的なものであったようで、書院で行なわれないこともある。

元禄改造後は一時儀式的中心が内対面所に移ったが、後に再び元に戻り、以後幕末まで変りがない。二番座が二日目に行なわれるようになったのが改造後における主な違いであって、場所の移動はない。

月次の御礼もまた欠くことの出来ない行事であって、本丸では大廣間で行なわれたが、二の丸に移ってからは一時書院がその中心となったが、綱村の延宝6年(1678)頃から全く小廣間に移行した(表36参照)。元禄改造後は書院が消失し、内対面所が新設される。連枝、奉行は御座間で、一門衆は内対面所、それ以外は小広間とに分けられる。なお天和元年頃から治家記録において対面所の呼称が現われるが、全く小廣間と同じである。<sup>29</sup> 狭義には小広間のうち、上段と次之間によって構成する一画を呼ぶ場合が多い。<sup>30</sup> 内対面所が出来てからは一般に表対面所と呼んで区別する。

本 丸	御座間	書 院	大 廣 間
寛永6・1・1	○		⊙
丸 (元禄改造前)	御座間	書 院	小 廣 間
万治3・1・1	○		⊙
延宝8・1・1	○	○	⊙
1・2	○	○	○
天和2・1・1	○		⊙
1・2	○		○
1・3	○		○
丸 (元禄改造後)	御座間	内対面所	小 廣 間 (表対面所)
元禄10・1・1	○	⊙	○
1・2	○	⊙	○
1・3	○		○
享保4・1・1	○		⊙
1・2	○		⊙
天明9・9・1	○		⊙
1・2	○		⊙
文久2・1・1	○		⊙
1・2	○		⊙
備 考	寺院家は除く。 ⊙は一番座、二番座で年始御礼 の中心をなす。		

表35 年始御礼と建物との関係

[治家記録、仙台城年始入賀次第書による]

Table 35 Location of ceremonial new year's greetings

御礼行為の場合、小廣間(表対面所)は上段と次之間(下段とも云う)、さらにはその縁通り(この部は2間幅の畳縁)とを上・下の軸として儀式場に用いる時と、次之間と三之間(この時は小広間の上之間、下之間と云う場合がある)を上・下軸として一つの式場として使う時とがあるが、月次の御礼のときは、例えば「御対面所へ御出……上段二御着座当番并在府ノ一家一族衆当日ノ御礼畢テ間ノ襖障子間之諸役人一同ニ御礼」<sup>22</sup>とあるように、一家、一族衆の御礼は前者、諸役人ノ御礼は後者と、同時に二様の座敷利用が行なわれ、これが定型化している。

その他の主要な儀式について、元禄改造の以前と以後とに分けてみる(表37参照)。これらの儀式は伊達家において戦国人名の時代より引き続き行なわれて来たものが多いのであるが、<sup>23</sup>改造後に永く内対面所に移行したものが無いのは注目すべきである(初卯の儀式が一時、内対面

本	文	御座間	書院	大廣間
慶長18(11・15)				一家、一族
丸 〔元禄改造前〕	御座間	書院	小広間	
寛永20(6・1)			一門、一家、一族	諸士
明暦3(2・15)			一門、一家、一族	諸士
延宝3(10・28)			一門、一家、一族	
延宝6(3・28)			連枝	一門、一家、一族
天和2(2・28)				一門、一家、一族
丸 〔元禄改造後〕	御座間	内対面所	小 (表対面所)	
元禄7(11・15)	連枝・奉行	一門	一家、一族、諸役人	
享保9(4・28)	連枝・奉行	一門	諸士以上	
宝暦2(11・28)	連枝・奉行	一門	一家、一族、諸役人	
文政11(8・1)	奉行	一門	一家、一族、諸士以上諸役人	

表36 月次御礼と建物との関係

〔治家記録、御入部以後諸御式並御参詣等之覚による〕

Table 36 Location of ceremonial monthly greetings

	連枝	政治所	謡初	法園	初御	玄徳	数会初	講釈初	什舞初
延宝4~8 (元禄改造前)	連枝間	御座間	書院	小広間	小広間	小広間	御座間		
元禄8~16 (元禄改造後)	連枝間	御座間	伊座間	小広間	小広間	御座間	御座間	内対面所	内対面所

※ 元禄14・1・6は内対面所にて行なわれる

表37 主なる年中儀式と建物との関係

〔青山公治家記録による〕

Table 37 Location of main ceremonies

所で行なわれるが、後に元へ戻る)。伝統的な諸儀は御座間と小広間を軸として営まれるものであることを知る。書院はもともと儀式、対面の場としての性格はうすいというべく、謡初の儀が以前に書院で行なわれていたのも、謡初が対面ではなく、響応を主としたものであったからと思われる。書院に上段の施設が無いのもその点から理解されよう。

謡初の儀は江戸藩邸においても書院で行なわれ、大名、旗本衆を招請しているが、仙台ではこの謡初に参加するものが自家の家臣に限られているのも、城館におけるこの種の儀式の特色とみられる。<sup>94</sup>

天和2年より元禄6年に至る間は、書院が無くなり(直ちに破却されたものか何うか不詳であるが、少くともこの時期には使用例がみられない)、そして内対面所は末だ造立されない時

期に当るが、この時には玄猪の儀は御座間で行なわれたが、<sup>55</sup> 謡初は小広間で行なわれた。<sup>56</sup>

講釈初、仕舞初の儀式は新設の内対面所、内舞台(内対面所の前面に接続する座敷舞台)とともに新たに加わり、以後二の丸における恒例の行事となったことも注目に値する。<sup>57</sup>

つぎに饗応、接客の面についてみると、將軍家より鶴拝領の上使の応対は、寛永17年の時のみ書院で面接し、御座間で饗しているが、以後の寛永18年、同20年、正保2年、慶安2年等の例ではいずれも小広間で面接し(鶴を小廣間上段に置く)、書院で饗応し、表で(小広間で)能、数寄屋で茶、<sup>58</sup> 鏝之間<sup>59</sup>に出て帰駕という順序で行なわれている。<sup>60</sup> その拝領の鶴は直ちに家臣達に配分されるが、「朝御拝領ノ鶴御披、御一門中ハ書院、一家一族ノ族ハ小広間、御家老及ヒ番頭、御相伴ノ輩ハ御談合ノ間、焼火ノ間廊下、惣上ハ御用ノ間ニ於テ御料理<sup>61</sup>」を賜っており、饗應の場として、書院は最上位の使われ方を示している。

延宝3年(1675)伊達綱村初入部の際に、父君・母方よりの質使は書院で拝謁し、焼火之間で料理を賜り、稲葉氏(綱村夫人の里方)よりの使者は書院で拝謁し、客之間で料理を賜り、そして諸大名よりの質使はすべて小広間で接見し、客之間で料理をうけている。<sup>62</sup> 即ち使者の性格により、接見の場所、饗應の場所をそれぞれ異にしている。そして書院がかく拝謁の場所として用いられることがあっても、小広間に較べてより内向きの性質をもつことが特徴的である。

奉行職(家老職)を命ぜられるとき、命ぜられるのは御座間で、その御礼は小広間で行ない、そして料理は書院で賜る。<sup>63</sup>

元禄4年(1691)、即ち書院も内対面所もともに無いかなしは用いられていない時期に、田村右京大夫参勤に就いて挨拶のため登城した際は、右京大夫はまず小広間に着座し、次いで御座間に請じ入れられて面接し、かつ饗をうけている。<sup>64</sup> 新たに内対面所が出来た後の元禄10年、鉄牛和尚登城し、内対面所で暫く待ってから御座間において饗された。<sup>65</sup> 八重姫入興調済を賀するため、元禄11年、水戸家より参じた使者はまず客之間に案内され、表対面所で接見し、口状を述べ、盃を賜っている。<sup>66</sup> 元禄11年8月、「公去年御能命セラレ且御能拝見ノ質儀トシテ能アリ。一門一家一族衆諸役人及大番組等ニ至テ拝見ヲ命セラ」れた時は、一門衆、同子息、一家、一族衆は対面所(小広間)、家老衆は内対面所裏座敷、大番組は元焼火間上ノ間、小性組番頭以下江戸番頭、出入司は同下ノ間、芝田文久郎は焼火間(新焼火間)、小性組小共見習、メ切番以下は大台所廊下において料理を頂戴している。<sup>67</sup> 小広間で一門、一家、一族衆等に料理が饗せられることもしばしばあったが、儀式を伴うか儀式的性格の強い場合が多い。また内対面所も裏座敷は家臣、寺院衆の料理の場となることがある。さらに焼火間、客之間、同公間等も、身分に応じ、機に臨んで饗應の場所としての機能をもちうるものであった。<sup>68</sup> これに比し、書院は常時饗應を考慮に入れた格式高い接客専用の部屋であったと思われる。

君、臣の間に行なわれる。拝謁、命令、御礼といった行為は最も頻りにみられるが、年始、

		御 座 敷	造 次 間	書 院	小 出 置 所 (裏 對 面 所)
延五〇	接見・拜命		○父君、母公ノ使者 ○伊達基実(妹婿殿ノ婿)	○幕府馬買衆 ○父君、母公ノ使者 ○殿威大名ノ使者 ○寺社、廟等ヘノ名代 ○門、一家、一族ノ休暇、參府	○幕府馬買衆 ○公方ヘノ使者 ○禁中ヘノ使者 ○母方ノ使者口伏ヲ述べ ○諸大名ノ使者 ○寺社、廟ヘノ名代 ○門、一家、一族ノ休暇、參府
	使者・役目等ヲ命ズ	○禁中ヘノ使者ヲ命ズ ○父君、母公ヘノ使者ヲ命ズ ○奉行、大番頭、奉楽民等ヲ命ズ	○公儀ヘノ使者ヲ命ズ ○父君、母公ノ使者ニ書ヲ授ケ ○寺社、廟等ヘノ名代ヲ命ズ ○近習、奉一家ヲ命ズ	○公方ヘノ使者ヲ命ズ ○父君、母公ヘノ使者ヲ命ズ ○寺社、廟等ヘノ名代ヲ命ズ ○小姓組頭、老健組士頭ヲ命ズ ○門、一家、一族ノ休暇ヲ命ズ	○公方、公儀ヘノ使者ヲ命ズ ○禁中ヘノ使者ニ書ヲ授ケ ○門、一家、一族ノ休暇ヲ命ズ
	御 札	○御成リ(家出定)ノ御札	○御成リノ御札 ○一門縁組ノ御札 ○曹味命ゼラル御札 ○出入可、納戸役、渡布作事奉行、江ノ出入司、高川老命ゼラル御札	○一門ニ命ゼラル御札 ○家、一族ノ家督、隠居、初メノ御札	○奉行儀命ゼラル御札 ○一門、一家、一族ノ縁組ノ御札
		御 座 敷	燒 火 間、 元 燒 火 間	内 對 置 所	小 出 置 所 (裏 對 面 所)
延五〇	接見・拜命	○公方、公儀ヘノ使者 ○父君、嗣君、北方ノ使者 ○一門參府		○公方、公儀ヘノ使者 ○殿威大名ノ使者 ○大名ヘノ使者 ○寺社、廟等ヘノ名代 ○一家、一族參府	○大名ノ使者 ○一家、一族嫡子參府
	使者・役目等ヲ命ズ	○公方ヘノ使者ヲ命ズ ○奉行、若老、大番頭、武頭、近習、小姓組頭ニ不斷頭、名掛頭ヲ命ズ ○所替、役目付、加増ヲ命ズ ○門、奉行、若老等ニ休暇ヲ命ズ		○公方ヘノ使者ヲ命ズ ○仙洞ヘノ使者ヲ命ズ ○寺社、廟等ヘノ名代ヲ命ズ ○家、一族ノ休暇ヲ命ズ	
	御 札	○清老、永代番頭、番頭命ゼラル御札 ○在所仔細ノ御札 ○奉行縁組ノ御札 ○奉行、若老、給奉行、旗本足輕頭、小姓頭、小姓与頭、近習命ゼラル御札 ○一門休暇命ゼラル御札		○家、清老、曹味、孟須、藏命ゼラル御札 ○分知ノ御札 ○一門、一家、一族、番頭格以上ノ家督、隠居、初メノ御札 ○大番頭、給番頭、中次役、武頭、足輕頭、給奉行、少小姓組頭、不斷組士頭、留守番頭、評定所役人、事小姓頭、名掛頭等命ゼラル御札 ○一家、一族ノ休暇命ゼラル御札 ○御成リ、入院ノ御札	○是所以上、先小姓頭、城番・番色等ノ奉行、隠居、初メノ御札 ○當出ノ御札 ○繼允許ノ御札 ○入院ノ御札
延五〇	接見・拜命				
	使者・役目等ヲ命ズ				
	御 札				
		御 座 敷	燒 火 間、 元 燒 火 間	内 對 置 所	小 出 置 所 (裏 對 面 所)
延五〇	接見・拜命				
	使者・役目等ヲ命ズ				
	御 札				

表38 接見、拜命、御札と建物との関係

〔青山公治家記録による〕

Table 38 Location of audience and greetings with Daimyo

月次の御礼以外のものについて、改造前後に分けてみると(表38参照)、改造前では諸大名の使者、公儀関係の使者との接見が小広間に限られていること。また使者を命ぜられるときの使者の性質から推して、小広間には御座間、焼火間、書院に較べて、より対外的、公式的傾向がみとめられる。御礼関係については、奉行職のときだけが小広間で行なわれる。一門、一家、一族の継目御礼も行なわれるがその例数が極めて少く、一般には他の御礼は焼火間、書院がむしろ中心である。この時期の御座間では、使者や重役の拝命が行なわれ、接見ならびに御礼の例は殆んどみられない。御成りに対する御礼は、まれには御座間のこともあったが、専ら焼火間で行なわれていた。

改造後は御座間と内対面所とにこれらの諸行為が集中され、秩序化される傾向にあり、その場合、御座間では奉行、若老等の重職、および近習諸役の御礼、そして内対面所ではそれ以外の表諸役の御礼というように区別され、小広間では役目の御礼は影をひそめる。一門、一家、一族等大身侍が仙台へ参府した時の拝謁や、在所への休暇の命令を受ける時、そしてその御礼に関しては、一門衆が御座間、一家、一族衆が内対面所と、これも区別されるようになった。諸大名よりの使者は依然として小広間で接見するが、公儀への使者は御座間、内対面所で拝謁するようになる。これは公儀への使者は自家の家中より任命するため、他藩よりの使者とはおのずから区別した扱いをうけるようになったものであろう。焼火間は改造前にはその利用範囲が広がったが、改造後の新焼火間は藩主が親しく出座して使者や家主に接する場所ではなくなるのも大きな変化と言えよう。むしろ奉行、若老等による主君の命令伝達の場、家臣への料理の場としての性格を強めてゆく。

即ち、丸に於てはまず書院の重要性が薄れ、ついで改造を機にして対面関係に重点がおかれ、対面関係の強化、格式化、秩序化という方向が顕著に打ち出されている。

以上のように重要な儀式、対面、接客、饗応、御礼等の場合に小広間(表対面所)、書院、内対面所、御座間等がその主役をなしていたことが理解される。なお他にこれらの補助的な役目を持った諸部屋がある。焼火間、向公間、客之間であり、天和年間に新設された馬場座敷である。

初卯の儀式は小広間(表対面所)が中心の儀場となったことはすでにみて来たが、その時の具足餅を家中に分配するのを例とするが、元禄元年「於御対面所下之間伊達将監殿大藏殿御具足餅御酒頂戴於焼火間諸役人頂戴於御次H野鉄船佐藤七之丞頂戴於大所小姓組右筆茶道ノ輩頂戴於御用間上間定供大番組番外同朋頭中ノ間徒組頭組付士大所人坊主組頭同朋坊主馬方下ノ間足輕小人諸職人馬取駕籠ノ者等頂戴<sup>87</sup>」とあり、即ち焼火間では諸役人が頂戴する。この関係は元禄4年の時にも同様で、元焼火間で奉行衆、若老以下諸役人が具足餅を頂戴していて、新焼火間でなく元焼火間に受け継がれている<sup>88</sup>。新焼火間は藩上の饗応の場となることもあったが、元焼火間にはそのような例はみられない<sup>89</sup>。

要するに焼火間は元禄改造後には藩主との直接の拝謁、命令、御礼等は全く行なわれなくなり、父君、母公、北方、嗣君等伊達家個人の使者や家士に対する饗応の場としての性格がより強くなって来た。元焼火間は元禄以降、若老、出入司、納戸奉行、目付等の詰所でもあり、<sup>30</sup>従ってここでは奉行、若老等による君命の伝達が行なわれるに至っている。元禄の改造後もしばらく元焼火間は上・下の二間より成っていたが、<sup>31</sup>後に改めて一間のものとなった。新・旧焼火間を通じて言えることは、元来その位置が御座間、休息所に近いいためか、その用途も御座間の延長、御座間の補助的な色彩の強いのが特徴である。

小広間の裏にある伺公間はまた連歌間とも称される。<sup>32</sup>上之間と下之間より成り、上之間をとくに連歌間、その場合に下之間を伺公間と言って区別することもある。上之間は実長3間に2間、下之間は実長3間に4間、床・棚を備え、表側にくれ縁、裏側に1間半の縁通りがある。連歌間では毎年正月七日の恒例の連歌会が催された。<sup>33</sup>連歌間の呼称のある所以である。その時ここで連歌衆に料理が饗されることもある。<sup>34</sup>また「奥方安鎮龍宝寺執行因テ於連歌間料理<sup>35</sup>と寺院衆の饗応に用いられているし、元禄6年能始めのときは、一門衆には馬場座敷、奉行衆(家老衆)には元焼火間、そして一家、一族衆にこの連歌間で料理を賜っている。<sup>36</sup>伺公間は諸士の詰所の一つであり、伺公間詰と称され、彼等の家督、雜日御礼等がしばしば行なわれ、その廊下では大所人等の微出御礼もあった。<sup>37</sup>寺社への名代が伺公間で拝謁することもあり、<sup>38</sup>また眞浄殿(將軍家の位牌を安置する)が落成し、その名代と造営奉行が登城して、対面所で拝謁した時に造営副奉行が伺公間下之間で拝謁している。<sup>39</sup>天和3年には一門衆の在所への休暇が御座間で出され、一家、一族衆の休暇はこの伺公間で賜うている。<sup>40</sup>

元禄3年9月、日光善請成就の賀には一門、一家、一族衆へは小広間で、一家、準一家、一族衆の嗣子には伺公間で餅および料理が出された。<sup>41</sup>天和2年より元禄3年に至る間は、書院も使用されず、内対面所も未だ無い時期であることに注目するならば、伺公間に表対面所の補助的な、もしくは後の内対面所に近い用法のあることもうなずけるところである。

客之間は諸大名よりの使者を饗応するときによく用いられるが、また大名使者および一門衆との対面が小広間(表対面所)で行なわれる場合に、ひとまずこの客之間で待たされる仕組みであった。<sup>42</sup>初卯の具足餅頂戴の際にはしばしば対面所や焼火間とともに併せ用いられるが、その時には例えば元焼火間では奉行衆、諸役人、そして客之間では大番、脇番頭、不断頭、給主頭、名懸頭、新名懸頭、足懸頭等のように家上の役柄、身分等によって区別した用い方をする。<sup>43</sup>

野初めの雉の料理を総武頭中にこの客之間で振舞っている。<sup>44</sup>組頭、武頭の例が多く、焼火間とは饗応をうける家臣の性質が異っていることに気付く。「鉄牛和尚東昌寺萬壽寺御礼トシテ登城御帰城ノ砌於客間対顔<sup>45</sup>」、「於客之間極楽院年始、賀儀太刀目録拝謁<sup>46</sup>」、「於客間善導寺十帖一柄献上入院ノ御礼<sup>47</sup>」のように寺院との対面、入院御礼にもまた広く用いられている。

客之間における特色ある用法として、一門衆嗣子の元服理髮の儀が挙げられる。「於客之間伊達安藝殿長男伊達源五郎殿元服理髮大條監物公御書院ニ御出初冠素袍袴湯掛御宇ヲ賜フ御一字及ビ兵庫ノ名目録柴田中務御前ニ授ク公御手自賜之」<sup>55</sup>、「石川松之助殿伊達兵力殿伊達孫吉殿各元服命セラル於客間松之助殿<sup>書上</sup>理髮柴田源四郎<sup>軍阿</sup>兵力殿<sup>書上</sup>理髮柴田土佐<sup>軍阿</sup>孫吉殿ハ前年中刺セラルニ因テ無此式」<sup>56</sup>。この他伊達卯之助の元服(元禄3・12・14)、伊達吉之助の元服(元禄15・9・1)、三沢門弥の元服(宝暦8・6・9)等いずれも客之間においてその理髮の儀式が行なわれている。<sup>57</sup>

書院の裏にある書院勝手座敷は「書院勝手ノ間」とも呼ばれる。書院裏座敷とある場合、ここを指すのか、あるいは書院北側の縁通りの部を言うのか明確でない。書院勝手では儀式、饗饋の例が見られず、その内容を具体的に知り難い。書院が破却、消失してからはここを元書院と称しており、文化元年の二の丸焼失後、再興された時にも依然として元書院と呼び、その形も文化以前の状態を踏襲しているが、字義の示すまま元の書院とみるのは誤りで、実は元の書院勝手に当たるのである。「書院ニ御出ノ序御座次ノ席渋谷助大夫富田二左衛門各嗣子書院勝手ノ間小姓組右筆ノ嗣子七人各太刀馬代ヲ献シ拝謁」<sup>58</sup>と、小姓組、右筆の嗣子等の拝謁がここで行なわれるが、一般には「書院勝手座敷ニ於テ品川小姓組齊藤作右衛門子十三郎……家督ノ御礼」<sup>59</sup>のように品川小姓組(綱村隠居の品川屋敷付きの小姓組)の嗣子の家督および初めての御礼等に限って使用されているところが特異である。

小広間脇の馬場座敷は、規模は小さいが上・下の2間より成る。実長3間に6間、即ち18坪の建物である。寛永の二の丸創立期にはその名は未だ見えていない。すでに述べたように治家記録によれば書院の語および用例は天和2年頃よりみられなくなり、逆に馬場座敷は天和元年頃より現われてくるので、書院の消失と馬場の設置、馬場座敷の呼称の確立とは互に関係があったものと考えられる。

天和元年9月27日、綱村の妹の夏姫の婚儀が馬場座敷で行なわれ、「夏姫御方今日伊達安房殿へ婚禮ニ就テ伊達将監殿屋敷ヨリ登城、堀地門ヨリ馬場座敷ニ入セラレ御祝儀アリ……夏姫御方客之間重縁際ヨリ乗輿、玄関へ徒組昇之式儀へ……」との記事が見えるが、馬場座敷へ堀地門を経て入っている。

馬場座敷の呼称の生ずる所以は、馬場における馬術の演習がこの座敷の主目的となったからと考えるが、実際は種々に用いられている。例えば將軍家への献上の茶の試飲、<sup>60</sup>近臣に対しての茶の饗応、<sup>61</sup>家臣よりの茶の奉饗など、茶事に関する用例が多くみられる。元禄初年二の丸の大改造後は新築の教習屋、園等に専ら茶事が移ったためか、このような例がなくなる。御座間の圖の普請中は藩主はここを居間の如くに使用している。<sup>62</sup>

「於馬御覽所晩殊將監殿侍食」<sup>63</sup>、「巳刻表ニ御出、詰所アル諸役人拝謁、能興行……於馬場

座舖公湯漬上之於連歌問御一門衆家老衆へ後段等出」<sup>68</sup>「直ニ馬場座敷二人セラレ晩殊、於外舞臺岩能三番」<sup>69</sup>等馬場座敷は藩主の食膳の場ともなったし、「將監殿若狭殿敷馬殿助三郎殿田手亥之助殿砂金臨古亙理孫吉へ御能拝見命セラレ於馬場座敷料理<sup>二汁</sup>ヲ賜フ」<sup>70</sup>、「能始メアリ御一門衆及在府ノ一家一族衆以奉書登城見物、詰所アル役人并大番組ノ輩ニ拝見命セラル……於馬場座舖御一門衆、於連歌問一家一族衆、於元焼火問家老衆大町備前茂庭下野奥山長十郎古内源吉、料理<sup>二汁</sup>ヲ賜フ」<sup>71</sup>とあるように一門衆に対しここで料理が与えられている。また幕府の奥州馬買衆に料理を享している例もある。<sup>72</sup>

藩上の食饌といい、幕府の役人に対する馳走といい、はたまた上級の家士に対する饗応といい、能興行とともにこの座敷が利用される場合が多いが、書院に類似した性格が認められる。これは小広間の前に表の能舞臺があり、小広間脇に馬場座敷があり、互いに近接した位置にあるためにもよろうが、小広間の奥にあった書院が失われることにより、その役割を一部この馬場座敷が受けついでものと見られないこともない。

以上、一見複雑に見える二の丸の殿舎も、個々の建物の間取り構成は上・下の関係を強調して表現され、主要建築相互は階段的に曲折して配列されているが、同じく線的な繋がり为基础とする。また諸建築ないし諸部屋の用いられ方をみると、儀式・対面・饗応等殆んど藩主とその家臣によってとり行なわれ、城館における諸行為の主軸となっている。二の丸殿舎の構成も個々の建築の間取りも全くこの関係をもとに成り立っている。元禄の改造はこれを建築の上で更に充実し、明確にしたものに他ならない。そしてそれらの中で、一貫して主軸の中心的役割を果たしているのは小広間であったことが知られるのである。

註(1) 忠宗君治家記録引証記 寛永15年、同16年條

(2) 茂庭家記録 貞元君六 寛永16年條(仙台市史資料編)

(3) 義山公治家記録

(4) 紹山公治家記録 文化元・6・24 是日仙臺二ノ丸及ヒ中奥天災ニ罹リ堂宇盡ク灰燼ス、之ヲ幕府ニ聞ス

(5) 仙台城享和二年御家作御絵図写(宮城県立図書館)、仙台城文化元年御造宮御絵図写(宮城県立図書館)、嘉永六年、御二丸御城中並御中奥下水抜溝御絵図(小倉強・仙台城の建築所収)、御二丸御家作水抜御絵図(斎藤報恩会)及び御絵図(登米伊達家文書)

(6) 背山公治家記録 元禄3・10・22

(7) 同 元禄4・4・2

(8) 同 元禄3・11・11「御持仏堂木造始」

同 元禄3・11・13「御持仏堂欄初アリ」

同 元禄3・11・16「御持仏堂地鎮」

同 元禄4・1・8「萬善堂柱立」

同 元禄4・4・26「萬善堂安鎮」

- 同 元禄4・4・27「御堂御連座」
- (9) 同 元禄4・3・26「教寺屋造畢ノ賀儀」
- 同 元禄4・4・30「新造ノ園開アリ」
- (10) 元禄3年すでに新焼火間は設けられていたと考えられる。  
 青山公治家記録 元禄3・12・13の条に「地下刻於御新宅焼火間大島良設講論語」とある。新宅（新休息所のこと）にも焼火間が施設されたことが分かるが、これによって以後焼火間は二ヶ所あることになる。はじめは従来の焼火間を元焼火間と称することもあったが（元禄4・1・16）、やがて元禄5年になると元焼火間、新焼火間とはっきり区別して呼ぶようになる。
- (11) 青山公治家記録 元禄7・8・6「御新宅今日地鎮執行ニ就テ……」、同元禄7・8・11「新舞臺御被ニ就テ拜刻新宅座敷上之間ニ御着座……」とあり、元禄7年8月以降しばしば新座敷の語があり、同元禄7・9・28の記事に「白河主殿殿并當番ノ一家一族衆へ料理ヲ賜ヒ御能興行段下別新座敷ニ御出上殿殿於二之間拜跪於裏座舖上之間御能拜見其外御能拜見命セラル奉裏座敷ニ之間并焼火間御下ニ於テ拜見已上刻能始ル」とある。舞臺との関係、部屋構成からみてこれが後の内対面所であることは明らかである。なお元禄9・12・29「今袋内御対面所上段間成就安鎮」とあるから、上段はしばらく後になって成就し、ここに内対面所が完成したとみられる。
- (12) 青山公治家記録によれば元禄8年正月元日の儀式より内対面所の語が見える。その後しばらく新座敷の語を用い、元禄9年以後より内対面所の語を正式に採用している。なお以上の改造の事情について元禄3・11・22の禰宗より嗣村あての書状（伊達家文書之四所収）によって窺い得る。  
 「然者先達休所出来押付付之家共作り申候當年出来仕事之由萬善堂奉春造替申候 是ハ因縁殿山之上に而不自由ニ製故  
 急度不仕候時分萬善堂ニて先祖をも祭申候此以前之屋間西之中段高キ所之  
 由寛申候然とも御座所地形を家共之地形同様にいたし右之所えつくり申候 去十一月于新立同十三日限  
 始十六日 地鎮迄首尾能相調申候之由御假造作り出来次第只今迄之萬善堂移し候而右之家並只今迄之休  
 所物置こほし屋間並調地形仕奉春造作り申候居間之手新仕未廿二日ニ仕告之由今迄之屋間ハ其儀差置  
 内々之対面所ニ用可申か屋間庭之内ニ可致か、奉春之様子次第可為之由書付計にて合点參か候時半  
 も難計被存候へ共地鎮之作法も有之事故様子書ニも被申越ニ付申道候由委細令承知念入候儀令承知満  
 足事候…」
- (13) 御二丸御指図（宮城県立図書館）
- (14) 例えば 小広間＝対面所、学問所＝小書院、連歌ノ間＝同公間、祠堂＝因縁殿
- (15) 青山公治家記録 天和1・9・27、天和1・9・28の条
- (16) なお御入部方絵図（宮城県立図書館）等に記載された三之間縁通りの畳の敷き方から推しても9間とみるのが正しい。
- (17) 引証記には「御殿、大手御門、大書院、御小廣間、御舞臺、御徳之間、右御家同十六年五月廿六日より十二月廿日迄ノ内御棟上相済申候事」とあるのに対し、治家記録では寛永16年12月20日の条に「五月廿六日ヨリ今日マテ御蔵、大手御門、大書院、大廣間、舞臺、御歩行間上棟アリ」とある。
- (18) 他に達侍、番所の部屋名としての広間があり、また達侍棟（広間、次之間、中之間）を広間ということもある。しかし番所広間は単に「広間」と称し、大広間、小広間とは呼称上区別され、それらの間に混在のないよう考慮されていた。
- (19) 前掲御二丸御指図の書き込みによる。

- (20) 青山公治家記録 天和1・7・22「殿上御對面所ニ御出御一門一家族衆ヲ翼セラル小廣間上ノ間ヨリ下ノ間ニ至リ兩頰ニ着座<sup>三汗十釘向結</sup>能七番……」。ここでいう上ノ間、下ノ間とは小廣間上段、次之間(下段)、二之間とある次之間、三之間を指す。
- (21) 例えば同天和1・9・27「伊達安房殿登城……於御對面所拝謁太刀一腰一匹處時服十領三種二高靴上段斗出……安房殿退出ノ節小廣間上下ノ間仕切際マテ公御出修理伊賀長門山城支聞傳録ニ出」即ち小廣間次之間(下段)に於て拝謁しているが、この部を特に對面所としている。
- (22) 同 元禄7・10・1
- (23) 輝宗代(天正12年)、政宗代(天正16年)、綱村代(天和2年)の正月行事を比較してみると、その内容に殆んど変化がなく、伊達家における古くからの恒例行事であったことが分る(天正12年12月「正月仕置之事」、青山公治家記録、青山公治家記録による)。

日	輝宗代(天正12年)	政宗代(天正16年)	綱村代(天和2年)
1		陣鳴吹始・鉄炮撃始	
2	買始・書始		
3	野始	野始	
4			野始
7	連歌	連歌	連歌
8	心経会	心経会	心経会
11	談合始	談合始	政治始
14	乱舞始・詠始	乱舞始	詠始
18	織法	織法	織法
20	きう所はじめ	法問	法問
22	講摩	講摩	講摩
28	講摩結願	講摩結願	講摩結願

- (24) 例えば青山公治家記録 天和2・1・14
- (25) 同 貞享2・10・24、元禄3・10・6
- (26) 同 天和2・1・14、貞享1・1・14、元禄1・1・14、元禄4・1・14
- (27) 同 講釈始は以前にもあったようであるが、日時は末だ1月に恒例化していないし、場所も御座間で行なわれ、後のように内封面所に固定化していなかった。例えば元禄3年には11月6日に、元禄4年には4月2日に、御座間もしくは新御座間で講釈始の儀が行なわれた。より古い例は見当たらない。
- (28) 義山公治家記録 寛永17・2・7、寛永18・11・5、寛永20・10・15、正保2・10・21、正保4・12・1、慶安2・12・3
- (29) 同 正保2・10・26
- (30) 青山公治家記録 延宝3年の條
- (31) 同 延宝5・12・23、天和2・3・19、天和2・3・21
- (32) 同 元禄4・3・23
- (33) 同 元禄10・1・25
- (34) 同 元禄11・8・3
- (35) 同 元禄11・8・27

- (36) 青山公治家記録中にも類案にみられる。
- (37) 青山公治家記録 元禄1・2・12
- (38) 同 元禄4・2・11
- (39) 同 元禄4・4・11「於新宅宴儀二計九訂取物肴各御盃ヲ賜ヒ返上、公於焼火間御飯侍食佐藤七之丞畢テ遠藤内匠津田民部佐々豊前富田心崎遠山常刀富塚長門ノ儀ヲ賜フ計訂同上於元焼火間日野鉄船若老及若老並……ニ御饗ノ兼ヲ賜フ」
- (40) 同 元禄5・8・22
- (41) 同 元禄5・8・22「一、若年寄衆本焼火間上ノ間ニ可麗在事  
一、本焼火之間下之間ニ出入可御納戸奉行御目付可麗在事」  
なお、同元禄11・8・27にも元焼火間上間、下間の話がみえる。
- (42) 寛永時代の引証記中にこれに当る建築名が無い。また前掲の二丸指図中にはこの部の間取りは示されているが名称の記入がない。この指図作成当時未だこの座敷の正式名が明確に定まっていなかったためであろうか。とすれば創建期に存在せず、やや遅れて附加された座敷と想像される。延宝3年には連歌ノ間の用例が見える。  
延宝年間は連歌間、伺公間の両呼称を持っていて両者間とくに差異はない。  
青山公治家記録 延宝6・3・21「父君ノ御使者小荒井伊右衛門伺公間下ノ間ニ於テ料理ヲ賜フ」  
同 延宝5・6・1「御一門一家誰一家一族衆小廣間次ノ間片倉小十郎宿老小廣間裏座敷御奉行連歌間各請所ヲ命セラル」
- (43) 例えば青山公治家記録 延宝4・1・6、貞享1・1・7、元禄1・1・7、元禄4・1・7、元禄6・1・7、元禄10・1・7、元禄14・1・7等。正月の7日に行なわれるのが恒例。
- (44) 同 延宝4・1・6「御嘉儀連歌アリ……御連歌衆ニ於連歌間料理ヲ賜フ」
- (45) 同 元禄3・12・27
- (46) 同 元禄6・1・19
- (47) 例えば 同 延宝4・2・16「今朝御出ノ時連歌之間廊下ニ於テ瀬川伊織家督御礼」、同 延宝7・5・13「伺公間上ノ間ニ於テ古内遣酒袴美子左大夫太刀目録献上拝謁」、同 天和2・3・11「連歌間廊下大所人……各新ニ微出サル御礼目録献上拝謁」元禄以前は家老(奉行)の詰所でもあり、従って「奉行ノ間」とも称された。同 天和1・9・13「奉行ノ間廊下ニ於テ大所人久保田甚之丞頼目御礼拝謁」
- (48) 同 延宝7・8・8「寛範寺御名代村遠藤山城於伺公間拝謁」
- (49) 同 天和1・5・1
- (50) 同 天和3・10・11
- (51) 同 元禄3・9・18
- (52) 同 元禄11・8・3「水戸宰相殿少将殿ヨリ八重姫君御入興調清賀儀ノ使者安藤弥左衛門登城……客之間ニ香曾我部庄兵衛案内ス、申下刻御対面所ニ御出兵替下段ニ御着來……」
- (53) 同 元禄4・2・11
- (54) 同 貞享1・1・6「御野始ノ始於客間惣武頭中ニ料理ヲ賜フ如例」
- (55) 同 元禄10・1・25
- (56) 同 天和2・2・6

- (57) 同 元禄 4・2・8
- (58) 同 延宝 3・11・14
- (59) 同 元禄 11・9・22
- (60) 曾山公、微山公治家記録
- (61) 曾山公治家記録 延宝 3・12・1
- (62) 同 延宝 7・11・18
- (63) 同 天和 1・10・10「御献上ノ茶御試晩於馬場座敷侍食伊達將監殿石川主馬殿小梁川修理黒木上野」
- (64) 同 天和 3・11・14「晩於馬場座敷古内造酒祐芝田文之允鈴木謙安ニ茶ヲ賜フ」  
同 天和 3・12・1「晩於馬場座敷橋木虎林日野鉄松泷川助太夫福井玄孝ニ茶ヲ賜フ」
- (65) 同 天和 3・11・16「於馬場座敷伊達左兵衛殿日切ノ茶奉饗アリ」  
同 天和 3・11・18「晩於馬場座敷柴田中務茶ヲ饗シ奉ル」  
同 貞享 1・2・晦「今晚於馬場座敷遠藤内匠茶ヲ饗ス」
- (66) 同 貞享 4・5・29「御座間ノ園善請初メニ就テ馬場座敷御出已刻奉行衆御用有之、同 貞享 4・6・6  
「……御帰城、御座間善請ニ就テ馬御覧所ニ入セラル」
- (67) 同 貞享 4・5・28
- (68) 同 元禄 4・4・11
- (69) 同 元禄 12・2・1
- (70) 同 元禄 3・12・15
- (71) 同 元禄 6・1・19
- (72) 同 貞享 4・8・21「門奈助右衛門殿諏訪邊喜右衛門殿留別トシテ登城……於御対面所公御接見料理出  
土器酬酢アリ饋ノ畢リ茶ヲ饗セラル於馬御覧所候物菓子出畢テ帰館」

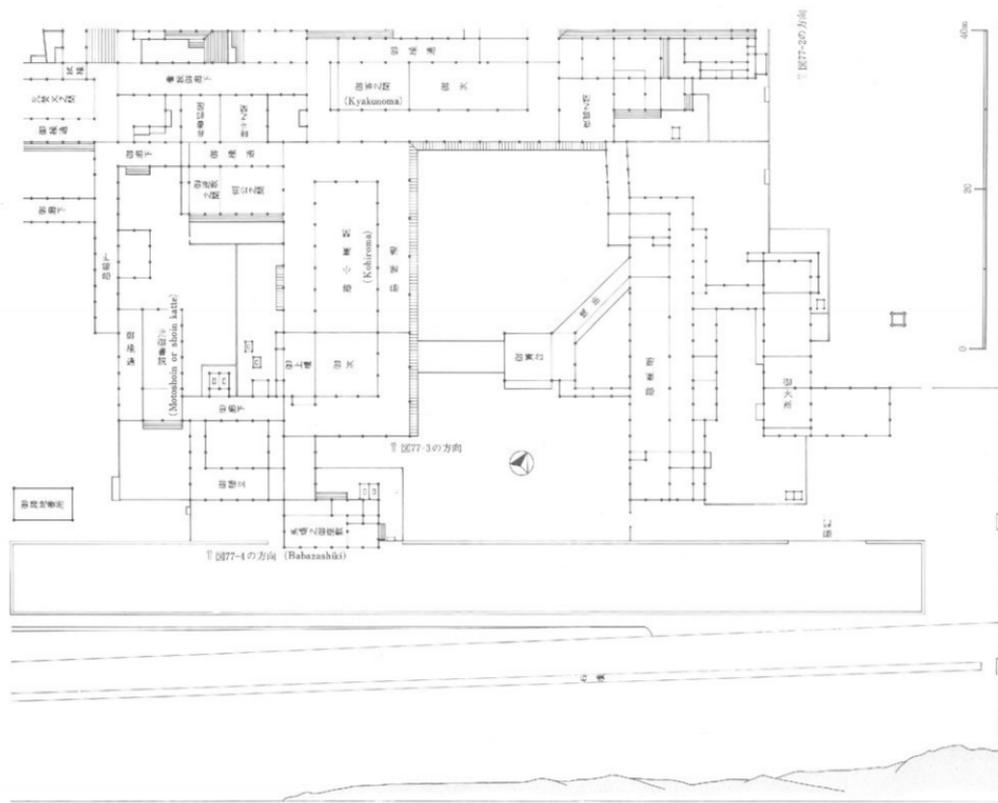


図76 二の丸小広間と周辺の建群図(幕末の状況を示す。斎藤朝恩会蔵御二丸御家作水抜絵図をもとに県立図書館蔵文化元年二丸御造営図写の柱割付を参考にして作図)(図77参照)

Fig 76 Central Ceremonial hall and surrounding structures in the secondary citadel of Sendai Castle In this figure shoin is lost. (Cf. Fig. 77)

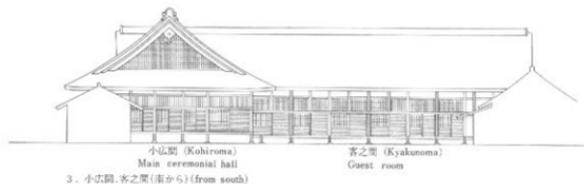
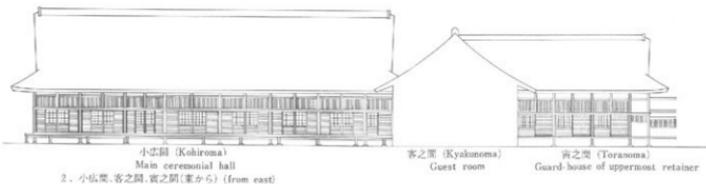
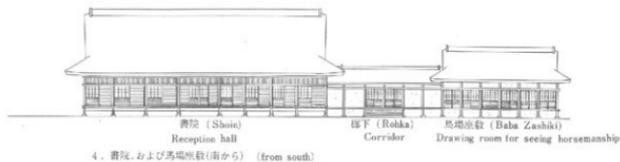


図77 二の丸表主要建物復元立面図 S-1/400 (図76参照)

Fig. 77 Profiles of Major structures in the secondary citadel of Sendai Castle Shoin is not yet lost in this figure. (Cf. Fig. 76)

## 第IV章 仙台城二の丸跡から出土した 陶磁器の化学組成について

蟹 沢 聰 史

### 1. はじめに

各地の遺跡から出土した遺物の原産地を推定することは、考古学の分野では欠かせない作業の一つである。そのため、石器については主成分あるいは微量元素組成から原産地の推定がしばしば行われている。また、土器や陶磁器などの焼き物についても化学組成の差に基づいた産地の特徴をさぐるための種々の試みがなされている。これらの試みの多くには微量元素組成が用いられているが、これには蛍光X線分析や放射化分析などの手法が必要とされ、どこでも簡単に行うというわけにはゆかない。また、焼き物の原料となる粘土や鉱物の化学組成についてみると主成分と微量成分の間にある程度の相関があるので、比較的簡単に行える主成分を分析すれば、微量成分分析を行わなくても原産地の推定が可能となる場合もある。今回は、仙台城二の丸から出土した陶磁器について原産地推定の基礎資料となるように、あらかじめ産地の判明しているものを選び、原子吸光法を用いて主成分分析を行った。なかには産地不確かな試料もある。

### 2. 分析方法

まず、出土した陶磁器の破片を水洗いしたのち、試料が大きいものは2分して、その一方はそのままダイヤモンドモーターで粉砕した後、めのう乳鉢で粉末にする。他の一方は軸葉を回転式円盤上で研磨して削りとり、粉砕後めのう乳鉢で粉末化する。小さい試料しか得られなかった場合はそのまま粉末にする。0.1g程度の試料があれば分析は可能である。0.1gの粉末試料を正確に秤りとり、白金皿上でフッ化水素酸5ml、濃硝酸5mlを加え砂浴上で加熱・蒸発乾固させる。これに濃塩酸2mlと蒸留水を加えて加熱し、完全に溶解した後200mlメスフラスコに移して蒸留水で満たす。これを原液とし、このうちから25mlを分取して50mlメスフラスコに入れ、全体でSr 1500ppm、1:100 HClの濃度になるようにSrCl<sub>2</sub>溶液と塩酸を加えた後、蒸留水で満たす。Srを加える理由は分析の際、他元素の影響を排除するためである。原液をそのままNa<sub>2</sub>O、K<sub>2</sub>Oの定量として用い、分取してSrを加えたものをFeO、MnO、MgO、CaOの定量に用いる。Na<sub>2</sub>OとK<sub>2</sub>Oは蛍光光度法により、他は原子吸光法によって定量した。分析結果は表40に示す。地質調査所の地球化学的標準試料(Geochemical standard)のうち、陶磁器の成分に近い流紋岩(JR-1、JR-2)を同時に分析し、その結果も併せて示した。

### 3. 分析結果の検討

陶磁気の原料は主として粘土鉱物や長石類、石英などの珪酸塩からなっているため、分析値は酸化物の形で表すのが普通である。表40に示した成分の他に主成分としては $\text{SiO}_2$ 、 $\text{Al}_2\text{O}_3$ 、 $\text{TiO}_2$ などがあり、とくに $\text{SiO}_2$ と $\text{Al}_2\text{O}_3$ は最も多量に含まれているものであるが、今回分析した6成分のみからでも多くの情報が得られる。今回の分析試料は、まとまったものとしては平清水の21個、大堀7個であるが、さらに切込3個、二本松1個、平清水?4個、大堀?3個、切込?2個、産地不明1個である。このなかで明らかになったことは、釉薬付のものは産地に関係せず例外なくCaOに富んでいることである(図78-1)。これは釉薬がいずれの産地のものもいわゆる灰釉であることを示す。CaO以外の組成は釉薬の付いたものと素地のみのもでも大きな差はない(図78-2)。また、平清水のものは $\text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$ に富み、 $\text{FeO} + \text{MnO} + \text{MgO}$ に乏しいグループと、 $\text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$ に乏しく $\text{FeO} + \text{MnO} + \text{MgO}$ に富むグループとに分かれる。前者は素地が白く、鉄の少ない原料であるのに対し、後者は素地が茶系統で鉄に富む原料であることを示す。そして前者では $\text{FeO} + \text{MnO} + \text{MgO}$ の変化に乏しく、後者では $\text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$ の変化に乏しい。これは、平清水焼きには2種類の原料が用いられていることを示唆するものであろう。これに対し大堀のものは全体として $\text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$ と $\text{FeO} + \text{MnO} + \text{MgO}$ とは逆相関の関係を示す。そして、平清水の磁器と陶器の中間的な範囲にプロットされる(図78-3・4)。切込の試料は少いので、はっきりしたことは云えないが、ほぼ大堀と同様な性質を示し、ややアルカリに富むようである。

また、分析した試料のうちからいくつかをX線粉末回折法により鉱物の同定を行った。いずれにも石英が存在し、次いでムライト、クリストパライトのピークが認められた。ムライトとクリストパライトは焼成によって生じたものである。表39にその結果を示す。

試料番号	石英	ムライト	クリストパライト
平清水 19	+-	-	±
26	+-	±	
27	-		
28	-	+	
切込 23	+-	±	
大堀 21	++	±	
同上(釉付)	++	-	
二本松?	++	-	+

表39 X線粉末回折法による  
鉱物同定結果  
+ 多量、  
+ あり、  
± わずかにあり。

Table 39 Mineral Composition  
of ceramics determined by  
x-ray diffraction

### 4. おわりに

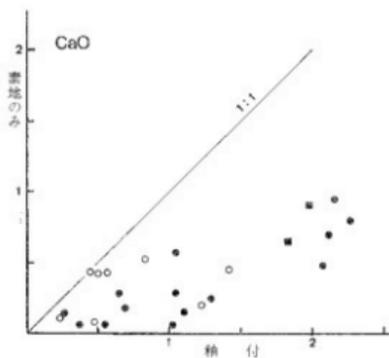
今回の試みはまだ始まったばかりであり、試料数も少いので結論的なものはないが、多くのデータを積み重ねてゆけば主成分分析のみでも産地同定にはかなり有効であると思われる。また、原料を採取した地域の地質や原料そのものとの比較によって、さらに確かな情報を得られるものと確信する。

No.	FeO	MnO	CaO	MgO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	種類	産地	備 考
1	0.88	0.006	0.58	0.23	2.76	2.23	磁器	平塚市	新製
2	1.67	0.023	0.66	0.90	1.43	12.46	磁器	伊豆	吉野山窯
3	1.54	0.023	1.83	0.98	1.45	2.57	磁器	伊豆	+
4	0.76	0.014	0.28	0.13	0.77	3.58	磁器	東京府	吉野山窯
5	0.29	0.018	1.04	0.20	0.23	5.26	磁器	平塚市	吉野山窯
6	1.40	0.019	1.41	0.34	0.34	2.58	陶器	大塚	新製
7	1.74	0.075	0.86	0.33	0.34	2.70	+	大塚	+
8	2.23	0.019	0.45	0.49	0.33	2.75	陶器	大塚	吉野山窯
9	2.08	0.016	0.44	0.42	0.33	2.67	+	大塚	+
10	0.06	0.014	0.56	0.26	0.40	3.25	+	大塚	吉野山窯
11	1.13	0.013	0.43	0.27	0.39	3.43	+	大塚	+
12	0.88	0.018	0.83	0.41	0.36	2.56	+	大塚	吉野山窯
13	0.92	0.017	0.2	0.00	0.34	2.46	+	大塚	+
14	2.78	0.057	1.22	0.47	0.32	2.03	+	大塚	吉野山窯
15	2.82	0.028	0.20	0.44	0.22	1.89	+	大塚	+
16	1.80	0.016	0.50	0.30	0.47	3.05	+	大塚	吉野山窯
17	1.51	0.014	0.42	0.34	0.37	2.86	+	大塚	+
18	0.83	0.011	12.1	0.30	1.80	2.69	磁器	伊豆	吉野山窯
19	2.85	0.007	0.70	0.34	1.85	2.74	+	伊豆	+
20	0.66	0.02	2.22	0.18	0.66	6.23	+	伊豆	吉野山窯
21	0.63	0.008	0.25	0.10	0.62	6.34	+	伊豆	+
22	2.66	0.035	1.82	0.43	0.67	1.03	陶器	大塚	吉野山窯
23	2.68	0.014	0.76	0.26	0.61	0.88	+	大塚	+
24	0.39	0.027	2.07	0.20	0.17	4.81	+	伊豆	吉野山窯
25	0.37	0.007	0.48	0.22	0.18	4.87	+	伊豆	+
26	0.42	0.023	1.60	0.26	0.23	5.11	+	伊豆	吉野山窯
27	0.38	0.004	0.96	0.19	0.20	5.21	+	伊豆	+
28	1.47	0.008	0.97	0.06	1.67	2.44	磁器	伊豆	吉野山窯
29	3.37	0.01	0.26	0.43	0.23	2.23	磁器	伊豆	吉野山窯
30	0.02	0.01	0.26	0.08	0.16	3.12	磁器	伊豆	吉野山窯
31	2.07	0.01	0.05	0.43	0.23	3.25	瓦器	伊豆	+
32	0.23	0.01	0.24	0.23	0.11	4.72	瓦器	伊豆	+
33	0.25	0.02	0.06	0.14	0.14	4.66	瓦器	伊豆	+
34	2.09	0.03	0.63	0.72	0.28	2.34	陶器	伊豆	+
35	0.35	0.07	0.76	0.26	0.11	5.02	陶器	伊豆	+
36	0.96	0.01	0.64	0.19	3.82	2.16	磁器	伊豆	吉野山窯
37	0.35	0.00	0.29	0.23	2.66	2.18	+	伊豆	+
38	0.82	0.01	1.38	0.26	2.69	2.47	+	伊豆	+
39	0.75	0.00	0.81	0.19	2.89	2.33	+	伊豆	+
40	0.53	0.00	1.04	0.23	3.06	1.97	+	伊豆	+
41	0.54	0.00	0.56	0.20	3.21	2.13	+	伊豆	+
42	2.182	0.02	0.69	0.34	0.58	2.36	陶器	伊豆	吉野山窯
43	2.37	0.00	0.16	0.33	0.49	2.36	+	伊豆	+
44	1.07	0.04	0.77	0.57	0.42	3.35	陶器	大塚	吉野山窯
45	0.87	0.02	0.37	0.35	0.33	3.01	+	大塚	+
46	1.81	0.02	0.81	0.40	0.21	2.32	磁器	大塚	吉野山窯
47	1.90	0.01	0.40	0.40	0.21	2.28	瓦器	大塚	+
48	3.25	0.03	1.02	0.56	0.15	3.37	磁器	伊豆	吉野山窯
49	3.53	0.00	0.05	0.43	0.16	3.40	+	伊豆	+
50	1.83	0.06	0.27	0.34	0.22	2.00	+	伊豆	吉野山窯
51	4.86	0.06	0.24	0.22	0.17	1.88	+	伊豆	+
52	3.94	0.01	0.25	0.50	0.18	2.49	+	伊豆	+
53	3.90	0.01	0.12	0.49	0.16	2.77	+	伊豆	+
54	0.76	0.02	1.29	0.17	0.63	4.41	磁器	伊豆	吉野山窯
55	0.80	0.01	0.23	0.31	0.54	4.66	磁器	伊豆	+
56	2.50	0.05	0.96	0.45	1.01	1.31	磁器	伊豆	吉野山窯
57	2.42	0.06	0.83	0.41	0.91	1.30	+	大塚	+
58	0.99	0.07	0.24	0.11	0.72	4.52	磁器	伊豆	吉野山窯
59	0.57	0.01	0.95	0.13	0.88	5.36	+	伊豆	+
60	1.03	0.07	1.97	0.95	1.25	2.13	磁器	伊豆	吉野山窯
61	1.43	0.01	0.80	0.93	1.14	2.13	+	伊豆	+
62	4.29	0.06	1.17	0.63	1.13	2.01	磁器	伊豆	吉野山窯
63	0.72	0.01	2.43	0.23	2.71	2.58	磁器	伊豆	吉野山窯
64	0.77	0.02	1.10	0.17	0.61	5.73	+	伊豆	吉野山窯
65	0.72	0.00	0.13	0.12	0.31	5.22	+	伊豆	+
66	0.60	0.00	2.16	0.20	2.43	2.92	+	伊豆	吉野山窯
67	0.98	0.00	0.89	0.24	2.32	2.97	+	伊豆	+
68	0.58	0.00	2.26	0.26	2.42	2.62	+	伊豆	+
69	0.59	0.00	0.79	0.19	2.41	2.38	+	伊豆	+
70	0.65	0.07	3.00	0.26	2.61	2.68	+	伊豆	吉野山窯
71	0.60	0.03	2.29	0.33	2.62	2.72	+	伊豆	吉野山窯

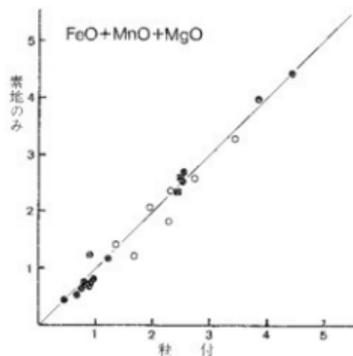
  

No.	FeO	MnO	CaO	MgO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	備考
JR-1	0.77	0.09	0.127	0.77	4.01	4.38	Present analysis
JR-1	0.85	0.10	0.09	0.63	4.10	4.44	Recommended value
JR-2	0.72	0.10	0.03	0.48	3.98	4.49	Present analysis
JR-2	0.86	0.11	0.05	0.45	4.03	4.48	Recommended value

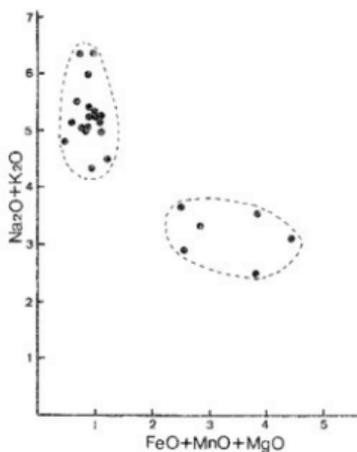
表40 NM2 出土陶磁器および地球化学的標準試料の分析結果 (地質調査所)  
 Table 40 Analytical results of ceramics from NM2 and the GSJ<sup>®</sup> geochemical standards @GSJ=Geological Survey of Japan (地質調査所)



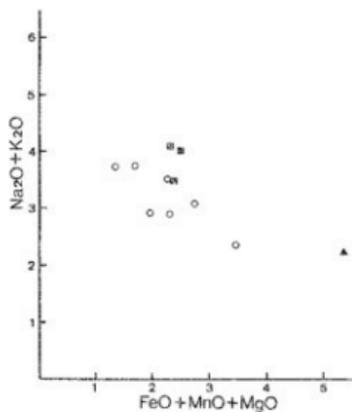
1. 焼薬付および素地のみの部分のCaO含有量



2. 焼薬付および素地のみの部分のFeO+MnO+MgOの含有量



3. 平清水焼の(FeO+MnO+MgO)-(Na<sub>2</sub>O+K<sub>2</sub>O)関係



4. 大塚・切込・二本松の(FeO+MnO+MgO)-(Na<sub>2</sub>O+K<sub>2</sub>O)関係

● 平清水, ○ 大塚, ■ 切込, (素地不焼夫のものは書いてある, 以下同じ)

図78 仙台城二の丸跡出土陶磁器の化学組成

Fig. 78 Chemical composition of ceramics from NM2

## 第V章 NM2の石敷遺構から出土した 植物種子および果実

内 藤 俊 彦

### 1. はじめに

1602年伊達政宗が、築城した仙台城二の丸の小広間裏手で、本来は手洗い場として利用されていた場所で、明治初期にゴミ捨て場として使用された場所から、多くの植物種子および果実が出土した。ゴミ捨て場であったことは、その当時の仙台城内の生活の一部を示す資料として利用できるものと考えた。そこで、出土した植物種子および果実の同定とその状況について調査した。

### 2. 調査方法

発掘によって取り出された土壌を、0.1mmメツシュの篩で水洗し、種子および果実を取り出した後、実体顕微鏡の下で、種子および果実の表面を検鏡し、種子および果実標本として、東北大学理学部附属植物園に保存されている種子および果実と比較検討した。また、それぞれの種子および果実について、その大きさを測定した。

### 3. 結果および考察

出土した植物種子および果実のうち、裸子植物3科3種、被子植物単子葉植物3科3種、被子植物双子葉植物17科27種、合計23科33種を認めた。この他不明種が約10種認められた(表41)。これらの種のうち、*Humulus lupulus* Linn. var. *cordifolius* (Miq.) Maxim. (カラハナソウ) が79粒、*Prunus pendula* Maxim. forma *ascendens* (Makino) Ohwi (エドヒガン) (図80-2) が54粒、*Cornus brachypoda* C. A. Mey. (クマノミズキ) が41粒、*Rhus trichocarpa* Miq. (ヤマウルシ) (図80-3) が28粒、*Ilex latifolia* Thunb. (タラヨウ) が27粒、*Moehringia lateriflora* (Linn.) Fenzl (オオヤマフスマ) が18粒などが多く出土した(表41)。

種子や果実などの植物の繁殖子の散布のされ方について、これらの繁殖子の形態的特徴に注目した、散布様式の類型化が、Clemeuts (1907)、Molinier & Muller (1938)、沼田 (1959) や Van Der Pijl (1969) などによって行なわれている。それによると、風散布型、動物散布型、自動散布型、重力散布型などに類型されている。出土した種について、散布型に分けると、風散布型のもの、*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. (アカマツ)、*Cryptomeria japonica* (Linn. fil.) D. Don (スギ)、*Miscanthus sinensis* Anderss. (ススキ)、*Dioscorea tokoro* Makino (オニドコロ)、*Carpinus laxiflora* (Sieb. et Zucc.) Blume (アカシデ)、*C. tschonoskii* Maxim. (イヌシデ)、*Humulus lupulus* Linn. var. *cordifolius* (Miq.) Maxim. (カラハナソウ)、*Acer palmatum* Thunb. var. *amoenum* Ohwi (オオモミジ) の

GYMNOSPERMAE	Rashishokubutsu		
TAXACEAE	Ichi-ka	出土粒数	
1. <i>Torreya nucifera</i> (Linn.) Sieb. et Zucc.	Kaya	1	(自生 or 植栽)
Pinaceae	Matsuka		
2. <i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.	Akamatsu	5	( + )
Taxodiaceae	Sugi-ka		
3. <i>Cryptomeria japonica</i> (Linn. fil.) D. Don	Sugi	7	(植栽)
ANGIOSPERMAE	Hishishokubutsu		
MONOCOTYLEDONEAE	Tanshiyoushokubutsu		
GRAMINEAE	Ise-ka		
4. <i>Miscanthus sinensis</i> Anderss.	Susaki	1	
JUNCACEAE	Igusa-ka		
5. <i>Luzula capitata</i> (Miq.) Nakai	Suzumenoyari	5	
Dioscoreaceae	Yamanoimo-ka		
6. <i>Dioscorea tokoro</i> Makino	Onidokoro	2	
Dicotyledoneae	Soushiyoushokubutsu		
Choripetalae	Ribenkarui		
Juglandaceae	Kurumi-Ka		
7. <i>Juglans ailanthifolia</i> Carr. var. <i>ailanthifolia</i>	Onigurumi	1	
8. var. <i>cordiformis</i> (Maxim.) Rehder	Himegurumi	3	(植栽)
Betulaceae	Kabanoki-Ka		
9. <i>Carpinus laxiflora</i> (Sied. et Zucc.) Blume	Akashide	1	
10. <i>C. tschonoskii</i> Maxim.	Iwashide	1	
Fagaceae	Buna-Ka		
11. <i>Quercus serrata</i> Thunb.	Konara	1	
Moraceae	Kuwa-Ka		
12. <i>Broussonetia kazinoki</i> Sieb.	Kouzo	5	
13. <i>Humulus lupulus</i> Linn. var. <i>cordifolius</i> (Miq.) Maxim.	Karahanazou	79	
Polygonaceae	Tade-Ka		
14. <i>Polygonum lapathifolium</i> Linn.	Ointatade	3	
15. <i>P. scabrum</i> Moench	Sanaetade	1	
Phytolacaceae	Yamagobou-Ka		
16. <i>Phytolacca esculenta</i> Van Houtte	Yamagobou	2	
Caryophyllaceae	Nadeshiko-Ka		
17. <i>Cerastium holsteoides</i> Fries var. <i>angustifolium</i> (Franch.) Mizushima	Mizushima	1	
18. <i>Moehringia lateriflora</i> (Linn.) Fenzl	Miminagasa	1	
19. <i>Stellaria media</i> (Linn.) Villars	Ooyamafusuma	18	
Rosaceae	Bara-ka		
20. <i>Prunus mume</i> Sieb. et Zucc.	Kobakobe	1	
21. <i>P. pendula</i> Maxim. forma <i>ascendens</i> (Makino) Ohwi	Ume	9	(植栽)
22. <i>P. persica</i> (Linn.) Batsch	Edohigan	54	(植栽?)
Leguminosae	Mame-ke		
23. <i>Amphicarpaea edgeworthii</i> Benth. var. <i>japonica</i> Oliver	Momo	3	(植栽)
Rutaceae	Mitsun-Ka		
24. <i>Zanthoxylum piperitum</i> (Linn.) DC.	Yabuname	1	
Anacardiaceae	Urushi-Ka		
25. <i>Rhus trichocarpa</i> Miq.	Sanshou	5	
Aquifoliaceae	Mochinoki-Ka		
26. <i>Ilex latifolia</i> Thunb.	Yamasurushi	28	
27. <i>I. macrospora</i> Miq.	Tarayou	27	(植栽)
Acерaceae	Kaede-Ka		
28. <i>Acer palmatum</i> Thunb. var. <i>amoenum</i> Ohwi	Aobaku	3	
Vitidaceae	Budou-Ka		
29. <i>Ampelopsis brevipedunculata</i> (Maxim.) Trautv.	Oomowiji	11	(植栽)
30. <i>Vitis flexuosa</i> Thunb.	Nobudou	1	
Violaceae	Sumire-Ka		
31. <i>Viola mandshurica</i> W. Becker	Saniakuzuru	4	
Umbelliferae	Seri-Ka		
32. <i>Hydrocotyle sithoripoides</i> Lam.	Sumire	1	
Cornaceae	Mizuki-Ka		
33. <i>Cornus brachypoda</i> C. A. Mey.	Chidomegasa	1	
	Kumanonizuki	41	

表41 NM2 石敷遺構から出土した植物種子および果実  
Table 41 List of the excavated seeds from the stone floor at NM2

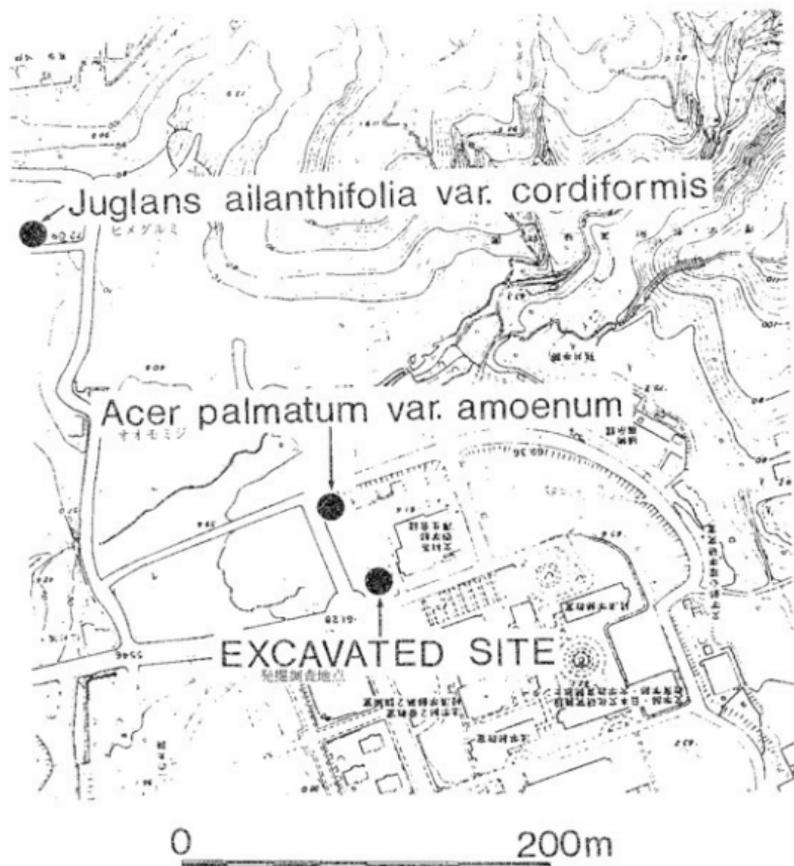


図79 ヒメグミおよびオオモミジの生育地と石敷遺構の位置  
 Fig. 79 Locations of the present trees and excavated site (NM2)

8種である。これらのうち庭園内などに植栽されるものとしては、アカマツ、スギ、オオモミジがある。オオモミジは出土地点から南へ約50mの地に、仙台市の指定樹木となっているものがあり、ここから供給される可能性が考えられる。アカマツおよびスギは西南へ約200mの東北大学理学部附属植物園内から、供給される可能性もある。

ススキ、オニドコロ、カラハナソウなどは近くに馬場があったことから、この付近からの供給があったものであろう。イヌシデ、アカシデについても、御裏林と呼ばれる地域からの供給であろう(図79)。

動物散布型のものは、*Torreya nucifera* (Linn.) Sieb. et Zucc. (カヤ) (図82-4)。*Juglans ailanthifolia* Carr. var. *ailanthifolia* (オニグルミ) (図82-5)。*J. ailanthifolia* var. *cordiformis* (Maxim.) Rehder (ヒメグルミ) (図82-6)。*Broussonetia kazinoki* Sieb. (コウゾ)、*Piptolacca esculenta* van Houtte (ヤマゴボウ)、*Prunus mune* Sieb. et Zucc. (ウメ) (図82-7)、*P. pendula* Maxim. forma *ascendens* (Makino) Ohwi (エドヒガン)、*P. persica* (Linn.) Batsch (モモ) (図82-8)、*Rhus trichocarpa* Miq. (ヤマウルシ)、*Ilex latifolia* Thunb. (タラヨウ)、*I. macropoda* Miq. (アオハダ)、*Ampelopsis brevipedunculata* (Maxim.) Trautv. (ノブドウ)、*Vitis flexuosa* Thunb. (サンカクズル)、*Cornus brachypoda* C. A. Mey. (クマノミズキ)の14種であり、もっとも多い。

カヤは種皮の破壊状態から、人間が食べた残渣であるとみえるが、出土粒数が1コであり、疑問が残る。オニグルミは核の破壊状態から、人間が食べた残渣であろうと推定されるが、出土粒数が1つであることが疑問を残している。ヒメグルミは、核に円形の穴が空いている。これはホンダアカネズミが食べた痕である。現在のヒメグルミの分布は、わが国では植栽されたもののみである。また、この地域でのヒメグルミの生育は、二の丸から天守台に登る道路から三の丸へ通じる道路の途中に1本確認されている(図79)。出土地からの距離は約400mであり、ホンダアカネズミの行動域の中に当たる。従って、この地から運搬されたことも考えられる。また、二の丸には中島池、瓢箪池などの池沼が、存在したことから、これらの周辺に植栽されていたものからの運搬も考えられる。さらに、救荒植物や戦時食の備蓄のために、二の丸内などにヒメグルミが植栽されていた可能性も考えられる。

コウゾ、ヤマウルシ、アオハダ、サンカクズル、クマノミズキなどは、御裏林と呼ばれた、現在の東北大学理学部附属植物園内から鳥類によって、食べられた後に排せされたものが、集積した可能性が大きい。ヤマゴボウやノブドウは二の丸の敷地内に、生育していたものから運搬されたものであろう。

ウメやモモは自生していないので、二の丸など城内に植えられていたものか、いずれかの地から、食料にするために持ち込まれたものであろう。また、モモについては、現在多数栽培さ

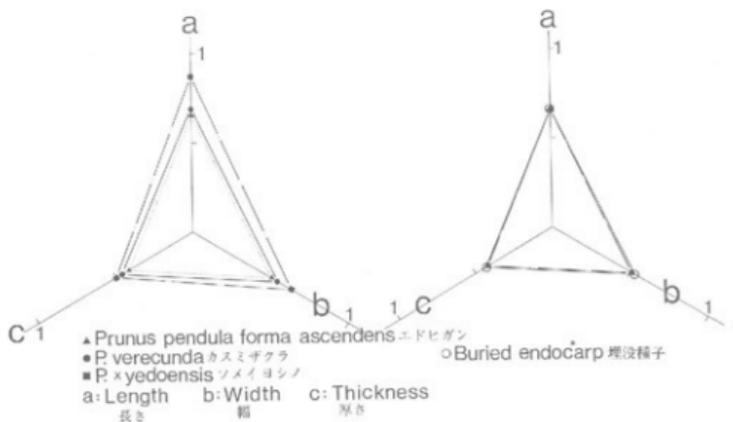


図80 桜属の核の大きさ (cm)  
 Fig.80 Endocarp size of *Prunus*

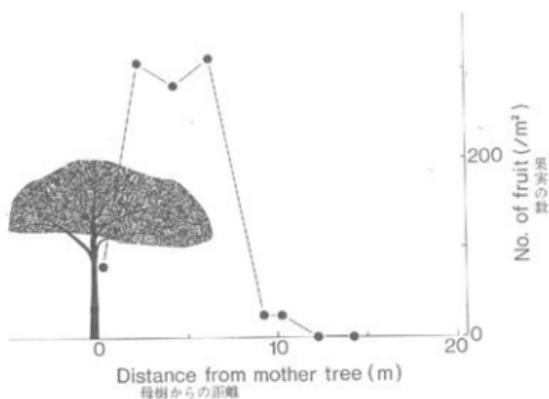


図81 エドヒガンの果実の散布  
 Fig.81 Fruit dispersal of *Prunus pendula* forma *ascendens*

れている品種である「大久保」などではない。ウメは生食しないので、出土地の庭に植栽されていないとすれば、梅干として利用されたものの残渣であると考えられる。この点については、今後の調査に期待したい。

エドヒガンについては、出土地を中心として、現在生育しているサクラの主なものは、ソメイヨシノ、エドヒガン、カスミザクラであり、また、仙台地方の丘陵地における花見の桜は、ソメイヨシノ、エドヒガン、エドウザクラ(垂桜)である。そこでこれらのうち、ソメイヨシノ、エドヒガン、カスミザクラの核の形態と大きさを計測した。また、出土したサクラの核について、同様の計測を行ない、図80のような結果を得た。

ソメイヨシノ、エドヒガン、カスミザクラの核の大きさは、ソメイヨシノがもっとも大きく、次いでカスミザクラ、次にエドヒガンの順で小さくなっている。出土したサクラの核の大きさは、エドヒガンの核の大きさに一致した。また、核の形態もエドヒガンのそれに似ている。この2点から出土したサクラの核をエドヒガンとした。

エドヒガンの核が、どこから散布されたのが問題となる。そこで、エドヒガンの核の散布について、記念講堂の東側の樹高10mのエドヒガンをういて調査した。

エドヒガンの樹幹から2m毎に50×50cmの方形枠を置いて、その中に落下している果実をすべて採集して、その数を数えた結果は、図81に示した。この結果からエドヒガンの果実の散布は、樹冠内にほとんどが落下している。このことと出土した核の数から、出土地のごく近くにエドヒガンが、植栽されていたものと推定される。また、エドヒガンを食べた鳥類が、御廊下の屋根にとまり、排糞したものが落下して、堆積したと考えることも出来る。これについては、建物の構造たとえば種の有無や屋根の角度などが関係するから、今後の問題である。いずれにしろ、二の丸の敷地内にエドヒガンが植栽されていたことは確かである。ソメイヨシノの核が出土しないのは、樹冠から直接落下堆積するにしろ、鳥類の排糞によって堆積するにしろ、ソメイヨシノの果実を供給するソメイヨシノの植栽がなかったものと推測される。このことから、仙台城内における花見の桜は、ソメイヨシノではなく、エドヒガンであったのではないかと考えられる。また、図82・図82-1のようにエドヒガンの花は、花見に十分耐えうるものである。

自働散布型の植物として、*Amphicarpaea edgeworthii* Benth. var. *japonica* Oliver (ヤブマメ)、*Viola mandshurica* W.Becker (スミレ)の2種が認められた。この2種は小広間裏の雑草として、生存していた可能性はきわめて高いものとする。

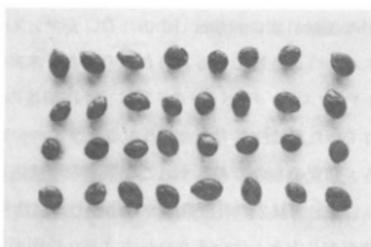
重力散布型の植物としては、*Luzula capitata* (Miq) Nakai (スズメノヤリ)、*Quercus serrata* Thunb. (コナラ)、*Polygonum lapathifolium* Linn. (オオイスタデ)、*P. scabrum* Moench (サナエタデ)、*Cerastium holosteoides* Fries var. *angustifolium* (Franch.) Mizushima (ミミナグサ)、*Moehringia lateriflora* (Linn.) Fenzl (オオヤマフスマ)、Zan-

*thoxylium piperitum* (Linn.) DC .(サンショウ)、*Hydrocotyle sibthorpioides* Lam .(チドメグサ)の8種である。これらのうち、スズメノヤリ、オオイヌタデ、サナエタデ、ミミナグサ、オオヤマフスマ、チドメグサの6種は、小広間裏の庭の雑草と考えられる。サンショウは庭に植えられていた可能性も考えられる。コナラについては、まだ未熟のきわめて若い果実であることから、初夏のものであろう。この果実の堆積由来については不明である。

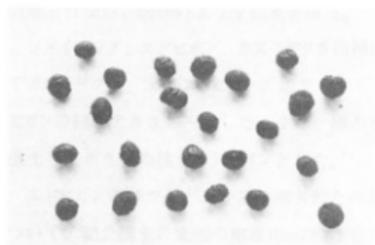
以上、NM2の石敷遺構から出土した植物種子および果実について述べたが、種々な点で推測があり完全とはいえない。古文書、絵図面、建物の構造や域内の住人の生活様式などの検討が必要であり、今後の問題としたい。



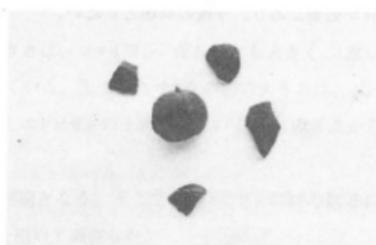
満開のエドヒガン



サクラの核



ヤマウルシの核



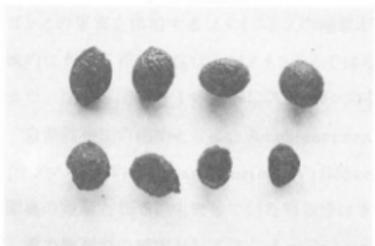
カヤの種子片



オニグルミの核



ヒメグルミの核



ウメの核



セモの核

図82 NM2石敷遺構出土の植物種子

Fig 82 Blooming *P. pendula forma ascendens* and specimens of seeds from stone floor at NM2

## 第VI章 NM2石敷遺構の花粉分析の結果について

竹内貞子

花粉分析の結果は、表42に示す通りである。Cryptomeria (スギ属)、Pinus (マツ属)が優勢で、Fagus (ブナ属)、Quercus (コナラ属)、Abies (モミ属)などを伴う花粉組成を示している。現在のこの付近の植物から判断して、Abies は、Abies firwa (モミ)と考えられる。試料堆積当時、この付近はスギやマツに囲まれ、裏の丘陵地には、モミやブナ属、コナラ属、クマシデ属などが、また沢すじにはハンノキやヤナギなどが生い茂っていたと推測される。

種別	総名	%
Abies	モミ属	2.5
Pinus	マツ属	22.4
Cryptomeria	スギ属	39.8
T-C-T*1		2.9
Fagus	ブナ属	4.1
Quercus	コナラ属	3.3
Alnus	ハンノキ属	1.2
Betula	カバノキ属	0.4
Carpinus	クマシデ属	1.7
Corylus	ハンバミ属	0.4
Juglans	クルミ属	0.4
Salix	ヤナギ属	2.9
Zelkova	ケヤキ属	0.4
Viburnum	ガマズミ属	0.4
Gramineae	イネ科	2.9
Cyperaceae	カヤツリグサ科	2.1
Chenopodiaceae	アカザ科	0.8
Carduoideae	キク亜科	1.7
Artemisia	ヨモギ属	0.8
Monolete spore	単葉型孢子	1.2
Trilete spore	三葉型孢子	2.9
Indeterminable pollen	不明花粉	4.9
AP/TP*2		83.0

\*1 Taxodiaceae-Cupressaceae-Taxaceae(スギ科-ヒノキ科-イチイ科)

\*2 花粉および孢子全体に対する樹木花粉の割合

表42 花粉百分率表

Table. 42 Percentages of pollens

## 第Ⅶ章 NM2出土の動物遺存体

高橋 理

同定した動物遺存体は、昭和58年より昭和59年にかけて、東北大学埋蔵文化財調査委員会によって発掘、調査が行なわれた NM2 より出土したものである。発掘中に目についた遺存体についてはその場で取り上げ、収納したが、ピット24と石敷遺構の場合は、ピットの埋土ごと収納し、後日室内において5mm・1mmの2段のフルイを用いて水洗いを行ない、フルイ上に残った遺存体を採集した。動物遺存体は大部分が火を受けて白色化しており、非常に脆い状態であったので、バインダーによって補強した後、接合・同定・計測を行なった。細かい骨片が少なからず出土したが加熱によるひび割れ、ねじれなど変形が著しく、同定できた遺存体はその一部にとどまる。貝類2種、魚類1科4種、鳥類1科、哺乳類2種が同定された(表43)。

### 1. 貝 類

#### 1) マシジミ *Corbicula leana* シジミガイ科

A-1・6層中より表皮のみが1点出土している。殻頂部を欠き、左右は不明である。殻長(殻の最大幅)は、28.6mmである。比較的新しい時期の遺跡・遺構において、このような淡水産の貝類が殻本体を消失しながら表皮のみを出土することはよくある。

#### 2) アサリ *Tapes japonica* マルスタレガイ科

D-2・カクランより左側の殻頂部を残す破片が1点出土している。現生標本との比較による、殻高31.5mm、殻長42.0mm程度の個体であり、アサリとしては、中型の大きさである。保存の状態は非常に良い。

### 2. 魚 類

#### 1) マダイ *Chrysophrys major* タイ科

石敷遺構より椎骨が1点出土している。火は受けておらず、全体が濃い褐色を呈している。横径5.3mm、縦径5.0mm、長さ5.8mmであり、現生標本との比較より標準体長(吻端より尾鰭の付根までの長さ)が、240mm弱と推定され、マダイとしては小型の部類に属する。解体を示すような痕跡はない。

#### 2) マダラ *Gadus morrhua macrocephalus* タラ科

石敷遺構より椎骨が3点出土している。火を受けた痕跡はない。

椎骨① 線が欠損しているが、椎体はほぼ完形。マダラに特有のゆがみが観察される。前面において、横径11.3mm、縦径11.2mmを測定し、標本と比較して標準体長約600mmと推

定される。

椎竹② 棘と椎体前部の上半を一部欠損する。後面の横径が11.0mm、縦径が10.6mmで、標準体長は615mm程度であろう。

椎骨③ 棘は欠損するが、椎体はよく保存されている。前面において横径10.2mm、縦径9.1mmを測り、標準体長約615mmの個体と推定される。

以上3点の椎骨は、いずれも標準体長600mm程度の個体のもので、同一個体の可能性もある。1.2mまで成長するマダラとしては、中型の個体といえよう。解体痕などは、観察されない。

### 3) サケ科 *Salmonidae* gen. et sp. indet.

石敢遺構においてサケ科魚類の椎竹破片が1点出土している。細片であるので椎体径、さらに標準体長の復元にまでは至らなかった。火を受けている。

### 4) フサカサゴ(クロソイ?) *Scropaena neglecta* (*Sebastes schlegelii* ?) カサゴ科

フサカサゴかクロソイの胸鰭棘と推定される骨片が1点、石敢遺構より出土している。火を受けてかなり欠損しており、上記の2種のいずれかであろうという程度の同定にとどまる。

### 5) アイナメ *Hexagrammos otakii* アイナメ科

石敢遺構より左上顎骨の先端部、即ち前上顎骨との関節部が1点出土している。

## 3. 鳥 類

### *Anatidae* gen. et sp. indet. ガンカモ科

C-1・4層中において、鳥類の下顎骨先端部と推定される骨片が1点出土している。火をかなり受けており、変形が著しいが、カモ類の下顎に類似している。大きさは、カルガモクラスである。

## 4. 哺 乳 類

### 1) テン *Martes melampus* イタチ科

C-1・4a層より右尺骨の近位端と右橈骨の近位端がそれぞれ1点ずつ出土している。大ききから同一個体の可能性があるが、火を受けて脆弱となっており、尺骨、橈骨相互の関節部の適合性は確認できない。体長40~50cmの成獣の大きさである。

### 2) イノシシ(ブタ?) *Sus scrofa leucomystax* (*Sus scrofa domesticus* ?) イノシシ科

ビット24より多数の獣骨片が出土した。全てがかなり強く火を受けており、変形が著しい。以下の6点が同定された。

- ①上腕骨 右上腕骨の近位端の一部。成長線から遊離した部分で、上腕骨頭の後側部にあたる。
- ②第一頸椎(環椎)と関節する後頭顆の左側部分の下部。
- ③脛骨 左脛骨の外側頭後側部の一部と、後頭間区一部。成長線から遊離したと推定される。
- ④坐骨 右坐骨の寛骨臼切痕の一部で、栄養孔が観察される。
- ⑤恥骨 右寛骨臼の一部とそれに連なる恥骨体の上半部。
- ⑥恥骨結合面 左恥骨結合面の一部(恥骨髁)と推定されるが形状に若干の疑問がある。
- ①～⑥のいずれにも解体痕など観察されなかった。上記以外の骨片もおそらくは、イノシシ(ブタ)の遺存体ではあろうが、確実に部位を判定できなかったので、以上の6点について報告するにとどめる。

区	出土地区、層位	種類	部位数
NM2	A-1, 6 層中	マシジミ	1 (表皮)
	石敷遺構	マダイ	椎骨 1
	〃	マダウ	椎骨 3
	〃	フセカサゴ(クロソイ?)	跗 骨 1
	〃	アイナメ	下 上 頰 骨 (f) 1
	〃	セケ科	椎 骨 (断片) 1
	ビッド 2f	イノシシ(ブタ?)	上 腕 骨 (f) 1
	〃	〃	後 頭 顆 (f) 1
	〃	〃	脛 骨 (f) 1
	〃	〃	坐 骨 (f) 1
	〃	〃	恥 骨 (f) 1
	〃	〃	恥 骨 結 合 面 (f) 1
	D 2, カクラン	アヤリ	(f) 1
	C-1, 4層中	ガンカモ科	下 頰 骨 1
	〃 4層	ア	尺 骨 (f) 1
	〃	〃	桡 骨 (f) 1

表43 NM2 動物遺存体一覧表

Table 43 List of faunal remains from NM2

## 第Ⅷ章 NM2出土の熔融ガラスの分析結果

旭硝子株式会社

### 1. 目的

東北大学埋蔵文化財調査委員会の依頼により、首題試料の成分、軟化温度等について現代の板ガラスとの比較分析を当社京浜工場技術室にて実施した。当該試料は、1983年仙台城二の丸跡の発掘調査で焼土と共に発見された熔融ガラスであり、1882年(明治15年)二の丸焼失時のものと考えられている。

### 2. 試料

#### 2-1 試料の形状

約2～6cm角位で厚み1.5～3.5mm位のやや失透し波状に変形したカレット片が主で、他に重り合って塊状となり焼結したものの、さらに、比較的正常で板ガラスの形状を留め変形変重してないものが少量ある。

全熔融ガラス重量……約405g

#### 2-2 試料の級分け

分析にあたり外姿の中から次の様に級分けを行なった。

(イ) 試料記号「A」

10～12枚位が重なり合って熔結した塊状部分。1ヶ約120g

(ロ) 試料記号「B」

約2～6cm角位で厚み1.5～3.5mm位のやや失透し波状に変形したカレット片。約280g。

(ハ) 試料記号「C」

板ガラスの形状を留め変形変重していないもの。約5g。

以上の試料については、外観写真、断面写真を添付するので参考のこと(図83)。

### 3. 分析項目

- ① 当該ガラスの成分(組成)
- ② 当該ガラスの軟化温度
- ③ 当該ガラスの比重

### 4. 分析結果

#### 4-1 成分(組成) (表44)

当該ガラスおよびフロートガラスの成分(組成)について分析した結果を表44に示す。

#### 4-2 軟化温度および比重(表45)

当該ガラスおよびフロートガラスの軟化温度および比重について分析した結果を表45に示す。

試料 成分	熔融ガラス組成(%)			比較ガラス組成(%) フロートガラス
	記号 A	記号 B	記号 C	
SiO <sub>2</sub>	72.50	72.50	71.80	72.70
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.70	0.53	0.60	1.74
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.24	0.20	0.18	0.16
TiO <sub>2</sub>	0.06	0.05	0.05	0.06
CaO	14.58	14.86	15.21	8.21
MgO	0.64	0.27	0.47	3.97
SO <sub>3</sub>	0.57	0.30	0.73	0.16
As <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.06	0.10	n, d	n, d
Na <sub>2</sub> O	10.40	10.60	10.70	13.00
K <sub>2</sub> O	0.30	0.40	0.30	

表44 熔融ガラスの成分(組成)  
Table 44 Compositions of melted glass from NM2

## 5. ま と め

(表44、表45参照)

1) 試料A・Bは共にAs<sub>2</sub>O<sub>3</sub>(酸化砒素)を含有しており、CaO(石灰)分が15%前後とフロートガラスに比べて多い。逆にアルカリ分(Na<sub>2</sub>O+K<sub>2</sub>O)とAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>(アルミナ)が少ない。

2) 試料CはA・Bとほぼ同じ組成であるが、As<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が検出されなかった。

3) 現代のフロートガラスの組成の一般の特徴は次の通り。

- ① As<sub>2</sub>O<sub>3</sub>を含有しない。
- ② CaOは8~9%程度。
- ③ Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>を2%近く含有する。

4) 軟化温度については試料A・B・Cとフロートガラスとではほとんど差異はないが、比重についてはフロートガラスの方が若干低い。

以上の点から

- i) 試料A・B・Cとも現代のフロートガラスと同様「ソーダ石灰ガラス」であるが、組成について(特にCaO、As<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、アルカリ分)差異がある。
- ii) 試料AとBは同一のガラスと推定できる。
- iii) 試料Cについては、As<sub>2</sub>O<sub>3</sub>を含有していないことから、A・Bとは違うものと推定できる。

試料 項目	熔融ガラス			比較ガラス フロートガラス
	記号 A	記号 B	記号 C	
●軟化温度(°C)	750.7	747.3	747.0	745.9
比 重	2.5428	2.5445	2.5539	2.4886

表45 軟化温度および比重  
Table 45 Softening point and specific gravity

※軟化温度:ガラスには明確な融点はなく、粘度の上昇と共に連続的に粘度が低下する。ガラスの粘度が4.5×10<sup>7</sup> Poiseの時の温度をガラスの軟化温度とする。

## 6. その他の推定事項

### 1) 国産か輸入品か

1880年代の板ガラスの物性・組成等に関する資料がないため定かでないが、当時はまだ板ガラスが国産化されておらず、生産技術の模索時代であることから、当該ガラスが当時のものであるとすると、輸入品である可能性が高い。

日本での板ガラスの国産化は、明治42年当社の尾崎工場にてスタートしたのが最初であるが、一方国外では18～19世紀にかけてベルギー・フランス等で、円筒法による板ガラスの生産記録がある。

### 2) 窓ガラスか否か

当該ガラスは、ソーダ石灰ガラスであり、鉛を含有していないことから板ガラスとして窓に使われていた可能性が高い。

### 3) 明治初年における東北地方の板ガラスの普及度

具体的資料はないが、1)でも述べた通り、板ガラスのほとんどが輸入品に依るものであり、しかも高価であったことから考えると、普及度はきわめて低いと思われる。

### 4) 製造後の経過年(絶対年代)、一枚の大きさ。

以上の2項目については、推定困難である。

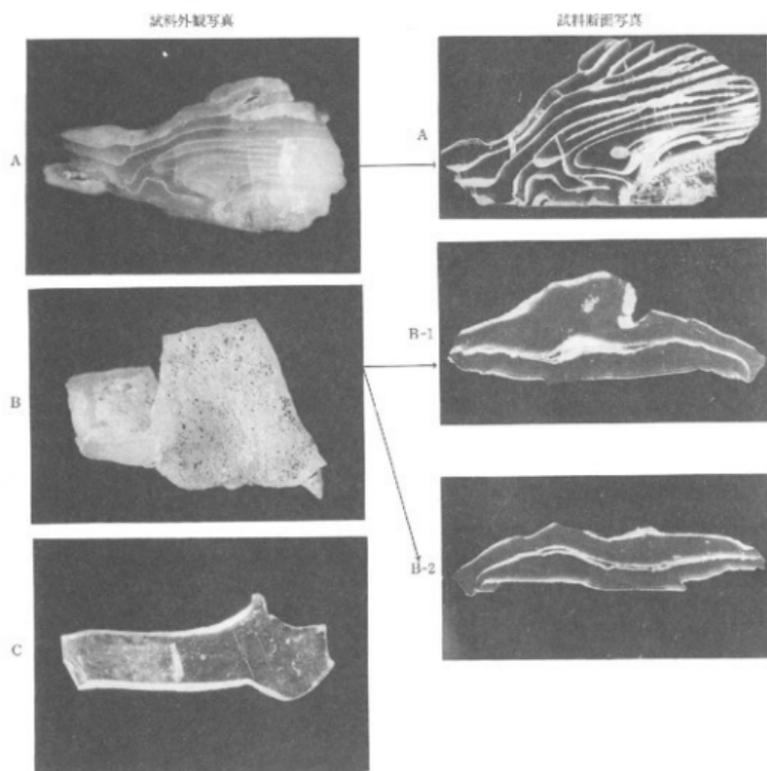


図83 分析試料写真(倍率2倍)

Fig. 83 Appearances and sections of analyzed glass specimens

## 《引用文献》

- 愛知県名古屋土木事務所、愛知県教育委員会 1975 「瀬戸市かみた第1・2号古窯」 pp.32
- 秋岡芳夫 1984 「晴と藝のデザイン」 『器のファッション』 日本と美の文化17 pp.106-113  
(講談社)
- 朝倉治彦 他 1981 『事物起源辞典 衣食住編 第12版』 (東京堂出版)
- 朝日新聞社編 1985 『日本百年写真館Ⅱ』 (朝日新聞社)
- 伊藤ていじ 1973 「城 築城の技法と歴史」 (読売選書)
- 伊東信雄 1967 「仙台城の歴史」 『仙台城』 pp.1-22 (仙台市教育委員会)
- 伊東信雄 1979 「仙台郷土史の研究」 (宝文堂)
- 奥津春生 1967 「仙台城の地形・地質」 『仙台城』 pp.123-165 (仙台市教育委員会)
- 大森忠五郎 1937 「仙台郷土史研究」 『戊辰戦争平事日記』 pp.9-18
- 小野正人 1973 「陶磁遺書」 北国<sup>ほくこく</sup>の陶磁 (雄山閣)
- 小和田哲男<sup>ちかおと</sup> 1979 『歴史新書 日本史97』 城と城下町 (教育社)
- 上磯町教育委員会 1983 『松前藩戸切地陣屋跡』 (北海道上磯郡上磯町)
- 河原純之 編 1984 『日本の美術3』 一乗谷遺跡 (至文堂)
- 鬼頭 宏 1983 「江戸時代の米食」 『歴史公論 No.89』 pp.43-49 (雄山閣)
- 九州陶磁文化館 1984 「北海道から沖縄まで国内出土の肥前陶磁」 (九州陶磁文化館)
- 古泉 弘 1983 「江戸を掘る—近世都市考古学への招待」 (柏書房)
- 古伊萬里調査委員会 編 1959 『古伊萬里』 (金華堂)
- 光芸出版編 1976 『やきもの辞典』 pp.206 (光芸出版)
- 古賀 孝 1974 「切込焼」 (雄山閣)
- 五島美術館編 特別展「江戸のやきもの」図録 五島美術館展覧会図録 No.104
- 佐藤 巧 1967 「仙台城の建築」 『仙台城』 pp.23-87 (仙台市教育委員会)
- 残 夢 斐 1972 「仙台戊辰役の終戦内幕」 pp.14-20 (仙台郷土史研究 16)
- 瀧谷五郎・長尾勝馬 1959 「新版 日本建築 下巻」 (学芸出版社)
- 白老町教育委員会 1982 『史跡白老仙台藩陣屋跡Ⅰ—昭和56年度環境整備事業概報—』
- 鈴木省三 1977 『仙台風俗志(全)』 (歴史図書社)
- 鈴木省三 編 1925 「戊辰始末」 『仙臺叢書 第12巻』 pp.41-325 (仙臺叢書刊行會)
- 芹沢長介 他 1981 『日本やきもの集成Ⅰ』 (平凡社)
- 芹沢長介 1976 「切込焼の碗と皿」 『東北考古学の諸問題』 pp.513-531 (寧楽社)
- 芹沢長介 1983 「東北地方の近世陶磁」 『世界陶磁全集 9』 pp.227-259 (小学館)
- 芹沢長介 編 1978 「切込」 『東北大学文学部考古学研究会考古学資料基別冊Ⅰ』 (東北大学文学部考古学研究会)
- 仙臺市史編纂委員会 1954 「仙臺市史 本編1」
- 高橋良一郎 1977 「ふくしま文庫 40」 相馬のやきもの (福島中央テレビ)
- 田淵実夫 1975 「ものと人間の文化史15 石垣」 (法政大学出版局)

- (財)千葉県文化財センター 1982 『花前Ⅱ-1遺跡』 「常盤自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」  
(日本道路公団東京第一建設局)
- 中央公論社 1978 『湯呑みと土びん』 『暮らしの設計No121』
- 出川直樹 1983 『やきもの鑑定入門』 (新潮社)
- 長尾勝馬 1982 『続 図解小笠原の知恵』 pp.178 (理工図書)
- 西岡常一 他 1981 『蘇る薬師寺塔』 (草思社)
- のり  
政方市教育委員会 1982 『古高取 内ヶ崎遺跡』
- 野村泰三 1975 『図鑑 伊万里のすべて』 (光芸出版)
- 白山四丁目遺跡調査会 1981 『文京区 白山四丁目遺跡調査会』
- 兵庫県立歴史博物館 編 1984 『特別史跡姫路城跡 — 兵庫県立歴史博物館建設に伴う発掘調査報告』
- 藤原和之助 1981 『奥羽成吉思汗と仙台藩』 (柏書房)
- 平凡社編集部 編 1984 『やきもの事典』 (平凡社)
- 真味意成 編 1973 『平清水焼物の歴史』 『山形市史編集資料 32』 pp.7~84 (山形市史編集委員会)
- 松下芳男 1978 『改訂 明治軍政史論 上』
- 瀧岡忠成 他 1980 『日本やきもの集成〔3〕瀬戸・美濃・飛騨』 (平凡社)
- 瀧岡忠成 他 1980 『日本やきもの集成〔2〕九州Ⅰ』 (平凡社)
- 三原良吉 1967 『仙台城年表』 『仙台城』 pp.215~238 (仙台市教育委員会)
- 宮城正俊 1982 『新説 切込焼』 (宝文堂)
- 三好 一 1975 『カラーブックス346 小皿豆皿』 (保育社)
- 武蔵岡遺跡調査会 1979 『東京都町田市武蔵岡遺跡』
- のり  
葉木洋 編 『陶芸のための科学』 (建設総合資料社)
- 山下三郎 他 1982 『時代弁当箱資料集成—その2—』 『東北工業大学紀要Ⅰ 第2号』 pp.121~140
- 山田しょう 1983 『(7) 石製品』 『仙台市文化財調査報告書第58集 今泉城跡』 pp.99~123  
(仙台市教育委員会)
- 雄山閣出版編 『帝國陸海軍』 『歴史公論No.89』
- Simpson, P., Kitto, L. and Sodeoka, K. 1979 The Japanese Pottery Handbook, Kodansha International Ltd.

REPORT  
OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF  
TOHOKU UNIVERSITY

No-1 October 1985

---

Contents

1. General Review of Excavation in 1983 Hiroshi Kajiwara
  2. Excavations At Kawaucii Campus of Tohoku University  
*Hiroshi Kajiwara, Masatoshi Sagawa, Hirotohi Oba, Kohei Sakuma,  
Fujiko Yamada, Akio Maesawa, Shou Yamada and Takenori Ichimura*
    - 1) Geographical and Historical Environment of Sendai Castle
    - 2) The First Excavation of the Secondary Citadel (NM1) of Sendai Castle
    - 3) The Second Excavation (NM2)
    - 4) The Third Excavation (NM3)
    - 5) Relation between Excavations Area and the Structures of the Secondary Citadel in Sendai Castle
    - 6) The Fire of Sendai Castle in 1882
    - 7) A Commentary on the Contribution of the Excavation in 1983
  3. The Ceremonial Hall in the Secondary Citadel of Sendai Castle  
*Takumi Sato*
  4. Chemical Composition of Ceramics from Sendai Castle  
*Satoshi Kanisawa*
  5. Seeds from Stone Floor in Sendai Castle  
*Toshihiko Naito*
  6. Pollen Analysis in Sendai Castle  
*Sadako Takeuchi*
  7. Faunal remains from Sendai Castle  
*Osamu Takahashi*
  8. Analysis of Melted Glass from Sendai Castle  
*Asahi Glass Co., Ltd.*
- Bibliography  
Summary
- 

THE COMMISSION  
OF THE BURIED CULTURAL PROPERTIES  
IN THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY  
1985

## Figures

- Fig. 1 Archaeological sites and Tohoku University
- Fig. 2 Excavation at NM1 in 1982
- Fig. 3 Location of excavations (1982,1983) and elevations at NM1
- Fig. 4 Excavation at NM1 in 1982 and 1983
- Fig. 5 Cross sections of NM1
- Fig. 6 Distribution of pits, drains and other features on each stratum at NM1
- Fig. 7 Artifacts from NM1
- Fig. 8,9 Ceramic roof tiles from NM1 (1),(2)
- Fig. 10 Grids showing location of excavations and test pits at NM2 and NM3
- Fig. 11 Cross sections of excavation grid at NM2
- Fig. 12 Distribution and cross sections of features on stratum 2 at NM2
- Fig. 13 Distribution and cross sections of features on stratum 4 at NM2
- Fig. 14 Distribution and cross sections of features on strata 5 and 6 at NM2
- Fig. 15 Distribution and cross sections of features on stratum 7 at NM2
- Fig. 16 Partially exposed stone floor of washing area filled with various artifacts at NM2
- Fig. 17 Exposed stone floor of washing area at NM2
- Fig. 18 Denomination of ceramic details and points of measurements
- Fig. 19 Profiles of "rice bowls"(1-8,10) and "tea bowls"(9,10)
- Fig. 20-23 "Rice bowls" with cobalt blue from NM2 (1)-(4)
- Fig. 24 "Tea bowls" with cobalt blue from NM2
- Fig. 25-27 Dishes from NM2,(1)-(3)
- Fig. 28 Molded square dishes from NM2
- Fig. 29-31 Teapots from NM2 (1)-(3)
- Fig. 32 Teapots and small teapots (*kyusu*)(12,13)from NM2
- Fig. 33 Teapot lids from NM2
- Fig. 34 Teapot capacity vs. "tea bowl" capacity
- Fig. 35 Capacity of teapots and small teapots (*kyusu*) from other sites
- Fig. 36 Bottles from NM2
- Fig. 37 Various ceramics from NM2
- Fig. 38 Cooking pots covered with iron glaze from NM2
- Fig. 39 Red earthenware and smudged black earthenware from NM2
- Fig. 40 Rectangular charcoal heaters and braziers for smoking out mosquito

- Fig. 41 Relation between the  $(\text{FeO}-\text{MnO})/\text{CaO}-\text{MgO}$  and the  $(\text{Na}_2\text{O}+\text{K}_2\text{O})$  in the ceramics from NM2
- Fig. 42 Percentage of excavated ceramics divided according to place of production
- Fig. 43 Types of excavated ceramics divided according to place of production
- Fig. 44-47 Wooden materials from NM2 (1)-(4)
- Fig. 48 Illustrations of building constructions from NM2
- Fig. 49 Detail example of shingled roof (*Joge-nyorai* five-storied pagoda)
- Fig. 50-51 Metal materials from NM2 (1), (2)
- Fig. 52 Distribution of length of Japanese nails from NM2 and NM3
- Fig. 53 Various artifacts from NM2
- Fig. 54 Sole of a modern military shoe
- Fig. 55-56 Ceramic roof tiles from NM2 (1), (2)
- Fig. 57 Cross sections of excavation and a stonewall at NM3
- Fig. 58 Points of measurements and post span of construction 1 at NM3
- Fig. 59-60 Historical transition of structures at NM3 (1), (2)
- Fig. 61 Plans and cross sections of pits and ditches at NM3 (1)-(3)
- Fig. 64 Side view of stonewall
- Fig. 65-66 Ceramics from NM3 (1), (2)
- Fig. 67 Various artifacts from NM3
- Fig. 68-70 Ceramic roof tiles from NM3 (1)-(3)
- Fig. 71 A superimposed plan of excavation university building, road and ruined structures in Yed era.
- Fig. 72 Excavated stone floor, rows of foundation stones and/or their holes at NM2
- Fig. 73-75 Historical transition of structures around ceremonial hall in the secondary citadel (1)-(3)
- Fig. 76 Central ceremonial hall and surrounding structures in the secondary citadel of Sendai Castle
- Fig. 77 Profiles of major structures in the secondary citadel of Sendai Castle
- Fig. 78 Chemical composition of ceramics from NM2
- Fig. 79 Locations of the present trees and excavated site
- Fig. 80 Endocarp size of *Prunus*
- Fig. 81 Fruit dispersal of *Prunus forma ascendens*
- Fig. 82 Blooming *P. pendula forma ascendens* and specimens of seeds from stone floor at NM2

## Tables

- Table 1 Rescue excavations in fiscal year 1983
- Table 2 A work record of daily excavations at NM1
- Table 3 Strata and features at NM1
- Table 4 Distribution of artifacts at NM1
- Table 5 Attributes list of ceramic roof tiles from NM1
- Table 6 A work record of daily excavations at NM2
- Table 7 Distribution of "tea bowls" at NM2
- Table 8 Distribution of "rice bowls" at NM2
- Table 9 Distribution of "tea bowls" at NM2
- Table 10 Attributes list of "Rice bowl" from NM2
- Table 11 Attributes list of "tea bowls" from NM2
- Table 12 Morphological classification of dishes from NM2
- Table 13 Classification of dish design from NM2
- Table 14 Distribution of dishes at NM2
- Table 15 Distribution of porcelain dishes from NM2
- Table 16 Attributes list of dishes from NM2
- Table 17 Attributes list of porcelain dishes from NM2
- Table 18 Attributes list of teapots from NM2
- Table 19 Attributes list of teapot lids from NM2
- Table 20 Distribution of teapots at NM2
- Table 21 Distribution of teapot lids at NM2
- Table 22 Attributes list of on various ceramics from NM2
- Table 23 Distribution of red earthenware and smudged black earthenware at NM2
- Table 24 Distribution of wooden materials at NM2
- Table 25 Distribution of metal and other artifacts at NM2
- Table 26 Distribution of ceramic roof tiles at NM2
- Table 27 Feature changes at NM3 listed chronologically
- Table 28 A work record of daily excavations at NM3
- Table 29 Size of post holes
- Table 30 Distribution of ceramics at NM3
- Table 31 Notes on ceramics in Fig. 65 and 66
- Table 32 Distribution of wooden, metal and other artifacts at NM3
- Table 34 Attributes list of ceramic roof tiles from NM3

- Table 34 Chronological table on the Sendai Castle
- Table 35 Location of ceremonial new year's greetings
- Table 36 Location of ceremonial monthly greetings
- Table 37 Location of main ceremonies
- Table 38 Location of audience and greetings with *Daimyo*
- Table 39 Mineral Composition of ceramics determined by x-ray diffraction
- Table 40 Analytical results of ceramics from NM2 and the GSJ geometrical standards
- Table 41 List of the excavated seeds
- Table 42 Percentages of pollens
- Table 43 List of faunal remains from NM2
- Table 44 Compositions of melted glass from NM2
- Table 45 Softening point and specific gravity

## Plates

- Plate 1 Views and cross section of NM1
- Plate 2,3 Features in east part of NM1 (1),(2)
- Plate 4 Views and a feature of NM2
- Plate 5 Snapshot of the excavation and close-up of artifacts
- Plate 6,7 Features at NM2 (1),(2)
- Plate 8 Cross sections at NM2
- Plate 9 Views of NM3
- Plate 10-12 Features at NM3 (1)-(3)
- Plate 13-16 "Rice bowls" with cobalt blue from NM2 (1)-(4)
- Plate 17 "Tea bowls" from NM2
- Plate 18-20 Dishes from NM2 (1)-(3)
- Plate 21-24 Porcelain dishes from NM2 (1)-(4)
- Plate 25-30 Teapots from NM2 (1)-(6)
- Plate 31 Teapots small teapots and teapot lids from NM2
- Plate 32,33 Teapots lids from NM2 (1),(2)
- Plate 34 Bottles and various ceramics from NM2
- Plate 35 Cooking pots and various ceramics from NM2
- Plate 36 Cooking pot red earthenware and smudged black earthenware from NM2
- Plate 37 Red earthenware and smudged black earthenware from NM2
- Plate 38,39 Ceramic roof tiles from NM2 (1),(2)

- Plate 40-42 Wooden materials from NM2 (1)-(3)
- Plate 43 Shingling at *Jôge-nyorai* five storied pagoda
- Plate 44 Eave shingles of *Jôge-nyorai* five storied pagoda
- Plate 45 Shingled roofs and implements for shingling
- Plate 46 Metal materials from NM2
- Plate 47 Metal materials and various artifacts from NM2
- Plate 48 Various artifacts from NM2
- Plate 49 A sole of military shoe from NM2 and specimens of military shoes
- Plate 50 Ceramic roof tiles and a iron ring from NM1
- Plate 51 Ceramics from NM3
- Plate 52,53 Ceramic roof tiles from NM3 (1),(2)
- Plate 54 Ceramic roof tiles and other artifacts from NM3

## THE SITE REPORT OF THE SECONDARY CITADEL OF SENDAI CASTLE

The Commission of the Buried Cultural Properties in the Campus  
of Tohoku University, Katahira-cho, Sendai 980, JAPAN

This is a report of three location in the *Ninomaru* (the secondary citadel) of Sendai Castle excavated in 1983 and 1984.

Sendai Castle was built in AD 1600 by *Mosamune Date* on a hill of 120m above sea level. It was a strategic point whose eastern and southern boundaries were guarded by cliffs of 70m, the *Hirose* river to the east and a stream to the south. One could see the whole city from there. In A.D. 1600, *Ieyasu Tokugawa* who became the first shogun of the *Tokugawa* shogunate, brought the whole land under his rule after a war-torn period of some 200 years. *Masamune Date* was appointed to the first daimyo of *Sendai-han* (feudal clan). However, because the age of war was over, the primary citadel on the high hill became useless, and *Tadamune Date*, the second daimyo, built the secondary citadel (*Ninomaru*) on lower terrace (60m above sea level, and 40m above the river) in 1639. Since then the *Ninomaru* had been not only the residence of daimyos but the center of the government of the *Sendai-han* for some 250 years. Although it was destroyed by earthquakes and fires a couple of times, it was quickly reconstructed in each time.

In 1868, the *Tokugawa* shogunate was replaced by the new government of the Emperor (*Edo* era was over and *Meiji* era began). Japan put an end of 200 years of national isolation, and Western cultures were imported rapidly. Prefectures were established instead of feudal clans, and the *Date* family rule was over. In 1871, the *Ninomaru* was occupied by the Japanese imperial army which was newly organized in Western style. In 1882, almost all of the structures of *Ninomaru* was lost in fire, and its brilliant history was over.

The site continued to be occupied by the imperial army, until the American army occupied it after World War II. The occupation of the armies prevented any scientific investigation of the site. It was 1957 the site area changed to the Tohoku University campus and, therefore, investigation on it became possible. However the organized excavation has only started in 1983.

The excavation revealed that the preservation of structures and artifacts was better than expected and that the arrangement of the structures fits the old map of the site very well. Furthermore, new structures which were not drawn on the old map were discovered. These results give a clue to the ordinary life of the residents of the castle as well as new information as to the architectural structure of the castle.

NM1 (Location 1 of *Ninomaru*)

This was probably the plaza in the western edge of the *Ninomaru* which was followed by the slope of the backyard forests. Although the excavated area is a rather peripheral part of the structure, underdrain ditches and pits were found. A few artifacts such as ceramics and ceramic roof tiles were also excavated.

NM2 (Location 2 of *Ninomaru*)

Rows of foundation stones and a stone floor were revealed. These structures are thought to be the corridor and its apron structure, located behind the ceremonial hall in the central part of *Ninomaru*. They were covered with strata 3 and 4 which were formed by the fire in 1882. Almost all the artifacts from NM2 are considered to be of the latest part of *Edo* era and early *Meiji* era (mid. of 19c., before 1882). The stone floor, probably a washing area, yielded many artifacts including ceramics, ceramic roof tiles, wooden materials such as shingles and chopsticks, metal materials, plant and animal remains. Therefore, it is considered to have been reused as a trash area until the fire in 1882.

Recovered ceramics, the most abundant artifacts from the stone floor, constitute very important specimens of ordinary serving vessels of those days. However, we cannot tell much about their usage, because life style has undergone two periods of big change, at the beginning of *Meiji* era and after World War II, and also, because ceramics used by the residents at the castle are thought to have been used in a rather different way than those living outside the castle. These ceramics were specially made by relatively sophisticated techniques, but include artifacts of inferior quality which suggests the users were in lower status. Most of the ceramics are thought to have been produced in the nearby production centers such as *Kirigome*, *Hirashimizu* and *Sōma-Ōbori*. This identification was supported by componential analysis of ceramic paste. Other than these popular ceramics, very few ceramics from *Imari* (*Saga* pref.) and *Seto* (*Aichi* pref.), the two big production centers, were found. Considering the facts that the backyard of the hall was reused as a trash area and that some of the ceramics excavated are thought to have been of the early *Meiji* era, it is inferred that these artifacts were disposed in the stone floor after the imperial army occupied the area when the power of the *Sendai-han* actually disappeared. Ceramics used by *Sendai-han* cannot be distinguished from those of imperial army. Some ceramics may have been continuously used by both.

In spite of the fact that ceramics from strata 3 and 4 show some differences from those from the stone floor in the kind of ware (*Kirigome*, the kilns authorized by *Sendai-han*, is lacking) and the motif of the painting decoration, refitted sherds across the strata indicate that the destruction of the *Ninomaru* by fire occurred soon after these artifacts were disposed in the stone floor. As a whole, they are considered to be the final products of traditional ceramic

techniques of the *Yedo* era, untouched by Western techniques.

Roofing materials such as ceramic roof tiles, shingles, and a tenon from NM2 give some detailed information on architectural structure. These artifacts support the idea that most of the structures of the *Ninomaru* had a shingled roof, a style which is now out of popular use.

Melted glass from strata 3 and 4 indicate that glass was used instead of paper screens on structures when the fire occurred. The glass is thought to be imported because production of plate glass had not yet begun in Japan. Also a fragment of a military shoe and glass buttons (both made in Japan) from these strata indicate rapid westernization.

Ceramics, wooden materials such as building materials and a pail, a military shoe, glass and glass buttons were investigated with the aid of modern craftsmen who are accomplished and/or familiar with these techniques. Much useful information on how these products were made and used were given by them.

The stone floor yielded fish bones such as sea bream, codfish, salmon, and shellfish such as corbicula which gives us some idea as to the eating customs of the imperial army. A ditch found in stratum 7 is thought to have been built before the *Ninomaru* structure was established.

The fact that this ditch is running in the same direction as the rows of foundation stones indicates that the temporal gap between these structures is not very pronounced.

#### NM3 (Location 3 of *Ninomaru*)

Structures found at location 3 can be roughly classified into three periods. The oldest group includes a pond which is probably a part of the residence of *Maneyasu Date*, older than the *Ninomaru* structure. This temporal sequence is supported by the fact that the pond was modified by the stonewall. The old map indicates that the stonewall was associated with the southern outline of the *Ninomaru* which was built at the same time as the main structures of the *Ninomaru*. The second period, though its actual age can not be specified, is represented by features which were found on top of the refilled layer of the pond. The last period is represented by features which are thought to have been built after the *Meiji* era.

Ceramics from location 3 are similar to those from location 2. However, differences in the size of some of roof tiles between the location 2 and 3 may indicate a temporal gap between them.

Plant seed analysis and pollen analysis of the soil from the stone floor in location 2 revealed that flora of the forest behind *Ninomaru* some 100 years ago had no great differences from the present flora behind Tohoku University. Pollen analysis shows that there were more pines

and cedars in those days than the present days. In contrast with the *Ninomaru* main area, the hill behind *Ninomaru* was covered with fir, beech and Japanese oak forests and, the valley, with alder and willow trees. Discovery of cherry blossom (*Prunus pendula forma ascendens*) seeds, rather than *Prunus yedoensis* which is the most popular today, implies that these trees were planted around the structures, forming a garden. Another thing to mention is that the riding ground area may be covered with weeds and surrounded by pine and cedar trees.

The excavation tells us that preservation of the *Ninomaru* sites is generally fine. Concerning the future, it is necessary to make planned excavations as well as conservational efforts in order to maintain the historical environment of the University campus.



Location of Sendai



Sendai Castle and related kilns

図

版



1. 排土作業



2. 精査前の発掘区



3. 北壁断面

図版1 NM1全景と断面図

Plate 1 Views and cross section of NM1



1. 東区水没状況



2. 溝1・ピット2確認面

3. 溝1・発掘途中

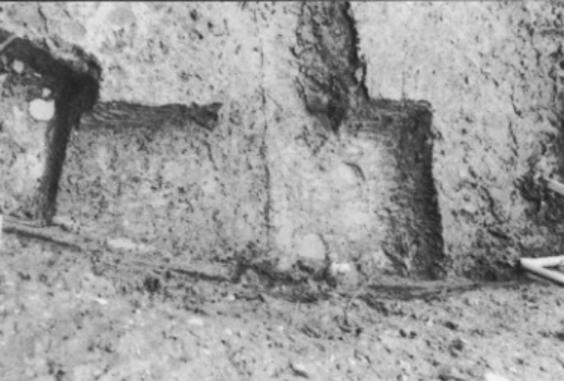


4. 溝1・掘りあげ



図版2 NM1東区遺構(1)

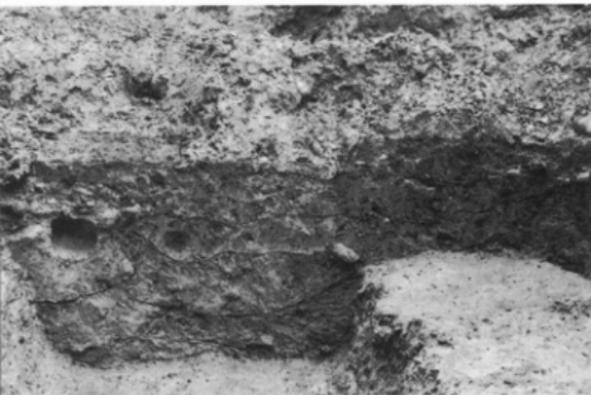
Plate 2 Feauctures in east part of NM1(1)



1. ビット4



2. 溝2



3. 南壁断面  
(ビット2,溝1,溝2)

図版3 NM1東区遺構(2)

Plate 3 Features in east part of NM1 (2)



1. 3層上面



2. 5層上面



3. 6層上面



4. ピット1(礎石)

図版4 NM2発掘区全景と遺構

Plate 4 Views and a feature of NM2



1. 作業風景



2. ビット1出土の漆器



3. ビット36出土の土師質皿

図版5 NM2作業風景、遺物出土状況

Plate 5 Snapshot of the excavation and close-up of artifacts

1. 礎石1と掘り方



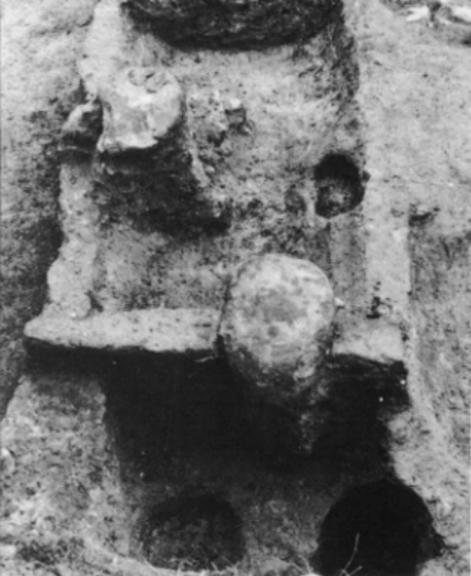
2. 礎石掘り方  
(ピット19)



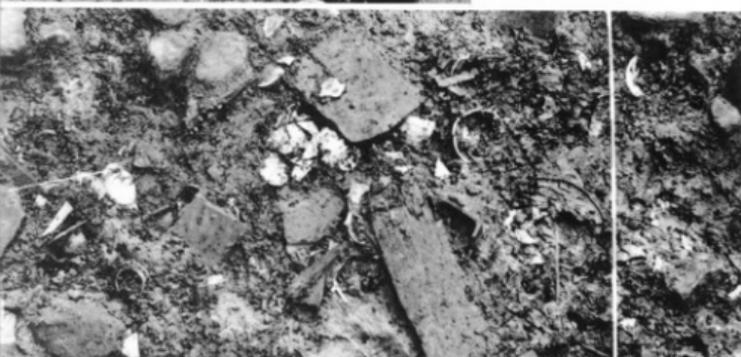
3. 礎石掘り方  
(ピット23)



図版6 NM2の遺構(1)



1. 溝1



2. 石敷遺構遺物出土状況



3. 石敷遺構

図版7 NM2の遺構(2)

Plate 7 Features at NM2 (2) foundation stone and stone floor of washing area

1. 北壁ピット36  
セクション



2. 北壁



3. 東壁



図版8 NM2の断面

Plate 8 Cross sections of NM2



1. 2層上面



2. 3層上面



3. 坑渠区全景

图版9 NM3发掘区全景  
Plate 9 Views of NM3

1. 掘立柱建物1全景



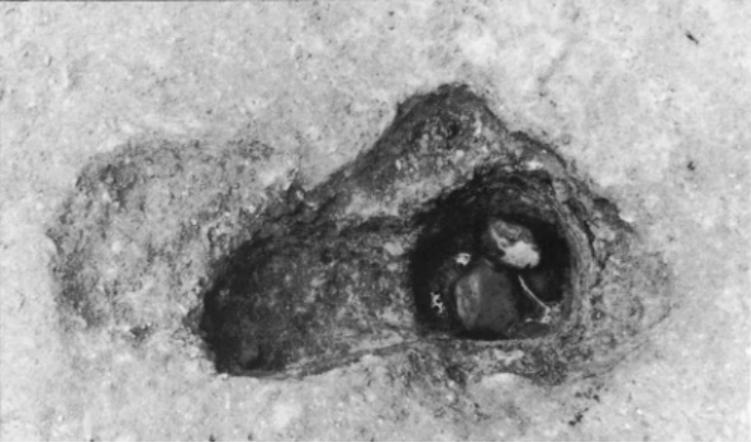
2. ビット22



3. 試掘坑からみた石垣



図版10 NM3の遺構(1)



1. ビット17a, 17b



2. ビット25

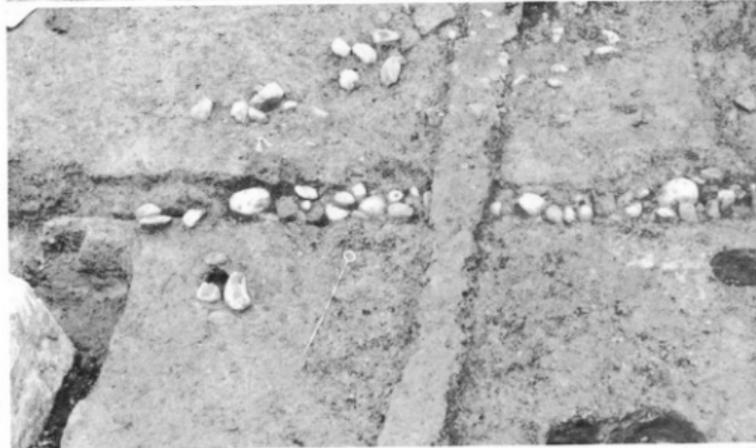


3. ビット7,8,10

1. ピット1



2. 溝と石詰め状況



3. ピット12掘り上げ全景



図版12 NM3の遺構(3)



1 (I<sub>1</sub>-Aa) [20-1]



2 (I<sub>1</sub>-Aa) [20-1]



3 (I<sub>1</sub>-Ab)



4 (I<sub>1</sub>-B) [20-2]



5 (I<sub>1</sub>-C:表) [20-3]



6 (I<sub>1</sub>-C:裏) [20-3]



7 (I<sub>1</sub>-C)



8 (I<sub>1</sub>-D) [20-4]

図版13 NM2出土の茶碗(1)

Mid. of 19c. (before 1882)

Plate 13 "Rice bowls" with cobalt blue from NM2(1)

porcelains

[ ] 内は対応する図の番号を示す。 Number in square brackets is figure number



1 (I<sub>1</sub>-D)



2 (I<sub>1</sub>-E)[21-1]



3 (I<sub>1</sub>-F)[21-2]



4 (I<sub>1</sub>-G)[21-3]



5 (I<sub>1</sub>-H:表)[21-4]



6 (I<sub>1</sub>-H:裏)[21-4]



7 (I<sub>1</sub>-I:表)[22-1]



8 (I<sub>1</sub>-I:裏)[22-1]

図版14 NM2出土の茶碗(2) Mid. of 19c.(before 1882)  
 Plate 14 "Rice bowls" with cobalt blue from NM2 porcelains



1 (I<sub>1</sub>-I)



2 (I<sub>1</sub>-J) [22-2]



3 (I<sub>1</sub>-K) [22-3]



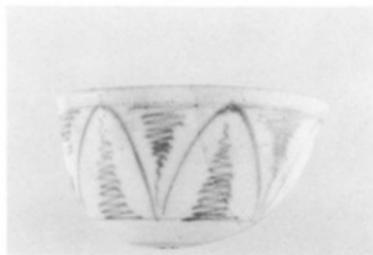
4 (I<sub>1</sub>-L) [22-4]



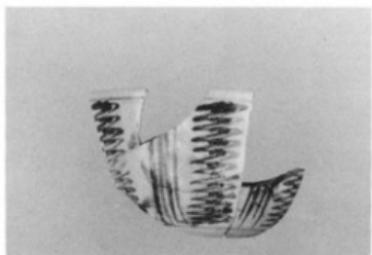
5 (I<sub>1</sub>-I)



6 (I<sub>1</sub>-M) [22-5]



7 (I<sub>1</sub>-N) [23-1]



8 (I<sub>1</sub>-O) [23-2]

図版15 NM2出土の茶碗 (3)

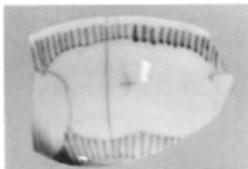
Mid. of 19c. (before 1882)

Plate 15 "Rice bowls" with cobalt blue from NM2

porcelains



1 (I,-P) [23-3]



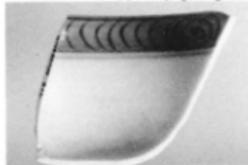
2 (I,-Q) [23-4]



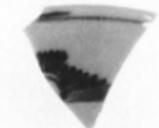
3 (Ia) [23-6]



4a (III) [23-5]



4b [23-5]



5 (I) [23-7]



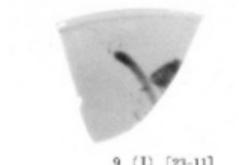
6 [23-8]



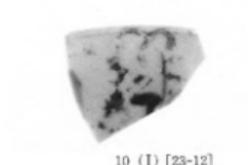
7 (I) [23-9]



8 (I) [23-10]



9 (I) [23-11]



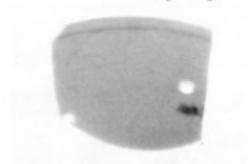
10 (I) [23-12]



11 (Ia) [23-13]



12 (I) [23-14]



13 (III) [23-15]



14



15



16

図版16 NM2出土の茶碗 (4) Mid. of 19c.(before 1882)

Plate 16 "Rice bowls" with cobalt blue from NM2

porcelains



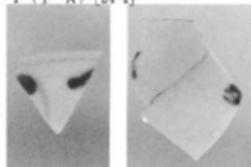
1 (I-A) [24-1]



2 (I-A) [24-2]



3 (I-B) [24-4]



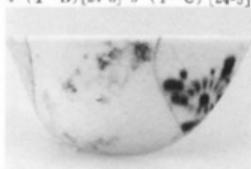
4 (I-B) [24-3] 5 (I-C) [24-5]



6 (I-C) [24-6]



7 (I-D) [24-11]



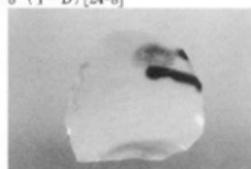
8 (I-D) [24-8]



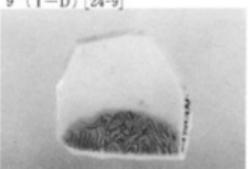
9 (I-D) [24-9]



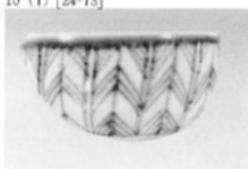
10 (I) [24-13]



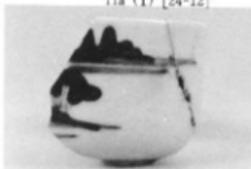
11a (I) [24-12]



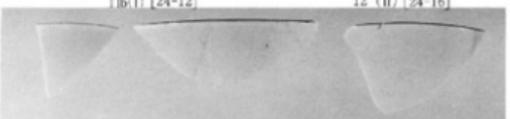
11b (I) [24-12]



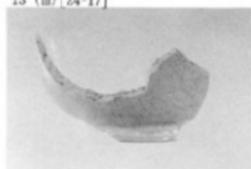
12 (II) [24-16]



13 (III) [24-17]



15 (I) [24-15]



14 [24-18]



16 (I) [24-14]



17 (IV) [24-19]



18



19



20



21 [24-20]

図版17 NM2出土の小形茶碗  
Plate 17 "Tea bowls" from NM2

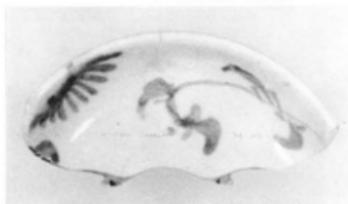
Mid. of 19c. (before 1882)  
porcelains (except 21)



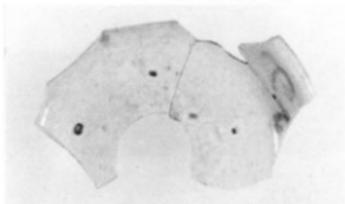
1 (I<sub>1</sub>-Aa) [25-1]



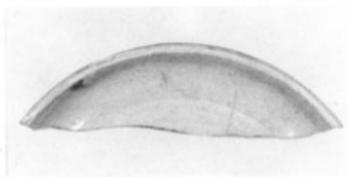
2 (I<sub>1</sub>-Ab) [25-2]



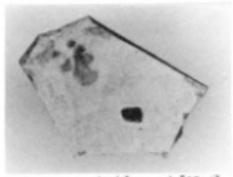
3 (I<sub>1</sub>-Ac) [25-3]



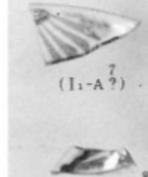
4 (I<sub>1</sub>-Ac) [25-5]



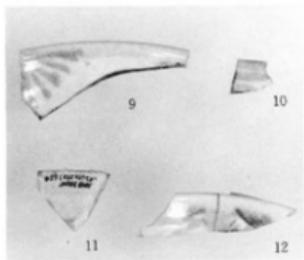
5 (I<sub>1</sub>?)



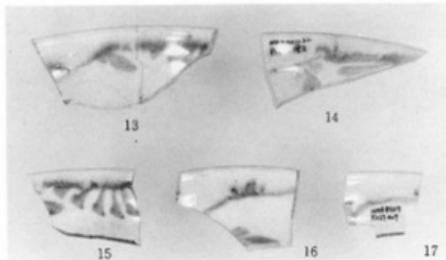
6 (I<sub>1</sub>-Ad) [25-4]



7  
(I<sub>1</sub>-A?)  
8  
(I<sub>1</sub>-A?)



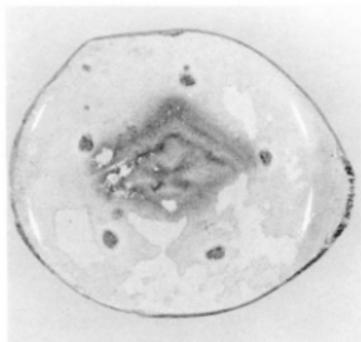
9  
10  
11  
12  
(I<sub>1</sub>-A?)



13  
14  
15  
16  
17  
(I<sub>1</sub>-A?)

図版18 NM2出土の陶器皿(1)  
Plate 18 Dishes from NM2 (1)

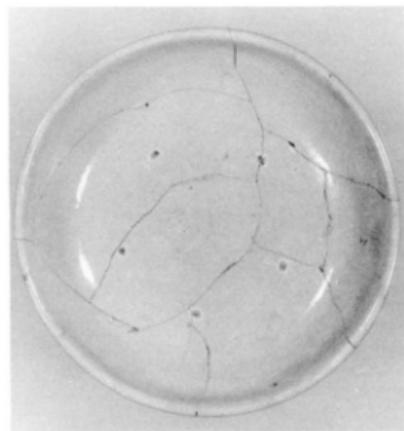
Mid. of 19c.(before 1882)



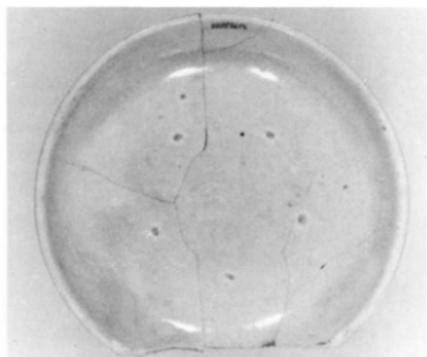
1 (I<sub>1</sub>-B) [25-6]



2 (I<sub>1</sub>-C) [25-7]



3 (I<sub>1</sub>-無文) [25-9]



4 (I<sub>1</sub>-無文) [25-8]



5 (I<sub>1</sub>-無文) [25-10]



6 (I<sub>1</sub>-無文?)



7 (I<sub>1</sub>-K) [25-11]

縮尺 1:2

図版19 NM2出土の陶器皿(2)  
Plate 19 Dishes from NM2 (2)

Mid. of 19c. (before 1882)



1 (II<sub>1</sub>) [25-12]



3 (II<sub>1</sub>) [25-14]



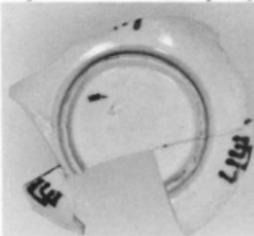
4 (II<sub>1</sub>) [26-15]



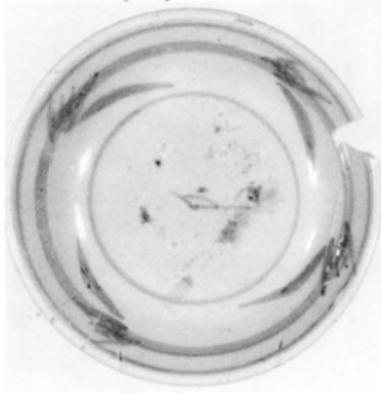
2 (II<sub>1</sub>) [25-13]



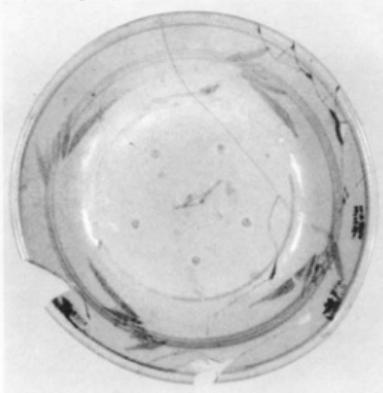
5 表 (I<sub>1</sub>-C) [26-1]



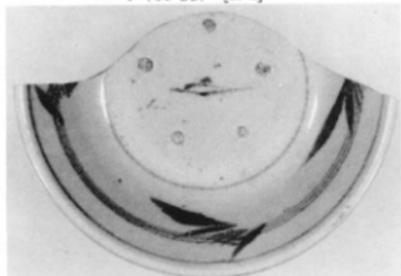
5 裏



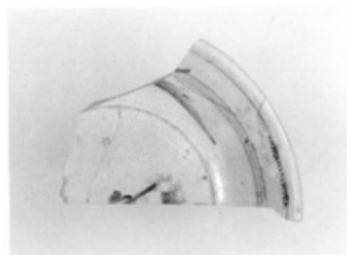
6 (I<sub>2</sub>-Da) [26-2]



7 (I<sub>2</sub>-Da) [26-3]



8 (I<sub>2</sub>-Da) [26-4]

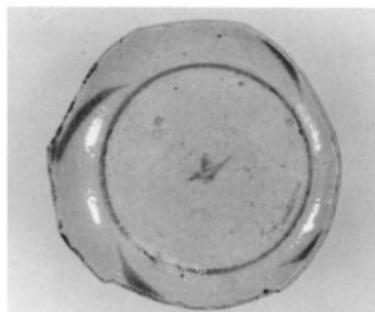


9 (I<sub>2</sub>-Da)

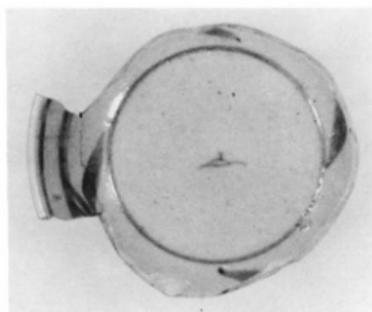
縮尺 1:2

図版20 NM2出土の陶・磁器皿  
Plate 20 Dishes from NM2

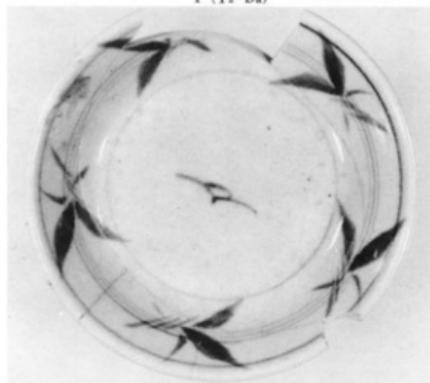
Mid. of 19c.(before 1882)  
5-9 porcelains



1 (I<sub>2</sub>-Da)



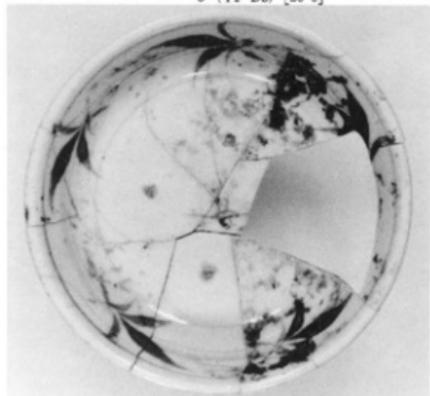
2 (I<sub>2</sub>-Da)



3 (I<sub>2</sub>-Db) [26-5]



5 (I<sub>2</sub>-Db)



4 (I<sub>2</sub>-Db) [26-6]



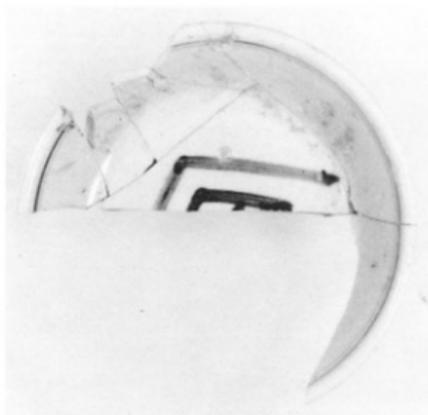
6 (I<sub>2</sub>-B)

縮尺 1 : 2

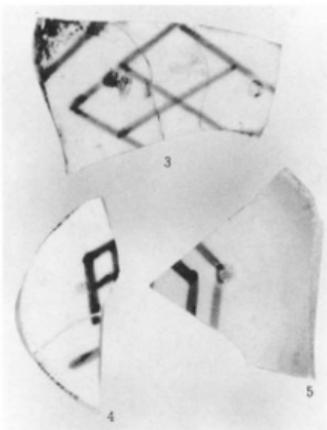
図版21 NM2出土の磁器皿(1)

Plate 21 Porcelain dishes from NM2 (1)

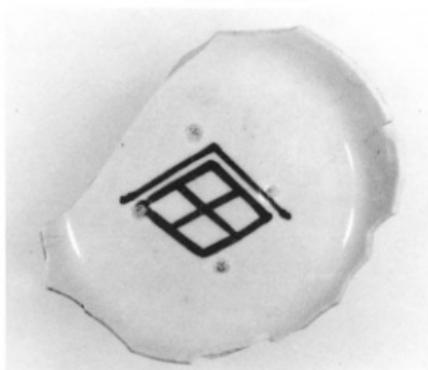
Mid. of 19c. (before 1882)



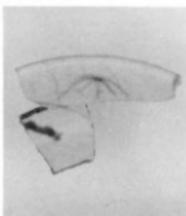
1 (Ia-B ?) [27-1]



(Ia-B ?)



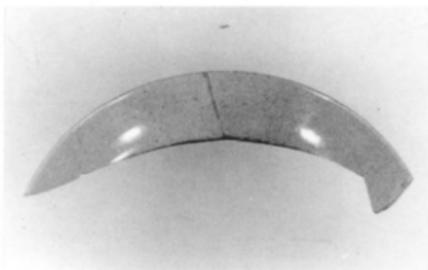
2 [27-2]



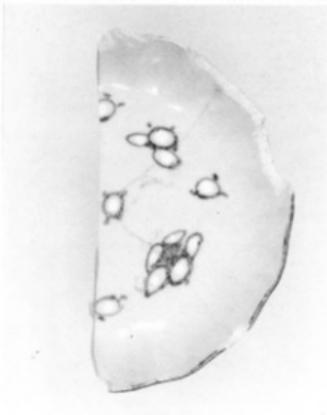
6 (I ?) [27-3]



7 (Ia-H) [27-4]



8 (I ?) [27-5]



9 (IIa-E) [27-6]

図版22 NM2出土の磁器皿(2)

Mid. of 19c. (before 1882)

縮尺 1:2

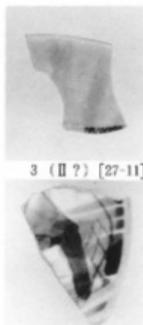
Plate 22 Porcelain dishes from NM2 (2)



1 (II-F) [27-7]



2 (II-F)



3 (II?) [27-11]

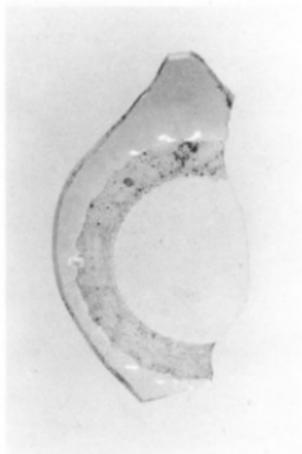
4 (Ia?)



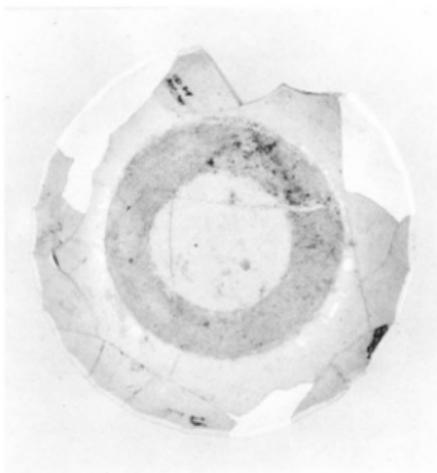
6 (II?) [27-13]



5 (II?) [27-12]



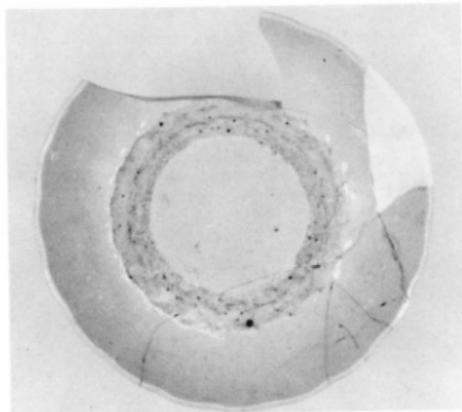
7 (II-無文)



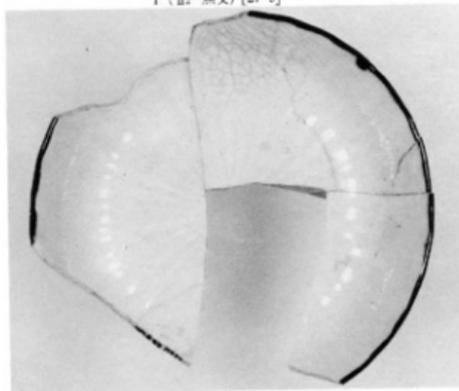
8 (II-無文) [27-8]

縮尺 1:2

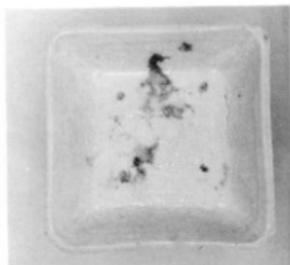
図版23 NM2出土の磁器皿(3) Mid. of 19c.(before 1882)  
Plate 23 Porcelain dishes from NM2 (3)



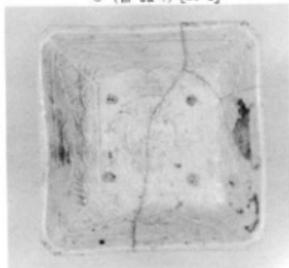
1 (Ⅲ<sub>2</sub>-無文) [27-9]



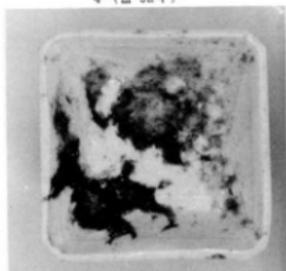
2 (Ⅲ<sub>1</sub>-無文) [27-10]



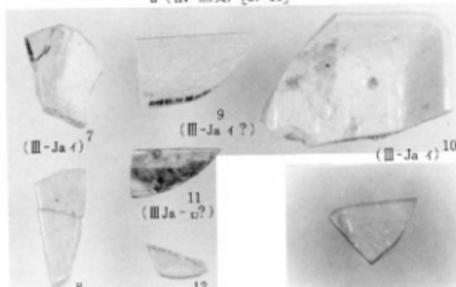
3 (Ⅲ-Ja<sub>1</sub>) [28-1]



4 (Ⅲ-Ja<sub>1</sub>)



5 (Ⅲ-Ja<sub>1</sub>)



(Ⅲ-Ja<sub>1</sub>) 7

(Ⅲ-Ja<sub>1</sub>?) 9

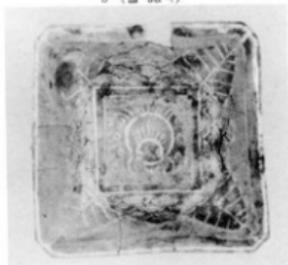
(Ⅲ-Ja<sub>1</sub>) 10

(Ⅲ-Ja<sub>1</sub>?) 8

(Ⅲ-Ja<sub>1</sub>?) 12

(Ⅲ-Ja<sub>1</sub>-c?) 11

13 (Ⅲ-Jb) [28-3]



6 (Ⅲ-Ja<sub>c</sub>) [28-2]

図版24 NM2出土の磁器皿(4)  
Plate 24 Porcelain dishes from NM2(4)

Mid. of 19c. (before 1882)

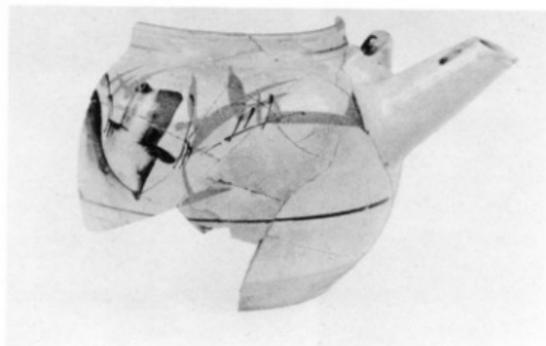
縮尺 1:2



1a | 山水文  
[ 29-1 ]



1b

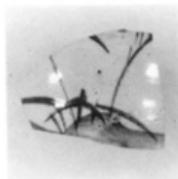


2 | 笹竹文  
[ 29-2 ]

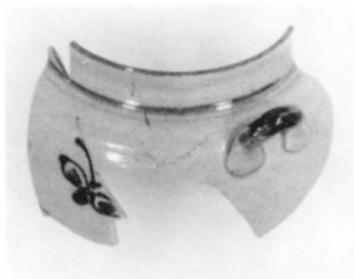
縮尺 1:2

図版25 NM2出土の土瓶(1)  
Plate 25 Teapots from NM2 (1)

Mid. of 19c. (before 1882)



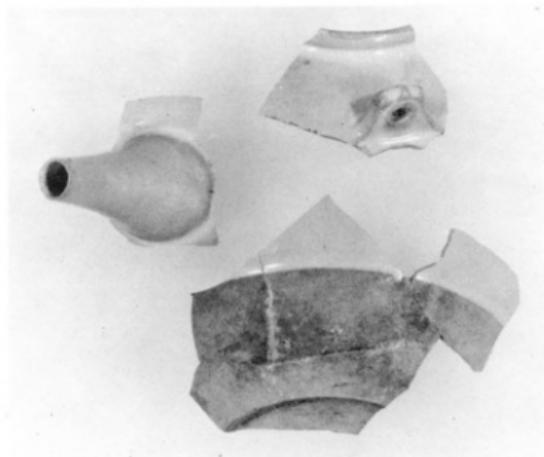
1 I 笹竹文



2 I 蝶文  
[ 29-4 ]



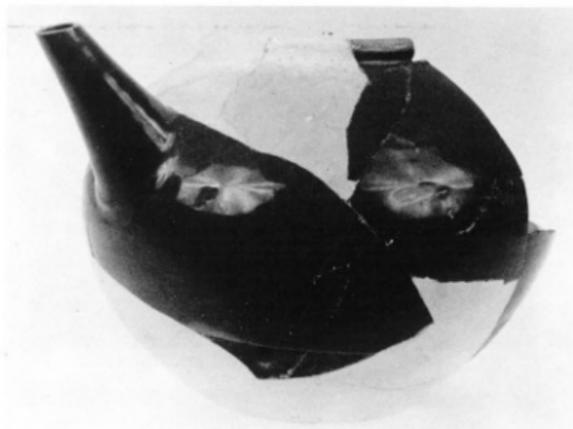
3 II, 青釉  
[ 29-5 ]



4 II, 珠白釉  
[ 30-1 ]

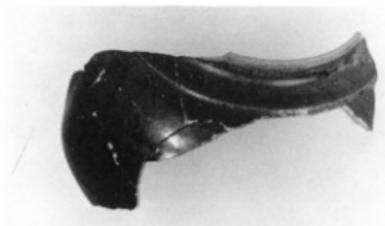
図版26 NM2出土の土瓶(2)  
Plate 26 Teapots from NM2 (2)

Mid. of 19c. (before 1882)



1 Ⅱ. 青釉  
[ 30-2 ]

2 Ⅱ. 青釉  
[ 30-3 ]

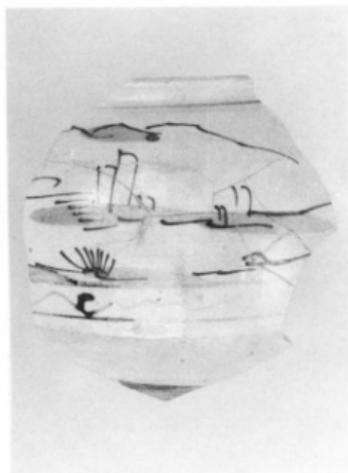


3 Ⅱ. 山水文  
[ 30-4 ]

縮尺 1 : 2

図版27 NM2出土の土瓶(3)  
Plate 27 Teapots from NM2 (3)

Mid. of 19c. (before 1882)

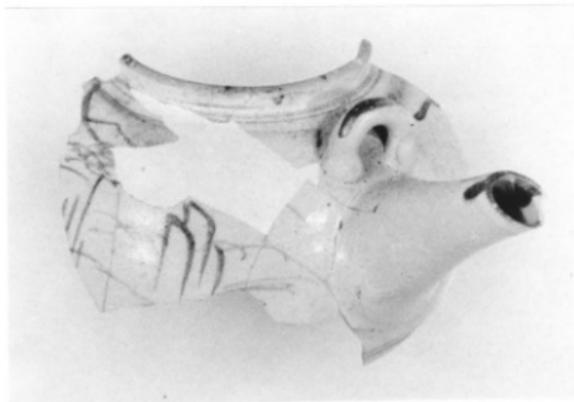


1 山水文 [ 30-5]

2 山水文 [ 31-1]



3 山水文 [ 31-2]



図版28 NM2出土の土瓶(4)  
Plate 28 Teapots from NM2 (4)

Mid. of 19c. (before 1882)

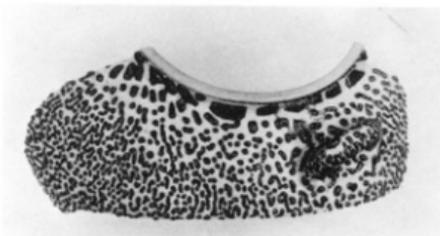
縮尺 1:2



1 Ⅱ.牡丹文  
[31-3]



2 Ⅱ.牡丹文  
[31-4]



3 Ⅱ.豹肌精  
[32-2]

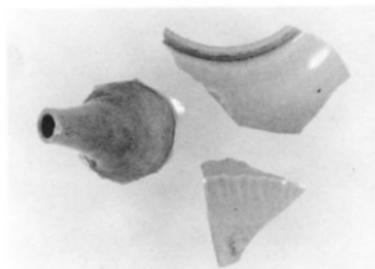
縮尺1:2

図版29 NM2出土の土瓶(5)  
Plate 29 Teapots from NM2 (5)

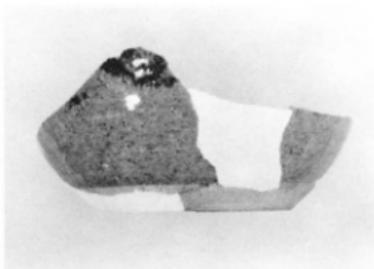
Mid. of 19c. (before 1882)



1 II. 梨肌粉  
[32-1]



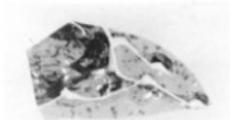
2 II. 飛龍文 [32-3]



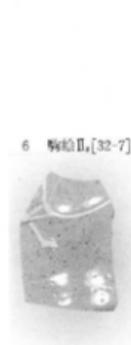
3 II. [32-4]



4 山水文 [32-5]



5 菊絵 [32-6]

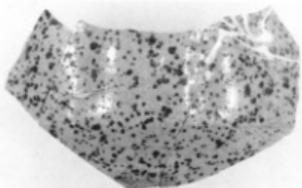


6 菊絵II. [32-7]

縮尺 1:2

図版30 NM2出土の土瓶(6)  
Plate 30 Teapots from NM2 (6)

Mid. of 19c. (before 1882)



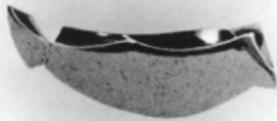
1 II, 駱絵 [32-8]



2 II, 山形に武田菱 [32-9]



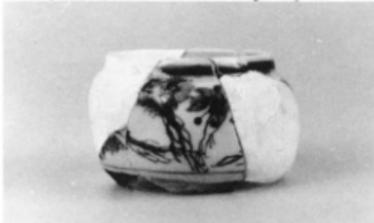
3 II, 葡萄文? [32-11]



4 II, 駱絵 [32-10]



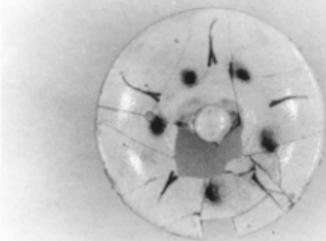
5 急須 [32-12]



6a 急須 [32-13]



6b



7 I 巴文 [33-1]



8 I 巴文 [33-2]



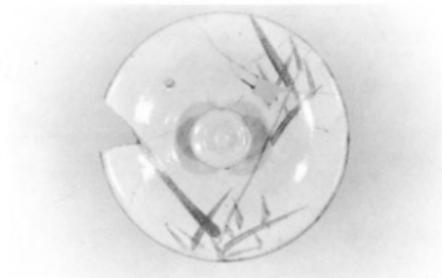
9 I 巴文 [33-4]



10 I 巴文 [33-3]

図版31 NM2出土の土瓶・急須・蓋

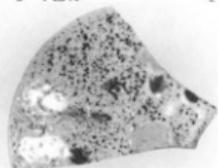
縮尺1:2 Plate 31 Teapots, small teapots and teapot lids from NM2 Mid. of 19c.(before 1882)



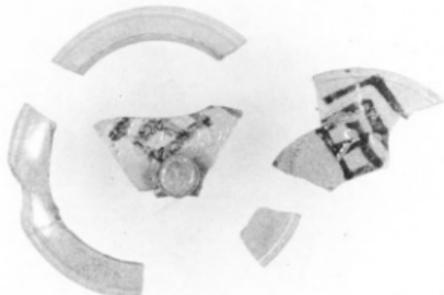
1 Ⅰ 笹竹文 [33-5]



2 Ⅰ 巴文 [33-8]



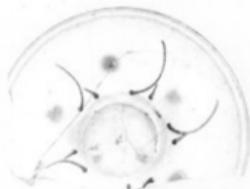
5 Ⅱ 巴文 [33-11]



3 山形に武田菱 [33-9] 4 山形に武田菱 [33-10]



6 Ⅱ 巴文 [33-12]



7a Ⅱ 巴文

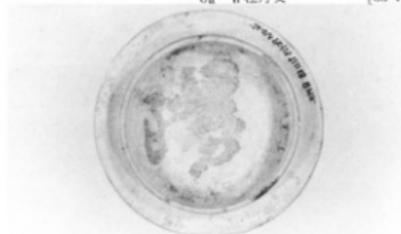


8a Ⅱ 牡丹文 [33-7]



7b (うら)

[33-6]



8b (うら)

縮尺 1:2

図版32 NM2出土の土瓶の蓋(1)  
Plate 32 Teapot lids from NM2 (1) Mid. of 19c. (before 1882)



1 Ⅱ, 梅花+青釉

[33-13]



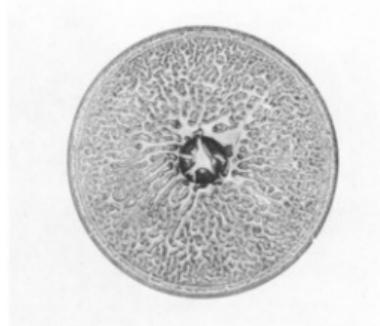
2 Ⅱ, 梅花+白釉

[33-16]



3 Ⅱ, 蚊肌釉

[33-15]



4 Ⅱ, 蚊肌釉

[33-18]



5 Ⅱ, 青釉



6 Ⅱ, 蚊肌釉

縮尺 1:2

図版33 NM 2 出土の土瓶の蓋(2)  
Plate 33 Teapot lids from NM 2(2)

Mid. of 19c.  
(before 1882)



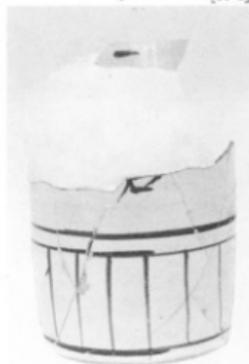
1 [36-1]



2 [36-2]



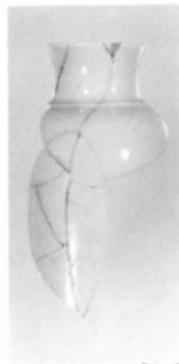
3 [36-3]



4 [36-4]



5 [36-5]



6 [36-6]



7 [36-7]



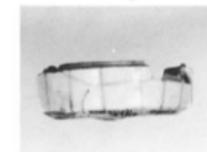
8 [36-8]



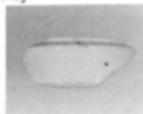
9 [36-9]



10 [37-1]



11 [37-2]



12 [37-3]

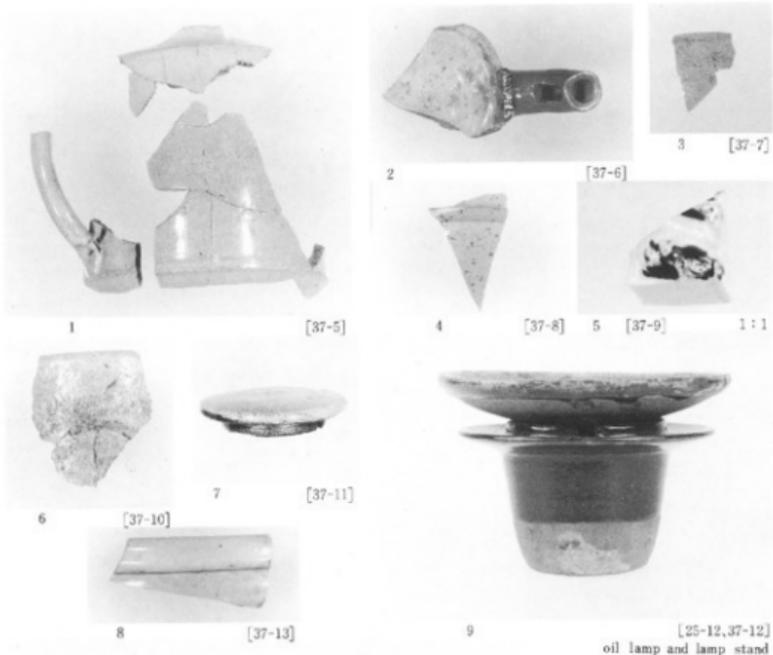


13 [37-4]

縮尺 1 : 2

図版34 NM2出土の徳利とその他の陶磁器  
Plate 34 Bottles and various ceramics from NM2

Mid. of 19c.  
(before 1882)



1 [37-5]

2 [37-6]

3 [37-7]

4 [37-8]

5 [37-9]

1:1

6 [37-10]

7 [37-11]

[37-10]

8 [37-13]

[37-13]

9 [25-12, 37-12]

[25-12, 37-12]

oil lamp and lamp stand

- 11 切込西山工房跡(東北大学蔵)  
 12 多賀城市山王通跡  
 (多賀城市教育委員会の御厚意による)

- 11 specimen from Kirigome kiln  
 12 specimen from Sazō site



10 土鍋

[38-1]

12 土鍋

1:4



11 土鍋

1:4

図版35 NM2出土の土鍋とその他の陶磁器

Plate 35 Cooking pots and various ceramics from NM2

Mid. of 19c.  
 (before 1882)

縮尺1:2



1 土鍋

[38-4]



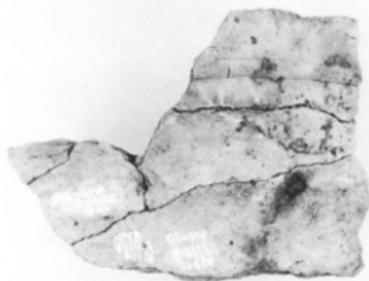
2 皿

[39-1]



3 鉢

[39-13]



4a 溜鉢 (外側)



4b (内側)

[39-6]



5a 鉢

[39-18]



5b 口縁のミガキ

1:1

図版36 NM2出土の土鍋と土師質・瓦質土器

縮尺1:2

Plate 36

Cooking pot, red earthenware and smudged black earthenware from NM2

Mid. of 19c.  
(before 1882)



1 鉢 [39-12] 1:2



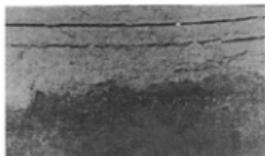
2 土管 [39-16,17] 1:2



3 蚊漬



4 焙烙



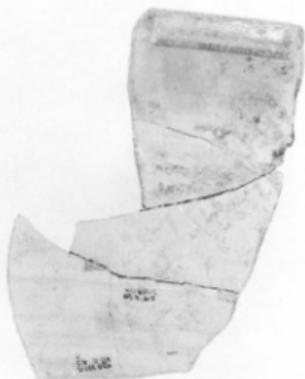
5 炭櫃磚の接合部分の写真



6 炭櫃 [40-1] 1:4



7 炭櫃 [40-2] 1:4



8a 樹書の紋道? [40-3] 1:4



9 土瓶の底の印

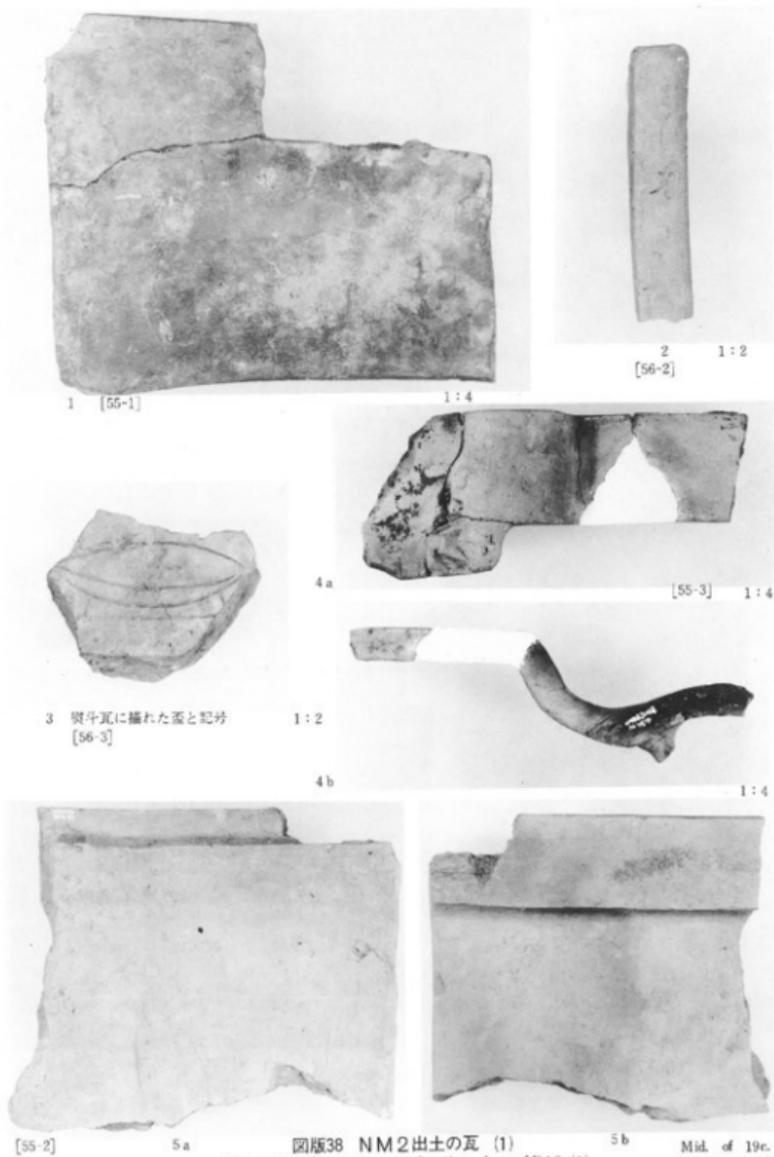


8b Mid. of 19c.

図版37 NM2出土の土師質・瓦質土器

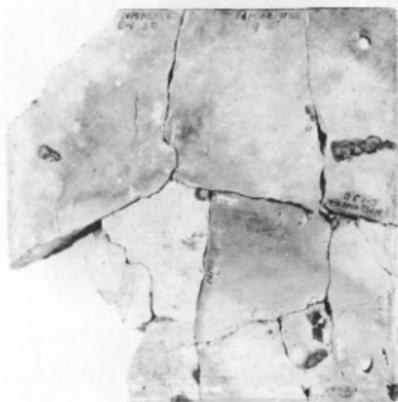
Plate 37 Red earthenware and smudged black earthenware from NM2 (before 1882)

3 4 多賀城作貫地区出土(宮城県多賀城跡調査研究所の御厚意による) 3,4 specimens from Tagajo site



図版38 NM2出土の瓦 (1)  
Plate 38 Ceramic roof tiles from NM2 (1)

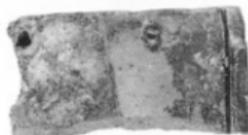
Mid. of 19c.  
(before 1882)



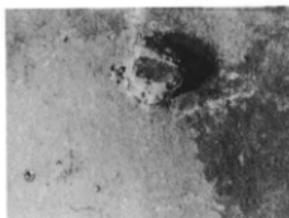
1 製斗瓦 C1-3層 [56-1]



2 製斗瓦 石敷遺構  
水切り溝と葺土の痕



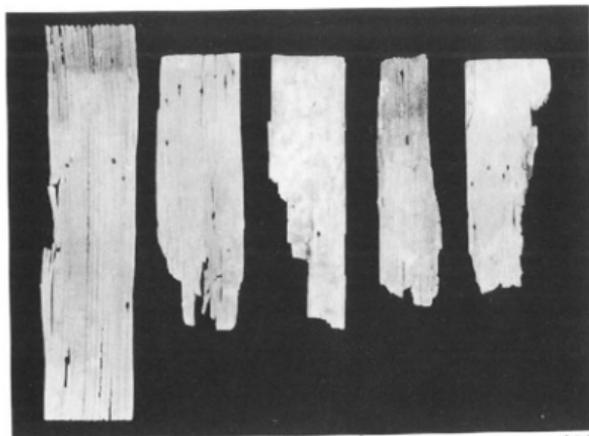
3 釘の残った製斗瓦 石敷・ピット36



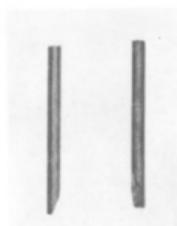
4 3の拡大 1:1

図版39 NM2出土の瓦 (2)  
Plate 39 Ceramic roof tiles from NM2 (2)

Mid. of 19c.  
(before 1882)



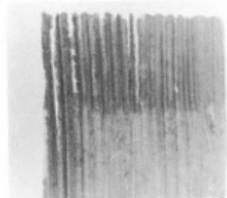
1 木 羽 [44-1,2,6,5,8]



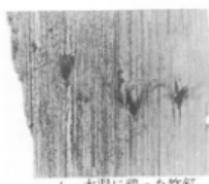
2 1:1

竹釘の見本

examples of bamboo nail



3 木羽の露足 [44-1]



4 木羽に殺った竹釘 [44-3]



5 木羽の文字? [44-6]



6 軒付板 [45-1,8,2]

1:4



7 側面の合釘穴 [45-2]



8 楔 [46-3]



9 軒付板? [46-4]

図版40 NM2出土の木製品(1)

Plate 40 Wooden materials from NM2 (1)

Mid. of 19c.  
(before 1882)

縮尺 1:2



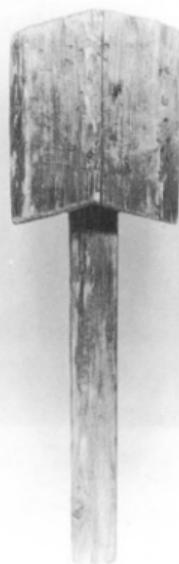
1 棟折 [45-5] 1:4



2 桶の柄? [45-3]



3 板材 [46-2] 1:4



4 下げ束 [46-1] 1:4



5 丸棒 [45-6]



6 角材 [45-7]



7 切片 [46-6] 1:1



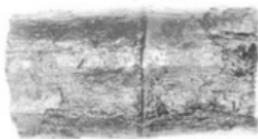
8 集めた木材 A1-4研



9 丸棒



10 切片

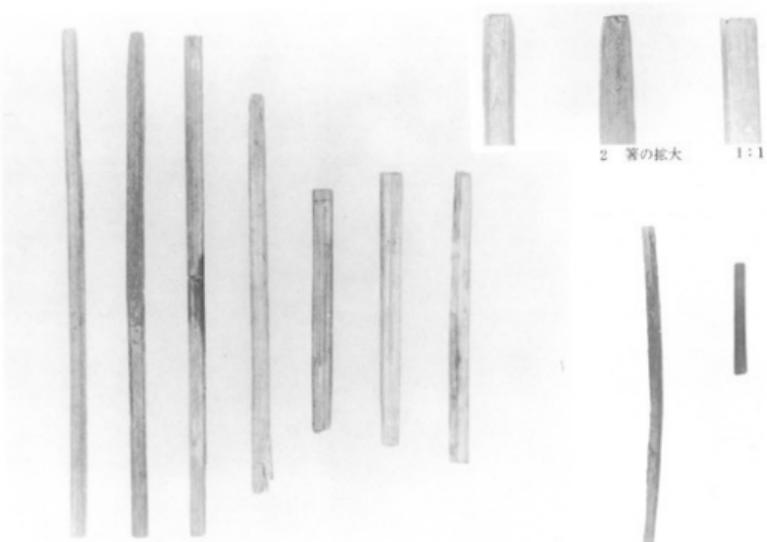


11 竹製品

縮尺 1:2

図版41 NM2出土の木製品(2)  
Plate 41 Wooden materials from NM2 (2)

Mid. 19c.(before 1882)



1 箸

[47-1,2,3,6,10,8,9]

2 箸の拡大

1:1

3 箸(小) [47-7,12]



4 竹製品 石飲遺構



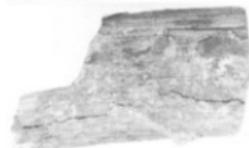
6 竹製品 [47-14]



7 椀 [47-15]



8 炭?



5 炭?

縮尺 1:2



9 竹製品



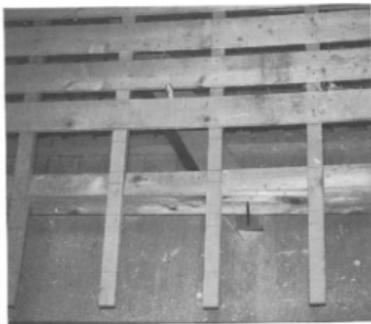
図版42 NM2出土の木製品(3)

Plate 42 Wooden materials from NM2 (3) Mid. of 19c. (before 1882)



1. 木羽板割り Making *koba* (shingles) with a mallet and an adz
2. 墨打ちによる葺足の揃え Using china ink line for arranging tails of *koba*
- 3-5 木羽板の打付(1) Nailing down *koba* with a "roof hammer" and bamboo nails

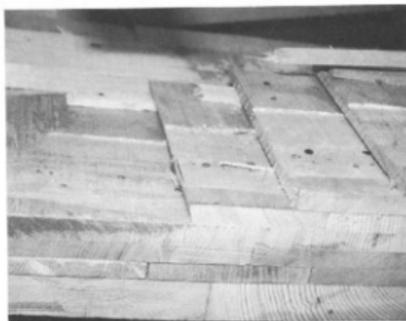
図版43 定義如来五重塔の柿葺作業  
 Plate 43 Shingling at *Jōge-nyōrai* five-storied pagoda (Miyagi pref.)



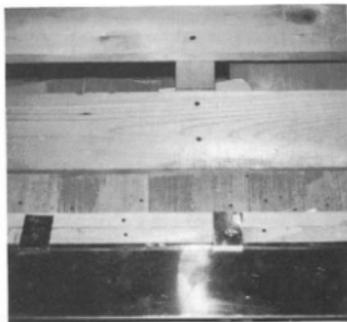
6 (上か6 top view)



7



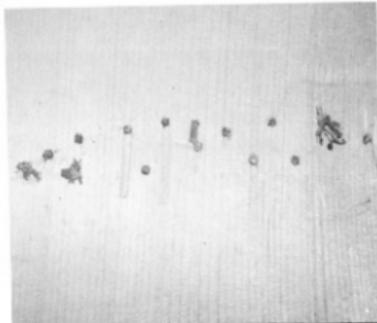
8 (7の拡大)  
横に挿んだ板片は空気の通りをよくする。



9 (上から top view)



10

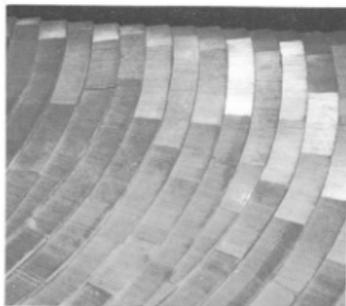


11

6. 軒付板の打付け前 Eave before nailing down *nokitsuke-ita* (eave shingles)  
 7, 8. 下軒付板の打付け Nailing down lower *nokitsuke-ita*  
 9, 10. 仕上がった軒付板(掃葺の前の状態) Completed eave (the state before shingling)  
 11. 軒付板の竹釘 Bamboo nails in *nokitsuke-ita*

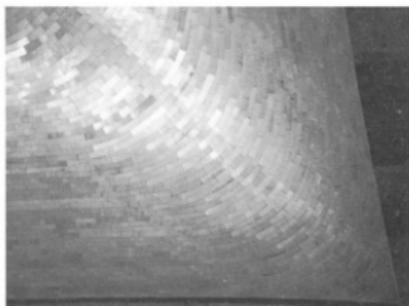
図版44 定養如来五重塔の軒付

Plate 44 Eave shingles of *Joge-nyorai* five-storied pagoda



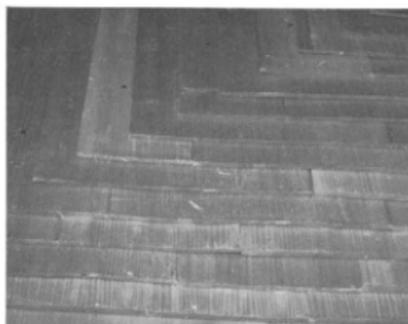
柿葺 隅の部分(横から side view)

12



同左(上から top view)

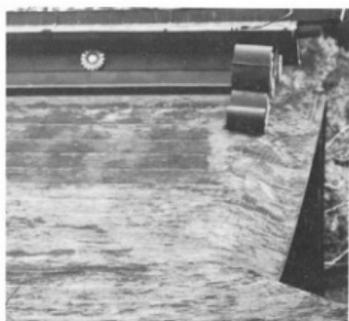
13



柿葺 隅の仕上げ前

14

12-14 定義如米五重塔 *Jogei-nyorai* five-storied pagoda



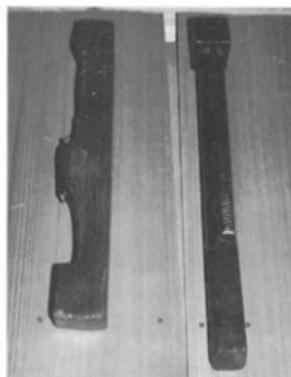
仙台市大崎八幡神社の柿葺と拍楯

15



木羽を割る槌とナタ mallet and adz

16



拍楯金槌 "roof hammer"

17

12, 13 shingled corner ridge

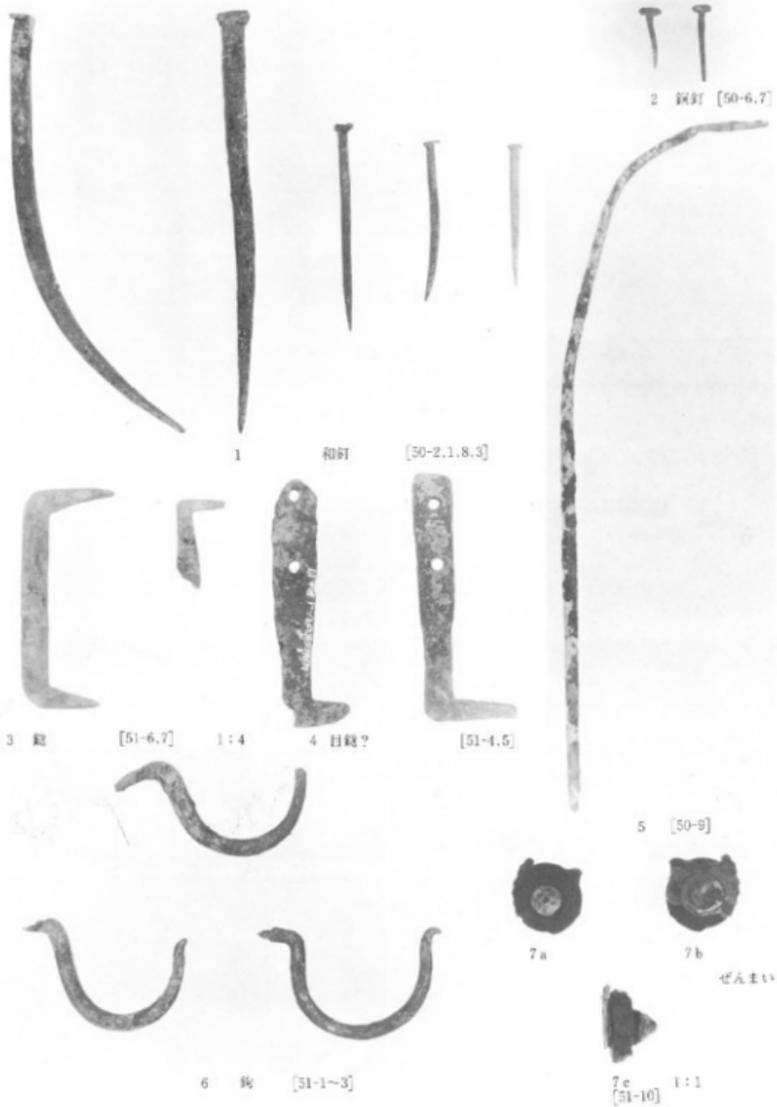
14 shingled roof before completing corner ridge

15 shingled roof of *Osaki-Hachiman* shrine (Miyagi pref.)

16, 17 Implements for shingling

図版45 柿葺屋根と道具

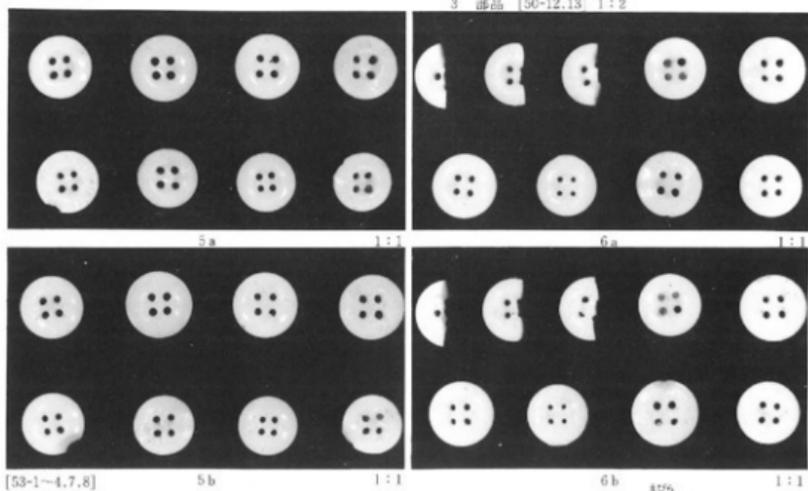
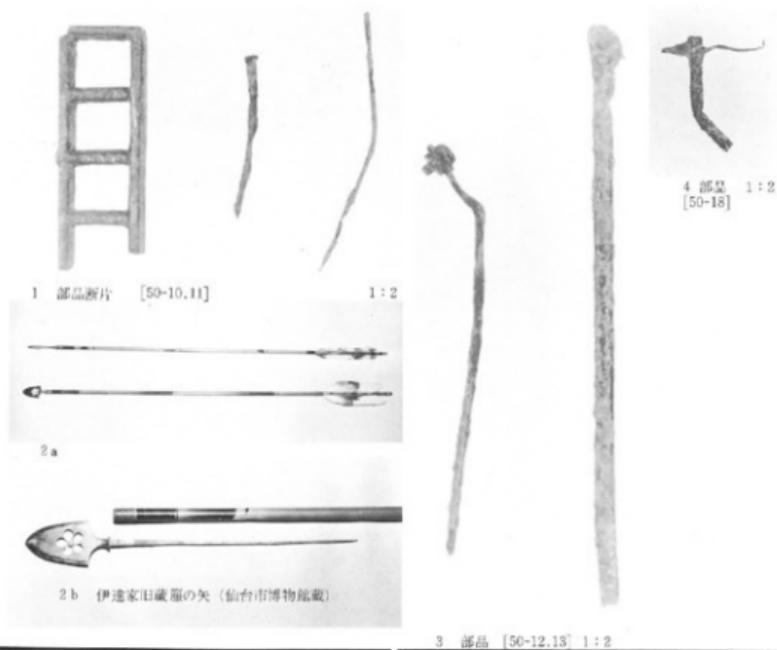
Plate 45 Shingled roofs and implements for shingling



縮尺 1:2

図版46 NM2出土の金属製品  
Plate 46 Metal materials from NM2

Mid. of 19c. (before 1882)



図版47 NM2出土の全属製品、ガラスボタンと伊達家箭の矢  
 Plate 47 Metal materials, glass buttons and examples of Date family arrow

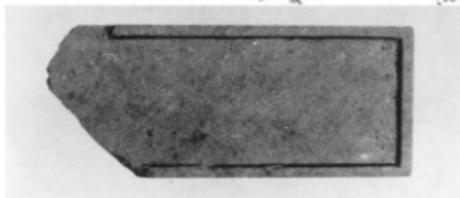


1 硯

[53-17]



2 ガラス小瓶 1:1  
[53-15]

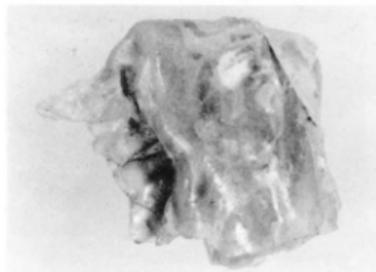


3 硯

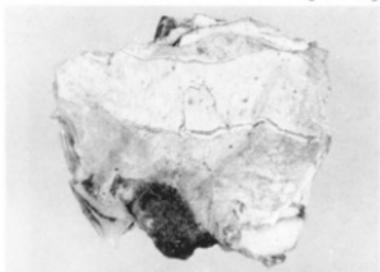
[53-16] 1:1



4 土玉(土製品)  
1:1 [53-9~14]



5 溶融ガラス



6 溶融ガラス

図版48 NM2出土のその他の遺物  
Plate 48 Various artifacts from NM2

Mid. of 19c. (before 1882)



1:2 1a [54]



1b  
1:2



2a



3a



2b



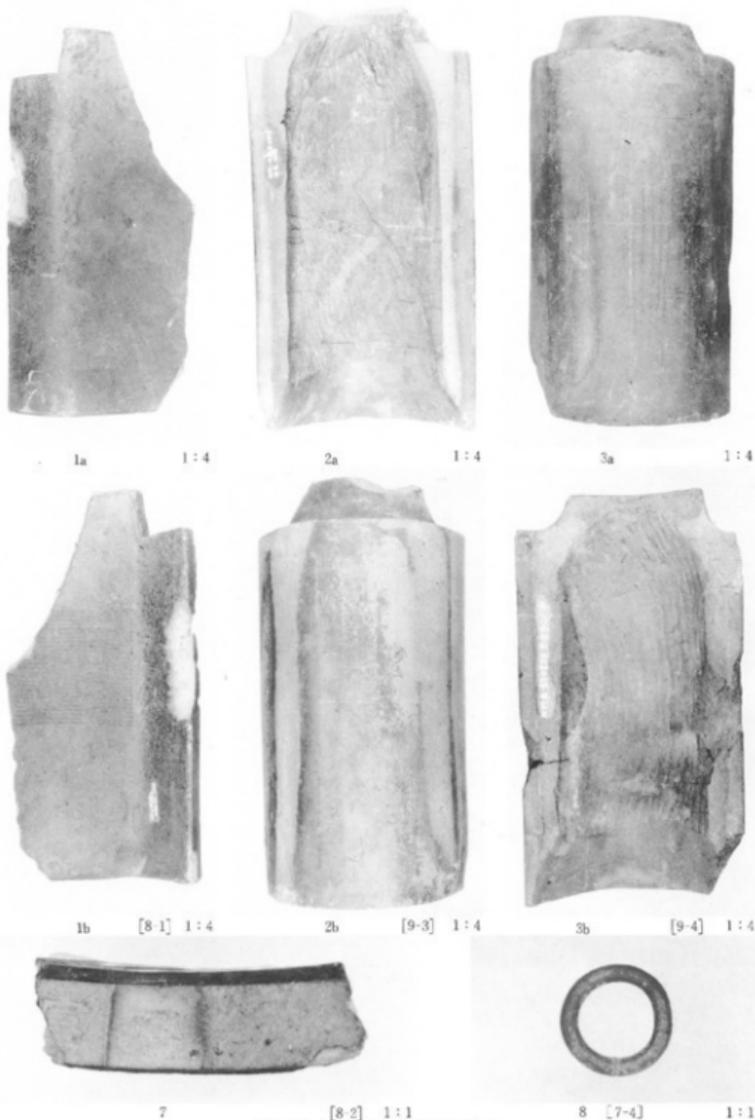
短靴 3b

2.3仙台市歴史民俗資料館蔵

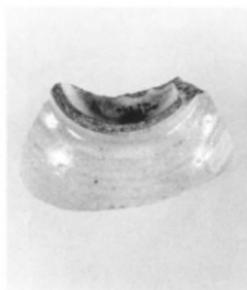
長靴

図版49 NM2出土の軍靴の底と軍靴の見本

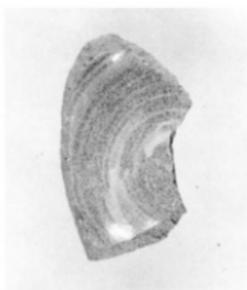
Plate 49 A sole of military shoe from NM2 and examples of military shoes



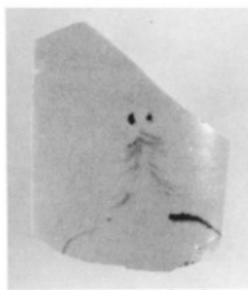
図版50 NM1出土の瓦と銅輪  
 Plate 50 Ceramic roof tiles and a iron ring from NM1



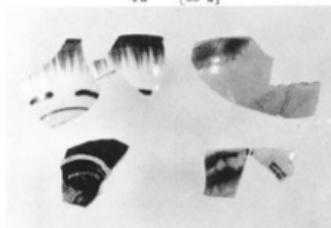
1a [65-2]



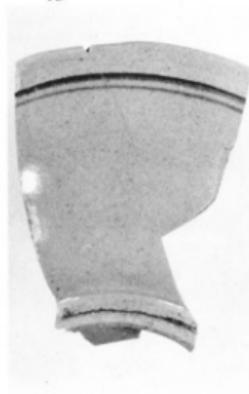
1b



2 [65-7]



3 [65-5,3,1,4]



5 [65-17]



6 [65-15]



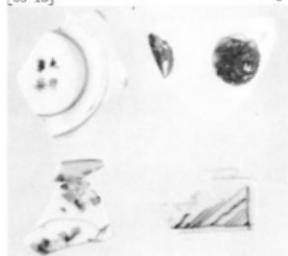
4 [65-13]



7 [65-12]



8 [65-20]



9 [65-11,19,66-2,5]



10 [65-10]

縮尺 1 : 2

図版51 NM3出土の陶磁器  
Plate 51 Ceramics from NM3

probably 19c.



1a [69-3]



1b

1:4



2 [69-6]



3a [69-5]



3b



4 [69-4]



5 [9-1]

6 [9-2] 1:4

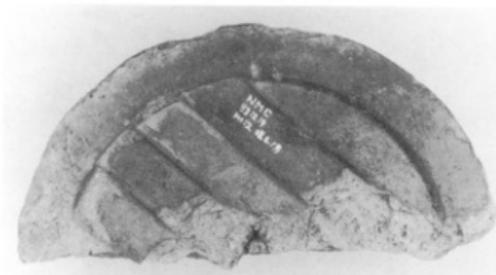
5,6はNM1出土

5 and 6 are from NM1

図版52 NM3出土土の瓦(1)

Plate 52 Ceramic roof tiles from NM3 (1)

縮尺 1:2



1 [68-2]



2 [68-3]



3 [70-1] 1:1



4 [70-4] 1:1



5 [70-7] 1:1



6 [70-8] 1:1



7a

[69-2]

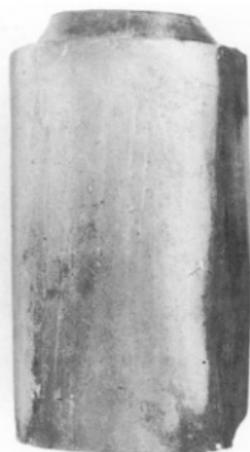


7b

縮尺 1:2

図版53 NM3出土の瓦(2)  
Plate 53 Ceramic roof tiles from NM3 (2)

19c.



1:4

1a



1b

[68-1] 1:4



1:4

2a

2b



[69-1]

1:4



3 杭

3

[67-8] 1:10



4 キセル

4

[67-3] 1:2



5 1:2

さじ [67-4]



6

1:2

刺釘 [67-5]

図版54 NM3出土の瓦とその他の遺物  
Plate 54 Ceramic roof tiles and other artifacts from NM3



---

---

東北大学埋蔵文化財調査年報 1

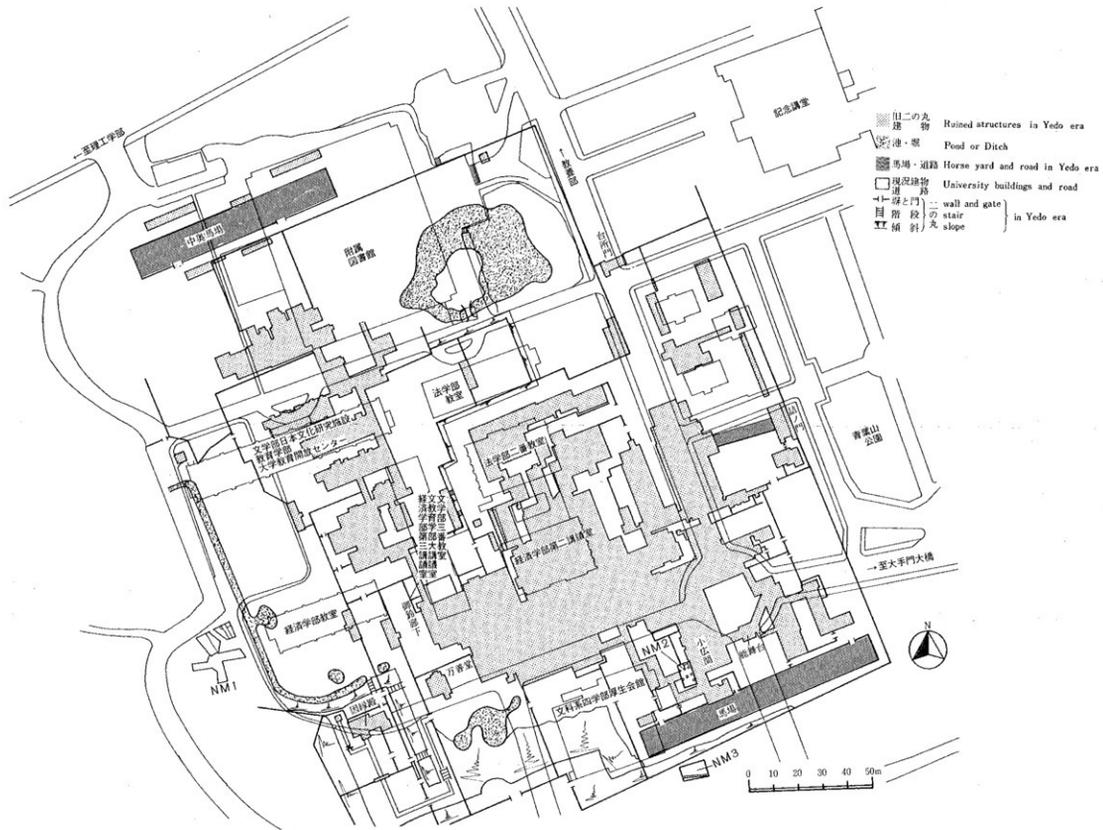
昭和60年10月11日

発行 東北大学埋蔵文化財調査委員会  
委員長 石田 名香雄

印刷 (株) 東北プリント  
TEL 0222(63)1166

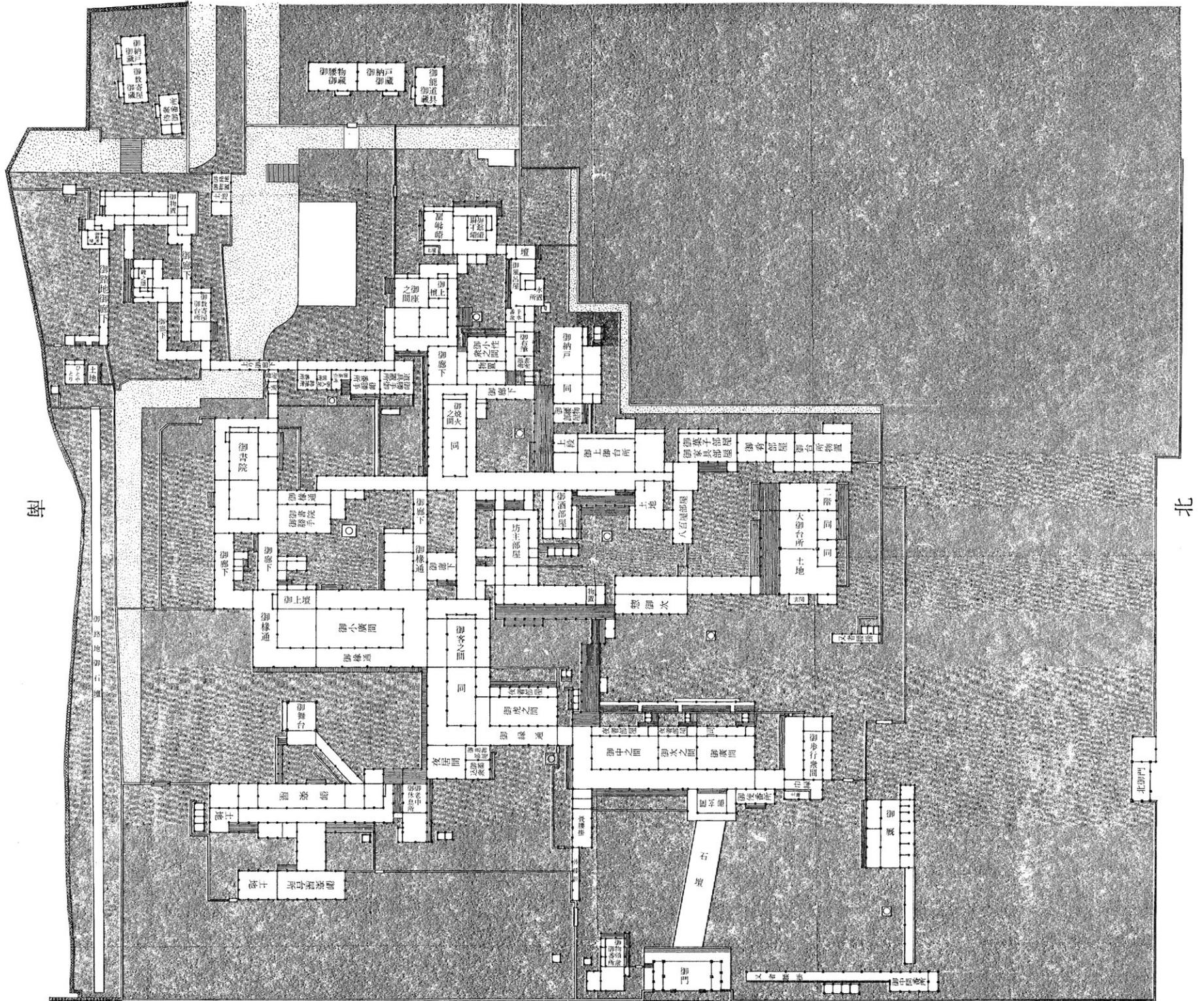
---

---



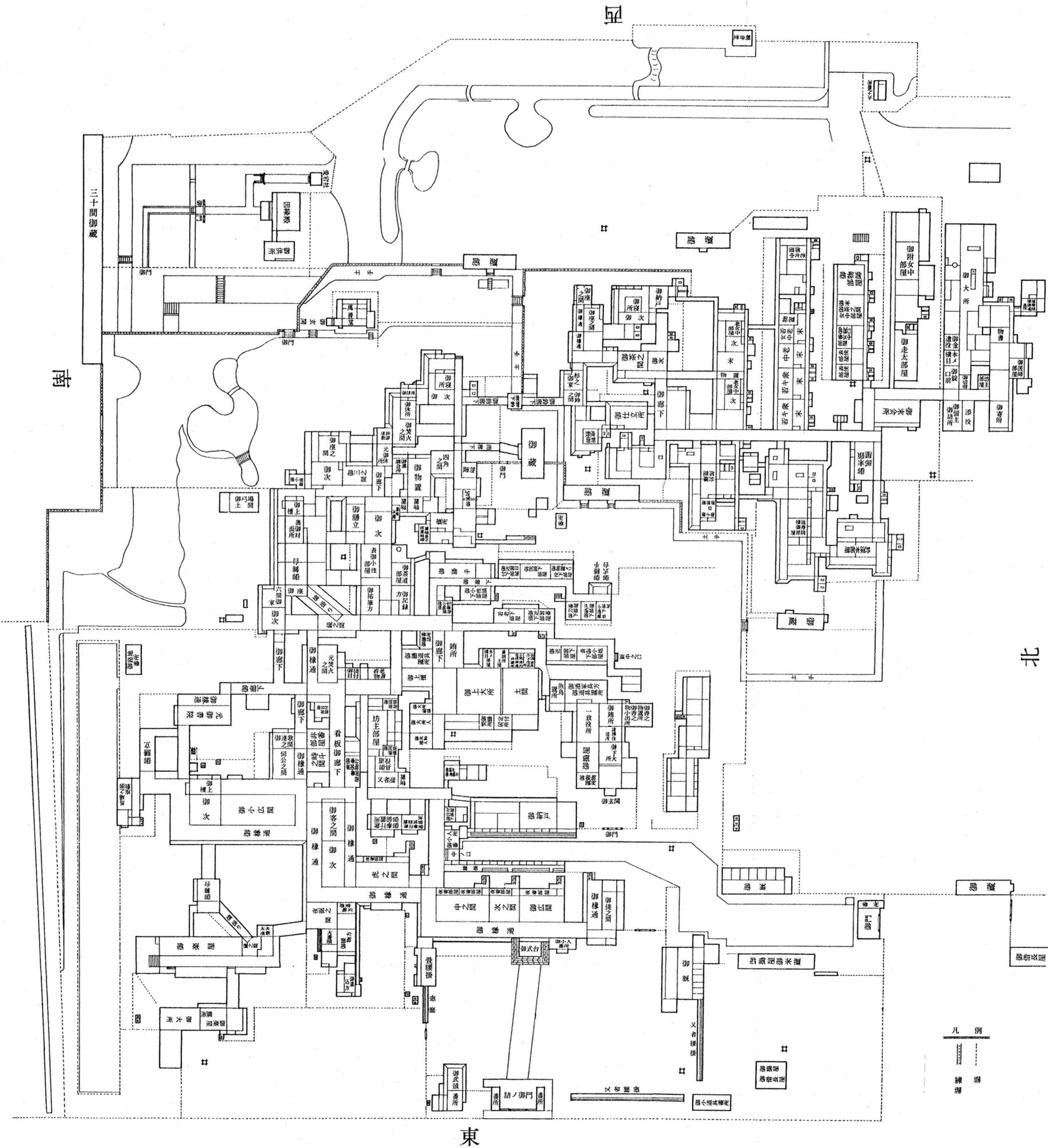
付図1 現況建築物・道路と二の丸建築物との関係(二の丸配置図は享和2年図を使用)  
 University buildings and ruined structures of the secondary citadel of Sendai castle superimposed on map.(17c.-19c.)

西



東

付図2 御二丸御指図



付図3 嘉永六年・御二丸御城中並御中奥下水抜溝御絵図